

# ことばと文化

小中高校生の  
相互理解をめざして

国際文化フォーラム 20年の歩み

---

# II

# 刊行にあたって

財団法人国際文化フォーラム 会長

野間 佐和子

(財)国際文化フォーラム(TJF)は、2007年6月22日をもって設立20周年を迎えました。バブル崩壊後の長い経済の低迷にもかかわらず、今日まで事業を着実に進めてまいることができましたのも、ひとえに役員・評議員・顧問・賛助会員の皆さまをはじめ、多くの方々の暖かいご支援、ご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

当財団では、海外および日本の若い人々が相互の言語を学習し、文化理解・人間理解を深めていくことを目標に掲げ、初等中等教育における海外の日本語教育と、国内の中国語、韓国朝鮮語、国際理解の各教育分野で、教師を対象とするさまざまな事業を展開してまいりました。近年は、新たに学習者の直接交流やウェブサイト上の交流事業も加わり、また、教育現場だけでなく国内外の行政機関との連携が深まるなど、大きな進展を見せております。

本書では最近10年間の事業を中心にまとめておりますが、民間財団の特性を生かした自由な発想と、活動の先進性をいささかでも感じていただければ幸いです。

この20年の世界の動きを振り返りますと、科学技術の面で進歩がありました半面、テロや戦争、貧困などが深刻な影を落とし、さらには地球温暖化・環境破壊の問題が出現いたしております。通信や交通の発達により地球全体が狭くなっている今日、私たちに求められているのは、国や地域を超えたグローバルな視点であり、地球を一つの共同体と考え、すべての人々が手を携えて平和の実現をめざすことであると思います。

とりわけ、次代を担う若者の教育は大切でございます。異なる多様な文化や宗教、生活様式をもつ人々がともに生きていくためには、お互いの言語を学ぶことによって心を通わせ、自他を尊重する精神を育む教育が不可欠であり、私どもの事業はいよいよ重要性を増していると申せましょう。

この20周年を一つの節目として、これまで培ってきた知識や方法、人脈を財産に、志を高くもちながら、さらに事業を進めてまいりたいと思っております。

今後とも、皆さまのご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。



# この10年の航跡

財団法人国際文化フォーラム 理事長

## 渡邊 幸治

(財)国際文化フォーラム(TJF)の過去10年の活動は、国内外の小中高校生による国際的相互理解を、相互の言語と文化の学習を通じて促進することがありました。常に事業の先駆性とネットワークづくりを重視して活動し、その成果はささやかとはいえ、日本の更なる国際化という時代の要請に応えてきたものと自負しております。

当財団の事業を特徴づけるものの一つに、写真媒体を使って、日本の若い世代の素顔や日常生活、生活文化を海外に伝える事業があります。「高校生のフォトメッセージコンテスト」や、写真教材「であい：7人の高校生の素顔」はその代表的な事業でした。しかしながら、この10年の事業の主要な柱は、なんといっても、海外の日本語教育と日本国内の中国語・韓国朝鮮語教育を、先駆的に支援してきたことでした。海外の日本語教育については英語圏と中国を主な対象として事業を実施してきましたが、特に隣国中国における小中高校の日本語教師の研修活動が大きな成果を上げたことは特筆に値します。

ここで特に指摘したいことは、これらの事業の実施が、歴史認識の問題、靖国神社参拝問題を通じて、わが国と隣国との間の政治的関係が冷却した時代と一部重なっていたという事実であり、にもかかわらず事業を着実に遂行できたのは、設立以来の活動を

通じて築いてきた、日本語、中国語、韓国朝鮮語それぞれの教師をはじめとする関係者との貴重なネットワークの存在によるものだという事実であります。

経済の相互依存関係の深化は、国と国との関係を緊密にすると考えられてきましたが、貿易・投資関係の増進だけでは真の関係は築くことができません。お互いの国民感情の行き違いを食い止めるためには、教育を通じて相互理解を深める不断の努力が必要です。今や世界の潮流はアジアに移りつつあるといわれております。東アジア共同体の構想のなかで、隣国との信頼関係の再構築が叫ばれ、隣国外交を支える不可欠な要素が若者間の相互理解であることが力説されています。その一環として留学生制度の拡大、相互訪問の拡充が唱えられていますが、中高校生が隣国の言語を学ぶための制度上の整備や、言語を通じて文化を学ぶ教育環境はあまりにも未発達な状況にあるといわざるをえません。当財団としては、こうした事態を少しでも改善すべく、今後とも協力関係の輪を広げながら、知恵を絞り努力を払っていきたいと考えています。

本書は、当財団の活動を支援してくださった方々に、当財団の事業の歩みを、感謝の気持ちを込めて、ご報告申し上げます。ご高覧いただけましたら幸甚に存じます。



# 目次

刊行にあたって	会長 野間 佐和子	2
この10年の航跡	理事長 渡邊 幸治	4

## 第1部

<b>20年の歩みを概観する</b>	<b>8</b>
I. 財団をめぐる社会状況の変遷	10
II. 財政と事務局運営	14
III. 事業の歩み	16
1 第1期(1987—1991年度)の事業	18
2 第2期(1992—1996年度)の事業	19
3 第3期(1997—2006年度)の事業	22

## 第2部

<b>各事業を振り返る 1997—2006</b>	<b>30</b>
I. 英語圏を中心とする海外の小中高校の日本語教育関連事業	32
1 文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストの開催	38
2 写真教材「であい」プロジェクトの実施	41
3 であいフォトエッセイカフェプロジェクトの実施	50
4 写真教材「日本の小学生生活」(日英併記版)の制作	55
5 日米の学校間交流に協力	57
6 REX-NETの活動に協力・助成	58
7 英語圏の日本語教師向け情報誌の発行	59
8 写真データベースTJF Photo Data Bank	61
II. 中国の小中高校の日本語教育関連事業	64
1 中高校日本語教師研修会の共催	68
2 中高校の日本語教科書の編集に協力	76
3 小学校日本語教師研修会の共催	77
4 日中の学校間交流に協力	80
5 写真教材「日本の小学生生活」(日中併記版)の制作	82
6 中国の日本語教師向け情報誌の発行	82
7 遼寧省教育代表団の招聘	84
III. 国内の高校の中国語教育関連事業	86
1 高校における中国語教育の調査の実施	90
2 国内の中国語教師を軸にしたネットワークの構築	93
3 中国語の教員免許取得講座の開講に協力	95
4 高校中国語教師研修の共催	96
5 ガイドライン・教材・教科書の制作に協力	100
6 中国語の学習と交流の連携事業の実施	103
7 高校の中国語教育に関する情報の提供	105
IV. 国内の高校の韓国朝鮮語教育関連事業	106
1 高校・大学等における韓国朝鮮語教育の調査の実施	110
2 教師ネットワークの結成と活動に協力	112
3 韓国朝鮮語の教員免許取得講座の開講に協力	117
4 韓国と日本における教師研修の共催	119

5 学習者向けの事業の実施	121
6 隣国のことばを考えるフォーラムの共催	123

<b>V. 国際理解教育関連事業</b>	<b>126</b>
1 高校生のフォトメッセージコンテストの開催	128
2 写真集「The Way We Are 伝えたい私たちの素顔」	138
<b>VI. 広報出版・ウェブサイト関連事業</b>	<b>140</b>
1 機関誌「国際文化フォーラム通信」の発行	142
2 ウェブサイトの開設と運営	143

## 第3部

<b>今、そしてこれからの展望する</b>	<b>146</b>
第4期(2007年度-)の事業展望	148
1 中国大連市の日本語教育支援プロジェクトの実施	152
2 中国語と韓国朝鮮語の学習のめやすづくり	155
3 中国語を学ぶ高校生の中国短期研修の実施	160
4 高校生の写真撮影交流プログラムの実施	163
5 中高校生の交流ウェブサイトの開設	167

## 資料

<b>TJFの事業をデータで見る</b>	<b>172</b>
20年の歩み：1987—2006	174
出版物：1997—2006	190
事業データ：1997—2006	202
財団のあらまし	240
財団概要	241
役員・顧問・評議員	242
収支の変遷(1997—2006年度)	244
2007年度の事業	246
あとがき	247

### 凡例

- 日本の学校教育では「韓国語」「朝鮮語」「ハングル」など、異なる名称が用いられているが、本書では原則として「韓国朝鮮語」を用いた。
- 教諭、常勤講師、非常勤講師、特別講師などの呼称はすべて「教師」とした。ただし、必要に応じて、教諭、常勤講師、非常勤講師の呼称を用いた。
- 外国の機関名は、通行の日本語名を用いた。ただし、日本語名がない場合は、原名を記すとともに括弧内に簡単な説明を付した。
- 中国の人名については原則的に簡体文字を用いず、日本の通行の文字を用いた。また、韓国ならびに在日コリアンの人名は片仮名で記した。

- 機関・団体・企業名は現行の名称を用い、括弧内に、事業実施当時の名称を付した。ただし、資料編の機関・団体・企業名はプログラム実施当時の名称とした。
- 関係者の所属・肩書は、事業に関わった時点のものとした。ただし、第2部では、現在の所属・肩書と異なる場合は、「当時」とした。
- 署名記事は、「国際文化フォーラム通信」「学びと交流の場づくり」などTJFの出版物に掲載した記事からの引用・抜粋である。
- 第2部の記述は2007年3月末まで、第3部は2007年12月末までとした。資料編の事項は原則として1997年4月から2007年3月末までとしたが、一部前後の事項も含めた。



第1部

20年の歩みを  
概観する



## 1. 財団をめぐる社会状況の変遷

# ますます重要になる 民間公益財団の役割

**国**際文化フォーラム（1997年より略称として「TJF」を使用）は、設立以来、民間の事業型財団として国際文化交流事業に携わってきました。財団の事業は、財団の掲げる理念と社会の要請との対話のなかで行われることから、財団にはその理念と社会の要請を見直し、見極めていく力、そして目標を達成するための事業を具現化していく力が求められます。さらに事業を着実に遂行するためには、安定した財政基盤と志をもったスタッフで構成される組織が必要となります。TJFもこうした条件を満たすため努力を重ねてきましたが、一方、今日まで支障なく継続して公益事業に取り組んでくることができたのは、出捐企業や賛助会員をはじめ、TJFの趣旨に賛同してくださった国内外の多くの人びと、団体、機関の支えがあったからにほかなりません。

20周年を迎えた今、財団をめぐる時代背景を振り返りながらTJFが追い求めてきた事業理念と事業の軌跡を概観したいと思います。

## 財団設立前後の国際文化交流の時代背景

1960年代から1970年代にかけて高度経済成長を遂げた日本は、貿易収支の不均衡により海外諸国との間に摩擦を生みだすようになりました。日本人論がブームとなるなかで、日本社会の特異性が取り上げられ、日本人は「エコノミックアニマル」などと呼ばれるようになりました。このような動向に対処するために、国家的課題として国際文化交流を推進し、海外における対日理解を促進する必要があるとして、1972年10月、公的な文化交流機関である国際交流基金が設立されました。しかし、対日理解を促進する必要性はその後も衰えることはありませんでした。

日本の目覚ましい経済発展は、一方で日本の経済や科学技術に対する関心を世界的に喚起することにもなりました。1970年代、日本との経済関係を重視する観点から、海外の日本語

学習に対する関心は急激に高まり、1980年代になるとさらに、それまでジャパノロジストなど限られた人びとのものであった日本研究や日本語学習への需要が量的に拡大し、質的にも多様化していきました。教師や教材の不足などに対して、海外の日本研究者や日本語教育関係者から支援要請が高まり、官民ともその対応に迫られることになりました。

同じ1980年代、日米貿易摩擦を解消するために、日本企業が米国での現地生産に乗り出すようになったのがきっかけとなり、地域社会に対する民間公益活動の支援に取り組む米国企業の例を参考にしながら、日本企業の間でも「企業フィランソロピー」に対する関心が高まりました。好景気を背景にして、1990年前後より「1%クラブ」の発足などを含め、経済界全体が「よき企業市民」や「企業の社会貢献」に関心を示すようになりました。「企業メセナ」（企業による文化支援）が関心をひいたのもこの時期でした。企業が利益を追求するだけでなく、公益活動にも積極的に関わる時代が日本にも到来したのです。

TJFは、こうした大きな時代の潮流のなかで、国際文化交流の推進と日本語、日本文化の普及を通じて対日理解を促進するという日本の国家的な課題に対して、民間の企業財団として取り組むことが期待され、設立されました。

## 財団の設立者と出捐母体

TJFの設立の背景には、こうした社会全体の動向とは別に、出捐企業を中心母体である株式会社講談社の企業風土がありました。日本の出版界の国際交流を積極的に推進した野間省一（1911—1984、第4代社長）は、出版人の立場から国際文化交流を推進することについて次のように語っています。

「文化に携わるものといたしましては、単に経済大国ということではなくて、日本が文化大国となるという理想のもとに、そのリーダーシップを出版界がとっていく、といった意気込みで進む必要があります。……世界の国々、各民族は、それぞれ固有の文化を有しており、各国、各民族が互いに他国の文化に接し、それによって自国の文化の向上を図れば、人類の生

活はさらに豊かになるはずであると考えています。世界の国々がそれぞれの文化と社会を互いに理解しあえば、平和的に共存し、戦争を防ぐことができるという信念をもっています」

また、「本は文化財であり、出版社は文化財を生産する文化産業であるから、一般企業と違って儲かればいいというものではない」という信念のもと、利益の一部を社会に還元すべきであるという考えをもっていました。

まず英文図書により日本文化を海外に紹介する活動を推進するため、1963年に講談社インターナショナル株式会社を設立し、1969年にはユネスコ本部から勸奨をうけて、アジア地域の図書の開発と振興を目的とする財団法人ユネスコ・アジア文化センター（当時ユネスコ東京出版センター）の設立に奔走しました。同センターは、アジア・太平洋地域の文化の保存と発展、そして識字事業へと活動を発展させています。さらに1979年には野間アフリカ出版賞の創設や野間アジア・アフリカ奨学金留学生制度の設立など、さまざまなフィランソロピー活動を行ってきました。

このような同社の企業風土のもとで、野間省一の後を継いだ第5代社長野間惟道（1937—1987）が、周囲からの要請もあってTJFの設立を提起しました。野間惟道自身、文学に造詣が深く、日本文学を翻訳して海外で紹介するとともに、世界中の日本語学習者を支援して、日本語で日本の文学を読める人を増やしたいと考えていました。

一般企業の資本金にあたる財団の基本財産については、財団の独立性を明確にするため、講談社1社の出捐ではなく、同社と事業上の関係が深く、かつまたフィランソロピー活動に熱心であった王子製紙株式会社、大日本印刷株式会社、凸版印刷株式会社、日本製紙株式会社（当時十條製紙株式会社）、株式会社三菱東京UFJ銀行（当時株式会社三菱銀行）の協力を得て、計6社の共同出捐とすることとしました。財団の名称も、出捐企業名を冠するのではなく、広く世界に向けて公益活動を実践する意味で、財団法人国際文化フォーラム（The Japan Forum）としました。理事・評議員も野間惟道の強い意向にもとづいて選任されました。

こうして1987年6月22日、TJFは外務省を主務官庁として設立されました。ただ惜しむらくはTJFの設立に情熱を注ぎ、自ら陣頭指揮をとっていた野間惟道が、発足10日余りの6月10日に急逝したことです。志半ばで倒れた野間惟道の遺志

を継いでTJFの指揮にあたったのは、惟道の夫人で、現TJF会長、講談社社長の野間佐和子でした。

### 民間公益法人としての社会的役割

1980年代末から1990年代にかけて、冷戦の終結に伴い新たな国際社会の秩序が模索されるようになりました。通信・交通手段の飛躍的な進歩により、人、物、情報の移動が劇的に活発になり、さまざまな領域で国際的な相互依存関係が緊密になっていきました。また、解決しなければならない地球的課題が次々に浮上してくるなかで、地球共同体の意識も国内外で芽生えていきました。

日本においても、この時期から内なる国際化の必要性が盛んに叫ばれるようになり、国際文化交流の目的や形態も変わっていきました。国家間の友好親善や相互理解という目的のもとに、国家レベルの公的機関が主体となって行ってきた国際文化交流が、次第に多文化共生社会を構築するための実践的な活動となり、交流の主体も、地方自治体、民間の公益団体、NGO、草の根レベルの市民組織などと多様化していきました。こうしたなかで文化交流の担い手としての民間財団の役割も、その重要性をますます帯びるようになりました。

21世紀に入ってこの傾向はさらに拍車がかかり、日本の公益法人制度も大きく変わろうとしています。企業会計の手法を大幅に取り入れた新会計基準が2006年に導入され、また国会で寄付金税制の改革を含む税の優遇措置が可決され、新しい公益法人制度が2008年12月に施行されます。今後は官庁の許可、監督を排し、自主的な財団運営が尊重されるとともに、出捐者、寄付者の意思にもとづく事業の運営、ディスクロージャー（財務情報の透明化）がいっそう要請されることになります。公益法人をめぐるこうした総合的かつ抜本的な改革を貫くのは、民間公益活動を活性化させ、非営利公益セクターをより大きく強いものにしたという考え方であり、成熟した社会にあって、公益法人の役割は今後ますます重要になると思われます。

TJFの20年は、まさにこうした国内外の社会状況が激変した時代のさなかにありました。今後も民間団体として公益活動に取り組むことの重要性を認識しながら、その強みを生かして、開拓精神と機動力を発揮して活動していきたいと思えます。



理事会・評議員会では、事業方針が決定され、事業予算、決算が承認される



国際相互理解と国際文化交流の促進という遠大な目標に向かって船出した

II. 財政と事務局運営

より公益性の高い活動を行うために

**社**会性、公益性の高い財団活動を遂行するために、国際文化フォーラム（以下、TJF）は、事業、財政、組織の三つの側面から、財団の独立性を強化することに努めてきました。

**事業・財政運営**

TJFの基本財産は設立当初は3億円でしたが、財政の自助、自立をめざし、基本財産の運用益で安定して事業が継続できるようにするために、基本財産を1992年度から1997年度にかけて20億円に増資しました。しかし、高金利時代から一転して、バブル崩壊後は金利が低下し、運用益が急激に減少したため、運用方法を銀行預金から、劣後債や仕組み預金、仕組み債に換えて運用益の確保を図りましたが、運用益だけで財団を維持し、事業を継続することは困難となりました。

このような状況のなかでTJFが財政の規模を縮小させることなく事業を進展させることができたのは、出捐企業6社の継続的な多額の寄付のおかげです。

最近5年間の財政規模は、年間1億5,000万円～1億9,000万円です。諸経費の削減、黒字予算・決算の励行に努め、退職給与引当金や20周年記念事業のため資金を積み立てるなど、財政面の健全化を図ってきました。

財団の活動が、出捐企業や賛助会員の寄付、基本財産の運用収入などがなくては成立しないことはいまでもありませんが、今後は、TJFの事業に対する国内外の評価の高まりを力として、これまで以上に積極的に民間の助成財団や企業、政府関係機関、海外の諸機関に働きかけて、助成や寄付を仰ぎ、事業面はもとより財政面でも自助・自立をめざしていきたいと考えています。

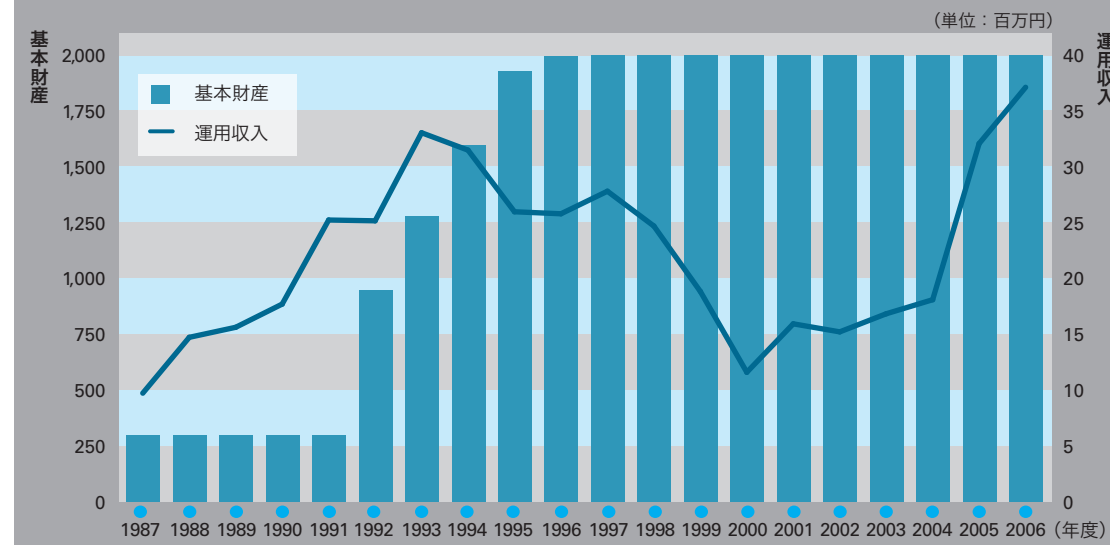
**組織運営**

TJFでは、理事・評議員によって事業方針が決定され、それに沿って事務局が事業を運営しています。事業の運営にあ

たっては、公益性、独立性を保つことをめざしてきました。設立以来4年間は、事務局は実質的には株式会社講談社の一部局として運営されていましたが、より公益法人としての独立性を図るために同社から人事面でも独立すべく、1992年度に国際交流活動を専門とする人材を外部から採用して陣容を整え、1995年度に事務所を千代田区麴町から新宿区西新宿に移しました。

2007年12月現在、事務局は、理事兼務の事務局長のもとに、職員8人、専門員4人、米国代表連絡員1人で構成されています。海外の日本語教育関連事業、国内の中国語教育関連事業および韓国朝鮮語教育関連事業、国内外の中高校生をつなぐ交流事業、広報出版事業など、各事業とも担当者は1人ないし2人という状況です。担当者個々人の能力を高め、効率化を図るとともに、プロジェクトの遂行にあたって、必要な人材をその期間を限定し補強することで、人員増を極力抑えてきました。また、関連諸機関・団体との連携・協力を緊密にすることによって、限られた資金や人員を最大限に活用し、事業を継続、発展させてきました。

グラフ■基本財産と運用収入の推移



基本財産20億円の出捐金内訳：株式会社講談社18億円、王子製紙株式会社、大日本印刷株式会社、凸版印刷株式会社、日本製紙株式会社、株式会社三菱東京UFJ銀行各4,000万円。運用収入37,165,040円（2006年度）



# 対日理解から 相互理解の促進へ

**国**際文化フォーラム（以下、TJF）の事業の目標として、設立趣意書には、①日本と日本文化に対する国際理解の促進、②諸外国と日本との相互理解と友好協力関係の増進、③日本語と日本文化の普及に関する国際的事業の推進と国際交流の発展、の三つの事項を掲げています。

これらの目標を達成するための具体的な事業として、寄附行為には、①日本語と日本文化に関する国際的セミナー、シンポジウムなどの開催および助成、②日本語と日本文化の普及に関する情報の収集と提供、③日本語と日本文化の普及に関する調査および研究、④日本語と日本文化に関する出版物や視聴覚資料などの制作および発行、⑤日本語と日本文化を通じる国際相互理解に資する各界の指導的人物、研究者、専門家などの招聘と派遣、の五つを掲げています。

日本語と日本文化の普及を通じて対日理解を促進することが設立当初のTJFに期待された役割の一つでしたが、地球規模の協力関係および共同体づくりを志向する新しい時代にあって、狭い意味での国益を志向する「対日理解」の促進という視点だけでは、「国際相互理解と国際的な文化交流を促進する」という遠大な使命を全うすることはできなくなりました。国際文化交流は、世界の人びととの対話を通じて、日本人が世界に向かって自己を表現する過程であるとともに、相手を理解しようとする過程であり、さらには自他の調整のなかで自己を変革していく過程でもあるといえます。こうした見地から、国際相互理解という事業理念を実現するために、「日本語と日本文化」の発信という一方通行の事業ではなく、「ことばと文化」というより広い視野に立ったキーワードを掲げて事業を見直し、双方向性のある事業を試みるようになりました。

## 多言語・多文化共生社会に向けて

20年間の事業の歩みを振り返ってみると、三つの時期に分けることができます。設立5年めにあたる1991年度までの第1

期は、対日理解の促進を事業目標に掲げ、日本語教育および日本文化紹介事業に専念した創業期と位置づけることができます。この創業期には、事業対象を特に限定せず、海外での対日理解を促進するための事業を実施するとともに、国内の国際文化交流推進事業に取り組みました。

1992年度から1996年度までの第2期は、多言語・多文化共生社会の構築をめざして、国内外の若い世代を対象に双方向的言語教育および文化理解を促進することを事業理念と目標に掲げました。事業の対象を、次代を担う小中高校生に絞り込み、海外の日本語教育支援事業は小中高校生に焦点をあてるとともに、新たに日本国内の若い世代への外国語教育、そのなかでも特に中国語教育および韓国朝鮮語教育を促進する事業を導入しました。これによって、国内外にわたって若い世代を対象とする事業の場ができました。それらの外国語教育を単なる語学教育としてではなく、文化理解、国際理解教育を含む、若い世代間の相互理解を図るためのものとして位置づけたのもこの時期です。国内外の小中高校生への外国語教育を促進する事業に関わることで、国内と海外の学校や教師の橋渡しをし、お互いの言語や文化を学ぶ学習者をつなげることができるようになり、事業に新境地を開くことができたことが、第2期の最大の成果であったと考えています。また、第2期は、国内外ともに未開拓の分野で事業を行うための調査、事業の骨格づくり、そして他機関や関係者とのネットワークづくりに力を注ぎました。

こうして第2期で掲げた事業理念と目標、およびそれに沿って新たに編成した事業の枠組みは、現在に至るまでTJFの事業の土台となっています。その意味で、第2期をTJFの第二の創業期と位置づけることができます。こうした土台の上で、事業理念と目標を達成するための具体的な事業を本格的に企画し、実行に移して発展させたのが、第3期（1997—2006年度）の10年でした。本書では、おもに第3期の事業に焦点をあててTJFの事業を振り返ります。

以下、各期の事業を概観した後、第2部で第3期の各事業、第3部で2006年度から新たに開始したいくつかの事業について詳述したいと思います。



# 1 第1期 (1987—1991年度) の事業

第1期は、いわば揺籃期を経て事業の三本柱が定着した5年でした。日本語、日本文化を通じての対日理解の促進、日本国内の国際文化交流の推進という二つの目標を実現するために、①海外における日本語教育に対する支援事業、②日本文化の海外への紹介と文化交流事業、③『ワールドプラザ』の発行を軸とする日本国内の国際文化交流の推進事業、という三つの事業に取り組みました。

## 海外における日本語教育支援事業

「I. 財団をめぐる社会状況の変遷」(10ページ参照)で述べたとおり、海外における日本語学習者は1970年代から1980年代に質的にも量的にも拡大しました。これはおもに仕事や観光などで日本語を必要とする一般成人が日本語に関心をもち始めたことと、各国・地域の学校教育に日本語教育が導入されたことによるものでした。教材や教師が極端に不足するなか、TJFはまず海外の日本語教育の実施状況を把握するために調査、研究を実施するとともに、外務省や国際交流基金などの協力を得て、日本語に関する国際シンポジウムやセミナー、研究会、講演会を実施し、日本語教育分野のネットワークを形成していきました。具体的な事業としては、中国と米国を中心に、当時最も需要の大きかった一般成人を対象とする目的別実用日本語教育の支援と、初等中等教育における日本語教育の支援として弁論大会、日本語コンテストの実施、教材制作や助成事業を行いました。

## 日本文化の海外への紹介と文化交流事業

さらに出版関連企業によって設立された財団としての特色を十二分に生かし、「文化財としての言語」教育の促進事業とともに、「文化財としての本」を通じて文化紹介事業を展開しました。とりわけ海外で開催した展覧会では、伝統文化の紹介という従来の形式だけでなく、マンガやアニメなどを通じて日本の現代事情や日本人の姿を伝え、大きな反響を呼びました。また、海外の日本語教育・日本研究機関、大学などを



日本語国際シンポジウムや調査を通じて、日本語教育分野のネットワークを形成した



財団設立当時から取り組んできた中国の日本語教育支援事業

対象とする日本関連図書の寄贈事業は、第2期に至るまで前半10年を彩るTJFの看板事業でした。

## 国際文化交流情報誌『ワールドプラザ』の発行

1988年12月、日本国内の国際化と国際文化交流への関心の高まりに応じて、国際文化交流に関する情報誌『ワールドプラザ』(隔月刊、A4判変型、2万部)を外務省国際文化交流情報センターとの共同編集で創刊しました。『ワールドプラザ』の使命は、日本の国際文化交流の担い手に、全世界の拠点にある日本の在外公館からの情報と国内の国際文化交流に関する情報を定期的に提供するとともに、国際文化交流の諸問題への関心を喚起していくことにありました。市販雑誌としては、わが国で最初にして唯一の国際文化交流情報誌とあって注目されました。



国際文化交流に関する唯一の情報誌として注目され、大いに期待された

# 2 第2期 (1992—1996年度) の事業

設立5周年を迎えるにあたり、時代状況に即応した新たな事業展開を行うために、事業を全面的に見直しました。このとき二つの重要な視点を導入しました。一つは、世界の人びとと相互理解を深めるためには、双方向性のある事業を進めるべきであり、日本語や日本文化を海外に紹介するだけでなく、日本人もまた相手の言語や文化を学ぶ必要があり、そのための事業を促進するという視点でした。それぞれのことばと文化をもつ世界の人びととともに生活し、働き、協力する社会をつくることは、国を問わず時代の要請であり、とりわけ日本にとっては、地域共同体であるアジア・太平洋地域の人びととお互いの言語や固有の文化を尊重しながら対話を深めていく努力を続ける必要があるという考えでした。二つめは、「ことばと文化」をキーワードに、お互いの言語を学び、文化間の相互理解を図るためには、発達段階にあって柔軟に異文化に対応できる若い世代への働きかけが重要であるという視点でした。事業の対象を若い世代に絞り込んだのはその視点からであり、また、海外における日本語学習者の低年齢化に応えるためでもありました。



世界の小中高校生が日本語を学ぶ環境づくりに力を注ぐようになった

こうして1993年3月の理事会・評議員会において、多言語・多文化共生時代の認識に立って、「ことばと文化」をキーワードに、「互いのことばと文化を学ぶことを通じて、異文化間の相互理解をめざす」事業を展開することが承認されました。そして、事業を①言語教育と文化理解事業、②出版メディア事業の二つに大別しました。一つの柱である言語教育と文化理解事業では、海外の日本語教育支援事業に加え、国内のアジア言語教育支援事業に取り組むことになりました。アジア・太平洋地域（インドネシア、オーストラリア、カナダ、韓国、タイ、中国、ニュージーランド、米国などで、世界の初等中等教育の日本語学習者の9割以上を占める）の初等中等教育における日本語教育と文化理解を推進するとともに、相互主義の観点に立って国内のアジア言語教育と文化理解を促進する事業を導入することが承認されたのです。

もう一つの柱である出版メディア事業では、図書寄贈事業を中心とする「本」を通じての文化理解の促進に絞り、国際文化交流の推進事業として異文化との交流・共生をめざして『ワールドプラザ』も引き続き発行していくことが決定されました。

### 海外の初等中等教育における日本語教育支援事業

第2期の日本語教育支援事業は、①アジア・太平洋地域の初等中等教育における日本語教育のインフラ整備への協力と、②文化理解のための日本語教育への支援に大別できます。

①については、第1期で事業を開始していた中国と米国を対象の中心に据えました。中国においては、第1期の事業を引き継ぎながら事業対象を初等中等に移していきました。そのなかで中高校の日本語教育のネットワークを構築するとともに、その後の支援のあり方を調査しました。米国においては、教科書制作に助成したり、ウィスコンシン州教育庁との大型共同事業として、全米初の初等中等教育の日本語カリキュラムガイドラインを作成したりしました。

②については、日本語が急速に普及したオーストラリア、カナダ、ニュージーランドを含む英語圏における初等中等教育の日本語教育をおもな対象としました。多言語・多文化の共生が時代の要請であるという認識にたつて、日本語教育や日本文化の紹介事業をとらえ直しました。日本語教育の目標は、学習者がコミュニケーションを図るうえで必要な日本語の運用能力を身につけることだけでなく、日本語という未知なる言語

と遭遇することで自言語や自文化を見つめ直し、地球的視野と多文化理解の態度を養うことが重要であると考え、文化理解のための日本語教育を支援することに力を注いだのです。

### アジア言語教育の促進

日本国内のアジア言語教育を促進するための事業に取り組むことは、TJFの事業の枠組みを大きく変えるものでした。

まずはアジア諸国のなかでも特に小中高校の日本語教育が盛んな国・地域の言語である、インドネシア語、韓国朝鮮語、タイ語、中国語について、国内の高校での実施状況を把握することから始めました。そして、それらのなかで最も実施校の多い中国語教育から事業に取り組むことにし、その実施状況を詳細に調査していきました。

### 出版メディアを通じての日本文化紹介と文化交流事業

言語教育と文化理解事業にエネルギーを注ぐために、日本文化紹介事業では、大型展覧会などの開催は漸次控え、図書寄贈事業に絞り込んでいきました。設立初年度より一貫して実施してきた図書寄贈事業では、10年間で延べ182ヵ国・地域の教育・研究機関、公共図書館などに、3,157件、8万1,529冊の日本語・日本文化関連図書を寄贈しました。

しかし、良質な英文の日本関連図書の調達が難しくなったこともあり、1997年度の財団設立10周年を記念して行った大型図書寄贈プログラムを最後に、英文図書寄贈事業は終止符を打ちました。一方、言語教育・文化理解関連事業との連携を図るものとして、初等中等教育向けの日本語教材を組みあわせ海外の小中高校に寄贈しました。

小規模ながら第1期より行っていた学術文化・教育交流事業のなかでは、1994年度に実施した日米の教育長の交流と初等中等教育における国際理解教育のシンポジウムの開催は、その後のTJFの事業の軸となった国際理解教育の分野で最初の取り組みであり、教育行政当局への働きかけの有効性に気づかせてくれた事業でもありました。

『ワールドプラザ』は、TJFの20年間の前半10年における看板事業の一つでしたが、インターネットを含むマルチメディア時代の到来で情報の即時性が問われるようになり、隔月刊による情報の発信では時代の要請に応えられないと判断し、第2期末の1996年10月に休刊



言語だけでなく、文化理解につながる日本語教育を追求してきた







財団設立10周年を記念して刊行した『ことばと文化 相互理解をめざして』

しました。特別事業予算を組んで負担していた大きな支出も、休刊に至った理由の一つでした。

また、設立当初は、国際文化交流や日本文化、日本語、日本研究に関連する書籍の編集・出版も多く手がけていましたが、第2期に入って編集・出版活動は言語教育と連携するものに限定するようになりました。

なお、第1期、第2期の事業の詳細については、1997年度に10周年記念として刊行した『ことばと文化 相互理解をめざして』をご参照ください。

### 3 第3期 (1997—2006年度) の事業

設立10周年にあたる1997年度より今日に至るまでの第3期は、第2期で土台を築いた言語教育と文化理解事業の一つひとつを、試行錯誤しながら着実に成長させた10年でした。出版メディア事業は、図書寄贈を2001年度まで継続し、その後は言語教育事業に吸収しました。

#### 文化理解としての日本語教育の追求

第2期から始めた「文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」(第2部38ページ参照)を1999年度まで実施することによって、文化理解をめざす日本語教育の授業例や教授法の実践例が蓄積され、TJFと同様の教育理念を有する国内外の日本語教師とのネットワーク(英語圏では米国に始まり、英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドまで拡大)が強化されたことは、その後の事業を展開するうえで大きな力になりました。このコンテストの実施によって、TJF独自の理論的枠組みの構築および実践的な素材や教材の開発に挑戦する土台が形成されました。言語習得だけに終わらない「教育としての日本語」の可能性を追求する始まりでした。

#### TJFの事業を特徴づけている写真素材や教材の提供

1995年度に日本の小学生の一日を紹介する写真教材を制作したことを機に、海外の小中高校の日本語学習者が日本の



事業を推進する原動力となった、海外の日本語教師たちとのネットワーク

同世代に深い関心をもっていることや、日本語教育現場でもそれらに関する視聴覚資料を強く望んでいることがわかり、写真という媒体を使って日本の若い世代の素顔や日常生活、若者文化を海外に伝える事業に本格的に取り組むことになりました。1997年度から10年にわたり毎年度開催した「高校生のフォトメッセージコンテスト」(第2部128ページ参照)と2001年度に完成した写真教材「であい：7人の高校生の素顔」(第2部41ページ参照)はその代表的な事業で、第3期のTJFの事業を決定的に特徴づけるものでした。

「高校生のフォトメッセージコンテスト」に寄せられた多くの日本の高校生の素顔は、写真集やウェブサイトを通じて国内外に発信し、TJFが制作した「であい：7人の高校生の素顔」は、英語圏をはじめ世界の国々の日本語教育現場に届けられました。2004年度に改訂した小学生の一日を紹介する写真教材も日中併記版、日英併記版を各国に寄贈するとともにウェブサイトに掲載しました。これらの写真教材あるいは素材は、海外の日本語学習者の日本理解のために制作したのですが、日本の小中高校生個人の素顔に焦点をあてた写真であることから、単なる日本理解に終わらず、同世代間の間接的交流、いわば写真による出会いをもたらしました。さらに、日本国内の高校生がコンテストに寄せてくれた多くの写真の背景には、撮影者と被写体の高校生との間の対話の過程があり、写真撮影



「高校生のフォトメッセージコンテスト」に寄せられた日本の高校生の素顔は、国内外の同世代の共感を呼んだ



写真教材「であい：7人の高校生の素顔」は、世界の日本語の教室に疑似的な出会いをもたらした

#### ロゴマークに込めた思い

設立10周年を記念して、グラフィック・デザイナーの鈴木一誌氏にTJFのロゴとロゴマークのデザインを依頼しました。これを無償で引き受けてくださった鈴木氏は、非営利事業は人びとの気持ちや共感に応える無償の仕事であるがゆえに、報酬を伴うものよりもっと緊張感を伴ったものでなければならないとして、TJFの出版物やウェブサイトに関しても制作に関わったり、さまざまなアドバイスをくださったりしました。

ロゴマークは、本を開いて横からみた形を、いまだ完全でない地球社会に見立てた不完全な円の真ん中にいれたデザインです。中央の本を開いたデザインは、人と人が握手している姿、文化と文化が交流している様子も表しています。「本」「ことばと文化」「地球社会」といったTJFの理念を盛り込んだものとなっています。

そのものが他者理解、自己理解の過程であることを認識できたことも大きな収穫でした。

写真関連事業を通じて、海外の日本語学習者に画一的な日本像ではなく、等身大の日本の若者の姿に接してもらい、一人ひとりの人間として理解を深めてもらおうとした事業の目標は、予想以上に達成されたといえます。同世代として共感してもらうこと、文化の相違だけでなく共通性にも注目してもらうこと、狭義の文化や伝統文化にとらわれることなく、より身近な日常の生活文化に注目してもらうこと、文化は絶えず変化するものであり、日本文化も多様性がある固定されたものにとらえることはできないことに気づいてもらうことなどをねらいとしたこれらの事業は、海外の日本語学習者が人間を理解するための文化理解に役立ったと考えています。

### 異文化間の相互理解から小中高校生間の相互理解へ

前述の写真関連事業を実施する過程で、財団の事業全体の目標として掲げた「異文化間の相互理解」という理念をめぐるさまざまな議論が内部でありました。文化についても、その定義から始まって、文化を紹介したり文化理解を促したりする方法、ことばと文化の関係のとらえ方などを見直すとともに、外国語教育をどのように行えば文化理解が深まり、学習者間の相互理解につながるかを模索しました。



日中の高校生。個と個の対話を通じて相互理解が深まる

TJFが最終的にめざすのは、単に文化を若い人たちに理解してもらうことではなく、互いのことばと文化を学ぶことを通じて、ことばや文化の違いを乗り越えて交流していけるよう手助けをすることなのだ認識するようになりました。そのなかから新たな事業の方向性が生まれてきました。学校のなかだけで学習を考えるのではなく、学んだことばを使ってその母語話者とコミュニケーションできる個と個の対話の場をつくらう、一人ひとりの人間と、マクロの文化との関係をとらえ直してみよう、マクロの文化から個々の人間をとらえるのではなく、異なる言語や文化を背景にもつ個々の人間を理解しようとするなかで、自分を再認識しながら自他の関係をつくっていく体験を若い人たちにしてもらおう、そう考えるようになりました。

日本の中国語教育や韓国朝鮮語教育関連事業においても、学習者が中国語や韓国朝鮮語を学ぶことによって、相手のことを知るばかりでなく、自分のことや日本の社会、文化、日本語を再発見し深く理解することにも教育的意義があること

が検証されました。

こうした議論を背景として、第3期の言語教育関連事業に「文化理解」だけでなく「国際理解教育」の視点も組み込み、事業の目標を「異文化間の相互理解」から「小中高校生間の相互理解」に設定することにしました。

学習者間の交流を促す事業は、今後の事業の一つの大きな柱となるものです（第3部参照）。海外の日本語教育と日本の外国語教育、国際理解教育関連の事業を並行して行っているTJFの強みを生かして、双方の事業をつなげ、学校、教師、児童生徒の交流を促進することは、これまでも日中、日米間で少しずつ取り組んできましたが、今後一層力を注いでいきます。

### 中国、韓国における日本語教育支援事業

アジア地域の日本語教育への支援については、設立当初より中国を重視していましたが、1996年度以降は初等中等教育に絞り込んで大型の事業を実施するようになりました。一つが1996年度から2002年度まで、毎年度東北部で開催した「中高校日本語教師研修会」（第2部68ページ参照）であり、もう一つが「日本語教科書の制作」（第2部76ページ参照）でした。中等教育用の日本語の検定教科書の制作に、中国側公的機関と国際交流基金の三者共同で7年にわたって取り組みました。

国際交流基金が当時、教科書の制作以外は中国の初等中等教育の支援に本格的に取り組んでいなかったこともあり、TJFは、中国側からの強い要請をうけて、初等中等教育における日本語教育の基盤整備ともいべき教師研修と教材制作に大きなエネルギーを注ぐことになりました。当初、受験のための文法中心の日本語教育を志向していた中国の教育状況と、TJFが重視していた文化理解、国際理解をめざす日本語教育との間には、距離があったことも事実でした。しかしその後、中国の外国語教育の目標も変化し、文化理解の重要性が指摘され、また資質教育としての外国語教育が提唱されるようになり、現在では教育理念を共有することができるようになりました。

一方、韓国も中国と並んで、日本にとって重要な隣国です。また、中国以上に中等教育における日本語教育が盛んなことから、TJFとしては、韓国の日本語教育についても視野に入れていましたが、まずは国内の韓国朝鮮語教育事業で実績を



7年にわたって共催した中国東北部での中高校日本語教師研修会



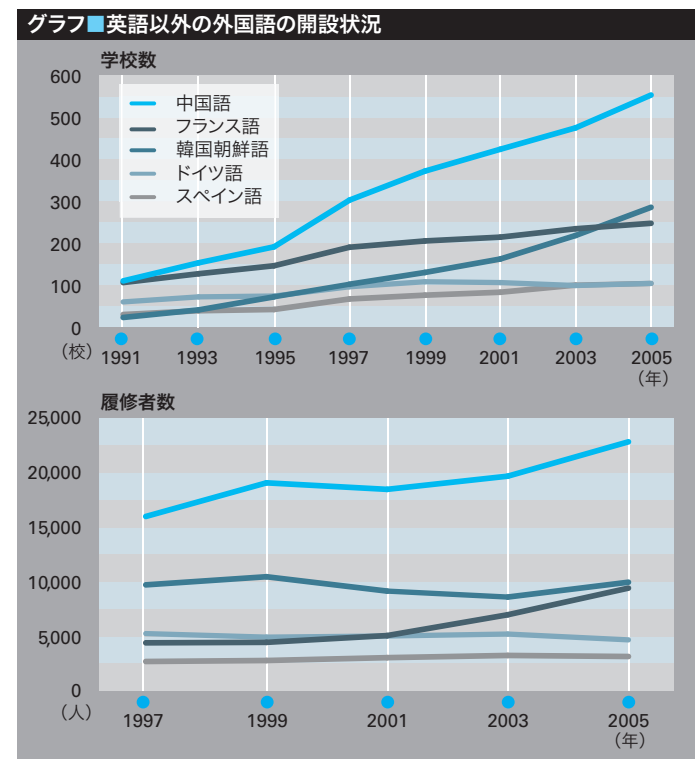
日中共同で編集した新しい日本語の教科書で学ぶ高校生



挙げてから着手したいと考えていました。2001年、写真教材「であい：7人の高校生の素顔」の制作・寄贈を機に韓国を訪れ、ソウルにおいて初めて日本語教師研修を行いました。それ以降、高校を中心とする韓国の日本語教育関係者とのネットワークを大事に育ててきました。

### 隣国のことばの学習：日本の外国語教育への提案

TJFは、日本の学校教育のなかで言語教育を効果的かつ体系的に実施するために、国語教育、日本語教育、外国語教育のすべてを含んだ総合的言語教育政策が必要であると考えてきました。また、国際語としての英語教育の重要性を認識しつつも、日本の近隣地域の言語を日本の学校で教えることの意義に注目し、第2期以降、各学校や地域の状況にあわせて英語以外の外国語を導入することを提唱してきました。当初は相互主義に立った「アジア言語」教育の促進という観点から、中等教育における日本語教育が盛んな地域の言語である、インドネシア語、韓国朝鮮語、タイ語、中国語を視野に入れていましたが、とりわけ日本人にとってさまざまな面で重要



資料：文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況」(調査は1986年から隔年で実施。履修者数の調査は1997年から)

な言語である中国語、韓国朝鮮語教育を重視し、若い人びとにとって教育的意義の深い「隣国のことば」「隣人のことば」の教育に集中して力を注ぐことにしました。具体的な事業としては、第2期より高校における中国語教育の促進事業を開始し、第3期に入ってから高校の韓国朝鮮語教育の促進事業にも着手しました。

日本の高校において中国語教育あるいは韓国朝鮮語教育を実施している学校は、2005年の文部科学省の調査によると、中国語は553校、高校全体の約10%、韓国朝鮮語は286校で、全体の約5%にすぎません。高校における外国語教育全体の実施校数の推移からみると、1990年を境に中国語がフランス語やドイツ語を抜いて英語に次ぐ地位を占め、韓国朝鮮語も2005年にフランス語を抜いて中国語に次ぐ外国語となっており、それぞれ急成長しています(左ページのグラフ参照)。しかし、実施校数に比して履修者数は伸び悩み、中国語で約2万2,000人、高校生全体の約0.6%、韓国朝鮮語にいたっては、約8,900人で、全体の0.25%、1,000人あたりわずか2、3人という状況です。実施校および学習者の絶対数は、重要な隣国の言語教育としてはあまりにも少ないといわざるをえません。

それでは、英語に加えてなぜ中国語と韓国朝鮮語を学ぶ必要があるのでしょうか。2000年1月に政府が発表した「21世紀日本の構想」では、二つの言語について次のように述べています。

「日本と韓国・中国との関係を長期的に安定させ、信頼関係を結ぶには、外交努力では不十分であり、深みのある関係を築く営み(「隣交」)が必要である。日本人がこれら隣国の民族の歴史、伝統、言語、文化を十分に理解することが求められる。そのためには、学校教育において両国の歴史と日本との関係史、とりわけ現代史を教える時間を充実させるとともに、韓国語や中国語の語学教育を飛躍的に拡充するのが望ましい」

二つの言語教育を推進する理由には、まずこうした東アジア地域において国家レベルで安定した協力関係、友好関係を構築し、政治、経済、文化をはじめとする各方面で円滑な関係づくりを進める必要があるということがあります。中国、韓国との経済関係もますます緊密化しており、経済言語としての社会的な需要も大きいといえるでしょう。

しかし、それとともに重要なことは、二つの言語を学ぶ教育的意義です。中国語および韓国朝鮮語を学ぶことによって、



高校生が隣国のことばを学ぶことの教育的意義は大きい





中国語教師や韓国朝鮮語教師と協力し、教育環境の基盤整備に取り組んできた

隣国の人びとや文化に対して関心をもって理解を深め、中国語や韓国朝鮮語の話者と積極的に交流しようとする態度が形成されることが挙げられます。また、日本と隣国の歴史的、文化的な関係を双方の見方を踏まえて見直すきっかけにもなります。

そして、それ以上に重要なことは、中国語および韓国朝鮮語は、地理的、歴史的、文化的、経済的に日本と密接な関係にある隣国のことばであり、日本語との関係が最も深いことばであることから、英語との比較では見えなかった日本語の特徴や思考の枠組みを相対的にとらえたり、広い視野から新たな発見をすることができることです。日本語との類似点、共通点、相違点を新鮮な驚きをもって知ることの喜びやおもしろさを体感できるといえます。学習者が日本語あるいは日本文化を再認識し、深く理解することにもつながるのです。

一方、外国人滞在者数からみても、中国語話者と韓国朝鮮語話者は短期および長期の在住外国人のなかで最も多いことから、中国語と韓国朝鮮語は日本国内の隣人とのコミュニケーション言語であり、両言語を話す人が増えることは、日本の地域において多言語・多文化共生社会、協働社会を構築していくための土台づくりにつながると考えます。

こうした意義をもつ両言語の教育ですが、教師のネットワークや研修の機会、学習のめやすや教材も不足している状況にあったことから、TJFでは、この10年間、全国の高校の中国語教師や韓国朝鮮語教師と力をあわせて教育環境の基盤整備に取り組んできました（第2部86ページ、106ページ参照）。文部科学省や地方自治体と連携したり、中国政府および韓国政府からの支援をうけながら、教師ネットワークの形成や教師研修の場づくり、教員免許取得講座開設への協力、そして高校生向けの教材や『高等学校の中国語と韓国朝鮮語:学習のめやす（試行版）』（第3部155ページ参照）の作成、学習者のためのプログラムの実施などに一定の成果を上げることができました。しかし、日本としてこれらの言語をどのように位置づけて教育制度のなかに組み込むか、という根本的かつ重要な課題は依然として残っています。

TJFでは、このように日本の外国語教育を促進しながら、海外の日本語教育の支援をしていることから、双方の言語教育をつなげることも重視してきました。同世代の母語話者との対話があってこそ、外国語教育の意義も深められ、かつ言語習得も進むと考えるからです。

## 広報出版活動

機関誌『国際文化フォーラム通信』を、1987年12月に創刊し、第1期は日本語や日本文化を考える媒体として、おもにTJFの事業を中心に特集を組み、その活動を報告しました。第2期以降の特集記事では、TJFの事業の紹介よりも、TJFが追求する文化交流、文化理解、言語教育に関する普遍的なテーマを取り上げ、それらのテーマに関する客観的な情報を掲載することによって、TJFの事業の理念や方向性を明確にすることを心がけてきました。また抽象的な内容とならないよう、具体的な事例を通じてそれらに関わる人びとの声を掲載するようにしました。体裁も第1期の重厚感のあるものから第2期以降は親しみもてる雰囲気に変え、用紙も軽量化しました。

英文機関誌『The Japan Forum Newsletter』は、1993年10月に創刊しましたが、おもな読者が海外の小中高校の日本語教師であることを考慮して、2004年6月に休刊とし、代わって、英語圏の日本語教師向け情報誌『Takarabako』を同年9月に創刊しました。

そして1997年3月には、TJFウェブサイトを開設しましたが、インターネットの機能が飛躍的に広がったことでTJFの事業も大きな展開を見せることになりました。海外への出版物の発送にかかる経費を抑えるためにも広報活動は即時性のあるウェブサイトを活用するようになりました。

## 財産としての人のネットワーク

20周年を迎えた現在、これまで積み重ねてきた事業の成果をさまざまな分野で実感できるようになってきました。同時に、これからの10年を見据えて事業の飛躍が必要な時期にもさしかかってきました。そこで2006年度より、事業の枠組みを再編成して新たな第一歩を踏み出しました（第3部149ページ参照）。

財団の事業を進めるとき何よりも大切なのは、財団の理念に賛同し、同じ志をもつ人びととのつながりです。この20年間に築き上げることができた国内外の人びととのネットワークこそがTJFの財産であり、支えでもあります。発足以来、TJFの事業に対して、個人、ボランティアグループ、民間の財団、企業、公的機関など、あるゆる分野の人びとが協力の手を差し伸べてくれました。今後も人的ネットワークを大事にするとともに、国内外で関連する事業を実施している団体・機関との協力関係をさらに発展させていきたいと思っています。



1987年12月の創刊以来、年4回発行している



財団の英文機関誌を1993年10月から2004年6月まで発行した



TJFウェブサイトの開設当時のトップページ

第2部

各事業を  
振り返る  
1997-2006



# 文化理解から 個と個の対話へ

1980年代後半、初等中等教育での日本語教育が急速に発展したオーストラリアをはじめとして、英語圏（おもに英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、米国を指す）を中心とする海外各国の小中高校では、学習者に単に言語を習得させるだけでなく、総合的なコミュニケーション能力を獲得させることに日本語教育の目標を設定するようになりました。1990年代に入ると、コミュニケーション能力を身につけるための重要な要素として文化理解を位置づける傾向が徐々に強まってきました。各国とも学習者が日本語という未知なる言語とその背景にある文化に触れることによって、日本語や日本文化に対してだけでなく、自分自身の言語や文化についても理解を深めたり、異なる言語や文化的背景をもつ人びとと積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけたりするなど、多文化的な資質や広い視野を獲得することが期待されるようになりました。

しかし、初等中等教育における日本語教育に関する調査・研究および支援体制は十分ではなく、文化のとらえ方や文化理解の目標も確立されていませんでした。初等中等教育においては、特に学習者の年齢や発達段階、興味、関心に即した内容をもつ教材や教授法を必要としますが、教材は不足し、教授法も十分に確立されておらず、現場の教師の創意工夫にゆだねられていたのです。

## 文化理解をめざす外国語教育のあり方を探る

こうした状況のなかで国際文化フォーラム（以下、TJF）では、第1部で述べたように、小中高校生の相互理解・文化理解をめざした日本語教育の具体的な内容や方法、教材、素材の開発に関心をもっていました。

そこで、まず海外の初等中等教育における日本語教育の実態を調査し、その成果を海外の日本語教師と共有したいと考えました。1995年度より始めた、海外の小中高校の日本語教師を対象とする「文化を取り入れた日本語の授業アイデアコン

テスト」は、それを象徴するプロジェクトでした（38ページ参照）。

このコンテストを通じて、文化理解をめざす外国語教育のあり方について多くのことを学ぶと同時に、海外の日本語教師とネットワークを築くことができました。このネットワークは、その後のTJFの事業を支える大きな力となりました。また英語圏の多くの国や地域において、実物教材や体験学習を取り入れた学習者主体の授業が重視されていること、海外の日本語教育の現場が多様であること、国や地域、学校、教師によって目的も方法も大きく異なっていること、日本の同世代への関心や視聴覚資料へのニーズが高いことなどがわかり、日本にある財団としての支援のあり方を考えるヒントを得ることができました。

## 文化理解への多角的なアプローチの開発

1997年、TJFは10周年を迎えましたが、この頃から日本や日本人を一般論として語ることは、日本に対する固定観念を助長し、多様な日本人の姿を画一的に伝えることになりはしないかと考えるようになりました。型にはまった従来の日本文化紹介からの脱却を図るためにも、個々人の生き方を伝えていくことが必要ではないか、また、海外の小中高校生が日本の同世代とのやりとりのなかで、学習した日本語を実際に使うことができれば、日本語学習の動機づけも高まり、文化理解も深まるのではないかと考え、個々の日本の小中高校生に光をあて、海外の同世代とつないでいく、いくつかの事業を始めました。

その一つが、設立10周年記念の事業として1997年度に開始した「日本の高校生の日常生活写真コンテスト」です（以後改称を重ね、最終的に2003年度に「高校生のフォトメッセージコンテスト」に改称）。これは、日本の高校生に、身近な高校生を主人公として、その日常生活や生き方を5枚の写真とメッセージで表現してもらうコンテストです（128ページ参照）。日本の同世代からメッセージを発信してもらえば、心の通った理解につながるのではないかと企画したものです。このコンテストを通じて、自己表現や他者理解、相互理解は、言語や文化を異にする海外の高校生だけでなく、実は撮影者と被写体の間でも、ま





た国内の高校生同士の間でも必要であることを認識しました。このことによって、海外と日本という二項対立的な発想からの脱皮も促されることになりました。

こうした実在する主人公を通じて日本の小中高校生の生活を伝える写真教材としては、「高校生のフォトメッセージコンテスト」に先駆けて、1995年度に制作した日本の小学校3年生を紹介する「けんたろうくんの一日」がありました。この教材は、10年以上経った今でも多くの教師に活用されていますが、それは主人公の小学生の存在感が大きく、魅力的であったからにはかなりません。文化理解は最終的に人間理解であるということ、文化から人間を切り離さず、文化理解を人間理解と連動させてこそ真の理解が得られるということを実感したプロジェクトでした。こうして、文化理解と一口にいても、日本社会や日本文化といったマクロの文化理解と、個人の生き方や生活に表象されるミクロの文化理解、ひいては人物理解を包含するアプローチが必要であると認識するようになったのです。

### 写真教材を通じて疑似的な出会いの場をつくる

前述のような経緯を経て、個と個の対話を通じて、お互いに相手を理解するとともに、自らを再発見し、他者との関係を築いていく「ことばと文化」の学習こそが、外国語教育あるいは文化理解の基底をなすものだと考えるようになりました。そこで、海外と日本の小中高校生がお互いのことを知り、連携していけるように、TJFは触媒役として、「ことばと文化」の学びの場を設けることに力を注ぐことにしました。理解したいと思う相手がいれば、言語や文化の学習は教科書や教室のなかだけで終わらず、より意味のあるものとなります。学習者は、習ったことばが通じたとき、人と人がつながるといふ楽しさを実感し、対話を重ねることによって、コミュニケーション能力や文化理解を深めることができます。しかし、すべての海外の学習者が日本の同世代と実際に会って交流することは難しいため、教材やウェブサイト上に出会いの場をつくらうと考えました。

こうした考えにもとづいて制作したのが写真教材「であい：7人の高校生の素顔」（以下、「であい」）でした（41ページ参照）。1999年度から2年以上の歳月をかけて制作した「であい」は、実在する日本の高校生の生きる姿を写真や動画、文章で表現したものです。「であい」3,000セットを日本語教育を実施している海外の中高校に日本語教育用の素材として寄贈しました

が、これは、7人の日本の高校生を世界の日本語の教室に送り出し、海外の学習者との疑似的な出会いの場を創出する試みでもありました。また、写真を日本語教材として活用するための教師向けの情報は、ウェブサイト上で提供し、海外の日本語教育現場の多様なニーズに応えるための情報のデータベース化や、情報の更新をする成長型教材のあり方を追求しました。印刷媒体とインターネットを連携させる形態をとったことも新しい試みでした。これらの試みはインターネットの発展によって可能になりました。インターネットを活用することによって、教材の形態ばかりでなく、教材に関連するプロジェクトの運営や、情報提供のあり方、そして交流の内容や方法、考え方も大きく変えていくことになりました。

### 現場に役立つさまざまな情報・素材の提供

写真教材の提供を通じて、写真が日本語教育現場における文化理解や人間理解を促す有効かつ優れた媒体であることを確認するとともに、言語運用能力を伸ばすための視覚素材としても有効であることがわかりました。

2001年度には、日本語や社会科などの授業で使用してもらうために、写真を無償で提供する「TJF Photo Data Bank」（2004年度に「TJF Photo Data Bank 日本編」に改称）をTJFのウェブサイト上に開設しました（61ページ参照）。2007年3月現在、日本の小中高校生の生活文化に関するものを中心に、年中行事などの伝統文化や現代の日本事情、日本の地域の様子や自然を伝えるものなど、多岐にわたる写真を約3,400枚掲載しています。国内外で「TJF Photo Data Bank」の写真を使用した多くのウェブサイトが制作され、数多くの教科書・教材が発行されています。

さらに、海外の小中高校の日本語教師を対象とする英文機関誌『The Japan Forum Newsletter』（2004年度に休刊）や情報誌『Takarabako』（59ページ参照）でも、日本語の教育現場が必要とする現代の日本事情に関する情報やさまざまな素材を継続的に提供してきました。

### 交流の場づくりと直接交流の試み

前述の「高校生のフォトメッセージコンテスト」や写真教材「であい」は、日本の高校生からの発信でしたが、海外の学習者からも日本の中高



校生に発信してもらいたいと考えました。そして2004年度に、「であい」を使って日本語を学習した中高校生に、自分自身に関するフォトエッセイ(写真と文章)を発表してもらおう「であいフォトエッセイカフェ」プロジェクトを開始しました(50ページ参照)。日本を含む世界各国の高校生からフォトエッセイを募集し、ウェブサイト上に掲載しました。2005年度には、「であいフォトエッセイカフェ」の応募者のなかから7人を選んで日本に招聘し、日本の高校生と交流してもらおうプロジェクトも実施しました。

2005年度末には、「であいフォトエッセイカフェ」ウェブサイトと「高校生のフォトメッセージコンテスト」の英語版ウェブサイト「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」を、国内外の中高校生を中心とするユーザーからの感想を掲載できるようにしました(135ページ参照)。これにより、双方向の交流に向けた第一歩を踏み出しました。「であいフォトエッセイカフェ」ウェブサイトでは、日本語、英語、中国語、韓国朝鮮語、「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」ウェブサイトでは、日本語と英語による投稿が可能です。ユーザーは学んでいる言語や母語を使って世界の同世代と対話をしていくことができます。

こうした活動を経て、2006年度には20周年記念事業として、ことばや国の違いを超えて中高校生が対話し、交流できるウェブサイトの開発に着手しました(第3部167ページ参照)。

### 海外の日本語教師とのネットワーク

日本語教育に関連する事業を通じて、TJFは海外の日本語教師とネットワークを構築してきました。このネットワークがあったからこそ、さまざまな事業を遂行することができました。

現在、英文情報誌『Takarabako』を送っている英語圏の小中高校の日本語教師約4,000人、中文情報誌『ひだまり』を送っている中国の中高校の日本語教師約1,600人をはじめ、韓国(韓国日本語教育研究会12支部)ほかの日本語教師とネットワークを築いています。今後は、Eメールの配信をより強化し、つながりをより堅固なものにしたいと思います。さらには、これらの海外の日本語教師と、国内でTJFが築いてきた、高校の中国語教育、韓国朝鮮語教育、英語教育、国際教育に携わる教師のネットワークとを結びつけていくことで、ことばと文化の学びと交流の場を学校の内外に築いていきたいと考えています。

## 1997 >> 2006 英語圏の日本語教育関連事業の動き

- 1997年2月 第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストを開催(1998年2月まで、1995年度に第1回、1999年度に第3回を開催)
- 1998年9月 ウィスコンシン州クロビス・グローブ小学校と群馬県大胡小学校間の交流を橋渡し(以後、11組の日本・ウィスコンシン州の小中高校間の交流の橋渡しを行う)
- 1999年4月 写真教材「であい」プロジェクトを開始
- 1999年6月 『The Japan Forum Newsletter』年2回から年4回の発行に増刊(年2回は16ページ、2色、年2回は8ページ、カラー)
- 2001年5月 「TJF Photo Data Bank」ウェブサイトを開設(2004年度に「TJF Photo Data Bank 日本編」に改称)
- 2001年11月 写真教材「であい」ワークショップを実施(2004年10月まで、英国・オーストラリア・カナダ・ニュージーランド・米国など延べ37カ所で開催)
- 2001年12月 写真教材「であい」キットを発行
- 2001年12月 「であい」ウェブサイト(日本語版・英語版)を開設
- 2001年12月 「であい」キットを寄贈(2004年5月まで、30カ国に3,000セットを寄贈)
- 2004年4月 国際教育活動ネットワーク/REX-NETの設立に協力
- 2004年7月 「であい」ウェブサイトに韓国朝鮮語版を開設
- 2004年7月 「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」ウェブサイトを開設
- 2004年9月 英語圏の小中高校の日本語教師向け情報誌『Takarabako』を創刊
- 2004年10月 「Takarabako」ウェブサイトを開設
- 2004年10月 「であいフォトエッセイカフェ」ウェブサイトを開設
- 2005年3月 写真教材「日本の小学生生活」(日英併記版)を発行
- 2005年4月 「TJF Photo Data Bank 日本編」ウェブサイトをリニューアルし、日英中の3言語で検索できる機能を付加
- 2005年5月 「日本の小学生生活」ウェブサイトを開設(「けんたろうくんの一日」ウェブサイトを吸収)
- 2005年11月 であいフォトエッセイカフェ交流プログラム「カフェおきなわ」を実施



# 1 文化を取り入れた日本語の授業 アイデアコンテストの開催

海外の小中高校の日本語教師を対象に、文化理解を促進する授業案とエッセイ（外国語教育における文化理解をテーマとするもの）を課題とする「文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」を1995年度から隔年で3回実施しました。応募作品は、初等教育と中等教育の二つの部門に分けて、言語面、文化面、授業案の構成、教師の考え方の4項目について、日本語教育の専門家が審査しました（資料202ページ参照）。

言語面では、生徒の年齢や関心、日本語のレベルに即した、コミュニケーションに役立つ日本語が取り入れられているか、文化面では、生徒の年齢や関心に即した題材が上げられ、生徒が日本語や日本文化ばかりでなく外国語や文化一般について考えたり、母語や自文化を再認識したりするような工夫が

なされているか、授業案では、時間配分や手順が適切か、取り上げられた日本語と文化に関連性があるかなどが評価の基準となりました。

## 見えてきた日本語教育の現場

第1回から第3回までに10ヵ国から、121件の応募作品があり、小中高校の日本語教育の実態をうかがうことができました。国や地域、学校によって日本語教育の実態は異なっていたにもかかわらず、コミュニケーション志向の日本語を習得させること、日本語や日本文化という未知なる世界に触れさせることによって、グローバルな視野や世界観、複眼的な思考や異なる文化に対する柔軟な態度や資質を身につけさせることを共通の目的としていました。

しかし、日本語の授業における文化の導入の方法や、文化理解のとらえ方は、国や地域、学校、教師によってさまざまでした。文化の導入の方法をみると、文化をテーマにした授業に言語の学習を組み込む授業案もあれば、言語の学習のなか



第2回特賞受賞者。西町インターナショナルスクール（東京）で模擬授業を行った [1999]

## 文化理解をめざした外国語教育の枠組み

TJFは、コンテストを通じて文化理解をめざす外国語教育の目的、内容、方法に関する基本的な考え方を、以下のようにまとめ、第2回コンテスト作品集（1998年発行）で提案しました。

### ■外国語教育で対象とする文化

広義の文化（価値観、思考方法、行動様式、生活習慣など）とする。

### ■外国語教育がめざすもの

#### 1. 言語運用能力および伝達能力の養成

4技能（聞く・話す・読む・書く）および自己表現能力を養成する。

#### 2. 文化理解能力の養成（文化理解教育）

自他の文化への理解を深める学習を通じて、文化的背景を異にする人びとと共生し、協働できる能力を養成する。

- ① 異文化に対する興味、関心、共感を喚起する。
- ② 文化の相違に対して寛容な態度で接し、自他の文化を尊重する姿勢を養う。
- ③ 文化が地域、年齢、性別、社会階層等によって多様であり、かつ変容するものであることを学習させる。
- ④ 自他の文化の比較を通じて、自文化を再認識させるとともに、文化の相違ばかりでなく共通性も認識させ、普遍的視野から

文化を位置づけさせる。

- ⑤ 異文化間の調整能力、適応技能を習得させる。

### ■文化理解をめざす外国語教育の方法

#### 1. 通常の言語の授業に文化を取り入れたカリキュラムのデザイン

- ① 言語の学習のなかに文化の要素を組み込む。  
cf. 敬語の学習をしながら、その背景にある人間関係を学ぶ。
- ② 文化をテーマとする授業（衣、食、住、学校、買い物、余暇、家族など）のなかに言語学習を組み込む。
- ③ 外国語授業の一定時間を文化の学習にあてる。

#### 2. 言語運用能力を向上させながら文化の学習ができる活動の導入

- ① 文化体験学習やタスク学習を導入する。
- ② 文化を疑似体験できる実物教材を使用する。
- ③ 学習対象言語を用いて、対象文化のなかで生活する人びと（同世代）との交流を図る。

#### 3. 留意したいこと

- ① 学習者の年齢、発達段階に即した内容を導入する。
- ② 学習者が関心をもち、親しみを感ずる内容を導入する。
- ③ 学習者が文化の相違点と共通点に気づくことができるように文化要素を選ぶ。



第3回特賞受賞者。日本語教育関係者と交流し、意見交換を行った [2000]

に文化の要素を組み込む授業案、さらに、授業のなかで一定時間を文化の学習にあてる授業案もありました。例えば、第2回コンテストの中等教育部門で特賞を受賞した「ペットをかっていますか」は、当時日本の子どもたちの間で流行していたゲーム「たまごっち」を取り上げ、そのゲームを通じて、日本語の表現（ペットをかっていますか、おなかがすきましたなど）を学習するというものでした。また、同じく第2回コンテストの中等教育部門で入賞した「日本人とお風呂」では、教科書の「お風呂と温泉」の単元を学習するときに、日本語の学習をしたうえで、日本の気候や風土が日本人の生活にどのように関わっているかを考えさせ、さらに自文化との共通点を発見させるというものでした。

その一方で、日本文化に関する知識を伝達するだけの授業も多く見受けられ、文化について考えさせると同時に、コミュニケーションに役立つ日本語を習得させたり、言語と文化をバランスよく授業に取り入れたりすることの難しさを知らされました。

しかし、優れた授業案に共通していたのは、学習者が興味をもつ身近な題材を選び、学習者が主体となる参加型の教室活動を導入していたことです。いずれの授業案にも教師の創意工夫や豊かな感性、教育に対する真摯な姿勢、学習者への愛情が感じられ、教師が重要な役割を担っていることを改めて認識しました。

各コンテスト終了後、特賞受賞者2人を副賞として約10日間日本に招聘しました。滞日中、日本語教育関係者と交流する場を設け、文化理解を外国語の授業に取り入れる意味や意義、また日本語教育の事情などについて活発な意見交換が行われました。

### 役割を終えたコンテスト

コンテストを開始した当時、日本語教育に文化を取り入れる意味は、まだ広く認知されていませんでしたが、時代の流れもあって、多くの国が日本語教育の大きな目標として文化理解を掲げるようになり、日本語教育を学習者のさまざまな能力を養成するための全人的な教育と位置づけるようになっていきました。第1回の応募者は英語圏のみでしたが、第2回、第3回は、韓国、中国、ドイツ、ブラジルなどからの応募もあり、地域が広がりました。

しかし一方で、国によって求められる学習者像や教育文化

が異なり、教育内容・方法や一学級あたりの生徒数などの違いもあるなか、単一の尺度で授業案を審査することの限界も感じるようになりました。また、インターネットの普及により、授業案の収集や教師とのネットワークの構築が以前よりも容易になったことから、第3回をもって終了することにしました。

### アイデア集の発行

コンテストを実施した翌年度には、応募作品のなかから、特賞・入賞作品と、第1次選考を通過した作品約20件を掲載した冊子を作成し（資料192ページ参照）、国内外の日本語教育関係者に配付しました。また、ウェブサイトにも掲載し、多くの教師にアイデアを共有してもらうようにしました。この冊子は、今も各国の教育現場で活用されています。



上段：第2回コンテスト作品集日本語版（左）と英語版（右）  
下段：第3回コンテスト作品集日本語版（左）と英語版（右）

## 2 写真教材「であい」プロジェクトの実施

2001年12月、3年にわたる制作期間を経て、海外（おもに英語圏）で日本語を学習している中高校生を対象とする写真教材「であい：7人の高校生の素顔」（以下、「であい」）を発行しました。「であい」は、実在する日本の高校生7人の人物像と日常生活を写真や動画、文章で紹介する素材「であい」キットと、この素材を教師が授業で使用するとき利用できる授業案や資料などを掲載した「であい」ウェブサイトで構成されています。従来の教材とは異なり、素材と教師向けの情報を切り離したことが「であい」の大きな特徴です。

### 実在する7人の高校生を主人公に

写真教材「であい」では、学習者がある日本人に出会い、その人となりを知っていく過程で、その人の話す日本語や個人の行動、価値観の背景にある多様な文化を学べるようにすることをめざしました。また、ある人物をコミュニケーションの相手と想定し、現実味のある文脈で日本語を学ぶことによって、日本語学習を学習者一人ひとりにとって意味のあるものにしたと考えました。そのため、実在する7人の高校生を主人公にし、実



際の生活の様子や考えていることを紹介することにしたのです。

1人ではなく7人にしたのは、できる限り多様な高校生を提示したいと考えたからです。また、台本はつくらず、ありのままの姿を一人ひとりの内面まで掘り下げて紹介したいと思いました。しかし、高校生の普段の生活に入り込み、生い立ちや悩み、夢などまで取材することから、関係者の同意や許可をとるのも容易なことではありませんでした。「高校生のフォトメッセージコンテスト」(128ページ参照)を通じて、すでにTJFとネットワークを築いていた高校教師に候補となる高校生を紹介してもらい、学校や家族に協力を求めました。そして、性別をはじめ、地域、学校の種類、家族構成、趣味、将来の夢など、いろい

ろな面から多様性が示せるかどうかを検討しました。地域は7都道府県、家族構成は両親と兄弟姉妹2人の4人家族もあれば3世代でくらす7人家族もあるといったように、さまざまな面を考慮しながら、7人の高校生を決めました。

撮影は、各人ができるだけ自然体で臨めるよう、本人と親しい人や写真を専攻する年齢の近い大学生に依頼しました。家庭や学校での様子、趣味、一日の過ごし方がわかるような場面を撮影し、撮影枚数は1万枚を超えました。さらに、7人の生い立ちから、現在の趣味や悩み、考えていること、夢、自分の家族や町に対する思いまで、本人や周りの人たちへの取材を重ね、時間をかけて丁寧にまとめました。

### 教師の声を反映

主人公7人の取材と並行し、「であい」をどのような構成にし、どのように教材化すべきかをさぐるために、オーストラリア、米国の日本語教師や日本語教育関係者の協力を得て、事前モニタリングと検討会議を実施しました。事前モニタリングでは、50人に「であい」のサンプル版と質問票を送付し、回答してもらいました。また、米国のウィスコンシン、オレゴン、ニューハンプシャー各州で、小中高校、大学の日本語教師や関係者の協力を得て検討会議を実施しました。

企画当初は、日本語学習のための教材、すなわち冊子に語彙や表現など日本語学習の要素を入れることを考えていました。しかし、事前モニタリングと検討会議を通じて、ある基準にもとづいて教材化すると、対象地域や対象学習者を限定してしまうことを改めて認識することになりました。語彙や表現ひとつをとっても、目標とするものは、国や地域によって、さらには学校によって大きく異なります。こういった異なるニーズに応えようとする、語彙や表現を提供するだけでも膨大な量になります。また、新しく把握したニーズに対応する要素を入れようとするれば随時改訂しなければなりません。印刷物では、とても対応しきれないということが明らかになりました。そのため、印刷物(「であい」キット)では、素材の提供にとどめることにし、日本語学習の要素、授業案や語彙・表現の提示などは、ウェブサイト(「であい」ウェブサイト)を通じて提供することにしたのです。



## 写真教材「であい」 に登場する 7人の主人公



玉城俊一

沖縄県在住。高校で沖縄の芸能や歴史を学ぶ2年生。伊是名(いぜん)島在住の家族と離れ、沖縄本島にある親戚の家に下宿している。趣味は音楽。将来の夢はシンガー・ソング・ライター。両親、弟5人の8人家族。



吉田功二郎

兵庫県在住。私立高校に通う2年生。弓道部所属。小学生のときに長崎県から兵庫県に引っ越してきた。動物や植物に興味がある。将来の夢は野生動物を保護する獣医。両親、兄、妹の5人家族。



山本隆幸

京都府在住。大阪の高校に通う3年生。難聴とうまくつきあひながら、アメリカンフットボール部の選手として活躍。社会人になってもアメフトを続けることが夢。両親、姉の4人家族。



柳有真

大阪府在住。インターナショナルスクールの2年生。日本で生まれ育った在日韓国人3世。趣味はスポーツ。将来の夢はスポーツカウンセラー。両親、姉2人の5人家族。



水島優

神奈川県在住。普通科高校2年生。写真部所属。趣味は写真、特に人物の写真を撮ること。将来の夢はジャーナリスト。両親、妹の4人家族。



大石勘太

東京都在住。単位制の高校に通う3年生。演劇部所属。中学生の頃から小説を書いている。将来の夢はミステリー作家。両親、姉3人、兄2人の8人家族。



坂井未知

北海道の高校に通う1年生。千葉県在住の家族と離れ、寮生活を送る。趣味は本やマンガを読むこと。動物や自然に興味がある。将来の夢は獣医。祖父母、両親、姉、妹の7人家族。

素材と教師向けの情報を切り離したことで、個人により焦点をあてることができるようになったといえます。また、7人を紹介する文章を日本語学習者向けに平易にする必要がなくなったことにより、内面をしっかりと描くことができるようになり、従来の日本語教育の枠にはまらない素材になりました。このことが後に社会科での活用につながったといえます。

### ウェブサイトでの情報提供

2001年12月に開設した「であい」ウェブサイトには、「であい」キットに含まれる写真や文章のほか、日本の文化について解説するミニ事典や語彙リスト、7人の紹介文と写真の説明文

を日本語学習者向けに平易に書き直したものなどを掲載しています。また、オーストラリアや米国でよく使われている教科書『いま!』『未来』『なかま』『季節』『おべんとう』『わかった!』と「であい」を併用するときの授業案を掲載するとともに、「であい」を使った教師から寄せられた活動例を随時追加し、蓄積していきました。さらに、希望する活動例をすぐに見つけられる検索システムを開発し、テーマ、国名、学習者の学習レベル、使用教科書、目標とする日本語学習項目・文化学習項目、活動の種類などを指定して検索できるようにしました。

2004年度には、日本語版と英語版のウェブサイトに加え、韓国朝鮮語版を新たに設けました。韓国では、学校における

## 「であい」の構成

### ■「であい」キット

**写真シート**：A3判カラー192枚。「プロフィール」と「一日の生活」の2部構成。「プロフィール」では主人公の家族や趣味、住んでいる町などを、「一日の生活」では、朝起きてから寝るまで、食事のシーンをはじめ通学や授業、部活動の様子や放課後の過ごし方などがわかる場面を紹介している。裏面に写真の説明文を日英併記で掲載。

**冊子**：A4判308ページ。海外の高校生に向けた主人公のメッセージ、生い立ち、悩み、考えていること、夢などについて記した「マイ・ストーリー」、写真シートの裏面に掲載しているキャプションで構成。すべて日英併記。

**CD-ROM**：2枚。写真シートで紹介している写真のほか、主人公のさまざまな日常生活の場面の写真とビデオメッセージ、主人公以外の高校生のクラブ活動など写真を収録。



### ■「であい」ウェブサイト

**「であい」キットに含まれるデータ**：7人の高校生の写真、マイ・ストーリー、ビデオメッセージなどを掲載。

**日本語教育用の授業計画と授業案**：人間理解や文化理解に重点を

おいた授業案、オーストラリアや米国などで広く使用されている日本語教科書と併用する授業案、各地の日本語教師やアドバイザーによる授業案を掲載。テーマやアクティビティの種類、言語や文化の目的などで検索することができる。

**アイデア・コーナー**：「であい」を使用した教師のアイデアを掲載。

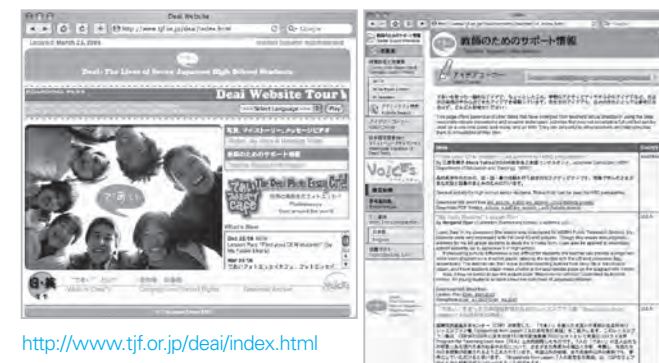
**Voices コーナー**：「であい」を使用した教師の感想と質問、TJFの担当者の回答などを随時掲載。

**参考資料集**：授業案を使う際に必要な資料やデータ、実物教材などを掲載。

**ミニ事典**：写真に写っている事物やキャプションを理解するために必要な文化・社会・教育制度などについての解説を掲載。

**語彙リスト**：写真のキャプションに関連する語彙の読みがなと英訳を掲載。

※上記構成のほか、であいウェブサイトツアーなどの情報を随時追加。



<http://www.tjf.or.jp/deai/index.html>



インターネットの普及率が高く、教育課程（学習指導要領に相当）で文化理解を重視していることから、「であい」は好意的に受け入れられ、多くの教師が関心を示しました。このように、ウェブサイトの利点を生かし、ニーズに応じて内容を更新するとともに、教師向けのメールマガジンを定期的に配信し、ウェブサイトの更新やワークショップの案内などの情報を提供してきました。

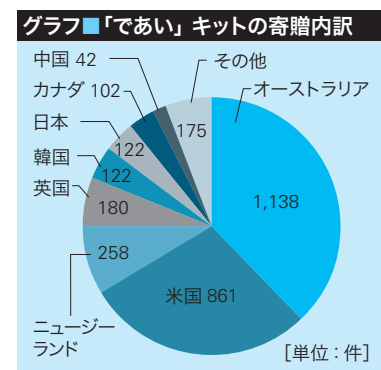
### 重要な役割を担ったワークショップ

2001年12月に「であい」キットが完成した後、英国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、日本、ニュージーランド、米国などで日本語教育を実施している中高校にキット3,000セットを、各学校の申請にもとづいて寄贈しました。

「であい」キットの寄贈と並行して、オーストラリア、カナダ、韓国、ニュージーランド、米国で、州や地域の日本語教師会、教育省などの協力を得て、30ヵ所以上でワークショップを開催しました（資料203ページ参照）。ワークショップでは、「であい」の趣旨、内容について説明し、使い方について実践例を紹介したあと、参加した教師たちに意見交換してもらいました。これらのワークショップの内容や成果は「であい」ウェブサイトに掲載し、多くの教師が共有できるようにしています。上記以外のセミナーやワークショップでも自主的に「であい」が取り上げられました。

「であい」自体は素材にすぎず、どのように教材化するかは教師にゆだねられています。そのため、「であい」の趣旨を教師に伝え、その使い方について教師同士で意見交換してもらえるワークショップは、このプロジェクトにおいて重要な役割を担っていました。「であい」の使い方は教師によってさまざまです。写真シートを見せるだけ、7人を紹介する文章の一部を

読むだけという使い方もありました。TJFが提案する「であい」の使い方やさまざまな活動例はウェブサイトに掲載していますが、「であい」が素材である以上、これらはあくまでも一例にすぎません。どのような使い方でも、生徒が「であい」



米国のボストンで行われた「であい」のワークショップ [2002年]

に触れることによって、何かを感じ、視野を広げるきっかけになるのではないかと考えています。

### 社会科教育でも活用

「であい」は文化理解を重視していることから、社会科の授業でも活用されました。国際交流基金日米センターは、2003年にペリー来航150周年を記念して実施した米国の中高校における日本理解教育の促進を図る事業の一環として、日本理解教育カリキュラム「Snapshots from Japan: The Lives of Seven Japanese High School Students」を開発しました。これは、米国の社会科のナショナルスタンダードを踏まえ、中高校の社会科教育を対象に制作され、2004年10月に完成しました。これは「であい」を素材として使用し、日本の地理、歴史、教育、人口、環境などに関する資料を備えた16の授業案で構成されています。TJFは、この事業に協力し、同センター

### 固定観念をくつがえす「であい」



州内で日本語を導入しているすべての中高校に「であい」キットを配付したところ、教師たちから好意的なフィードバックを得ました。2005年から施行された州の小中学校向け新シラバスは、「Using Language」（言語運用力の向上）、「Moving Between Cultures」（文化理解）、「Making Linguistic Connections」（言語構造の把握と応用）の3点を目標としています。特に、「Using Language」と「Moving Between Cultures」では、日本語を使ったコミュニケーション能力の向上と、言語と文化の相互関係への理解を深めることが求められており、「であい」の趣旨とも合致しています。

「であい」の主人公たちの魅力の一つは、各人がさまざまな背景をもち、私たちの固定観念を壊してくれることです。中高校生たちにとって、オーストラリアや日本を含めたすべての国々が、さまざまな社会的・言語的・文化的背景を内包していることを知り、それを受容し評価することは大切なことだと思います。

（サリー・シマダ/オーストラリア・ニューサウスウェールズ州教育省日本語コンサルタント）



に「であい」キット100セットを寄贈しました。「であい」キットは、全米の中高校の社会科の授業で活用されました。また、オーストラリアでも、アジア教育基金を通じて、同国の社会科教師に「であい」キットを寄贈しました。

### 「であい」はどのように活用されたか

2002年9月から2003年6月まで、英国、ニュージーランド、米国の日本語教師9人と生徒270人に「であい」を使った授業について報告してもらいました。また、2006年4月から5月にかけて1,500人を対象に「であい」に関するアンケート調査を実施しました（回答は234人）。

教師からは、実在する高校生と結びつけて日本語学習や文化理解学習ができるという点が高く評価されました。「であい」の主人公について学んだ学習者は、彼らに興味や関心を抱き、共感していることがわかりました。主人公に質問したい、主人公と話したいと思うことが、日本語学習に対する意欲の向上につながったといえます。文化面では、日本の高校生の多様性に気づいたり、自文化と比較して同じところや違うところを認

識したり、それまでの日本に対する画一的な見方を改めるという効果がありました。さらに、主人公を、日本人として一般化してとらえるのではなく、ひとりの人間としてとらえ、個人的な共感や驚きをもったことがわかりました。異なる言語、文化をもつ人との出会いの場をつくり、「もっと知りたい」「もっと伝えたい」という気持ちを喚起することによって日本語学習や文化理解への動機づけや意欲を高めようとした「であい」の目的は達成されたと考えています。

### 明らかになった課題

しかし、評価方法については課題のあることも明らかになりました。TJFは、成果ではなく文化理解学習の過程を体験することを重視する考え方を提示しましたが、テストや評価方法が不明確であるという指摘がありました。評価方法として、生徒に気づいたことや考えたことなどを作文に書かせ、内面的な変化をとらえる試みも見られましたが、日本語の運用能力が十分でないため、自分の考えを日本語で的確に表現できず、母語で補足させる必要があったようです。ある教師は、学習前に日本語運用能力の習得だけでなく文化理解も授業の目的であることや、何を評価基準とするかを生徒に明確に伝えておくことが必要だと指摘しています。

また、「であい」の趣旨に沿い、「自分」というテーマで使用する教師が多く見られましたが、自分自身を振り返るよう求めることによって生徒の負担が大きくなり、そのような授業を続けると生徒が抵抗したり飽きたりする例があったこともわかりました。

印刷物とウェブサイトという二つの媒体で素材や教材を提供したことについては、両者とも役に立ったとする教師が多かったです。しかし、印刷物の内容と授業案など教師向けの情報を両方提供しているウェブサイトのほうがより役に立ったとする教師は少数です。手軽に使える印刷媒体の役割はまだ大きいことを再認識しました。ウェブサイトの情報量が多く、構成が複雑であったことも、教師が使いがらかった一因だと思われました。これを改善するために、ウェブサイトの内容や構成、使い方を説明するコーナー「であいウェブサイトツアー」を設けました。



## 「であい」を使った高校生から

「であい」の主人公と不思議と強いつながりを感じました。今日をティーンエイジャーとして生きるという共通性からきているのだと思います。こうした共通性がすべての文化的、言語的障壁を乗り越え、人間同士を一つに結びつけることができるのだと思います。いつか、「であい」の主人公のうち何人かに実際に会って話し、彼らの生活をより深く知りたい、そしてこの世界に生きる人、文化、出来事についてもっと学びたい、と思っています。  
(オーストラリア)

「であい」を通じて、自分のこれまでを振り返り、楽しかったことも苦しかったことも、自分にとって大切な経験になっていたり、以前よりも自信がついて楽観的になっていたりしていることに気づ

きました。自分自身にもすてきなところがたくさんあると思わせてくれました。生活のなかの小さな物ごとを大切にしたいと思います。  
(中国)

日本は韓国と近いといえば近い国。それなのに知っていることが少ないのが残念でした。「であい」を通じて少しは日本に近づけた気がします。日本の生活は、ドラマや映画、マンガなどを通じて知っていました。しかし、日本の友だちが見せてくれる生活は、他のメディアから得た情報よりずっと中身の濃いものでした。自分では体験できないことが、写真を通じて学べるのが興味深いと思いました。これまでわからなかったこともよくわかったし、ことばと文化の違いがあるだけで、同じ高校生なのだと思います。  
(韓国)

「であい」フォトエッセイカフェ」ウェブサイトより抜粋

## 各国の関係機関の協力

「であい」プロジェクトは、多くの機関の協力を得て遂行できたプロジェクトです。制作にあたっては、米日財団から3年にわたって多額の助成をうけました。また、(株)講談社、国際交流基金、Japan2001実行委員会からも助成を、凸版印刷(株)から印刷協力を得ました。一式10kgの「であい」キットの送付にあたっては、北米はノースウェスト航空に、英国は外務省と全日本空輸(株)に、オーストラリアとニュージーランドは、国際交流基金と(株)商船三井の協力を得ました。各国内での「であい」キットの申し込みの受け付け、配付にあたっては、現地の教育関連機関、財団などの協力を得ました。特に、オーストラリアでは各州教育省およびMelbourne Centre for Japanese Language Education、ニュージーランドでは教育省と関連機関、英国ではJapan Festival Education Trust(日本理解促進のための公的機関)が配付を担当するとともに、教師向けのワークショップを開催しました。また、韓国への「であい」キットの輸送、配付については韓国日本語教育研究会と国際交流基金ソウル日本文化センターの協力を得ました。そのほか、北米、ニュージーランド、韓国の各地域の日本語教師会の協力を得て多くのワークショップを開催しました。

## 3 「であい」フォトエッセイカフェプロジェクトの実施

「であい」プロジェクトの最終段階として、「であい」を使って日本語を学んだ海外の中高校生に、「であい」の主人公と疑似的に出会い、他者を理解することを通じて自分自身を振り返ったことを表現してもらう場をウェブサイト上につくることを企画しました。初めての試みだったこともあり、どのような方法がいいのか、どのような課題があるのかを探るために、2004年度に英国、オーストラリア、韓国、中国、米国の中高校の教師14人にモニタリングを依頼し、その生徒たちに「であい」の主人公を知って考えたこと、自分自身のことを写真と文章で紹介するフォトエッセイづくりに取り組んでもらいました。そして、制作の過程で生じた問題について教師や生徒からの感想や意見などを聞いたり、ウェブサイトに掲載するときの問題点などを整理したりしながら、企画をつめていきました。

2004年10月、「であい」フォトエッセイカフェ」ウェブサイトを開設し、モニタリング参加者から集まったフォトエッセイを掲載しました。そして、応募者のなかから7人を日本に招聘するとして、2005年5月まで自分自身をテーマとするフォトエッセイを広く募集しました。対象は日本語学習者としましたが、このプロジェクトの大きな目的は、自分の考えを発信してもらうことだったことから、参加者には日本語、英語、中国語、韓国語、朝鮮語のいずれかの言語でエッセイを書いてもらうことにしました。

その結果、英国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、ニュージーランド、米国、ベトナムの8カ国、37校から157件のフォトエッセイが寄せられました。家族や友だちの悩み、日々の生活、将来のことなど、自分が関わる身近なテーマについて、自分が



<http://www.tjf.or.jp/photoessaycafe/index.html>

## フォトエッセイカフェに参加した教師の声

自分の作品を世界中の人に読んでもらえるという意識があるので、日本語を書くことがとても現実味を帯びたものになりました。自分のことをもっと知ってもらいたいという純粋な動機から、とても丁寧に取り組んでいました。正解があるわけではないので、日本語のレベルや一人ひとりのペースに応じて取り組むことができ、それぞれに達成感があったようです。(オーストラリア)

日本語を習っている高校生がいちばん関心をもってするのは、日本の高校生についてではないかと思います。私の学校では、日本の高校生とEメールをしたがっている生徒がとても多いです。彼らは日本語を使って日本人の同世代の友だちをつくりたいと思っています。そんな意味で、であいフォトエッセイカフェプロジェクトは韓国の高校生にとって興味深いものだと思います。(韓国)

内向的な生徒が多かったのですが、フォトエッセイづくりを通じて、親やクラスメイトなど、他人との関係づくりがうまくできるようになってきました。ある生徒は、以前は日本語にまったく関心をもっていない様子でしたが、フォトエッセイづくり

に取り組むうち、日本語の授業で積極的に発言したり、日本人教師に積極的に話しかけるようになりました。(中国)

「であい」の生き生きとした高校生の姿に触発されて、自分を客観的に振り返り、成長を確認し、さらなる成長を促すという効果があったと思います。作品には生徒の性格がよく出ます。生徒自身も友だちを知るよい機会になったと思います。教室のなかやテストだけではわからない生徒の別の顔を知ることができました。また、写真の説明文を日本語で書くことで、自分を表現する語彙が身につきます。自分の好きなことを好きなだけ書かせることで、生徒は満足感が得られると思います。教師にとっても、どのような語彙を授業で取り入れていけばよいのか参考になりました。(米国)

生徒中心のプロジェクトで、生徒自身も興味をもって取り組んでいました。私の役割が教えることから、生徒を助けることになったことで、生徒の自主性やグループでの協力が促され、生徒同士のつながりが強くなった点が印象に残りました。(米国)



思っていることや考えていることが率直なことばで書かれました。これらのフォトエッセイは、日本語と各母語を併記してウェブサイトに掲載しました。

### 「カフェおきなわ」の実施

2005年11月に、応募者のなかから7人（米国2人、英国、オーストラリア、韓国、中国、ニュージーランドから各1人）を招聘し、日本の高校生7人と交流する「カフェおきなわ」を10日間の行程で実施しました。前述したような、他者と出会い、理解することを通じて、自分について考え表現することを積み重ねる過程を、実際の交流をとおして体験してもらいたいと考えたからです。海外の7人の選抜にあたっては、まず、「高校生のフォトメッセージコンテスト」（128ページ参照）や国際教育活動ネットワーク／REX-NET（58ページ参照）などでTJFがこれまでに培ったネットワークを活用し、東京、神奈川の高校4校の協力を得て、日本の高校生7人で受け入れチームをつくりました。この7人が「であいフォトエッセイカフェ」の全作品を読み、「会いたい」「いっしょに活動したい」と思う高校生を選びました。自己を表現するフォトエッセイに優劣はつけられないという考えから、コンテスト形式にはしませんでした。

高校生14人は、「であい」の主人公のひとりのふるさと、沖縄県伊是名島を訪れ、4日間滞在しました。伊是名島では、3グループに分かれ、グループごとに伊是名島の自然と人を取り材してフォトエッセイをつくる課題に取り組みました。コミュニケーションが不可欠な共同作業を行うことによって、言語の壁を乗り越え、お互いを深く知ってもらいたいと考えたのです。

まず、自然や芸能、暮らしなどについて地元の人の話を聞き、グループごとにテーマを決めました。沖縄の墓の形に興味をもったグループは「死生観」について、伊是名島の自然の美しさに心をひかれたグループは「ごみ問題」について、伊是名島の太鼓に感動したグループは「音楽の力」についてそれぞれ取材し、フォトエッセイにまとめていきました。

参加した高校生はフォトエッセイづくりの過程で、言語や文化、考え方の違いによって壁にぶつかったり、チームで活動することの難しさを感じたりしつつも、自分の意見を述べ、



各グループとも、毎日遅くまでフォトエッセイづくりに取り組んだ



伊是名中学校と東京の会場でフォトエッセイの発表を行った



相手の意見を尊重しながら、最終案をまとめていくおもしろさ、協力して作業することの楽しさ、達成感を体験しました。また、英語圏の高校生は、ほかの英語圏の高校生との共通点や違う点を発見したり、日本だけでなく韓国や中国にも興味をもったりしました。同じ高校生として共感したからこそ、互いに「もっと知りたい」「もっと伝えたい」という思いが芽生え、ことばの大切さにも気づいたようです。

### 交流プログラムに参加した生徒の声

言語の壁があっても、みんなそれぞれ工夫してコミュニケーションを取っていたし、ちゃんと取れていたのはすごいと思いました。仲よくなるほど、相手ともっと話したくなりました。（日本）

このプログラムに参加するまで、団体行動を面倒くさいと思い、少人数で行動してきました。でも、みんなで協力してつくりあげる喜びや、やりきったときの達成感を知り、人とつながることの楽しさを知りました。（日本）

みんな違う意見や考えをもっていて、よかったです。ほかの人のアイデアも尊重して取り入れようとしたことは、グループとしての強みだと思いました。何かを決めるときは多数決にし、それでもうまくいかないときは妥協案を出して解決しました。（米国）

海外の高校生が自分の意見をしっかりもっているのを見て、「人と同じなのがいい」という考えを捨て、自分の考えをもつことができるようになりました。（日本）

仲よくなるためには、なんとなくことばが通じれば、あとはジェスチャーや気持ちでいろいろ話せましたが、グループで物ごとを決めるときにはそうはいきませんでした。もっとほかのことばを勉強している人々と話すことができればいいと思います。（日本）

日本語や日本文化についてもっと知りたくになりました。また、ほかの海外からの参加者に会い、ほかの言語も勉強したいと思うようになりました。（ニュージーランド）

共同作業を通じて、日本と海外の高校生の間でも、さらに日本の高校生同士でも考え方が違うことに気づきました。その違いをとてもおもしろく感じ、違うということは本当に大切なことだと思いました。人と触れあうのが楽しいのは、一人ひとりが違うからだと思いました。（日本）

多様な考えをもつ各国の高校生と出会い、以前よりほかの人を受け入れることができるようになったと思います。たとえ何かで意見が対立したとしても、その人の別の面を見れば素晴らしいところがあるということを学びました。（英国）

まったく違う環境で生活してきたのに、こんなにも仲よくなれるんだと知ってびっくりしました。やっぱり同じ「人」だということがすごくわかりました。私も将来、人と人をつなぐことができるような職業に就きたいと思います。（日本）

このプロジェクトでは意思を疎通させないと前に進むことができないので、「どうしても伝えてやる！」という気持ちが自然に芽生えてきて、相手に言いたいことが伝わるまで、辞書を片手に懸命に話しかけました。（日本）



### 世界の高校生が語り合う場へ

2006年3月、世界中の中高校生の交流の場となるよう、「であいフォトエッセイカフェ」ウェブサイトにて、フォトエッセイの感想や質問を日本語、英語、中国語、韓国朝鮮語の4言語で掲載する機能を追加しました。2007年3月末現在、インドネシア、英国、オーストラリア、カナダ、中国、日本、ニュージーランド、米国の高校生から送られてきた200件以上のコメントを掲載しています。

しかし、4言語で感想や質問を掲載する掲示板の機能を開発するのは容易ではなく、その作業にフォトエッセイの掲載後半年以上を要しました。フォトエッセイの作者の多くが卒業してしまったことから、寄せられたコメントに対する返信をもらえず、交流が深まらなかったことは残念なことでした。こういった「であいフォトエッセイカフェ」で得られた経験や教訓は、後のSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用した世界の中高校生の交流ウェブサイト「つながーる」の企画につながりました（第3部167ページ参照）。

### 「であいフォトエッセイカフェ」のエッセイへの感想

自分の夢に向かってまっしぐらに突っ走っているジウオンさんは、とても輝いていると思います。弟がいじめられたりしたときに、仕返しをしてあげたところは、お姉さんらしくて好きです!! また、自分が正しいと思うことを他人の前で堂々と言うことができるのは、とても尊敬すべきだし、見習うべきところだと思いました!! ジウオンさんと友だちになって、ときどきシャイになってしまう自分を変えられたらと思います! (日本)

これまで、とても遠くにみえる存在の人に、こんなに親近感を感じたことはありませんでした。私もいろいろな場所に引っ越して転校を重ねてきました。そんなに好きでもない人たちと一緒に過ごし、よく知らない人には本当の自分を隠してきました。本当の私を知っている人はほんの少ししかいないし、私自身、自分をわかっているのかどうか、わからないときもあります。レベッカには

会ったことはないけど、きっと私よりも私のことをわかってくれそうな気がします。

(オーストラリア)

私もSAXを吹いています。私は日本で生まれてずっと日本で育って、1年と少し前にアメリカのテキサス州に引っ越してきました。現地校で英語に不自由しつつも、日本にいたころの部活の先輩の名言、「英語だけでなく、音楽もまた、世界共通語である」というのを胸に、アメリカでもSAXを吹き続けています。これが私の教訓というかモットーです(笑)。コーさんも素敵なことばをご存じですね!

(米国)

シェリーさんのものの考え方に、すごく考えさせられました。シェリーさんと話して、もっとシェリーさんの考え方について知りたいと思いました。

(日本)

## 4 写真教材「日本の小学生生活」(日英併記版)の制作

2004年6月に写真教材「日本の小学生生活」の日中併記版を、2005年3月に日英併記版をそれぞれ200セット制作しました。この教材は、海外で日本語を学ぶ小学生たちに、日本の小学生の写真や手紙、メッセージなどの素材を使って、日本語を学んでもらうことを目的としました。

教材は、写真シート、冊子、CD（日中併記版は音声テープ）で構成されています。写真シートは、写真教材「けんたろうくんの一日」と「6年1組の一日」から構成されています。

「けんたろうくんの一日」は、TJFが1995年に制作したもので、石川県金沢市に住む小学3年生の憲太郎くんの朝起きてから夜寝るまでの生活を紹介しています。布団での寝起き、入浴、こたつでの家族だんらんといった家庭内の場面に加え、授業、給食、掃除など学校での場面を収めるとともに、場面ごとに簡単な説明をつけています。オーストラリア、ニュージーランド、米国など英語圏の小学校の日本語教育現場に寄贈し、現在も広く活用されています。撮影後10年以上経っていましたが、現在の学校生活や家庭生活と大きな違いがないため、「日本の小学生生活」に組み込むことにしました。

「けんたろうくんの一日」に含まれていなかった場面を補充するために、2003年秋に東京都内の区立小学校と児童の保護者に撮影の協力を依頼しました。避難訓練、授業参観、校舎内の様子、筆箱、名札などを撮影するとともに、移動教室や水泳の授業の写真を借りるなどして「6年1組の一日」としてまとめ、「日本の小学生生活」に組み込みました。

冊子には、写真シートの各場面についての説明と、日本の小学生の生活に関する補足説明を載せました。日中併記版、日英併記版とも漢字にはすべて読みがなをつけています。「けんたろうくんの一日」の写真の説明は、憲太郎くんへのインタビューをもとにTJFが作成しました。「6年1組の一日」では、実在の子どもたちを身近に感じてもらうために、6年1組の子どもたちが実際に書いたものをできるだけ



手を加えずに採用しました。また、子どもたち一人ひとりの自己紹介や自分たちの学校や町を紹介する手紙なども収録しています。CDと音声テープには憲太郎さんと6年1組の子どもたちによる肉声のメッセージ（日本語）を収録しました。

### 日英併記版の寄贈

2005年4月に、英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、米国などの英語圏で教材・資料の貸し出しを行う拠点機関や、充実した日本語教育を実施している小学校に寄贈しました。また少数ですが、外国人児童の日本語教育を行っている日本国内の教育機関にも寄贈しました。

## 「日本の小学生生活」の構成

### ■写真教材（日英併記版）

**写真シート：**A3判カラー35枚。写真教材「けんたろうくんの一日」と「6年1組の一日」の2部構成。「けんたろうくんの一日」には、石川県金沢市に住む小学3年生の憲太郎さんの朝起きてから寝るまでの生活場面（13場面）、「6年1組の一日」には、東京都内の区立小学校6年生の学校での生活場面（31場面）を収録。裏面には写真の説明文を掲載。

**冊子：**A4判86ページ一部カラー。写真シートの各場面についての説明と、日本の小学生の生活に関連する情報を日英併記で掲載。漢字には読みがなをふっている。

**CD-ROM：**1枚。憲太郎さんと6年1組の子どもたちによる肉声のメッセージを収録。

### ■ウェブサイト（日英中3言語）

**6年1組の一日コーナー：**「6年1組の一日」の写真シートを含む計88枚の写真、写真の説明文、参考情報、冊子に含まれる情報を掲載。また、6年1組の子どもたちの自己紹介や歌を聴くことができる。

**けんたろうくんの一日コーナー：**「けんたろうくんの一日」の写真シートの写真と写真の説明文、参考情報を掲載。「TJF Photo Data Bank 日本編」ウェブサイトへのリンクをはり、関連場面の写真を見られるようにしている。憲太郎さんの自己紹介を聴くことができる。

**もっと知りたい人のために：**日本の小学校、日本人の生活について、詳しい説明を掲載。

**アクティビティ：**英国、オーストラリア、カナダ、米国の初等教育の日本語教育関係者が作成した活動例のほか、TJFが開催した「全中国小学校日本語教師研修会」用に作成された活動例を掲載。



[http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index\\_j.htm](http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index_j.htm)

## 「日本の小学生生活」ウェブサイト開設

教材の写真、文章、音声を、日本語教育および日本理解教育の現場でより広く使用してもらうために、2005年5月に「日本の小学生生活」ウェブサイトを開設し、日本語、英語、中国語の3言語で掲載しました。日本の小学生の生活に関する解説のほか、各国の日本語教育関係者が執筆した授業案なども掲載しました。

## 5 日米の学校間交流に協力

TJFの米国代表連絡員が、長年ウィスコンシン州の日本語教育に携わってきたことから、1990年代初めからウィスコンシン州に対して、日本語教育助手の派遣や日本語教育カリキュラムガイド制作を助成するなど積極的に支援してきました。

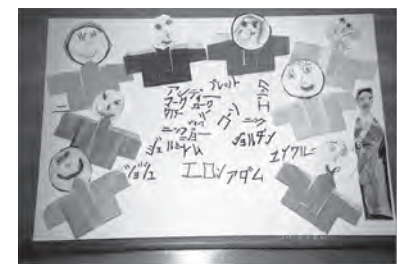
1998年当時、日本語教育を実施していた同州のクロビス・グローブ小学校では、日本の小学校との交流を強く望んでいました。一方、6年生に英語教育を実施していた群馬県の前橋市立大胡小学校（当時大胡町立）では、「総合的な学習の時間」で国際理解のために実践的な取り組みを模索していたことから、TJFは両校の橋渡しをし、同年に子どもたちの絵画作品、ビデオテープなどの交換から交流が始まりました。その後、中学校、高校間の交流、ついで、保護者、地域の教育長、町長、市長が相互訪問するなど、地域ぐるみの交流に発展し、2002年8月には姉妹学校区、姉妹都市提携を結びました。

この取り組み以後、日本語教育を実施している米国の学校と英語教育を実施している日本の学校をおもな対象にして、小中高校、地域間の交流を仲介し、千葉県富里市とウィスコンシン州メクオン市、東京都立大崎高校とウィスコンシン州メナーシャ高校、愛媛県新居浜市教育委員会とフランクリン学校区など11組の交流に協力してきました。

どの交流も目的は子どもたちを中心とする人的交流です。そのために、子どもたちの現地滞在はホームステイを原則とするとともに、訪問先の学校が休暇中でないときを選び、通学できるようにすることを心がけてきました。



大胡小学校の交流相手となったクロビス・グローブ小学校



大胡小学校に送られてきたクロビス・グローブ小学校の子どもたちの作品





PTA主催による海外の高校との国際交流は、東京都で初めてのケースという大崎高校の取り組み [2004]



富里市の子どもたちがメクオン市を訪ね、受け入れ先の子どもたちとビーチバレーを楽しむなどして交流を深めた [2005]

### 交流を継続させるために

交流を始めるようになった経緯は学校によりさまざまですが、発起人となった校長や教師が異動するなどして交流が中止されてしまうことが少なくありません。交流を継続させるためには、交流を担当する双方の教師を支え、態勢をつくることが第一に必要なことです。そのために、前述の大胡小学校のように、最初の1、2年は児童の作品や学校生活のビデオの交換などで実績をつくりました。そういう活動が定着したところで学校長や行政にはたらきかけ、理解と協力を得ていきました。

また、学校の教師だけに任せるのではなく、外部の機関に運営の主体をおくことも有効な手段です。2003年からウィスコンシン州内の高校と交流を続けている大崎高校ではPTAが、ウィスコンシン州メクオン市と交流している千葉県富里市では富里国際交流協会が主体となって、プログラムを運営し、TJFが協力しています。

## 6 REX-NETの活動に協力・助成

国際教育活動ネットワーク／REX-NET（以下、REX-NET）は、REXプログラム<sup>❖</sup>の参加者が中心となって2004年4月に設立した団体です。REXプログラムに参加した教師は、その経験を所属する学校で生かす機会はあるとしても、広く教育の場に還元する機会が少なかったため、参加者が中心となって、国際教育、外国語教育、日本語教育などの分野で、国内外の教育に貢献しようとREX-NETを結成しました。TJFはその趣旨に賛同し、設立準備の段階から全面的に協力してきました。

### REX-NETの活動への協力とネットワークづくり

REX-NETはおもな活動として、年に1回全国規模の国際教育シンポジウムを主催するほか、ウェブサイトの運営を行ってきました。2004年度より毎年6月に開催されたシンポジウムは、全国各地の教師が国際教育、外国語教育、日本語教育の実践事例を発表し、参加者に今後の教育活動のヒントにしたり、

日々の授業に生かしたりしてもらうことを目的としました。ウェブサイトでは、国際教育、外国語教育、日本語教育、REX派遣などについて実践例を含むさまざまな情報を提供しているほか、掲示板を通じて自由に意見交換や質問ができるようにしています。また、ウェブサイト内に設置している人材バンクには、国際教育、外国語教育、日本語教育などの分野で活躍しているメンバーが登録されており、会員の要望に応じて助言をしたり、資料を提供したりしています。2005年3月には、それまでのREXプログラム参加者を対象に行ったアンケートの調査結果をまとめた報告書『REXプログラムの意義と可能性を探る～REXプログラム評価に関する調査報告～』を発行しました。

TJFは、前述のシンポジウムをはじめとするREX-NETの活動に対し助成を行ったほか、事務局運営、ウェブサイト制作、アンケート調査およびその報告書の編集・制作などに協力しました。REXプログラムのように、中高校の現職教師が海外で異文化を体験し、異なる学校風土や教育文化のなかで教育体験を積むことのできるものはほかに例が少なく、大変優れた研修プログラムです。また、英語の教師が8割を占めるREXのネットワークは、海外の日本語教育と日本国内の英語教育や国際理解教育をつなげるうえで貴重なものです。TJFはREX-NETの活動への協力を通じて、その会員とネットワークを形成し、海外の日本語教育、日本の外国語教育・国際理解教育の促進をめざすTJFの事業との連携を図ってきました。

❖ REX (Regional and Educational Exchanges for Mutual Understanding) プログラム (外国教育施設日本語指導教員派遣事業) は、全国の公立中学校・高等学校の若手教員を海外の日本語教育を行う初等中等教育施設に日本語教師として2年間派遣する事業で、文部科学省が1990年から総務省、地方公共団体と協力して実施している。



REX-NETのウェブサイト

## 7 英語圏の日本語教師向け情報誌の発行

TJFでは1993年10月に英文機関誌『The Japan Forum Newsletter』(年2回・16ページ)を創刊しました。TJFの活動を紹介するほかに、日本語や日本文化に関する情報を提供





してきました。1999年6月からは、年2回から年4回の発行に増刊しました。増刊した2号は、英語圏（英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、米国など）の小中高校の日本語教師を対象としたもので、日本の生活文化を紹介するシリーズや日本の高校生の素顔を紹介するシリーズなどをカラーで掲載しました。特に海外の小中高校の学習者が最も関心をもつ、日本の小中高校生の姿、日常生活、背景にある文化に焦点をあてながら、新しい情報を紹介しました。具体的には、「風呂」「お茶」「年賀状」「花見」など、日本人にとって身近な生活文化や、「携帯電話」「ファストフード」「マンガ喫茶」といった日本の若い世代の間でトレンドになっている事象を取り上げたり、高校生の考え方や生き方を掘り下げて紹介したりするとともに、これらを素材として使った日本語の授業のアイデアなどを提案しました。

### 『Takarabako』の創刊

『The Japan Forum Newsletter』の読者の8割以上を日本語教育や日本理解教育に携わる教師が占めていたことから、より役立つ情報を提供するために、この英文機関誌を2004年6月をもって休刊とし、2004年9月、新たに英語圏の小中高校の日本語教師向けの英文情報誌として、『Takarabako』を創刊しました。

創刊当初は、授業で利用できる素材をカラーで提供するとともに、素材の使い方に関する授業案を提案しました。2006年6月発行の8号からは、授業案を終了し、さまざまな分野で活躍する10代の若者を毎号1人ずつ取り上げ、その生活、生き方、考え方などをインタビューをもとに紹介する「Meeting People」と、取り上げた人に関連する事柄をテーマにして日本の社会事情を説明する「Japanese Culture Now」の2部構成にしました。海外の小中高校生が日本の文化や人に触れることによって、ことばや文化、あるいは自分自身について考え、視野を広げてもらうことをめざしました。また、年1回特別号を発行し、通常よりもページを増やすなどして財団の理念や事業の内容を伝えました。

「Takarabako」ウェブサイトでは、情報誌のPDF版を掲載するほか、英文機関誌にこれまでに掲載した日本の小中高校生の素顔や日常生活を中心とする、日本の生活文化を紹介する記事が閲覧できるようにしました。



<http://www.tjf.or.jp/takarabako/index.htm>

## 8 写真データベース TJF Photo Data Bank

海外の小中高校生が関心を抱くのは、同世代の日本の若者の日常生活や文化です。しかし、美しい自然の風景や名所旧跡、伝統的な日本文化を撮った写真は数多くあるものの、現代に生きる若者の表情や動きをとらえた写真はなかなか手に入りません。ましてや、無償で教材として使用できるものは少ないのが実情でした。

そこで、TJFは「高校生のフォトメッセージコンテスト」(128ページ参照)に寄せられた高校生の写真やTJFが撮影した写真などを活用して、2001年5月に約1,000枚の写真に掲載した「TJF Photo Data Bank」ウェブサイトを開設しました。掲載にあたっては、日本の若者の生活文化や素顔を伝えているものを中心に、日本の文化、社会、自然と、そのなかで生きる日本人の姿が表現されているものを選びました。メンバー登録をしたうえで、教育目的かつ非営利目的の利用に限定して写真の利用を許可しています。

写真は、日本語教育（外国語教育）や文化理解教育での利用を想定して、15のテーマに分類しました。

### 日英中3言語での検索に対応

2004年9月、中国に関する写真をデータベース化し、「TJF Photo Data Bank 中国編」(102ページ参照)として開設したことから、すでに公開していた日本に関する写真データベースを「TJF Photo Data Bank 日本編」と改称しました。

2005年4月には、国立国語研究所の「e-Japan (ITを活用した日本語学習環境の整備) プログラム」より助成を受けて、日英中3言語での写真検索システムを開発しました。これにより、海外の小中高校の日本語教師や社会科教師などが、日本の若者の生活文化に関連する写真を教室で使用の際、希望する写真を迅速かつ無償で入手できるようになりました。

「高校生のフォトメッセージコンテスト」への応募写真や、小学生や中学生の写真を漸次補充し、2007年3月現在、写真は約3,400枚、メンバー登録者数は、国内外あわせて約6,000人に上っています。



[http://www.tjf.or.jp/photodatabank\\_j/](http://www.tjf.or.jp/photodatabank_j/)

TJF Photo Data Bank

## 「TJF Photo Data Bank」で取り上げている写真のテーマ

写真の使用が想定される初等中等教育の日本語教育や文化理解教育の現場では、多くの場合、学習者の関心に沿ったテーマや場面に軸にしたカリキュラムが組まれています。そこで、授業で使う写真を教師が容易に検索できるよう、テーマ別に写真を分類することにしました。そして、英国、オーストラリア、

ニュージーランド、米国などの日本語教育のカリキュラムを分析し、必要とされるテーマを選定しました。日本の若者の生き方や日常生活に関連するテーマを中心に、生活文化の背景にある日本の教育、社会、自然環境に関連するテーマも加え、計15のテーマを設定しました。

### 自分・家族・友だち

自分/家族・ペット/友だち



### 食

食品・料理/飲食/外食



### 住

部屋/バス・トイレ/玄関・廊下/庭・外観/台所



### 衣・ファッション

メイクアップ・身だしなみ/衣服・履物/身の回りの品



### 学校・教育1

校舎・教室/通学/授業・教科書/学校活動/校則/クラブ活動/放課後・休み時間/勉強・受験・進路/地域・海外交流/昼食/寮(生活)



### 学校・教育2 (学校行事)

入学式/卒業式/体育祭・運動会・スポーツ大会/文化祭・学校祭/林間・臨海学校/宿舎/修学旅行



### 買い物・アルバイト

買い物/アルバイト/お金



### 交通

自転車/バイク/自動車・タクシー/バス/鉄道/船/道路/標識/飛行機



### 余暇

習い事・趣味・娯楽/手伝い・家事/地域活動



### 交際

電話・ファックス/電子メール・コンピュータ/郵便/贈答・社交/挨拶/身体表現/表情/デート



### 身体・健康

健康・体力づくり/病気・けが



### 冠婚葬祭

成人式/結婚式/葬式



### 年中行事

正月/節分/ひな祭り/桜・花見/こどもの日/母の日/父の日/七夕/お盆/月見/七五三/クリスマス/大晦日/誕生日



### 社会環境

名所旧跡/芸能・芸術/街の風景/政治・経済・社会/社会問題



### 自然環境

景勝地/気候風土・気象/自然環境問題



花見 |

検索

## 著作権・肖像権について

TJFは、国内外の小中高校生を対象とする文化理解教育や外国語教育を促進するうえで、電子画像教材としての写真の有効性に注目し、「TJF Photo Data Bank」ウェブサイトで多くの写真を利用者に提供しています。写真の収集および掲載にあたっては、付随するさまざまな権利関係について特段の注意を払っています。

写真の著作権に関しては、TJFが撮影していない写真の場合は、撮影者から写真の著作権を譲渡してもらってから掲載しています。

小中高校生同士の相互理解や文化理解を人間を通じて具体的にとらえてもらうために、人物の写っている写真が多くありますが、被写体の顔がはっきりわかる写真については、プライバシーに十分配慮し、本人から肖像権に関する承諾書を得てから掲載しています。また、TJFの事業が小中高校生を対象としているため、写真には国内外の多くの小中高校生が登場しますが、被写体が未成年者の場合には、保護者に事業の趣旨を説明して、同様の承諾書をもっています。承諾書の事項は、写真の2次利用、インターネットへの掲載の諾否、氏名表示等に関するものです。また、写真の背景に写っているキャラクターやロゴ、ロゴマークなどについても、適宜掲載許可を得ています。さらに、「TJF Photo Data Bank」の利用者に対しては、教育目的での利用に限定するために、メンバー登録制をとっています。

こうして著作権および肖像権等に関する権利関係について関係者の許諾を得たうえで、「TJF Photo Data Bank」に掲載した写真は、教育目的かつ非営利目的に限り、利用者は著作権料無償で使用することができます。例えば、写真をダウンロードしてコピーしたり、あるいは拡大・縮小したり、吹き出しを入れて文字を書き込むなど加工して、ワークシートやOHPに使用し、教室などで配付したりすることができます。上記の目的で使用する限り、TJFの許可を得る必要はありません。ただし、営利、非営利を問わず、教科書などの出版物やウェブサイトに掲載する場合は、TJFの許可が必要です。また可能な限りTJFの提供であることを明記するよう要請しています。

教育現場で使えて、しかも著作権料無償で使用できる、高画質の写真をはじめとする電子画像素材が非常に少ない現状を踏まえ、TJFでは、今後も他のウェブサイトと連携を深めながら、良質な画像素材を提供していくとともに、その活用法についてもアイデアや情報を関係者と共有できるよう努力を続けていきたいと思っています。



## II. 中国の小中高校の日本語教育関連事業

# 日本語教育の灯を ともし続けるために

中国では、1972年の日中国交正常化および1978年の日中平和友好条約締結を契機に日本語ブームが起き、1980年代、中高校の日本語学習者が飛躍的に増えましたが、日本の政府レベルの支援は高等教育に集中していました。国際文化フォーラム（以下、TJF）も設立当初より、日本語教育関連事業において中国に重点をおき、弁論大会、教材制作などさまざまな事業を行っていたものの、おもに大学および一般成人を対象としたものでした。

しかし、第1部で述べたように、1992年前後からTJFの事業の対象を初等中等教育に絞り込んだことから、中国での日本語教育関連事業も見直しを行いました。

中高校の日本語教育関連事業の第一歩となったのが、1992年度から実施した「全中国外国語学校中高生日本語弁論大会」でした。この弁論大会を通じて中等教育における日本語教育関係者とのネットワークを築くことができたのと同時に、日本語教育の実態も把握できるようになりました。

第2回弁論大会から、大会終了後2日間、引率の日本語教師を対象に小規模な教師研修も実施するようになると、研修に参加した教師や日本語教育関係者の間で、本格的な研修を実施してほしいという声が高まりました。さらに日本語の教科書の制作を担当していた国家教育部（当時国家教育委員会）の直属機関である課程教材研究所の日本語教育関係者や、日本語教育実施校が集中する東北部各地の教育学院（現職教師の研修や教育研究を行う教育局付属機関。教育局は教育委員会に相当）の日本語教育関係者からも、新しい教科書を制作するのに協力してほしいこと、中高校の日本語教育の質を高めるために日本語教師の研修会を開催してほしいことなど、中等教育における日本語教育への強い支援要請が寄せられるようになりました。TJFも中高校における日本語教育へのこうした支援が急務であると考え、1996年度から東北三省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）と内蒙古自治区を対象地域とした「中国中高校日本語教師研修会」の開催（68ページ

参照）と中高校の日本語教科書の編集協力（76ページ参照）といった、日本語教育を支える両輪ともいべき基盤整備事業に取り組むことになりました。

## 教育改革と中高校日本語教育の基盤整備への協力

これらの事業に取り組んだ1990年代後半から2000年代は、中国の教育改革が進んだ時期でもあり、中等教育における日本語教育も様変わりしていきました。日本の学習指導要領にあたる教学大綱の改訂、その後の課程標準の制定などにより、それまでの文法一辺倒からコミュニケーション志向の日本語教育へと目的や方法も変わり、また言語教育における文化理解の重要性が提唱されるようになりました。さらに、学習者の個性や能力を伸ばす資質教育も大きな目標として掲げられるようになりました。当初は、文化理解や若い世代間の相互理解をめざす日本語教育というTJFの事業理念を中国の日本語教育関係者と共有することは難しく思われましたが、こういった新しい国家教育政策によって、中国側責任者、担当者と少しずつ教育理念を共有できるようになっていきました。一方、現場への新しい考え方の浸透には当然時間がかかり、こうした流動的な状況のなかで研修会や教科書の編集制作を進めました。

1996年から6、7年におよんだ、「中国中高校日本語教師研修会」および日本語教科書の編集制作は、多くの日中の機関と人びとの協力を得て、初等中等教育の日本語教育支援の牽引役となりました。これらの事業を通じて築いた日中の関係者とのネットワークや経験は、現在TJFにとってかけがえのない財産になっています。

## 中国での新しい動き

こうした大型の事業が進むなか、中高校で第一外国語の選択肢の一つに位置づけられてきた日本語は、英語の勢いに押され、徐々に衰退していきました。それに拍車をかけたのが、2000年に国家教育部が発表した小学校への外国語教育の導入政策で、これによって多くの小学校が英語を導入するようになりました。小学校で英語を学べば、そのまま中高校でも英



語を学習することになり、中高校の日本語の衰退が加速するのではないかと危惧する声が日本語教育関係者の間に広がりました。これに対処するため、遼寧省と黒龍江省では中高校の日本語教育実施校を一定数確保することをめざし、日本語教育を担当する教研員（指導主事に相当）を中心に、小学校の教科書の出版や実験校の指定など、小学校で日本語教育を実施するための環境整備が進められました。TJFはこれらを支援し、小学校の日本語教師を対象とする研修会の開催や教材の制作などの事業を行った結果、日本語教育の拠点地域（日本との結びつきの強い地域や朝鮮族、モンゴル族の多い地域）では、逆に日本語教育の裾野が広がるという現象が生じました。

TJFでは、こうした流動的な状況を考慮して、第一外国語としての日本語教育は拠点地域もしくは拠点校（校長が日本語教育に関心をもっている学校など）において支え、その灯を消さないこと、そして第二外国語としての日本語教育が導入される日まで、東北三省や内蒙古自治区の教研員が開催する教師研修などに助成を行うほか、情報誌『ひだまり』（82ページ参照）の発行などを通じて、日本語教師にエールを送り続けたいと考えるようになりました。

### 日本の中国語教育との連携

TJFはこれら中国における日本語教育関連事業に協力する一方、1995年度より国内の高校における中国語教育を促進する事業を開始し、1997年度より両者の橋渡しを始めました。TJFとしては、中国における日本語教育を促進するだけでなく、相互の言語を教える日中の教師、相互の言語を学ぶ学習者をつなぎたいと考えてきました。1997年夏、遼寧省でTJFが共催した「中高校日本語教師研修会」に、日本の高校の中国語教師3人が参加し、「日中友好クラス交流」（93ページ参照）の小さな一歩が踏み出されました。海外の日本語教育と国内の外国語教育をつなぐTJFの重要な事業の種が、ここでも蒔かれたのです。2002年夏には日本の中国語教師21人と中国の日本語教師79人の参加によるセミナーを中国で開催しました。以後、日本国内で毎年行われるようになった日中の教師セミナーの開催に協力してきました。また、2004年度より遼寧省を中心に日本語教育を実施する小中高校を、日本で中国語教育や国際理解教育を行っている小中高校に橋渡しをし、日中間の教師交流、学校交流を促進してきました。



第7回研修会の最終日に行われた、中国の日本語教師と日本の中国語教師の合同授業 [2002]

## 1997 >> 2006 中国の日本語教育関連事業の動き

- 1996年4月 高校日本語教科書『日語』の編集に協力（1999年度まで）
- 1997年7月 第2回中国中高校日本語教師研修会を開催（大連市）（1996年度に第1回を開催）
- 1998年8月 第3回中国中高校日本語教師研修会を開催（ハルビン市）
- 1999年7月 第4回中国中高校日本語教師研修会を開催（延吉市、ハルビン市、瀋陽市）
- 1999年10月 中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』を創刊
- 2000年8月 第5回中国中高校日本語教師研修会を開催（长春市、ハルビン市、大連市、フフホト市）
- 2001年8月 第6回中国中高校日本語教師研修会を開催（通遼市、长春市、ハルビン市、瀋陽市）
- 2001年4月 中学日本語教科書『日語』の編集に協力（2003年度まで）
- 2002年7月 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」全5冊を発行
- 2002年8月 第7回中国中高校日本語教師研修会を開催（ハルビン市）
- 2002年8月 日中教師セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」を開催（ハルビン市）
- 2002年12月 「ひだまり」ウェブサイトを開設
- 2003年9月 東北三省・内蒙古自治区における日本語教育活動に対する助成を開始
- 2004年6月 写真教材「日本の小学生生活」（日中併記版）を発行
- 2004年7月 第1回全中国小学校日本語教師研修会を開催（瀋陽市）（2006年度まで開催、2006年度は大連市）
- 2004年7月 佛寺小学校（阜新市）と大久保小学校（東京）との交流を橋渡し（以後、7組の日本と遼寧省の小中高校間交流の橋渡しを実施）
- 2004年8月 小学校向けの日本語副教材パックの寄贈に協力（2003年度に選定）
- 2005年10月 遼寧省教育代表団を招聘（以後、毎年度実施）
- 2006年3月 大連教育学院内に設立された日本語教育学習研究センターへ図書・教材・教具を寄贈
- 2006年8月 大連市中学校日本語教師研修会を開催
- 2006年12月 大連市中学校の第二外国語用の日本語教科書の共同編集を開始

# 1 中高校日本語教師研修会の共催



研修会は学びと交流の場となった【2002】

TJFは、日本と中国の関連機関との共催で、1996年から2002年まで毎夏、吉林省・黒龍江省・遼寧省・内蒙古自治区を対象に「中国中高校日本語教師研修会」を実施しました。研修期間は約2週間で、7回にわたるこの研修会では、対象地域の日本語教師の半数に相当する523人（延べ550人）が研修を受け、90人（延べ168人）に上る日中の講師が教壇に立ちました（資料204ページ参照）。また、助成・後援・協賛機関は50を超えるなど、日中共同・官民共同の一大事業でした。

## 合同開催から省別開催へ

第1回（1996年度）から第3回（1998年度）まで会場を吉林省、遼寧省、黒龍江省と移しながら、それぞれの会場で三省合同の研修会を開催しました。しかし、教師の人数や日本語力、教科書などが違い、日本語教育の事情はそれぞれの省で異なっていました。自分の省の実情にあった研修内容にして研修の効果を向上させるとともに、研修を受けられる教師を増やすために、研修会を自分の省で開催したいという強い要望

### 実施概要

開催年	開催形式	場所・期間	研修生数（延べ）	講師数（延べ）
1996	合同	吉林省长春市：長春外国語学校 [8/5~8/16]	47	13
1997	合同	遼寧省大連市：大連市教育學院 [7/20~8/1]	48	16
1998	合同	黒龍江省ハルビン市：黒龍江省教育學院 [8/2~8/14]	50	19
1999	省別	吉林省延吉市：延辺教育學院 [7/25~8/6]	30	12
		黒龍江省ハルビン市：中国共産党ハルビン市委党校 [7/25~8/6]	31	12
		遼寧省瀋陽市：遼寧教育學院 [7/25~8/6]	30	12
2000	省別	内蒙古自治区フフホト市：中日友好語言培訓中心 [8/18~8/28]	19	5
		吉林省长春市：吉林省教育學院 [8/4~8/16]	32	9
		黒龍江省ハルビン市：黒龍江省教育學院 [8/4~8/16]	31	7
		遼寧省大連市：大連市教育學院 [8/4~8/16]	33	8
2001	省別	内蒙古自治区通遼市：カンチカ第二高級中学 [7/26~8/7]	27	7
		吉林省长春市：吉林省教育學院 [8/5~8/17]	31	10
		黒龍江省ハルビン市：黒龍江省教育學院 [8/8~8/20]	32	9
		遼寧省瀋陽市：遼寧教育學院 [8/2~8/14]	30	10
2002	合同	黒龍江省ハルビン市：中国共産党ハルビン市委党校 [8/4~8/15]	79	19

が関係者から上がったこと、合同開催の目的の一つである各省間のネットワークを図るという目的が達成されたことから、第4回から省別に開催することにしました。

省別に開催したことにより、研修を受ける教師の数が倍増し、カリキュラムも大枠では共通のものを使いながら各省の事情にあわせてきめ細かく変更することが可能になりました。また、教員も研修会を運営しやすくなったと同時に、後に教育学院が研修会を主体的に実施するための下地となりました。

一方、内蒙古自治区では日本語を担当する教員がおらず、現地での研修会の開催が困難だったことから、参加者は第4回（1999年度）まで前述の3会場で研修を受けていましたが、同地区の外国語担当の教員から現地での開催を強く求められ、2000年度と2001年度に研修会を現地で開催しました。

## 研修生の要望をくみながら

7回の研修会が実施されている間に、中国では教育改革が進み、中高校の日本語教育でも、それまでの知識偏重からコミュニケーション能力重視へ、さらに生徒の資質や能力・個性を伸ばす資質教育へと、めざすものが変わっていききました。さらに、文化理解の重要性についても認識されるようになり、自他の言語や文化を尊重し、その異同を理解することを日本語教育の目標の一つとしました。しかし、こうした政策はすぐに現場に浸透したわけではありませんでした。

第一外国語としての日本語は、大学受験科目の一つであり、



徐々に学生に戻った研修生は、真剣そのもの【2001】



第1回内蒙古自治区中高校日本語教師研修会には、内蒙古の現役日本語教師19人が参加した【2000】

## 研修会を実現して



私たちの学会では、中高校の日本語教師がおかれている状況（教師歴、学歴、日本語教育歴、4技能および教授法のレベルなど）を調査した結果、教師研修の必要性を強く感じていました。しかし、協力団体もなく、資金の工面もできず、実現できないでいました。そんなときに国際文化フォーラムとの出会いがあり、教師研修会を共催することになりました。多言語多文化の時代にあって、生徒の日本語力を高めると同時に、国際的視野を広げることが必要です。そして、そのような生徒を情熱をもって指導する教師を養成することは何よりも重要なことです。研修会を通じて、中高校の日本語教師の日本語力や教授力が高まっただけでなく、中日間の理解も深まりました。多くの方々から協力を得た7回にわたる研修会は、中国の中等教育における日本語教育の歴史にすばらしい一ページを残すことができるでしょう。

（張国強／中国教育学会外語教学研究会日語專業委員會會長、当時）





発音クラスの授業。一人ひとりの課題にあわせて個別に指導にあたった [2001]



TJFが制作した写真教材「であい」を使った文化理解ワークショップで、授業アイデアを発表する研修生たち [2002]

当時の大学入試問題は文法や語彙が中心であったため、教師の最大の関心は、いかに効率よく文法や語彙を教え、いかに試験で点数をとれるようにするかというところにありました。こうした事情から、研修会では、文法や類義表現などの講義に強い要望がありました。

カリキュラムの作成にあたっては、このような要望に応える一方、日本語教師にとって必要なものを組み込むよう心がけました。教師自身、文法重視の日本語を学んできたため、最も不足していたのは聴解や口頭などの言語運用能力でした。それらを向上させるための講義とともに、日本語の運用能力の育成を図る授業や学習者主体の授業、文化理解を図る授業など時代を先取りした教授法もカリキュラムに組み込みました。

年を追うごとに、教育改革で掲げられた新しい理念は教師にも少しずつ浸透していき、資質教育をめざす教授法に対する関心も高まってきました。また、大学入試の科目に作文と聴解が入ったことにより、それらの講義への要望も強まり、その結果、当初は多くの時間を割いていた文法や語彙、読解などの言語知識を高める講義は回を重ねるごとに減り、聴解や口頭表現などの言語運用能力を高めるための教授法の講義が増えていきました。

### オリジナル教材の制作

第1回の研修会で市販の教材から必要な部分を抜き出してまとめたものを教材として使用したところ、講師や関係者から、中国の中小高校の日本語教師にあった教材を開発すべきであるという意見が多く出されました。そこで、研修生から最も要望の強かった「類義表現」と、高校の日本語教科書(76ページ参照)で重視されている「交際用語」「助詞の使い方」の三分野に絞って教材を制作し、第2回の研修会で使用しました。

その後も、講師や研修生、日中の日本語教育関係者の声を取り入れ、毎年増補改訂を重ねました。特に、「発音」については、研修生が漢語話者と朝鮮語話者(中国朝鮮族)に大別でき、それぞれの母語によって問題点が異なることを考慮し、それぞれの話者向けの項目を設けました。分野ごとにチームを組んで行った5年におよぶ編集作業は、大変な苦勞を伴い、一つの例文をめぐる、メールのやりとりが十数回におよんだこともあり(資料215ページ参照)。

こうして2001年7月、①『発音』、②『コミュニケーション表

現』、③『類義表現の使い分け』、④『助詞の使い分け文例集』の4分冊からなる「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」試作版を刊行しました。さらに翌年、⑤『発音指導の手引き』を追加して、5分冊からなる完成版を刊行しました。5冊あわせて916ページに上るこのシリーズは、③、④、⑤に日中の2言語を併記し、①、②、⑤には音声テープもつけ、自習教材として使えるようにしました。

研修会の蓄積をもとに2002年度に完成したこのシリーズは、黒龍江省の教育学院の協力を得て中国で3,000セットを印刷・製本し、黒龍江省で開催された最後の研修会の際、参加した各省・自治区の教研員が梱包し、発送しました。その後、中国教育学会外語教学研究会の協力を得て、第1回から第7回までの研修生と、把握できる限りの中高校の日本語教師、希望する大学関係者などに計2,500セットを寄贈しました。

### 教師研修を文化交流事業としてとらえる

教師研修というと教師の技術や技量の向上にばかり力点が置かれていますが、この研修会では、①日本語力の向上、②教授力の向上、③ネットワークの構築・情報交流、④相互理解と

### 「漢語話者のためのわかりやすい日本語」シリーズ

『発音』: 106ページ、テープ2本。外国語を習得する際に母語の干渉を受けることから、漢語と朝鮮語の母語別に解説。練習問題にもアクセント記号をつけた。

『コミュニケーション表現』: 202ページ、テープ1本。日常のコミュニケーションに必要な日本語表現の紹介だけでなく、その背景にある文化や対人関係のルールについても解説。さまざまな表現を「あいさつ」「誘い」「勧め」「申し出」「依頼」「許可」といった機能別に整理するとともに、ロールプレイや会話例も提示した。

『類義表現の使い分け』: 356ページ。要望の強かった語彙・表現を「名詞類」「形容詞類」「副詞類」「助詞類」「助動詞類」「接続詞類」に整理し、65項目について、その用法を基本から応用までステップ別に解説した。すべての解説に中国語訳を併記した。

『助詞の使い分け文例集』: 156ページ。文例を通じて基本動詞と助詞の関係を提示。文例と文例に関する注釈の中国語訳を併記した。

『発音指導の手引き』: 96ページ、テープ1本。漢語話者が日本語の音声を学習するとき、またそういう学習者を指導するときの問題点と解決法を具体的に解説するとともに、練習素材を提示。すべての解説に中国語訳を併記した。





いう4項目に重点をおきました。これは、日中共同事業である研修会を文化交流事業の一環としてとらえ、日中の関係者間の交流と相互理解を促進したいという主催者側の強い意向があったからでした。特に、研修生と講師との出会いが交流の軸であると考え、多くの研修生にとって講師が初めて出会う日本人であることを考慮して、講師の人選に最大の配慮を払いました。日本語教育の教師としての専門性もさることながら、この事業に賛同してくれること、中国事情や中国語に通じていること、中国の人たちを理解し尊重すること、同じ日本語教師として対等に研修生と向きあえることなどが重要であると考え、そういう要件を満たす人に講師を依頼しました。

### 研修会を運営して



研修会に参加した日本語教師にとって、四つ成果がありました。まず、日本語力が向上したこと。次に、日本人と交流したことで自分の日本語力に自信をもったこと。三つめは、学校間の交流が促進されたこと。黒龍江省は面積が広く学校同士が離れていることに加え、日本語教育を行っている学校は奥地に点在しているため、交流はほとんどなかったのです。そして、四つめは、いい教材と参考書を得たこと。どれをとっても、その効果は大きいものでした。

(張石煥／黒龍江省教育学院日本語教員)



研修会に参加する前は文法中心で、中国語で授業を行っていた教師が、研修会後は授業のやり方も変わり、日本語を使うことが多くなりました。日本人講師から、生きた日本語の知識や指導技術を学んだだけでなく、本からは知りえない言語の文化背景も知ることができ、日本人講師の勤勉な精神や授業で手を抜かない態度も学びました。さらに、研修会後は、あらゆるチャンスを生かして日本人と交流しようとするようになりました。これは、研修会の講師が中国の日本語教育に対して熱意と愛情と強い責任感をもつ優秀な人ばかりだったからだと思います。

(曾麗雲／遼寧省教育学院日本語教員)

研修会では、研修生と講師が交流する場をできるだけ多くつくるよう努めました。例えば、昼食もその一つととらえ、各テーブルに必ず講師に入ってもらいました。また、菓子をつまみながら気楽に話ができる茶話会を設けました。そこでは、講義では緊張してあまり発言できなかった研修生も、世間話をしているうちに打ち解け、それが講義でも生まれました。こういった場を通じて、講師と研修生は「教える人」「教えられる人」ではなく、同じ教育者として対等な交流ができたようです。

事務局を担った日中のスタッフの間でも、当初さまざまな場面で摩擦が生じ、準備のやり方一つとっても意見の食い違いがありました。第3回まではTJFが主体となって運営にあたりましたが、研修会の現地化をめざしていたことから、中国側のやり方に歩み寄り一方、中国側も運営経験を蓄積すると同時に、日本側のやり方に歩み寄るようになりました。最終的には中国の教員が主体となって運営にあたり、TJFは協力するという体制になりました。

### さまざまな交流の場

7回を通じて研修会の会期中には、規模の大小はあるもののさまざまな交流プログラムを実施しました。大連の日本商工会(当時大連日本商工クラブ)の会員、ハルビンや瀋陽にある日本企業の駐在員には、研修生との交流会に参加してもらうなどの協力を得ました。多くの日本人と交流できた研修生は、生きた日本語に触れることで自分の日本語に自信をもち、日本人に対する抵抗感も軽減できたようでしたが、研修会後も交流を継続させるまでには至りませんでした。

第2回以降は日本の高校の中国語教師との交流の場を設けました。その集大成として、第7回の研修会と「高等学校中国語教師研修会」(96ページ参照)を同一会場で会期を一部重ねて開催し、研修後に日中教師セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」を実施しました。中国の日本語教師79人と日本の中国語教師21人が10グループに分かれ、「日本語・中国語を教えることの意味」「自分たちにとってできる交流とは」について2日にわたって意見交換しました。

### 研修会の成果

7回にわたる研修会を終えた翌年、研修生全員を対象にアンケート調査を行い、研修会の成果を探りました。7割以上の



日中の人たちが交流する機会をできるだけ多くつくった



日中教師セミナーでは、隣国のことばと文化を教えることの意味をともに考えた [2002]

人が「日本語力が向上した」「いろいろな教授法を学んだ」と回答するとともに、「日本人講師の教え方や姿勢から学んだ」と回答しました。日本語力と教授力の向上という所期の目的を達成しただけでなく、その副次的効果として、日本人講師たちのひたむきな姿勢が多く研修生に感銘を与えたようでした。

一方で、「研修会直後は日本語力が向上したと思っていたが、1年後には元に戻ったように思う」という回答からうかがえるように、わずか2週間の1回限りの研修では、日本語力や教授力を向上させるには限界があることを再認識しました。研修会の成果を定着させるためには、研修会後も引き続き情報や素材を提供するとともに、地域に根ざした教師研修を小規模であっても継続することが必要であると痛感しました。

中国では日本語の授業を開講している中高校が減少し、日本語教師を取り巻く環境は厳しくなっています。そのような状況のなかで、日本語教師という仕事や教師という仕事に対して自信や使命感を見失っている人もみられますが、研修会への参加を通じて、さまざまな場面で励まされ、日本語教師として自分の存在意義を再確認した研修生も多くなりました。

教育現場では、教師のもっている知識や教える技術と同様あるいはそれ以上に、教育に臨む姿勢が問われます。この研修会においても、教壇に立つ日本人講師の姿勢を通じて、研修生が日本語力や教授力の向上だけでなく、教師のあるべき姿勢について考え、意識を変えることができたところに大きな意味があったと考えます。研修会の方針、カリキュラム、授業内容がこのような成果をもたらしたわけですが、講師と研修生という異なる立場で、同じ日本語教育者が出会い、研修を通じて「教育文化」を共有した意義は大変大きいといえます。このことは、今後の教師研修のあり方を考えるときの大切なヒントとなると思います。

### 研修会の終了とその後の支援

この研修会は、中国の初等中等教育の日本語教師に対する支援がほとんどない状況の下で始まりました。しかし、研修会を継続して実施している間に、当初は助成機関あるいは協力団体であった国際交流基金と国際協力機構（JICA、当時国際協力事業団）が、初等中等教育に対する支援体制を強化し、恒常的な支援活動を展開するようになっていきました。

国際交流基金は、2000年に研修会の共催者となることも

に、日本語課長が3会場を巡回し、各省の教育学院院長と会談した結果、翌年から日本語教育ジュニア専門家（当時青年日本語教師）を各教育学院に順次派遣することになりました。また、中国の中高校の日本語教師を毎年日本に招聘し、日本語国際センター（さいたま市）で研修を受ける機会を提供するようになりました。JICAは中高校に派遣する日本語教師隊員を増員し、配属先だけでなく周辺地域の日本語教師を対象に、小規模な教師研修やスピーチコンテストを開催しています。

研修会が一定の成果を上げ、現地側にも研修会を実施するための素地ができ、その後の恒常的な支援が必要な段階に移ったところで、資金力、組織力ともにすぐれた国際交流基金と

### 研修会の講師を務めて



一般的にこのようなプロジェクトは同化主義的な傾向や押しつけがましい運営に陥りやすいものです。しかし、この研修会では、TJFのスタッフや現地の教員が相手のやり方を理解しあい、柔軟に対応しながら協働作業を行っていました。もちろん、この研修会に関わった多くの熱意ある講師の力が大きかったことも忘れてはいけません。人材育成の伴わないプロジェクトはインパクトがないといわれますが、この研修会では日中双方が次世代を担う人材を育成したのではないのでしょうか。

（加納陸人／文教大学助教授、当時）



研修会が始まった当初、研修生の関心は「授業で何を教えるか」に偏っていました。しかし、研修会が回を重ねるにつれ、「どのように教えるか」という授業技術に興味をもつようになりました。これは、研修会を重ねたことの効果だと思います。というのは、研修会を実施して4年めぐらいから、各校で研修会に参加した教師が未参加教師より多くなったからです。参加者が研修会後自校に戻り、同僚と話をするとき、「研修会の講師がどのように授業を進めたか」ということが話題になることで、授業の方法や技術を強く意識するようになったのではないかと思います。

（本田弘之／杏林大学助教授、当時）



研修会では、講義がすべて日本語で行われ、研修生にとっては大変厳しいものでした。しかし、ほとんどの人が最後まで研修を受けたのは、研修内容がその当時の研修生の要望にあっていたということはもちろん、研修生の教育に対する熱意に、日中双方の講師、スタッフが熱意で応えたからだだと思います。そうした熱意のもとで進められた研修会は、日中双方の関係者に一体感をもたらし、講義の時間以外でも交流が進むことになりました。閉講式が終わった後の歓送会の盛り上がりや涙の別れは、まさに研修を通じて心の交流があったことの証でしょう。

（山口敏幸／ヒューマンアカデミー日本語教師養成講座講師、当時）



JICAに支援の中心をゆだねることができたことから、2002年度をもって本研修会を終了しました。

研修会終了後は、2003年度から各省や自治区の教研員がジュニア専門家や青年海外協力隊員の協力を得ながら自主企画・運営する小規模の教師研修活動を助成するほか、1999年に創刊した中高校の日本語教師向けの情報誌『ひだまり』の制作や「ひだまり」ウェブサイトの制作運営に力を注ぎました。

### 他機関との連携

研修会では、研修の実施と並行して日本語教材などの寄贈や交流プログラムなどを行うとともに、オリジナル教材「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」を制作しました。研修会およびこれらの事業を可能にしたのは、日本側の多くの機関、団体、企業、個人から寄せられた物心両面にわたる協力でした。特に、(財)三菱銀行国際財団からは、本研修会に対し3年にわたって助成を得ました。その後、TJFの中国における日本語教育支援事業全体が同財団の自主企画事業として位置づけられたことによって、同財団からは研修会を含む諸事業に対して、今日にいたるまで毎年助成を得ています。研修会の講師陣を編成するにあたっては、国際交流基金や国際協力機構（当時国際協力事業団）から講師を派遣してもらいました。また、教材の寄贈については、(株)アルク、(株)講談社、(学)文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社等から協力を得て、全日本空輸(株)に無償空輸してもらいました。

## 2 中高校の日本語教科書の編集に協力

1996年の教学大綱（学習指導要領に相当）の改訂に伴い、国家教育部の直属機関である課程教材研究所は、高校用の新しい日本語の教科書である『全日制普通高級中学教科書（試験本）日本語』（以下、高校『日本語』）全3冊を制作することになりました。教科書の制作を日中共同で進めたいという同研究所の強い要請を受け、1996年度から1999年度まで、TJFと国際交流基金は日中共同編集制作に参画しました（資料216ページ参照）。国際交流基金が助成・協力をを行い、TJFは日本側事務局を担当しました。



高校『日本語』では、従来の文法中心の内容を改め、コミュニケーション能力の養成や異文化理解を深めていくことに重点をおきました。そのために、会話文を初めて取り入れ、文化に関する題材をコラムで紹介することになりました。各課のテーマも日本や中国に関するものだけでなく、家族愛や友情、環境問題などの普遍的なものを取り上げることによって、生徒が読解を通じて、グローバルな視野を養い、人類共通の課題にも目を向けるよう配慮しました。また、文化コラムでは、日本の伝統文化だけでなく、日本の高校生の生活も紹介するなど、新しい内容を盛り込みました。

TJFは事務局として、おもに日中の編集委員会間の仲介を務めると同時に、中国の出版社に代わって写真などの著作権交渉を行ったり、コラム執筆のための素材や資料、写真などを提供したりしました。1年めは、毎週のように日本側編集委員による編集会議が開かれました。各課のテーマを決めることに始まり、一つの課の本文が決まるまで、日中間で1ヵ月以上のやりとりが行われることもありました。著作権交渉においては、予算が限られていることから、できるだけ無償で提供してもらえるよう交渉にあたりました。

2001年度には中学校用の日本語教育ガイドラインとして課程標準が制定され、新しい日本語の教科書を制作することになりました。TJFは2001年度から2003年度にかけて、資料・写真の提供や歌の著作権交渉の代行をするなど、『義務教育課程標準実験教科書日本語』全6冊の編集に協力しました。



## 3 小学校日本語教師研修会の共催

教科書の制作・出版や実験校の指定など、小学校で日本語教育を実施するための環境整備を行ってきた遼寧省では、2003年には47の小学校が日本語教育を実施するようになりました。地域としては、1980年代半ばから漢族の小学校に導入が始まった大連地域と、2000年以降、蒙古族の小学校に導入された阜新地域の二つがあります。黒龍江省では、2001年より朝鮮族の小学校3校が初めて日本語教育を導入し、2003

年には12校まで拡大しました。

英語教育を導入する小学校が多いなか、これらの地域では進学先となる中高校が日本語教育を実施していることと、英語教師が不足していること、また外国語教育の多様性の保持と少数民族への配慮といった政策上の理由で、朝鮮族や蒙古族にとって母語との近似性から英語より学習しやすい日本語の導入に踏み切りました。しかし大連地域では、日本語教育を実施する漢族の小学校は、1990年代から減り始め、2000年以降激減し、さらに2004年には壊滅状況に向かっていました。その背景には英語の導入を望む保護者の意向があったようです。しかし一方で、2004年に全国的に導入された校本課程(学校裁量科目)として、日本語教育を再開する小学校も現れました。このほかにも、北京、天津、山東、福建などの小学校が日本語教育を導入していました。2003年の時点で、全国で65の小学校で日本語教育を実施しており、教師数は約100人に上ることを確認しました。

そのような状況のなか、これらの教師の多くが、大学で日本語を専攻していないため日本語能力が十分でなく、教授法の訓練もきちんと受けていないという問題がありました。こうした問題を解決するために、遼寧省と黒龍江省の日本語教育関係者から、全中国の小学校の日本語教師研修会を早期に開催してほしいという要請があり、小学校日本語教師研修会の実施に踏み切りました。

「第1回全中国小学校日本語教師研修会」は2003年度に実施する予定でしたが、SARS(重症急性呼吸器症候群)の流行のために中止し、2004年度からの実施となりました。2003年度は、それに代わって、小学校向けの日本語副教材パックを選定したり、写真教材「日本の小学生生活」(82ページ参照)を制作したりするなどしました。

### 副教材パックの選定・寄贈

遼寧省基礎教育教研培训中心(当時遼寧省教育学院)では、2001年から2003年にかけて、小学校向けの日本語教科書『小学日語教材』の制作に取り組み、TJFは助成を行いました。また、2003年度の完成にあわせて、同機関とともに、教科書を補完するような視聴覚教材や教具などで構成される副教材パックを、日本語教育を実施する小学校や教育センターに寄贈することを企画し、TJFは、このパックに含まれる

副教材の選定を行いました。

副教材パックには、年少者を対象とする日本語教育のために制作された教材や教具のほか、ひらがな・カタカナ表、絵本、世界地図、日本地図を含めました。また日本の子どもたちの生活や遊びの一端を体験し、遊びのなかからことばが学べるように、ベイゴマ、けん玉、お手玉、福笑いなどを加えました。さらに、これらの副教材を活用してもらえよう、副教材の説明と使い方を記した手引き(日中併記)をつけました。このほかに、日本語教育専門家の協力を得て、副教材を使った教室活動例やおもちゃの遊び方の実演を収録したビデオを制作し、副教材パックに加えました。

これらの副教材の購入と副教材パックの輸送については、日本の外務省所管の「草の根無償資金協力」を受け、2004年度に日本語教育を実施している全小学校65校に寄贈しました。

### 研修会の実施体制

小学校の日本語教師は100人と推定されたことから、各回約50人の研修を3ヵ年計画で行うこととしました。第1回と第2回は初めての参加者を対象に、第3回はすでに参加した経験があり、所属校または地域において中堅とされる教師をおもな対象としました。3回で延べ151人が研修を受けました。

3回とも、小学校の日本語教師が最も多い遼寧省に会場を設けました。第1回と第2回は遼寧省基礎教育教研培训中心とTJFの共催で、第3回は同機関と大連教育学院、TJFとの共催で実施しました(資料216ページ参照)。

### 小学校の日本語教育の目的と意義

研修会では、日本語教師の日本語力と教授力の向上、ネットワークの形成に重点をおきました。教授法では特に、小学生に即した日本語教育の意義と目的を明確にして、教授法の向上を図るとともに、日本語教育について研修生とともに考えたいと思いました。中高校の日本語教育とは違って大学入試という制約がない分、言語教育の本来あるべき姿について議論し、実践できる可能性が大きいと考えたからです。第3回研修会では、すでに研修会で学んだ理念や方法を授業でどのように生かしているのかを研修生に発表してもらい、全員で共有することを目的に加えました。



小学生が楽しく生きた日本語を学べるよう副教材・教具を寄贈した〔2004〕







ワークショップで写真教材「日本の小学生生活」の写真シートを熱心に見ている研修生たち【2004】



グループに分かれて作成した授業案を発表した【2006】

研修会ごとに、その地域在住の日本人との交流の場を設けたり、日本の小学生の生活をビデオや写真教材を通じて学んだり、日本の小学校関係者をゲストに招いたりするなど、日本の小学校教育への理解を促進するプログラムを用意したりして、文化理解、相互理解の促進に努めました。

### 研修会の成果と課題

研修会では毎回、初日に研修生に各自の研修目標を設定してもらい、研修終了時に自己評価をしてもらいました。研修が進むにつれて、研修生の日本語での発言が顕著に増え、日本語学習に対する意欲の高まりが見られました。特に上級者は、教科書にある言語項目をそのまま詰め込む授業から、教科書にある材料を使った総合的な日本語の運用能力を育成する授業を志向するようになり、その具体的な手法として提案された「テーマ学習」を体得するようになりました。日本語のレベルが相対的に低い研修生も、「テーマ学習」の必要性を理念上は理解し、具体的な教室活動の例を自らの教室で再現できるようになりました。

しかし一方、日本語のレベルが非常に低く、日本語教師として最低限の日本語力を身につける必要のある研修生が、毎回全体の3分の1ほどいました。一人ひとりの研修生の実力に即したカリキュラムを実施することが望ましいのですが、研修会の枠内でそれを実現させることは困難でした。日本語力の向上に特化した研修や、教師が抱える個々の課題に絞った研修を、小規模であっても各地域の状況にあわせて現地主導型で実施できるように、資金提供や講師派遣などの形で支援していくことが今後の課題です。

## 4 日中の学校間交流に協力

TJFでは、中国の日本語教育と日本の中国語教育を連携させるために、1997年頃から、中国の高校で日本語を教えている教師と日本の高校で中国語を教えている教師を橋渡しする、「日中友好クラス交流」(93ページ参照)を行っていました。2004

年に開催した「第1回全中国小学校日本語教師研修会」が契機となって、日本語教育を実施する中国の小学校と日本の小学校との交流の橋渡しにも取り組むようになりました。

まず、同年に阜新県佛寺小学校(遼寧省阜新市)と新宿区立大久保小学校(東京都)、阜新県王府架其小学校(遼寧省阜新市)と杉並区立荻窪小学校(東京都)の橋渡しをしました。2005年10月、遼寧省教育代表団の来日にあわせて、大連市の宇峰小学校と神奈川県川崎市の立宮前小学校の橋渡しをしました。その後、校長をはじめとする関係者が学校を相互に訪問するなど学校間の交流が活発に行われました。宮前小学校も大久保小学校も、中国にルーツをもつ子どもたちが大勢学んでいます。こうした交流は、そういった子どもたちを励まし、活躍の場を与える効果もあります。

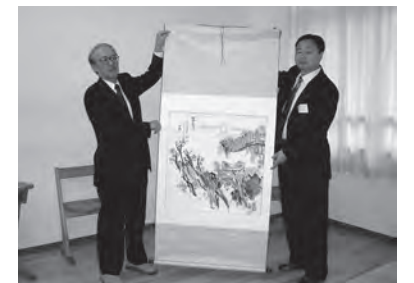
### 中学校間の交流

2006年度には、神奈川県の橘学苑中学校と大連市の弘文学校(当時第八十七中学)の橋渡しを行いました。遼寧省教育代表団招聘プロジェクトで5月に来日した弘文学校の校長は、代表団とともに相手校である橘学苑を訪問しました。同学苑は県下でも数少ない中国語教育を実施している中学校の一つです。校長は、戦前大連の学校の教官をしていた自分の両親が引き上げる際、中国人に助けられ、中国人は世界で最も信頼できる民族だと語っていたという話を披露し、交流の第一歩を踏み出しました。8月には、橘学苑の教職員8人が弘文学校を訪問しました。

### 高校間の交流

2006年10月、TJFは神奈川県高等学校中国語教育研究会、神奈川県日本中国友好協会との共催で、神奈川県と友好提携関係を結んでいる遼寧省の大連市で日本語教育を実施している高校3校から、校長、日本語教師、日本語を学ぶ高校生各1人を招聘しました。これにあわせて、県下の高校3校との交流の橋渡しをしました。

大連市第十六中学は神奈川県立外語短大付属高等学校、大連市旅順第二高級中学は神奈川県立大師高等学校、大連市一〇四中学は横浜市立みなと総合高等学校と、それぞれ交流相手校を訪問し、中国語の授業の参観や文化祭などの行事に参加しました。



大連市弘文学校の校長(右)が交流開始のしるしとして橘学苑に贈った水墨画【2006】

## 5 写真教材「日本の小学生生活」 (日中併記版)の制作

TJFが2004年度に実施した「全中国小学校日本語教師研修会」にあわせて、写真教材「日本の小学生生活」の日中併記版を2004年6月に完成させました。この教材は、A3判の写真シート35枚、冊子(A4判、108ページ)、音声テープ(30分)から構成されています。日本語を学ぶ中国の小学生に、日本の小学生の写真や手紙、メッセージなどの素材を使って、日本の小学生を身近に感じながら日本語を学んでもらうことを目的としています。2005年3月には日英併記版も完成させました(55ページ参照)。

前述の研修会でこの教材を使用するとともに、中国で日本語教育を行うすべての小学校に寄贈しました。

### 「日本の小学生生活」ウェブサイトの開設

教材の写真、文章、音声を、日本語教育および日本理解教育の現場でより広く使用してもらうために、2005年5月に「日本の小学生生活」ウェブサイトを開設し、日本語、英語、中国語の3言語で掲載しました。日本の小学生の生活に関する解説のほか、各国の日本語教育関係者が執筆した授業案なども掲載しました。

## 6 中国の日本語教師向け情報誌 の発行

1999年10月、中国の中高校の日本語教師を対象とする情報誌『ひだまり』を創刊しました。創刊当時は、1996年の教学大綱(学習指導要領に相当)の改訂に沿った新しい教科書、高校『日語』が使われ始めた頃で、新しい教科書の考え方はまだ現場に浸透していませんでした。また、「中国中高校日本語教師研修会」(68ページ参照)では教科書の内容についての疑問や質問が多く出されていました。そのため、教科書に出てく

る文法や表現に関するQ&A、日本語の言語習慣や言語知識に関するコラムなど、日本語に関するシリーズを掲載してきました。研修会を通じて得られた教師の要望を誌面に反映していったのです。

一方、誌面を通じてTJFのメッセージを送り続けてきました。英語圏向け情報誌『Takarabako』(60ページ参照)の趣旨と同じく、日本語教育を通じて文化理解、相互理解を促進するために、言語情報に偏ることなく、文化情報を提供するとともに、その文化情報をどのように授業に活用できるのかという授業のヒントを提供してきました。また、「日本の中高校生」というシリーズでは、中高校生の作文やスピーチ原稿などを掲載し、日本の中高校生がどのようなことに興味、関心をもち、どのような考えや意見をもっているのかを紹介してきました。

### 日本語情報の提供から脱した誌面づくり

2004年度から、前述の日本語に関するシリーズに代えて、日本の社会事情に関する情報の提供と、それを活用した授業案の紹介、その授業案を使う際のアドバイスを提示するようになりました。1990年代から2000年代はじめにかけての、教学大綱の改訂や課程標準の制定で、日本語教育を通じて文化理解の促進と生徒の個性や能力を伸ばす資質教育の重要性が掲げられるようになったものの、資質教育に適した素材が不足していたことから、素材の提供により重点をおきたいと考えたからです。そして、2005年度には、誌面のフルカラー化を図り、教室に張ってもらえるよう、A4判16ページの中折りから、A4判8ページの蛇腹折りにしました。

2007年3月現在、誌面は、いろいろな分野で活躍している小中高校生を中心に紹介する「人物探訪」とその人物と関連するテーマで現代の社会文化事情を紹介する「今日日本」、「人物探訪」や「今日日本」を素材とした授業を行う際のアドバイスを紹介する「教法指点」を中心に構成されています。

「人物探訪」と「今日日本」は、2006年度から『Takarabako』と共同で誌面づくりを行うようになりました。この背景には、この10年で掲げられるようになった中国の日本語教育の目的が、英語圏のそれと大きく重なったことが挙げられます。

『ひだまり』は、現場の声を汲みながらも、一歩先をめざす誌面づくりを行ってきました。『ひだまり』で提案してきた授業案は、普段の授業ではそのまま使われないものの、研究授業







<http://www.tjf.or.jp/hidamari/index.htm>

の際に使われたり、授業案のなかの活動例や考え方などが活用されたりしています。また、「日本の中高校生」や「人物探訪」は、読解教材や作文教材としても活用されています。

### 「ひだまり」ウェブサイトの開設

2000年度から『ひだまり』のPDF配信を始め、2002年12月には「ひだまり」ウェブサイトを開設しました。『ひだまり』の号数が増えるにつれ、素材と授業案の蓄積が多くなったため、2003年度からはシリーズごとに閲覧できるようにしました。2005年からは、「今日日本」と授業案は、その内容が中国だけでなくほかの地域の日本語教師にも役立つものであることから、日本語と中国語の2言語で掲載しています。ウェブサイトを開設した当時は、中国でパソコンやインターネットはまだあまり使われていませんでしたが、この数年で急速に普及したことから利用件数も増えています。

## 7 遼寧省教育代表団の招聘

2004年度から3ヵ年計画で「全中国小学校日本語教師研修会」(77ページ参照)を開始しましたが、第1回の研修会開催後の新学期を迎えた頃、小学校での日本語教育が盛んな地域の一つである遼寧省大連市で、日本語教育を取り止める学校および行政区がでてきたことがわかりました。その理由を探ったところ、英語の導入を望む両親の意向に沿って、行政区の教育局が小中高校に第一外国語として英語を導入することを奨励したことで、学校としてやむを得ず英語教育に切り替えたりしていることが判明しました。

国際語化していく英語の前において、第一外国語としての日本語が衰退していくことを予想はしていましたが、長年中国の小中高校における日本語教育を支援してきたTJFとして、今後どのような支援策をとるべきか探りたいと考えました。また、現在日本語教育に熱心に取り組んでいる学校を拠点校として残すとともに、学校長とのパイプを強化するために、遼寧省の教育行政者や校長などからなる教育代表団を日本へ招聘

することを決めました。この招聘で日本の初等中等教育の現場を視察することにより、日本の社会、文化、教育への理解を深めてもらうとともに、日本の教育関係者との交流を図ることをめざしました。

第1回を2005年10月に実施し、遼寧省の日本語教育の拠点である大連市と阜新市の教育行政および小学校の校長を含む10人を日本に招聘しました。この招聘が契機となり、11月末には、大連教育学院内に日本語教育学習研究センターが設立されるなど、大連市教育局による市内の小中高校における日本語教育振興プロジェクトは一気に進行しました。阜新市においても日本語教育がさらに強化されました。

2006年5月には、両市の教育行政者の理解をさらに得るために、市と各行政区の教育局長ほか13人を招聘しました。とりわけ大連市はほぼ全行政区の教育長が揃って来日したこともあり、9月の新学期から従来の第一外国語としての日本語教育に加え、第二外国語としての日本語教育を中学校に導入しました。行政とともに取り組む新たな日本語教育のプロジェクトが動き始めたのです。

### 教育交流と連動

2度にわたる招聘では、代表団に対日理解を深めるだけでなく、中国の日本語教育と日本の中国語教育をつなげ、相互の言語教育と学校・教師・学習者の交流を促進させたいというTJFの理念を理解してもらいたいと考えました。そのため、遼寧省と友好関係にある神奈川県や、中国語教育を実施している学校、中国の学校と交流している学校などを訪問先を選びました。これにより、すでに交流が始まっていた学校間では、中国側の校長が日本の相手校を訪問するなどして交流がさらに深まり、大連市内と神奈川県内の小中学校間でも交流が始まりました。

初等中等教育における外国語教育を促進するには、教師研修・教材整備とともに、教育行政と各学校当局双方への働きかけが必要であり、さらに教育交流と連動させることで大きな効果を上げることが確認されました。2006年の秋以後、TJFは大連市日本語教育振興プロジェクトを本格的に支援し、大連市の中学校日本語教師研修や第二外国語用の日本語教科書の共同編集制作などに取り組むことになりました(第3部152ページ参照)。



1回目の遼寧省教育代表団の招聘。訪問先の大久保小学校で、子どもたちの大歓迎を受けた [2005]



2回目の遼寧省教育代表団の招聘では、橘学苑の中国語の授業を見学した [2006]

III. 国内の高校の中国語教育関連事業

学びの広がり  
と  
深まりのために

**【国】** 際文化フォーラム（以下、TJF）は、国内の「アジア言語」教育を促進する事業として、まず1994年度から高校における中国語教育を促進する事業に取り組むようになりました。隣国である中国の人たちとコミュニケーションを図ることが不可欠であり、これからの若い人たちのために、中国語を学習する環境を整えることが急務であると考えたからです。当時高校で教えられていた英語以外の外国語のなかで、最も多く導入されていたのは中国語でした。そして、中国語教師のネットワークがすでに10年以上にわたる活動をしており、高校の中国語教育の環境整備に取り組むことができる状況にあったことも、高校中国語教育事業に踏み出す大きな要因の一つでした。その当時、実施校は約150校、全国の高校の2.7%にすぎませんでしたが、10年後の2005年現在、実施校は約550校と3.6倍に増え、全国の高校10校に1校の割合となりました。

脆弱な高校中国語教育の位置づけ

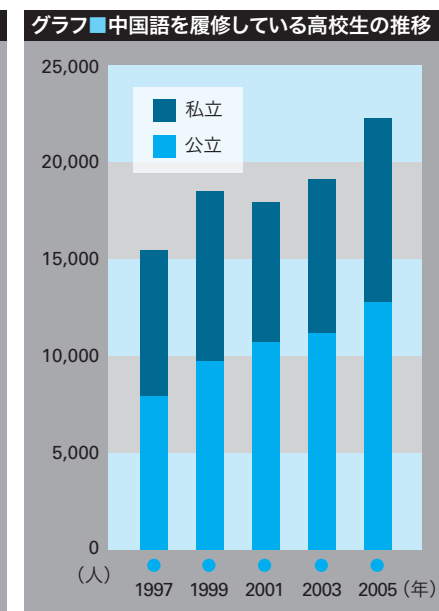
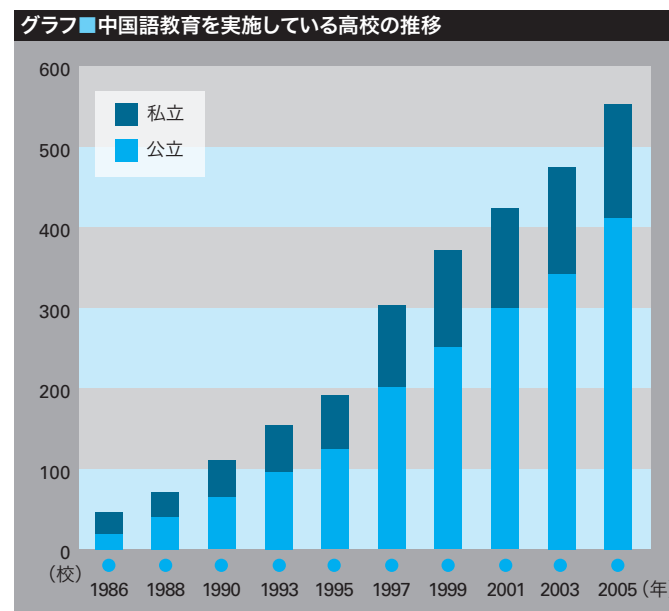
中国語教育を導入する高校は、1980年代後半から増加し始め、1990年にはフランス語教育の実施校数を抜き、それ以降、英語に次いで最も多い状況が続いています。このように増加した背景には、まず国際理解のための外国語教育が重視されるようになったこと、次に総合学科や単位制などを取り入れる新しいタイプの学校が増え、選択科目の一つとして中国語教育を導入したことがあります。

しかし、開設状況を子細に見ると、常に1、2割の学校が入れ替わっており、必ずしも継続して開講されているわけではありません。また、実施校数は年々増え、全高校の1割を超えたものの、履修者数は2005年現在2万2,161人、高校生1,000人あたり6.1人にすぎず、順調に増えたわけではありません（右ページのグラフ参照）。さらに中国語は選択科目であり、履修時間も週2、3時間、1年間のみ開講という学校が多く、学習時間数にすると年間100時間に達しないのが現状です。

また、外国語の学習指導要領には、中国語について具体的な記述もないという状況のなか、学習の内容は担当する教師に任されており、教師たちは高校の中国語教育は何をめざしたらいいのかを模索しながら授業を進めていました。多くの学校で選択科目とされているため、履修者が集まらなければ実際には開講しない場合もあれば、せっかく開講されても中国語教師の異動によって講座がなくなってしまう場合もありました。

10の提言

高校の中国語教育事業に取り組むにあたって、まず1994年度に高校の中国語教育の実態に関するアンケート調査を、中国語教育を実施していると思われる197校を対象に実施しました。調査によって明らかになった問題点を整理し、高校の中国語教師や大学の中国語教育関係者と協議しながら、解決の糸口をさぐり、調査結果をまとめた報告書『いま高校の中国語教育を問い直す』（1996年4月発行）のなかで、高校の中国語教育を促進し、充実させるための10項目の提言をしました。



資料：文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況」（調査は1986年から隔年で実施。履修者数の調査は1997年から）



1. 第二外国語としての中国語教育を積極的に推進する。
2. 高校中国語のガイドラインを作成する。
3. 高校中国語の標準テキストを編纂する。
4. 資格をもった中国語担当教員を確保する。
5. 教員を養成するとともに再研修の機会を提供する。
6. 教員主導の研鑽の機会を充実させる。
7. 教員の海外研修の機会をつくる。
8. 一日も早く中国語指導助手の招致を実現させる。
9. 教員間のネットワークを構築する。
10. 中国語教育関連の情報を共有する。

### 連携が新たな事業を生み出す

提言に沿って事業を展開した結果、高校中国語教育に関する情報の提供、データの蓄積、高校の中国語教師のネットワークの充実、学習のめやすの作成、高校生向け教材の制作や素材提供、日本および中国での教師研修の実施など、高校の中国語教育を取り巻く環境は多くの点で改善が見られました。TJFが中心になって行ったものもあれば、高校や大学の中国語教師とともに共催したもの、日中双方の大学や教育行政に協力を依頼して実施したものなどさまざまでしたが、いずれも高校教師とのネットワークがなければ成し遂げられないことばかりでした。

中国語教育関係者にTJFの事業を認知してもらうまでには時間がかかりましたが、少しずつ信頼を得て、日本国内の大学や、韓国朝鮮語教育など他の外国語教育の関係者とも連携できるようになりました。また、中国や日本の各関係機関から

支援を得て、少しずつではありますが事業を拡大することが可能になりました。一つの事業を通じてできたネットワークが、新たな事業へと発展し、さらに複数の事業が結びつくことで、これまでばらばらだった高校中国語教育の流れが一つの大きな流れにまとまってきています。今後高校の中国語教育をより発展させるためには、量的拡大とともに質的な向上が必要になっています。



## 1997 >> 2006

### 高校中国語教育関連事業の動き

- 1997年6月 第2回高校の中国語教育の調査（韓国朝鮮語と合同）を開始（1998年12月まで）
- 1997年8月 日中友好クラス交流の橋渡しを開始
- 1998年6月 調査の中間報告書を発行
- 1999年4月 高校の中国語教師向け情報誌『小溪』を創刊
- 1999年6月 『日本の高等学校における中国語教育の広がり』（1997年度の第2回調査報告書）を発行
- 1999年6月 『高校中国語教育のめやす』の出版に助成（1995年度から編集に協力）
- 2001年7・8月 大阪外国語大学と神田外語大学の中国語教員免許取得講座の開設に協力（大阪外大は2004年度まで、神田外語大は2003年度まで開講）
- 2002年7月 『高校生からの中国語』の出版に助成（2000年度から編集に協力）
- 2002年8月 高等学校中国語教師研修会を後援（ハルビン市）
- 2002年8月 日中教師セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」を開催（ハルビン市）
- 2002年12月 「小溪」ウェブサイトを開設
- 2003年4月 高等学校中国語教育研究会の事務局としての活動を開始
- 2004年3月 第4次日本高校生交流代表団の中国派遣に協力（2005年度の第6次まで毎年度協力）
- 2004年7月 第1回高等学校中国語担当教員研修の開催に協力（長春市、北京市）（以後、毎年度開催。2005年度から共催）
- 2004年9月 「TJF Photo Data Bank 中国編」ウェブサイトを開設
- 2004年12月 北京修学旅行セミナーを開催
- 2005年8月 高等学校中国語担当教員講座を開催（大阪）（以後、毎年度開催）
- 2005年12月 大連修学旅行セミナーを開催
- 2006年1月 「高等学校の中国語と韓国朝鮮語の学習のめやす」作成プロジェクトを開始（2006年度まで）
- 2006年6月 韓国の高校中国語教師を招聘
- 2006年8月 高校中国語教員研修を開催（北九州、東京）（以後、毎年度開催）
- 2006年12月 フォーラム2006を開催（以後、中国語・韓国朝鮮語教育連携事業として毎年度実施）
- 2007年3月 『高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす（試行版）』を発行

# 1 高校における中国語教育の調査の実施

高校の中国語教育事業を始めるにあたり、高校でどのような中国語教育が行われているのか、現場がどのような問題を抱え、どのようなことを求めているのか、その実態を把握するために1994年度に第1回の調査を行いました。調査にあたっては、当時すでに10年以上の活動実績があった高等学校中国語教育研究会（当時全国高等学校中国語教育研究会）<sup>❖</sup>の協力を得ました。同年5月の時点で中国語教育を実施していると思われる197校の高校を対象に調査を行いました。TJFはそれまで中国語教育とはまったく無縁だったこともあり、締め切り時の調査票の回収率は4割にとどまっていた。そのため、半年近くかけて学校や教育委員会と何度もやりとりした結果、195校から協力を得ることができ、156校が中国語教育を実施していることがわかりました。

さらに、実態を十分に把握するため、教師から直接話を聞いたり、実施校を訪問して中国語の授業を見学したりするなど、1年半をかけて調査した結果、現場で抱えている数多くの問題点が明らかになってきました。

❖中国語教育実施校が全国で十数校しか確認されていなかった1982年に、高校中国語教師の有志により設立された教師のネットワーク。2006年現在の会員数は約180人、大半は高校の中国語教師である。おもな活動として、年1回の全国大会の開催のほか、八つの支部（北海道、関東、北陸、東海、関西、中国・四国、九州、沖縄）をおき、支部ごとに研究会や高校生のための中国語学習発表会などを開催している。

## 課題山積の高校中国語教育

高校の学習指導要領では、英語以外は「その他の外国語」として一括りされており、学習すべき項目についての具体的な記述がないため、学習の指針を求める教師が多かったです。また、高校用の教科書は、1987年に高等学校中国語教育研究会が編集した『高校中国語』が1冊あるだけで、そのほかに教材はなく、教師研修の機会や情報交換の場なども不足していました。中国語を担当する教師の約6割が非常勤講師で雇用が安定していないことも、中国語教育が学校教育のなかに位置づけられにくい原因の一つとなっていました。

## 第2回調査

1980年代後半から、中国語教育の実施校数は顕著な増加が見られ、第1回調査（1994年度）の後も中国語教育を導入する学校は着実に増え続けました。新しくできた総合学科の学校で多く中国語教育を取り入れるなど、新しい動きも見られました。こうした変化を追うとともに韓国朝鮮語教育の実態もあわせて把握するために、1997年度から1998年度にかけて高校の中国語教育と韓国朝鮮語教育の調査と情報収集を行いました。この二つの言語に関する調査を同時に行ったのは、一つには中国語教育の実施校と韓国朝鮮語教育の実施校に重なりがあるという背景があったからですが、もう一つには、二つの言語の教育事情を比較することによって、それぞれの言語教育につ

### 現場が抱える課題

1年間で生徒に何を身につけさせればよいかははっきりしないまま、ただ教科書を進めるという状況。それも半分くらいしか進まない。  
(公立高校講師)

教師の確保に苦勞している。場合によっては中国語の講座そのものが開講できなくなるおそれがある。  
(公立高校教務部教諭)

大学在学中に中国語の教員免許を取ったものの、中国語の教員採用はなかった。県の教育委員会で講師として登録したが、「中国語の免許だけでは採用は難しい」と言われた。知人の紹介で、やっと教壇に立つことができた。  
(公立高校講師)

どの高校で中国語教育が行われているのかもわからず、情報交換・意見交換ができない。自分自身の教育方法のどこを直していくべきかわからず、向上心も薄れてしまっている。  
(私立高校講師)

教材は生徒たちが興味をもってくれるような楽しい内容のものであってほしい。読解を重視した従来の教材ではなく、文化を紹介しながら、そのなかで生きた会話をしていけるような教材がほしい。  
(私立高校講師)

アンケート調査票より抜粋



いて掘り下げた見方ができるのではないかと考えたためです。

第2回の調査では、調査票を送る時点で中国語教育または韓国朝鮮語教育を実施していることが確認された学校だけでなく、講座の開設を計画または希望している学校、以前は実施していたが現在は何らかの理由で中国語教育、韓国朝鮮語教育を中断している学校も対象としました。二つの言語教育のおかれた状況は必ずしも安定したものではないことから、実態を把握するためには数年間の動きを見る必要があると考えたからです。また、中国語教育や韓国朝鮮語教育は外国語科目のなかだけで行われていたわけではなく、課題研究や他教科の授業、必修クラブなど教科外活動として取り組んでいたり、総合的な学習の時間でこの二つの言語を教えていたりする場合も少なからずあったことから、これらの高校も、中国語教育、韓国朝鮮語教育の取り組み校として調査対象に含めました。

### 調査からわかったこと

調査や情報収集を通じて、各校の中国語教育、韓国朝鮮語教育を導入した経緯や取り組みの目的・内容は、地域の特性や導入した時期、各学校の特性などによってさまざまであり、全国一律に一括りに論じることはできないことを改めて確認しました。

地域についていえば、中国に姉妹都市があるかどうか、中国と経済的なつながりが強いかどうかで、取り組み方が違ってきます。また、学校の改編や校長、理事長などの考え方も中国語教育を導入した時期や目的に影響を与えていることもわかりました。今後、中国語教育関連事業を企画し、実施していくときには、全国に共通する実態をとらえていくと同時に、地域ごと、公私立校ごと、さらには学校ごとに異なる取り組みの内容とその背景、課題を考えていく必要があることを実感しました。

また、調査や情報収集を通じて、修学旅行で中国語圏（中国・台湾・シンガポール・マレーシア）を訪れる学校が年々増えていることや、中国語圏の学校に友好校のある学校が数多くあることも明らかになりました。こうした学校の中には中国語教育を導入していない学校も少なくありませんでした。中国語教育の裾野を広げるためにも、こうした中国語圏の学校との交流、母語話者である同世代との交流を、中国語学習と結びつけていくことが重要であると考えています。

## 2 国内の中国語教師を軸にしたネットワークの構築

2回の調査（1994年度、1997—1998年度）を通じて、中国語教育の実施校や、年1回開催される高等学校中国語教育研究会の全国大会、同研究会の支部が実施する研修会に足を運んで、教師から話を聞き現場の直面する問題を把握するとともに、教師とのネットワークを少しずつ広げていきました。

同研究会の協力を得ながら事業を行っていましたが、全国の高校で中国語を教えている教師が400人近くいたにもかかわらず、同研究会の会員は約150人でした。より多くの教師にTJFの収集した情報を伝えるには、独自のネットワークをつくる必要があると感じ、1999年4月に高校の中国語教師向け情報誌『小溪』を創刊しました。創刊時は500部だった部数も、年を追って増え、2007年3月現在、全国で中国語教育に取り組む高校約730校の教師と大学等の中国語教育関係者をあわせて900人近い読者を得るまでになりました（105ページ参照）。

1999年以降、同研究会と『小溪』を通じてできたネットワークを活用して事業を進めてきましたが、2002年に同研究会が設立20周年を迎え、運営体制が新しくなったことに伴い、翌2003年度からTJFは事務局を担い、全国大会の開催、会報の発行など研究会主催事業の企画立案と運営に参画するようになりました。互いの関係が密になるにつれ、事業の成果も大きくなっていきますが、その一方で、それぞれの独自性を保ちながら事業を進めていくことが今後の課題です。

### 中国の日本語教育との連携

中国の中高校で日本語を教えている教師は、日本の学校との交流を強く望む一方、日本の高校で中国語を教える教師からも中国の学校との交流を望む声があがっていました。ことばの学習と交流が結びつくことによって、生徒の日本語ないしは中国語への学習意欲が高まり、自分たちのことばや文化を見直すきっかけになることを指摘する教師は少なくありませんでした。すでに姉妹校関係を結び、教師や生徒の相互訪問を行っている学校もありました。しかし、学校間交流は、担当教師の希望だけでは実現が難しいのが実情です。





中国中高校日本語教師研修会で、中国の日本語教師に「日中友好クラス交流」について説明 [1998]



中国の高校生から日本の高校生に届いた手紙

TJFは、教師を核にしたクラス間の交流なら気軽に始めることができるのではないかと考え、1997年度から「日中友好クラス交流」の橋渡しを始めました。1998年8月に中国黒龍江省ハルビン市でTJFが「第3回中国中高校日本語教師研修会」を共催した際には、友好クラス交流を希望する中国語教師と日本語教師の橋渡しをし、友好クラスは26組に増えました。そのうちのいくつかは教師が相手校を訪問するなど活発な交流が行われました。しかし、生徒の手紙を翻訳したり、手紙を取りまとめて送付したり、交流相手の教師と連絡を取るなどの作業は、大きな負担になりました。また、教師が異動したり、日本語や中国語のクラスがなくなったり、試験や休暇など互いの年間予定がうまくあわないなど、交流は次第に途絶えていきました。教師同士が連絡を取りあっているケースはあるものの、10年友好クラス交流が続いている例は残念ながらありません。

こうしたことから、教師にかかる負担を少なくするためには、学校間の交流にすることが有効だと考え、学校間交流を促進できるよう、校長や教育行政者への働きかけを始めています。

### さらなるネットワークの広がり

2004年12月、日本の高校の中国語教師2人が、韓国京畿道中等中国語教育研究会の年次大会に参加しました。このと

き、韓国の高校中国語教師のネットワークである、韓国中等中国語教育研究会の会長と出会ったことから、日韓の高校中国語教師間の交流が始まりました。教材やガイドラインなどを交換したり、日韓の高校中国語教師ネットワークの代表が、互いの全国大会に参加したりしています。

## 3 中国語の教員免許取得講座の開講に協力

「免許外教科担任許可という資格で何年も中国語を教えている自分が指導する教育実習生が、毎年教員免許を手にしていく。何とも割り切れない」という、ある教師の切実な思いがきっかけとなり、韓国朝鮮語の教員免許取得プロジェクトに続き、中国語でも同様のプロジェクトを開始しました。

1997年度に実施した第2回調査によると、免許の保有状況について回答のあった180人の教師の約4割が中国語の教員免許を取得しないまま、臨時免許や免許外教科担任許可という資格で中国語を教えていました。

### 友好クラスに取り組んで



1998年から、内蒙古の高校で日本語を学習しているクラスと交流を始めました。私は生徒に、いわゆるマスコミが伝えるような一般論で語られる中国文化ではなく、等身大の中国文化を学んでほしいと、いつも思っていました。そのためは、中国の同年代の生徒と交流するのがいちばんいいと考えていたからです。私自身が中国の最新情報を教えてくれる人を求めていることも交流を始めた理由の一つです。

友好クラス交流は、まず文通から始まりました。中国の生徒が文通に対して熱意と期待をもって

るのに対し、私の生徒はさほど積極的ではなかったのですが、実際に手紙が届くと、次第に興味を示しました。文通に取り組んだ生徒のほとんどが「楽しかった」と感想を述べ、卒業後も文通を続けている生徒も何人かいたようです。

生徒たちは文通を通じて、自分が学んでいる言語を話す同世代の高校生に興味、関心をもち、それが中国語の学習に役立ちます。中国の高校生の生活、日本に伝わってくる大都市以外の街の様子など、なかなか知りえないことを知ることができました。そして、何よりも私自身、中国で日本語を教えている友人ができたことは大きなことでした。(内山修一/山梨県立甲府城西高校講師、当時)

### 中国語の教員免許取得講座に携わって



私と高校の中国語教育との関わりは、2001年に教員免許法認定公開講座を大阪外国語大学で開設したときに始まります。この講座の企画段階では、もっぱら同僚のS先生が関わっていました。ところがS先生は、講座開設の年度に北京に赴き、長期滞在することになりました。ふつつなら1年延ばして開講すべきところですが、緊急性を痛感されていたS先生は、私の手を握り涙を流して、「一刻の猶予もならぬ。後は頼んだ」と言いおいて、旅立っていかれました(大げさに言うところな感じでしょう)。この講座はそれほど

開設を望まれていたのです。

こうして開設した講座は、4年間で28単位になりました。4年というのは短い年月ではありません。新しく免許を取得するのは、それだけ大変なことなのです。4年で実にさまざまな背景をもつ方々が参加してくれました。夏休みにわざわざ研修に参加しようとする奇特な人たちとの出会いは、講座を開く側としてはうれしい限りです。学内外の関係者とあれこれ議論しながら毎年講座のプログラムを考えるのは、苦しくも楽しい年中行事となりました。この講座に関わり、大学は高校と緊密に連携すべきでは、と考えるようになりました。

(山崎直樹/大阪外国語大学助教授、当時)



教員免許取得講座の開講を大学に働きかけた結果、2001年夏に、大阪外国語大学と神田外語大学で現職教員の中国語教員免許取得のための集中講座が開講されました。『小溪』などを通じて開講を広報したところ、定員30名のそれぞれの講座に全国各地から参加がありました。講師にとっても研修生にとっても夏休み返上で講義は、大阪外国語大学では4年、神田外語大学では3年にわたり実施されました。

## 4 高校中国語教師研修の共催



初めて中国で開催された日本の高校の中国語教師を対象とする研修 [2002]

2001年6月、国外における中国語教育の推進を担当する、中国国家漢語国際推進小組弁公室（当時中国国家漢語教学推進小組弁公室）<sup>❖</sup>の代表団が日本の中国語教育の視察を目的に来日しました。その折、中国大使館の依頼で、TJFが日本の高校中国語教育の現状について説明したところ、高校中国語教師研修への講師派遣などに協力したいとの申し出がありました。

その結果、2002年8月、日中の機関の協力を得て、高等学校中国語教育研究会が主催団体となり、黒龍江省ハルビン市で高等学校中国語教師研修会が開催されました。TJFは、日本の高校中国語教師を対象とする初めての研修を後援するとともに、運営事務局としてカリキュラム作成などに全面的に協力しました。この研修には、全国から21人の教師が参加しま

した。また、研修期間と場所をTJFが共催する「中国中高校日本語教師研修会」（68ページ参照）のそれと重なるよう設定し、それぞれの研修の参加者が交流できる機会を設けました。日本の中国語教師と中国の日本語教師は同室で8日間過ごし、互いの発音を指導しあったり、宿題を手伝ったりしながら、それぞれの研修に参加しました。研修会終了後、TJFの設立15周年記念事業として、日中教師セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」を2日にわたって開催しました。セミナーには、日本の高校中国語教師21人と中国の中高校日



本語教師79人が参加し、日中の高校生が相手側のことばを学び、互いの理解を深めることの意義を確認しました。

❖ 国外における中国語教育および中国文化普及を目的に1987年に設立された中国の政府機関の事務局機構。通称「漢弁（ハンバン）」と呼ばれている。

### 長春研修の開催

2002年12月、第2回研修の準備を始めようとしていたとき、第2次日中教育交流計画の一環として、中国教育部と文部科学省の共催で高校の中国語教師を対象とする短期中国研修を2003年度から5ヵ年計画で実施することが決定しました。TJFは前述のハルビンでの研修開催の実績があったことから、カリキュラムや事前研修の企画など内容面でこの「高等学校中国語担当教員研修」に共催者として関わることになりました。中国語を国外で積極的に普及するという近年の中国政府の政策が、日本の高校の中国語教育への追い風となり、研修の実施が決定されました。

研修実施に向け準備を進めていたものの、SARS（重症急性呼吸器症候群）の影響で2003年度の開催は見送られ、2004年度に実施した第1回研修には、20人の高校中国語教師が参加しました。全日程23日間のうち、最初の18日間は吉林大学で講義を受け、後半の5日間は北京市内を見学しまし



吉林大学で初の開催となった「高等学校中国語担当教員研修」の開講式 [2004]

### 少し遅れた恩返し



中日両国の政府は、自国のことばの普及、教育に力を入れてきました。特に1980年代初め、日本政府は中国の大学日本語教師400人を養成してくれました。そのおかげで中国における日本語教育は一挙に普及し、質も高くなりました。

中国も、日本における中国語教育を重視してきましたが、日本と比べれば支援規模はかなり小さいものでした。近年、中国の経済も発展し少しずつ余裕ができたので、今度は、恩返しの意味でも、何とか日本の中国語教育を支援したいと思っています。まずは、日本側が要望している高校中国語教師の養成に対して、重点的に支援することにしました。

（胡志平／駐日中国大使館教育処一等書記官、当時）

た。吉林大学が長春にあることから、研修生の間で通称「長春研修」といわれるこの研修は、23日にわたって寝食を共にすることで、研修生の中に強い連帯感が生まれ、帰国後もEメールなどを通じて情報交換をしています。長春研修は、中国語運用能力や教授力の向上という本来の目的を達成するだけでなく、教師たちのネットワーク構築という大きな成果を生みました。2006年度までに3回の研修が実施され、60人の教師が参加しました（資料218ページ参照）。

### 多くの教師に研修の機会を

前述の長春研修は、高校の教諭と常勤講師を対象としています。しかし、400人以上いると推測される中国語を担当している教師のうち、この対象となるのは100人ほどで、多くは非常勤講師のため対象となりません。そこで、TJFは、できるだけ多くの教師が研修に参加できるように、国内の大学など関

係機関に働きかけた結果、2005年8月、大阪外国語大学と共催で、国内研修を実施することができました。

この国内研修に、定員30人を超える応募があったこと、参加者の3分の1近くが関西地域以外からだったことから、東京をはじめ他の地域でも研修が開催できるよう、各地の大学に打診しました。その結果、2006年度は、桜美林大学孔子学院<sup>❖</sup>、大阪外国語大学、北九州市立大学の三つの大学と国内研修を共催することができました。これにより、2006年度は78人が研修を受けました（資料221、222ページ参照）。これらの研修には、それぞれの大学の講師陣に加え、中国国家漢語国際推广領導小組弁公室に協力を仰ぎ、長春研修を担当している吉林大学の中国語教育専門家を派遣してもらいました。

<sup>❖</sup>中国国家漢語国際推广領導小組弁公室の支援のもと、各国の大学や教育機関と共同で設立・運営される中国語および中国文化の教育機関。2007年3月現在、世界で約150校、日本では7校が開設または開設を予定している。



大阪外国語大学で開催された講座の様子。「少しでもいい授業をしたい」という熱意ある受講者がたくさん集まった[2005]



桜美林大学孔子学院で開催された研修の1コマ。漢弁派遣の講師の授業を受ける受講者[2006]

## 教員研修に参加して



2004年当時つばさ総合高校は、中国語科目を開設したばかりで、中国語教育に関する資料も経験もありませんでした。何を教えたらいのか、生徒たちにどんな力を身につけさせればいいのかかわからず、ずっと悩んでいました。翌2005年、大阪外国語大学で中国語の教員免許取得のための集中講座を開講することを知り、早速受講を決めました。その後科目等履修生として桜美林大学に通い、教員免許取得に必要な残りの単位を取得しました。二つの大学では多くのことを学ぶとともに、仲間との出会いもありました。教え始めた頃は、教えるべきことが多いのに時間が少ないと思っていましたが、今は、単に知識を教え込むのではなく、生徒たちの興味や関心を高める授業をつくりたいと思うようになりました。

（加藤リカ／東京都立つばさ総合高校講師）



2004年の長春研修は、大学卒業後で一番充実した研修でした。講義以外に模擬授業、ディベート、夜の自習室での予習、そして何といてもほぼ毎日の発音矯正は有意義でした。長春から戻って、最初の英語の授業をしたときに驚きました。「わあ、口の中が中国語仕様になってる!」。頭のなかでは今までのように英語の発音をしているつもりなのに、耳に戻ってくる音は違っていたのです。思いっきり好きな勉強ができた夢のような研修の日々から現実に戻ると、中国語は日常業務の何分の一でしかなく、少しさびしい感じでした。少し前まで、異動すればまた中国語から離れてしまう、英語教師である私にとって今は仮の姿と思っていましたが、今は、できればずっと中国語教育に関わりたいと思っています。

（千場由美子／大阪府立柴島高校教諭）

## 中国語教師の姿勢に感動



2002年の夏、私は黒龍江省ハルビン市に向かいました。中国国家漢語国際推广領導小組弁公室から日本の高校中国語教師研修を委託されたからでした。このとき、私は初めて日本の高校の中国語教師に会いました。中国語の基礎的な力、運用能力にはかなり差がありましたが、全員に共通していたのは、まじめに学習に取り組む姿勢です。

2004年からは吉林大学で夏期研修を行うことになり、私は主任講師として関わりました。さらに2005年からは、日本国内の研修も始まり、同弁公室の派遣で大阪外国語大学の研修でも講師を務めることになりました。私が最も感動したのは、2002年のハルビン研修以来、ほぼ毎年行われる研修すべてに参加している教師がいること、彼らの中国語のレベルが着実に高まっていることです。ここ数年、私は日本の高校における中国語教育について理解を少しずつ深めるとともに、中国語教師たちの思いや態度により深く感動し、この事業に対してますます情熱を燃やすようになりました。

（劉富華／吉林大学教授）



### 講師と研修生でつくるカリキュラム

高校中国語教育の現場の要望に対応するため、どの教師研修でも、高校の中国語教師とともにカリキュラムの原案の作成にあたりました。また、研修会の講師とも協議を重ねながらカリキュラムを完成させ、回を重ねるごとに改訂しました。しかし、研修に参加した教師の中国語学習歴も教師歴も異なっているうえに、所属校での中国語教育への取り組みも多様であり、研修の内容に対する要求もそれぞれで異なっていたため、研修生全員の要望に応えることは難しいことでした。

しかし、国内研修の研修生のなかには、2002年度にハルビンで行われた研修や、大阪外国語大学の教員免許取得講座(95ページ参照)、長春研修などを受講した経験のある研修生が毎回いました。夏休みとはいえ、まとまった時間をつくり出すのはそう簡単なことではないにもかかわらず、数多くの教師が研修に参加しました。参加者にとっては、授業を受け、中国語の運用能力や教授力の向上を図るための場ではなく、仲間と出会い、さまざまな人と交流する機会でもありました。また、講師にとっても、研修に関わることにより、日本の高校中国語教育に対する理解が深まっただけでなく、同じ中国語教師として学ぶものがあつたようでした。

## 5 ガイドライン・教材・教科書の制作に協力

1994年度に行った第1回調査の後、高校と大学の中国語教育関係者が協議していたときに、高等学校中国語教育研究会の有志4人が、優先課題の一つであったガイドラインの作成に取り組みたいという意向を表明し、1995年3月にガイドライン研究会を発足させました。中国語の開設校のなかで最も多い単位数である3ないし4単位の履修で、コミュニケーション能力の養成、国際理解や異文化理解を目標に設定した際に、学習すべき文法項目と語彙を提示するガイドラインづくりに大学教師の協力も得て、着手しました。

しかし、大学レベルでも確立されていないガイドラインの作成は、想像以上に大変な作業となりました。有志によって始めら

れた作業は、後に高等学校中国語教育研究会のプロジェクトとなり、関東と関西の両支部が語彙編と文法編をそれぞれ担当し、作業を進めていきました。合宿討議、支部ごとの討議を重ね、1999年6月に『高校中国語教育のめやす』（平成11年度版）を出版しました。

TJFは、プロジェクトチームのガイドライン作成に対し助成し、同刊行物の編集・出版に協力するとともに、中国語教職課程を有する大学の関係者、文部科学省や教育委員会など教育行政関係者に配付しました。

### 写真教材づくりから教科書づくりへ

ガイドライン作成の作業を進めていた当時、書店には数多くの中国語の教科書が並んでいましたが、高校生を対象にしたものは、高等学校中国語教育研究会の有志が編集した『高校中国語』（1987年初版、1994年改訂、2007年改訂新版、白帝社）の1冊だけで、学習時間数、到達目標、生徒数などが異なる、多様な現場の要望に応えられないのは明らかでした。

「高校生が興味をもってくれる教材が少ない」「同世代の生活の様子を伝える素材が不足している」という教師の声に応えるとともに、文化理解を取り入れた中国語の授業を充実させるために、2000年度から、高校生を中心とする中国の人びとの生活を伝える写真教材を制作する準備に取りかかりました。まず高校で多く使われている教科書を分析し、どのような写真が必要かを考えました。

企画を練っていくうちに、写真教材を活用してもらうためには、写真の説明だけでなく、その場面で使われる中国語の表現も提示したほうが良いのではないかと考えるようになりました。そして、場面ごとの表現を考えているうちに、教科書づくりへと企画が発展し、有志9人の教師からなる「小溪教材研究チーム」が結成されました。それから約2年、休みを返上して編集会議を重ね、数百通におよぶメールのやりとりをするなどして作業を進め、2002年7月に白帝社より『高校生からの中国語』を出版しました。

ちょうど同じ頃、自分たちがめざす中国語教育には、新しい教科書が必要だと考えた教師たちが、個人で、あるいは仲間たちと教科書の制作に取り組み、『高校生からの中国語』が出版された同じ年に、高校生を対象とする教科書が3冊出版されました。



『高校生からの中国語』の制作にあたっては、高等学校中国語教育研究会が1999年度に制作した『高校中国語教育のめやす』を考慮しながら、文法積み上げ方式ではなくコミュニケーション志向の中国語学習をめざし、高校生が自分自身や家族、学校について語れるようにすることと、中国の高校生を理解し交流するために必要な中国語の表現を習得させることを目標におきました。そのため、実際のコミュニケーション場面を想定して、交流を疑似体験できるような内容にしました。また、独学で勉強できるよう会話を録音したCDを作成し、中国の高校生の生活や中国の歴史や文化について紹介したコラムを掲載しました。TJFは、文化紹介のためのコラムの執筆と写真の提供を中心に編集に協力するとともに、教育現場に配付するため、200冊買い上げました。

「小溪教材研究チーム」は、教科書の出版だけでなく、教科書の使い方を示した「教師用指導書」(B5判、72ページ)を出版し、さらに、『高校生からの中国語』を使った授業づくりに関するワークショップを開催しました。TJFはこうした活動も支援しました。

### 中国語の授業に役立つ写真バンク

教科書づくりに取り組むことになったため、写真教材の制作を中断していましたが、再開にあたって、印刷物にするのではなく、TJFのウェブサイト上に公開することにしました。それまで収集していた写真を整理する一方、中国語の授業でより役立ててもらうため、生徒の興味や関心をひく同世代の高校生の写真、教科書に出てくる場面で活用できる写真、教科書の内容を補足する写真(生活習慣、伝統文化、名所旧跡、伝統行事など)、多様な中国の民族や地域の写真、自分たちの文化との共通点や相違点が見える写真を新たに収集することにしました。

収集にあたっては、これまでTJFがネットワークを築いてきた中国の日本語教育を実施している学校5校に、学校や家庭生活、地域に関連する写真を撮影してもらったり、中国国家観光局から各地の名所旧跡や民族に関連する写真を提供してもらったりしました。

そして、先行して開設した「TJF Photo Data Bank 日本編」ウェブサイト(61ページ参照)に続いて2004年9月、「TJF Photo Data Bank 中国編」を開設し、写真を公開しました。すべて

の写真に日本語と中国語の説明文をつけるとともに、中国編のトップページでは、「注目の一枚」として、毎月中国各地の様子がわかる写真を取り上げ、文章で詳しく紹介しています。また、日本語と中国語(漢字とピンイン)で写真を検索できます。2007年3月現在、約2,000枚の写真を掲載しています。

## 6 中国語の学習と交流の連携事業の実施

中国語を学んでいる高校生の学習意欲を高めるためには、中国の高校生との交流が効果的だと考え、さまざまな試みをしてきました。2000、2001年度に企画した高校生のための中国研修旅行もその一つでした。

プログラムを作成するにあたって、高校の中国語教師たちと一緒に企画を練り、教師の要望を随所に取り入れました。また、TJFがネットワークを築いている中国の日本語教育実施校に対して、学校訪問や日本語を学ぶ高校生との交流ができるよう協力を依頼すると同時に、中国のいろいろな面に触れてもらえるよう、北京だけでなく地方都市も訪問できるようにするなど工夫もしました。しかし、費用の面や主催者が旅行社であったことなどから、内容は充実していたものの、多くの高校生の参加を得るまでにはいたりませんでした。

### 他機関と連携

中国語を学ぶより多くの高校生に中国に行く機会を提供するためには他機関との連携が必要だと考え、日中の高校生の交流を実施している機関に働きかけました。その結果、社団法人日本中国友好協会が実施している「日本高校生交流代表団」に、2003年度の第4次派遣から、中国語学習者枠20人が設けられることになりました。TJFはこの20人の募集を行うとともに、プログラムや事前研修の企画にも協力しました。

中国滞在中は、まず中国の人びととその生活、次に歴史や伝統文化、さらに現在の中国に触れてもらえるようプログラムを組みました。歓迎会や送別会、訪問先の学校などで中国語であいさつするなど、中国語学習者が日頃の学習成果を発揮



[http://www.tjf.or.jp/photodatabank\\_c/](http://www.tjf.or.jp/photodatabank_c/)



6泊7日の行程で中国を訪れた高校生たち。帰国の前日行われた送別会では肩を組んで「さくら」を合唱した[2004]



できる場面もできるだけ多く設定しました。高校生からは、中国を訪れ中国の人びとと交流したことで、中国語への学習意欲が高まったという感想が多く寄せられました。また、中国語教育の裾野を広げる方法の一つとして修学旅行に注目し、2004年度から中国への修学旅行に関するセミナーを日本中国友好協会と共催してきました（資料223ページ参照）。

これらの事業を通じて、ことばの学習を修学旅行や交流と連携させることは、学習者が中国語を母語とする相手を理解し、自分の伝えたいことを相手に伝えようという姿勢を身につけると同時に、中国語を学ぶ意味を問い直すことができるということを確認しました。

## 中国を訪問した高校生の声

今回の旅でことばの重要性を再確認しました。自分の意思を伝えることと他人の気持ちがかかることが、こんなにも気持ちがよくて素晴らしいことなのかと感動しました。そして自分の勉強不足を反省し、この悔しさを生かして勉強しようと思います。多くの感動と発見を与えてくれた中国を後にしてから考えたこと、それはすべてのものに感謝するという事です。（2000年研修旅行）

何より自分の中国語が通じてうれしかったです。でも同じ班にもっと話せる子がいて羨ましかったです。もっと話せたら今以上に交流できるのに、と思うと悔しかったです。（第3次日本高校生交流代表団）

何より心に残ったのは、この研修旅行のメインともいえる生徒たちとの交流です。カンチカ第二高級中学の人たちは私たちをとても歓迎してくれました。どちらかといえば、初対面の人と話すのが苦手な私も、歓迎を受けて、すぐに友だちをつくることができました。この旅でことばだけでなく、人間関係の築き方、母語のもつすごさを知り、いろいろの意味でたくましさをも身につけることができました。（2000年研修旅行）

ホームステイ先で最初に思ったのは、「なんでお母さんが3人もいるの！」実は2人はおばさんで、お母さんは1人。一人っ子政策をとっているので、一人の子を親戚みんながとても大切に育てていて、見ていてとても温かいものを感じました。（第4次日本高校生交流代表団）

僕は中国の人を僕のわからない言語を話す「中国人」という見方しかしていませんでした。しかし、旅を終えて、「自分と同じ一人の人間」として見ることができるようになりました。中国の人たちと1週間一緒にいて「日本人と同じ、心はちゃんと通じあう」と確信しました。（第5次日本高校生交流代表団）

「中国人の若者の70%が日本を嫌っている」という統計があることを聞きました。でもそんな統計をとっても何もいいことはないと思いました。好きとか嫌いとかは、一人の人間としてつきあって初めて生まれてくる感情だからです。今回の中国訪問で、私たちは日本人、中国人なんて関係なく、本当に素晴らしい時間を共有できました。（第4次日本高校生交流代表団）

## 7 高校の中国語教育に関する情報の提供

中国語教育に取り組んでいる日本の高校のほとんどは、中国語の担当教師が1人しかいません。近くに中国語を開設している高校はなく、教師は孤立した状況で日々の授業に臨んでいました。こうした状況を打開するためにも、高校の中国語教育に関連する情報を提供することは、TJFに求められた重要な役割の一つでした。

この情報提供の手段として、1999年4月に、情報誌『小溪』を創刊しました。誌面が一つの流れをつくりだす、高校の中国語教育を支えている教師一人ひとりがつくる流れが集まって大きな河となる、そんな願いを名称に込めました。

創刊当初は4ページで、全国各地にいる中国語教師たちが、どのようなきっかけで中国語と出会い、どんな思いで中国語教育に携わっているのか、どんな工夫をして中国語を教えているのか、中国語教育の実態や研修に関する情報を掲載していました。

創刊5年を経た2004年4月からは、授業に役立つ素材の提供を目的に、「中国語で語る私たちの生活」「授業の工夫」「中国の中高校生」の三つのコーナーを中心に8ページの誌面構成にしました。「中国語で語る私たちの生活」では、テーマに沿って、生徒が自分について語れるようにする授業のヒントを提供しています。「授業の工夫」では、生徒が楽しく、効率よく中国語が学習できるよう、教師が日々の授業で試みている工夫やアイデアを紹介しています。また、「中国の中高校生」では、「であいフォトエッセイカフェ」（50ページ参照）に中国の高校生が寄せた自己紹介を中国語で掲載しています。

2002年12月には、「小溪」ウェブサイトを開設しました。開設以来、情報誌『小溪』のバックナンバーをPDF版で掲載するとともに、3人の高校生の生活を写真と文章で紹介する「中国高校生写真館」、2回の調査報告書のほか、中国語教育に関する出版物、中国語教育取り組み校リストなど、高校の中国語教育に関連する情報を掲載しています。また、トップページでは、高校の中国語教育に関する研修やセミナーなどの情報を随時提供しています。



<http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/>

## IV. 国内の高校の韓国朝鮮語教育関連事業

# 学校教育に 根づかせる ために

**国**際文化フォーラム（以下、TJF）は、第1部で述べたとおり、1993年度から国内の「アジア言語」教育を促進する事業に取り組むことにしました。「アジア言語」のなかでも、インドネシア語、韓国朝鮮語、タイ語、中国語について日本国内での普及状況を調査し、その結果、まず1994年度から中国語教育、1997年度から韓国朝鮮語教育を促進する事業に取り組みました。この頃から、中国語と韓国朝鮮語をあわせてとらえる概念を模索していました。

高校の中国語・韓国朝鮮語教育の実態を把握するために1997年度から1998年度にかけて実施した調査を通じて、両言語をあわせてとらえる用語として「隣国のことば」を使うようになりました。日本において中国語が「アジア言語」のなかで歴史的にも文化的にも圧倒的に大きな地位を占めていることは否定できません。多くの場合、言語の社会的地位はそれを公用語とする国家の政治・経済的な力の強弱を反映しているからです。そうした従来の言語観を排して、言語本位の考え方を前面に押し出すべく、「隣国のことば」という概念を打ち出し、中国語と韓国朝鮮語を等距離から見る姿勢を鮮明にしたいと考えたのです。

## 学習者の増加と教師をめぐる問題

韓国朝鮮語は、外国語科目の一つとして、1970年代の初めに西日本地域の高校に導入され、1980年代後半からは全国的に広がるようになりました。特に、1990年代に入ると、韓国朝鮮語教育を実施する高校の増加率は大きくなりました。1995年には、英語以外の外国語では、中国語、フランス語に次いで多いドイツ語に並び、1997年にはドイツ語教育の実施校数よりも多くなりました。さらに、2003年にフランス語に迫ると、2005年にはフランス語も抜き、中国語に次ぐ位置を占めるようになりました（第1部26ページ参照）。

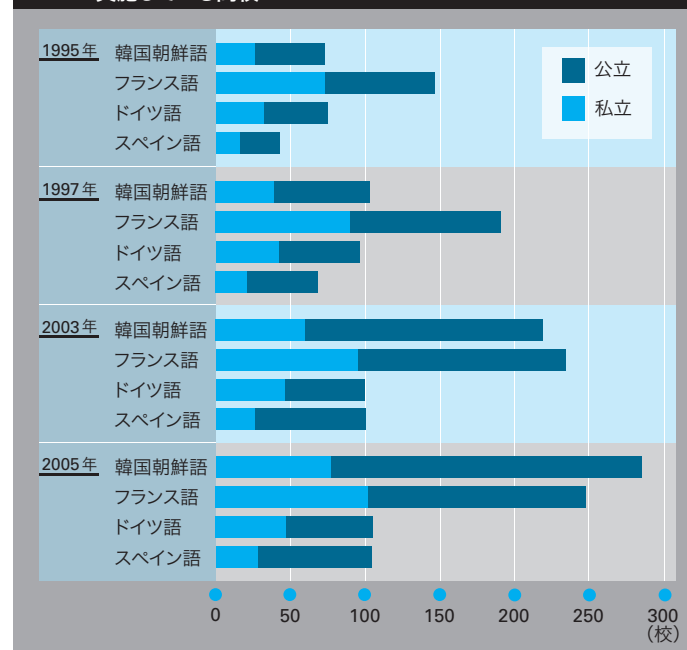
2005年現在、韓国朝鮮語教育を実施している高校は286

校、全高校の5.3%にあたります。しかし、実施校の多くが選択制のため、履修者は8,891人、全高校生のわずか0.25%です。フランス語の履修者数、9,427人にもおよびません。また、フランス語教育やドイツ語教育に比べて、韓国朝鮮語教育を実施している高校は私立校よりも公立校の実施率が高いのも、注目されることです。

いずれにせよ高校生全体からみれば、どの言語の学習者も少数ですが、ごく一部の関心をもつ人だけが韓国朝鮮語を学んでいた状況は過去のものになりました。若者たちの間で韓国朝鮮語やその文化に対する関心が高まり、学習者の増加が見られる一方、教師の絶対数の不足、教材の不備、教師のおかれている不安定な地位などの問題が明らかになりました。

これらの要因の一つとして、高校の教育課程のなかに韓国朝鮮語を含む英語以外の外国語が制度として位置づけられていないことが挙げられます。大学と違って高校には第一、第二

グラフ■韓国朝鮮語・フランス語・ドイツ語・スペイン語教育を実施している高校



資料：文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況」（調査は隔年で実施。韓国朝鮮語と他の言語教育の実施校数の順位に変化が見られる年のみデータを掲載した）



外国語という区別がなく、英語以外は「その他の外国語」として一括りにされ、外国語教育自体がきわめて不安定な状態におかれたままなのです。

### 課題を解決するために

TJFでは、1997年度から1998年度にかけては高校を対象に、2002年度から2004年度にかけては大学等を対象として、韓国朝鮮語教育に関する調査を2回実施しました。これらの調査に共通していた問題意識は、日本の学校教育において韓国朝鮮語は正当に位置づけられておらず、高校のカリキュラムに組み込まれないまま行われている現状を改善すべきだということです。調査で明らかになった課題を解決すべく、さまざまな事業を行ってきました。

TJFにおける韓国朝鮮語教育関連の事業の10年は、三つの時期に区分することができます。第1期（1997—2000年度）は、高校の韓国朝鮮語教育の調査結果をふまえて教師のネットワークを構築しました。調査を通じて、教師研修に対する需要を確認でき、1998年度に初めての「韓国語教師研修会」が実施されました。研修会に参加した34人の高校教師の思いが一丸となり、翌年に高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（以下、JAKEHS）を設立しました。

第2期（2001—2003年度）は、このネットワークを軸に据えながら高校と大学の連携を視野に入れ、大学等の韓国朝鮮語教育調査を実施しました。この調査は、大学等や語学学校の韓国朝鮮語教育を含め、日本の韓国朝鮮語教育全体のなかに高校教育を位置づけるための試みでした。また、大学に協力を要請し、高校教師が韓国朝鮮語の教員免許を取得するための講座を開講する一方、教師研修のあり方を模索しました。

第3期（2004—2006年度）には、教師研修事業を多様化し、JAKEHSの地方活動の活発化を図りました。教師研修の対象が高校だけでなく大学等に広がるなかで、いくつか課題も見えてきました。最も重要な課題の一つは、韓国朝鮮語の教師のための研修を制度として組み込むことです。それを実現するためには、他の外国語の科目や他教科との関係を含め、韓国朝鮮語を高校教育のなかにきちんと位置づけることが求められています。



## 1997 >> 2006

### 高校韓国朝鮮語教育関連事業の動き

- 1997年6月 高校の韓国朝鮮語教育の調査（中国語と合同）を開始（1998年12月まで）
- 1998年6月 調査の中間報告書を発行
- 1998年8月 第1回高等学校韓国語教師研修会を後援（東京）（2000年度まで毎年度開催。1999年度から共催）
- 1999年6月 『日本の高等学校における韓国朝鮮語教育』（1997年度の調査報告書）を発行
- 1999年8月 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(JAKEHS)の設立に協力
- 2001年7・8月 天理大学と神田外語大学の韓国朝鮮語教員免許取得講座（第1期）の開設に協力（2003年度まで開講）
- 2001年11月 第1回JAKEHS全国交流会に助成・後援（大阪）（以後、名称を「全国研修会」と改め、鹿児島、松本、鳥取、対馬、横浜、広島で順次開催）
- 2001年12月 第1回「韓国語を学んで韓国に行こう」の実施に協力（2003年度まで毎年度実施）
- 2002年8月 第1回高等学校韓国語教師研修会の開催に協力（ソウル）（2005年度まで毎年度開催。2004年度から共催）
- 2002年12月 フォーラム2002を開催（2004年度を除き毎年度開催）
- 2003年1月 大学等における韓国朝鮮語教育調査を開始（2004年12月まで）
- 2003年3月 第1回「話してみよう韓国語」コンテストの開催に協力（東京、大阪）（以後毎年度開催、2005年度から青森、鹿児島、鳥取でも開催）
- 2003年6月 調査の中間報告を発表
- 2003年12月 「隣語」ウェブサイトを開設
- 2004年1月 第1回高等学校韓国語教育セミナーを後援（鳥取）（以後、対馬、横浜、広島で順次開催）
- 2004年2月 『高校生のための韓国朝鮮語Ⅰ 好きやねんハングル』の出版に協力
- 2004年8月 第1回大学等韓国語教師研修会を開催（京都）（2006年度まで毎年度開催）
- 2004年8月 第1回韓国語教師研修会を開催（東京）（2006年度まで毎年度開催）
- 2005年5月 『日本の学校における韓国朝鮮語教育』（2002—2004年度の調査報告書）を発行
- 2006年1月 「高等学校の中国語と韓国朝鮮語の学習のめやす」作成プロジェクトを開始（2006年度まで）
- 2006年7・8月 天理大学と神田外語大学の韓国朝鮮語教員免許取得講座（第2期）の開設に協力
- 2007年3月 『高校生のための韓国朝鮮語Ⅱ 好きやねんハングル（試行版）』の編集に助成
- 2007年3月 『高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす（試行版）』を発行

# 1 高校・大学等における 韓国朝鮮語教育の調査の実施

1997年度から1998年度にかけて、高校を対象に韓国朝鮮語と中国語の授業に関する調査を行いました。韓国朝鮮語または中国語の授業を実施していると思われる高校375校を対象に、アンケート調査に加え電話での取材を行いました。1997年度当時に実施が確認された高校だけでなく、1996年度以前に実施していた高校、1998年度以降に実施を予定している高校も調査対象に含めました。担当教師の異動やカリキュラムの改訂によってやむなく講座を中断している高校は条件が整えば講座を再開する可能性があり、そういう高校を含めたほうが実態をきちんと把握できると考えたからです。

この調査から、韓国朝鮮語の教師は孤立していて情報交換が行われていないこと、教師研修の機会がないこと、高校生向けの韓国朝鮮語の教科書や教材が不足していることなど、いろいろな課題が浮かび上がってきました。

この調査を出発点として、高校の韓国朝鮮語の教師を対象とする研修会が、駐日韓国文化院の支援を得て初めて開催され、研修会を通じて教師のネットワークも形成されました。以後、このネットワークを軸としてさまざまな事業を実施しました(114ページ参照)。

## 調査対象を大学等に広げた意味

2002年度から2004年度にかけて、4年制大学、短期大学、高等専門学校、外国の大学が日本に設立した学校等を対象に韓国朝鮮語教育に関する調査を実施しました。高等教育は本来TJFの事業対象に含まれませんが、高校とあわせて大学等も調査することによって、高校の韓国朝鮮語教育を日本の学校教育全体のなかに位置づけようとしたのです。また、後述する教員免許取得プロジェクトなどを通じて、高校と大学の関係者がそれぞれの状況しか見ていないことがわかってきたことから、調査を行うことで双方の状況を知ってもらいたいと考えました。中国語と違って社会的な認知度が低く、教師の層も薄いため、高校教育だけを対象としては事業を展開することに限界があったことも調査を実施した背景にありました。

大学を対象とする全国的な韓国朝鮮語教育の調査は予想以上に大きな波紋を起しました。日本の学校教育における韓国朝鮮語教育の歴史的な推移と現状を客観的にとらえられるようになったことで、多くの大学関係者が大学と高校の韓国朝鮮語教育を見直すようになったことから、高校と大学が連携しようとする動きが加速され、京都と東京の高大連携の研修(120ページ参照)につながりました。

調査を通じて明白になったことの一つは、大学では歴史的に外国語に第一外国語、第二外国語という位置づけがあるのに対して、高校では第一と第二の区別すら行われていないという基本的な位置づけの違いがあるということです。調査によって、このことが、多くの関係者に共通の認識になりました。

また、大学等における外国語講座の開設率と履修率を見ることによって、高校だけを対象にした調査からは見えてこなかった中国語教育と韓国朝鮮語教育の違いが明らかになりました。高校では、英語以外の外国語のなかで、韓国朝鮮語は中国語に次ぐ地位を占めていますが、4年制大学において、中国語は英語、フランス語、ドイツ語と並んで8割前後の大学で開設しているのに対し、韓国朝鮮語は5割に届か届かないかでないことが判明したのです。

## 2回の調査から見えてきたこと

韓国朝鮮語学習への需要が高まっているにもかかわらず、高校と大学等で十分対応できる体制が整っていないということが、2回の調査を通じてわかりました。なかでも、教師の数は十分でなく、身分も不安定なことが浮かび上がりました。

高校、大学等ともに、韓国朝鮮語教育に携わる教師の立場を見ると、常勤の場合は韓国朝鮮語以外の教科の専任が韓国朝鮮語を教えている場合が多いこと、また非常勤も多いことが明らかになりました。さらに、韓国人、在日コリアン、日本人など、言語・文化の背景も異なり、多様であることがわかりました。さらに、韓国朝鮮語の教授法を系統的に学んだ教師も多くはありませんでした。

二つの調査結果は、『日本の高等学校における韓国朝鮮語教育：中国語教育との比較で見る』(1999年6月)と『日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題』(2005年5月)にまとめると同時に、2003年12月に開設した「隣語」ウェブサイトにも掲載しています。



[http://www.tjf.or.jp/korean/index\\_j.htm](http://www.tjf.or.jp/korean/index_j.htm)



これら2回の調査報告は、TJFの韓国朝鮮語教育事業の骨格となり、ネットワーク組織の形成や教材作成、高大連携にもとづく教師研修などのプログラム開発につながっていきました。調査事業によって把握した現状を分析し、整理した課題を解決するためにさまざまなプログラムを開発していったのです。調査の最終報告では、調査結果だけでなく、調査の中間報告にもとづいて実施した事業もあわせて報告しました。こうした手法が韓国朝鮮語教育事業の特徴でもあります。

## 2 教師ネットワークの結成と活動に協力



第1回高等学校韓国語教師研修会に集まった教師たち [1998]

1998年7月初め、第1回調査の中間報告書を読んで関心を抱いた当時の駐日韓国文化院の文化官から、日本の韓国朝鮮語教師を対象とする研修事業と一緒に運営したいという提案がありました。それを受けてTJFは、調査で確認していた高校教育の現状をふまえ、高校教師を対象とする研修会の開催を提案しました。開催が決定すると、TJFは全国の高校に呼びかけ、短期間の募集にもかかわらず34人の教師を集めることができました。

そして、1998年8月、全国の韓国朝鮮語教師を対象に「第1回高等学校韓国語教師研修会」が駐日韓国文化院の主催により開催されました(資料223ページ参照)。

研修会の参加者は、大学の教授による講義を受講するとともに、自分たちの授業の実践報告や各校独自の取り組みについて情報交換を行い、直面している課題について討論しました。韓国朝鮮語教育に携わる者が共通にもっている隣国のことばに対する思いと、学校制度のなかにおける自分たちの地位の低さに対する反発があったため、研修会での教師の連帯感は想像をはるかに超えるものがありました。1998年当時、韓国朝鮮語教育を実施している高校は150校近くありましたが、韓国朝鮮語の教師が一堂に会する機会はそれまでありませんでした。孤軍奮闘していた教師たちは、短期とはいえ研修の機会を得て、多くの仲間に出会い情報交換ができたことで大いに勇気づけられたのです。

同研修会に参加した教師の熱い思いを、TJFの韓国朝鮮語教育事業としてプログラム化していくことが、その後のTJFの韓国朝鮮語教育事業の原点となりました。

### 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワークの発足

第1回研修会の最終日に、その後の研修会の方向性をさぐるために高校教師5人からなる世話人会が発足しました。この世話人会が中核となって、韓国朝鮮語教師のネットワークの結成に向け活動が始まりました。研修会終了後、世話人とTJFが連日行ったファックスのやり取りなどを通じて、翌年、2回めの研修会開催の1ヵ月前に、名称や会則を含むネットワー

### 第1回研修会に参加した教師の声

現在は、教科書を何にするかで悩んだり、個人的にそれぞれ工夫しながら教えていると思います。文科省検定の教科書ができるまでに時間がかかるので、韓国語能力試験などを基準にしながら、教師たちで統一教科書をつくってはどうか。

(私立高校非常勤講師)

全国で多くの学校が韓国語を実施していると知り、勇気づけられました。将来的には組織づくりが必要ですが、ここ数年は情報交換を続けることが大事だと思います。センター試験\*、私大への働きかけが必要です。教師も生徒も熱が入り、挑戦する生徒も出てくると思うので、入試との結びつきは重要だと考えます。

(公立高校教諭)

今回は集まるだけでも意義がありました。ややもすれば孤立し、ひとりで授業をしている私たちが、たくさんの仲間に出ただけでも勇気が出ました。将来何かをアピールするには、個人の意見よりも組織としてのほうが力があると思います。

また、生徒や周囲が関心をもつような、日々の授業のあり方が大事だと思います。毎年同じ教材を使っていますが、中身の質的な向上を考える時期にきていると感じます。量的質的な拡大を考え

るために、よりどころとなるような集まり、センター試験や韓国政府へのアピール、授業実践例の交換を吸収できるような基盤がぜひ必要です。

(公立高校教諭)

どのように授業を進めているかの話もあり、初めての研修会で勉強になりました。今年から常勤講師になり、どのように授業を展開したらよいかひとりで悩んでいたのがよかったです。韓国語とその文化を勉強していかなければならないという気持ちを新たにしました。来年以降、教師研修の場として教師が専門的に勉強する機会となるような研修内容を組んでほしいと思います。

(公立高校常勤講師)

一個人として、岩手で何ができるかを考えました。例えば文化祭でビビムパを出すことで、来訪者に学校でハングルをやっていることを知ってもらうことができます。中学生、高校生だけでなく小学生にも、関心をそそる話をしたいです。国語の教科書に韓国の民話が載っていますが、堅苦しいことばで伝えるのではなく、小学生や中学生に韓国について知ってもらうきっかけをつくるようなことをしていきたいです。

(公立高校非常勤講師)

\*第1回高等学校韓国語教師研修会を開催した当時、韓国朝鮮語はセンター入試の外国語科目に入っていなかったが、2002年1月に「韓国語」という名称で導入された。ちなみに、中国語は1997年1月から外国語科目に加わっている。

クの骨格をつくることができました。

1999年8月、駐日韓国文化院とTJFの共催で前年と同じく東京で開催した「第2回高等学校韓国語教師研修会」には、高校教師と大学の関係者60人が参加しました。研修日程が終わったあと、第1回研修会で選ばれた世話人がネットワーク組織の結成を提案しました。東日本、西日本、南日本の3地域に分かれて行われた分科会では、現状や課題について情報を交換し、ネットワーク結成の意思を確認するとともに、その後の活動内容についても議論しました。こうして第2回の研修会の最終日に、高まる一体感のなかで高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（以下、JAKEHS）が発足しました。

### TJFがめざすもの

1999年度から2004年度まで、TJFの韓国朝鮮語教育事業とJAKEHSの事業は一体となって運営されたといっても過言ではありません。TJFがJAKEHSの立ち上げ準備を進めると並行して、TJFの韓国朝鮮語教育事業の目標や取り組むべき課題が、JAKEHSの中核メンバーとの間で共有されるようになりました。JAKEHSの会則に定められた目的は、韓国朝鮮語教育を高校で拡充するとともに、学校教育のなかにきちんと位置づけ、さらには日本社会における韓国朝鮮語教育の意味を再考することであり、これはTJFがめざす方向でもありました。

こうして韓国朝鮮語教育関連事業の目標をJAKEHSと共有しながら、TJFは具体的に取り組むべき課題としておおむね次の3項目を設定し、1999年度以降の事業を運営しました。

第一は、調査と継続的な情報収集で把握した高校と大学等の韓国朝鮮語教育の現状に関する情報を公開し、それを関係者間で共有すること。第二は、高校の韓国朝鮮語教育の現状を改善するために、教師研修の実施、学習のめやすづくり、教科書づくりなど、韓国朝鮮語教育現場が抱えている課題を解決するためのプロジェクトを推進すること。そして第三は、JAKEHSのもとに、高校をはじめとする日本の韓国朝鮮語教育を支えている人びとのネットワークを構築して、連帯を強め、さらにその連帯感を維持し発展させることでした。

### JAKEHSの活動を後押ししたTJF

TJFは、JAKEHSにさまざまな事業の企画を提案し、日韓の関連団体などに働きかけて、運営に必要な資金を調達しま

した。事業の実施を通じて、JAKEHSの基盤を固めることができると考えたからです。2004年度までは、JAKEHSの事務局をTJFが担っていましたが、2005年度から、JAKEHSが独自のウェブサイトを持ち、事務局の運営をJAKEHSのウェブサイト上で行うようになりました。

JAKEHSは日本国内を三つの地域ブロック（東・西・南）に分け、ブロックごとに独自のプロジェクトを進めてきました。関西地方を中心とする西ブロックは1999年度から高校生向けの教科書づくりに、関東地方を中心とする東ブロックは2000年度から語彙集づくりに取り組んできました。いずれも第1回の調査で明らかになった高校の韓国朝鮮語教育の課題を教師自ら解決するために取り組んだプロジェクトでした。

### 初めての高校生向けの教科書づくり

1999年10月、JAKEHS西ブロックは「学習のめやす」作成プロジェクトに着手しました。高校の韓国朝鮮語の授業の実態に即した2単位分（1年間で50時間、4単位の学校は半年分の授業）の到達目標を約1年半かけて検討しました。語彙と文法項目の到達目標を「学習のめやす（案）」としてまとめ、2000年の「第3回高等学校韓国語教師研修会」で発表した後、それらをどのように教えるかを検討したうえで、高校生向けの教科書づくりに取りかかりました。2002年4月に、試用版を完成させた後、約1年にわたって授業で試用版を使った教師の意見を参考にして改訂し、2004年2月に日本で初めての高校生向けの韓国朝鮮語教科書『高校生のための韓国朝鮮語Ⅰ 好きやねんハングル』（白帝社）を出版しました。次いで、2005年4月から『高校生のための韓国朝鮮語Ⅱ 好きやねんハングル』の編集作業を始め、2007年3月末に試行版を発行しました。TJFはこれらの教科書の制作・出版に協力・助成を行いました。

### 高校生向けの交流語彙集づくり

JAKEHS東ブロックでは、高校生が交流の場で授業中に習った韓国朝鮮語が使えるようにすることを目標に、2000年8月に、まず『わー！ 通じた！ ハングマル！ 高校生のための交流語彙集500』を制作し、次いで2001年3月に、その改訂版として『高校生のための交流語彙集（試験本）』を制作しました。





さらに、2003年2月に「高校生のための韓国語でひとこと会話手帳」の作成を検討したのがきっかけとなり、韓国朝鮮語を学んでいない日本の高校生でも会話を楽しめる冊子の制作に取り組みました。そして、2005年1月に『ハングル@ホームステイ』（白帝社）を出版しました。TJFはこれを1,200部購入し、韓国朝鮮語を導入している高校と韓国への修学旅行を実施している高校などに寄贈しました。

### 地方に広がった高校教師の連帯

「第1回高等学校韓国語教師研修会」から始まった高校教師の連帯の広がり、大きく二つの時期に分けることができます。第1期は1998年度から2003年度までで、全国的な集まりを重視しました。第2期の2004年度以降は、地方自治体や教育委員会と連携しながら研修会の地方化を推進しました。これらの研修会には、毎回50人前後の参加者がありました。また、大阪、鹿児島、神奈川、鳥取、兵庫、長野などの府

## 韓国朝鮮語教育に携わる教師の声



公立高校のなかでは、最も古くから朝鮮語を必修として取り入れてきた湊川高校で長年教壇に立ってきました。生徒たちには、朝鮮のことばを学ぶと同時に、そのことばが抱えもつ朝鮮の文化を正しく知ってもらい、21世紀に向けて隣国のよきパートナーとして共存していける担い手になってもらうことが、朝鮮語授業の大切な目的であると考えています。生徒が卒業して実社会に出て「朝鮮」と出会う場面があったとき、朝鮮に対して何の偏見もわだかまりもなく、素直に接していけるようになっていたとき、私の朝鮮語授業は本当に成立したといえるだろうと思っています。（パン・ジョンウン／兵庫県立湊川高校教諭、当時）



私は地理の授業を担当していますが、日頃人なつこく明るい生徒が、授業で韓国・朝鮮に話題がおよんだ際に、猛烈に反発したり、無関心だったりすることが気がかかっていました。考えた末、ことばに触れることがひょっとして彼らを変えるきっかけになるのではと思いました。ことばの学習は本来外国語教育の分野ですが、言うまでもなくことばはその国の文化そのものであり、地理における文化学習の一環と位置づけることも可能です。日本語との共通点も多い韓国朝鮮語を学ぶということは新鮮な発見であり、発見の喜びは相手への尊敬につながる可能性をもっていると考えたのです。ことばに触れることは、身体の内、心のなかからその国・民族を認識しようとするようになるのではないかと、そしてそれは俯瞰的作業である地理教育を温もりによって補強することになるのではないかと考えています。

（山下誠／神奈川県立岸根高校教諭、当時）

県において、高校教師を中核として、大学教師や市民講座の講師もJAKEHSの会員になるなど、JAKEHSを中核として韓国朝鮮語教師の組織化が進みました。

韓国朝鮮語の教員免許取得のための大学講座、ソウル、京都、東京などで開催された教師研修、学習者向けプログラムなどさまざまな事業を可能にしたのは、韓国朝鮮語教育の関係者の全国的な連帯であり、それぞれの地方における関係者の連携でした。その中核にはJAKEHSを支える高校教師の連帯があり、TJFはその活動を応援してきました。

## 3 韓国朝鮮語の教員免許取得講座の開講に協力

韓国朝鮮語の教員免許取得プロジェクトの企画と運営は、TJFの韓国朝鮮語教育事業のなかで最も重要な事業の一つでした。このプロジェクトは高校の教育制度の根幹に関わる教員免許の取得に関するものであり、大学と高校の連携を推進したものであったからです。

このプロジェクトを始めるきっかけとなったのは、2000年2月に熊本で開かれたJAKEHS南ブロックの定例会でした。定例会が終わりに近づいたとき、ある在日コリアンの教師が「韓国朝鮮語の教員免許を取得する方法はないだろうか」と問いかけました。この教師を含め、多くが韓国朝鮮語の教員免許をもたずに教えているというのが当時の状況でした。

### 教員免許取得プロジェクトの発足

2000年3月初め、韓国朝鮮語の教員免許を取得するための講座の開設をめざすプロジェクトを発足させ、2年後の実現をめざして動き出したものの、開講の見通しはまったくありませんでした。暗中模索のなか、臨時免許状で韓国朝鮮語を教えてきた講師や、社会科や国語の教員免許で韓国朝鮮語を教えている教師などが各地の教育委員会に足を運び、免許を取得する方法を探りました。教育職員免許法と同施行規則などの法令や、各自治体の教育委員会の教員免許に関する規則と首っ引きの日々が続きました。



第3回高等学校韓国語教師研修会。研修会に続いて、韓国朝鮮語と中国語の教員免許取得に関するプロジェクトの会合が同じ会場内でもたれた [2000]

こうして集めた情報をもとに方策を練るための会議を開く準備をしていた頃、天理大学関係者との出会いがありました。これが、韓国朝鮮語の教員免許取得講座の実現に向けた大きな第一歩となりました。わずか数ヵ月前にプロジェクトを発足させたときには誰も予想しなかった急展開でした。大学が実施する韓国朝鮮語教師の再研修という制度を利用するというアイデアを得たのです。同年9月、JAKEHSとともに講座開講の要望書を天理大学に、翌月には同じ趣旨の要望書を神田外語大学に提出しました。

教員免許取得講座の開講に向けた動きは中国語教育の関係者にも伝わり、中国語教師の教員免許取得講座の開講に向けて、神田外語大学と大阪外国語大学に対して働きかけを行いました（95ページ参照）。

#### 教員免許取得のための大学講座（第1期）が開講

2001年4月に、同年夏から天理大学で朝鮮語科教員免許取得講座が、神田外語大学で韓国語特別講座が開設されることが正式に決まりました。国語、社会などの高校の教員免許をもつ教師は、天理大学では2年、神田外語大学では3年におよぶ夏期集中講座の受講で、韓国朝鮮語教員免許の取得に必要な単位を履修することができることになりました。両大学関係者の終始変わらぬ協力の賜物でした。

二つの大学の講座をあわせて第1期に60人が受講し、うち35人が高校の韓国朝鮮語の教員免許を取得しました。夏の暑い時期に朝から夕刻まで、ほとんど休む間もない集中講義方式でした。多くの参加者にとって、2年ないし3年にわたって毎年夏休みに2、3週間の時間をつくることは大変なことであり、費用負担も小さくありませんでした。受講者のなかには、教員の基礎免許をもっていないために、受講しても韓国朝鮮語の教員免許を取得できない人もいましたが、それでも教授法を学び直したいという教師が少なくなかったのです。

この教員免許取得講座（2001—2003年度）が終了した後も、多くの高校教師が韓国朝鮮語教員免許の取得を希望したことから、2006年の夏から天理大学と神田外語大学において第2期の講座が開講されることになりました。TJFは、一定の受講者数を確保するためJAKEHSのウェブサイトなどを通じて広報を行い、募集活動に協力するとともに両大学との連絡と調整にあたりました。

#### 大学講座から大学等の調査へ

第1期の教員免許取得講座に関わるなかで、TJFは高校と大学等の韓国朝鮮語教育について再調査を行うことの必要性を痛感しました。高校の韓国朝鮮語教師たちは高校の状況しからず、大学の関係者は大学のことしか見ていないように思われたからです。高校と大学等の韓国朝鮮語教育の関係者に、客観的な資料を通じて双方の状況を知ってもらうためにはアンケート調査を実施する必要があると考えました。

当時、高校の韓国朝鮮語教育に関する資料は公表されていましたが、大学等の資料はほとんど公開されていませんでした。高校教師の側からすれば、まだ脆弱な高校の韓国朝鮮語教育のために大学関係者の協力を得たい。一方で韓国朝鮮語の教職課程をもつ大学は韓国朝鮮語の教職課程履修者の教育実習先を確保するとともに、入学者を増やすために高校との関係を強めたいと考えていました。

このような相互的な関係は一部にできていましたが、両者の関係をより確実なものにするためにも、高校だけでなく日本の学校全体における韓国朝鮮語教育の現状を調査する必要があると考えました。教員免許取得プロジェクトと後述するソウル研修の実施を通じて、2003年1月、大学等の韓国朝鮮語教育に関する調査に取り組むことになったのです（110ページ参照）。

## 4 韓国と日本における教師研修の共催

2002年8月、ソウル大学言語教育院で日本の高校の韓国朝鮮語教師を対象とする教師研修会が開催されました（資料225ページ参照）。この研修は韓国国際交流財団とJAKEHSの共同事業として実施され、TJFは事務局として事業を円滑に進めるための支援を行い、2004年度からは共催機関となりました。

ソウル研修と呼ばれるこの研修に、高校教師とともに韓国朝鮮語の外国語指導助手（以下、ALT）が参加したことは特筆すべきことでした。というのも、ALTは韓国朝鮮語教育について専門的な訓練を受けずにJETプログラム（日本政府が実施する外国青年招聘プログラム）で日本に派遣され、指導され



る機会もないまま日本の高校で韓国朝鮮語の授業を任されていることが少なくないからです。2002年度に鹿児島で開催されたJAKEHS全国研修会にTJFがALT5人を招聘し、関係者がALTの状況をつぶさに知ることがきっかけとなり、2003年度と2005年度のソウル研修にALTが参加することになったのです。

このソウル研修と前述した教員免許取得のための大学講座を通じて、日本の大学関係者も韓国の韓国朝鮮語教育関係者も、日本の高校の韓国朝鮮語教育に対する理解が不十分であることが明らかになりました。

教員免許取得のための大学講座やソウル研修、そして高校と大学等の調査事業を通じて二つの問題点が見えてきました。一つは、高校教師の多くが非常勤で、大学や語学学校の教師を兼任していること。もう一つは、高校の韓国朝鮮語教育を発展させるためには、大学等も含めて学校教育のなかに高校の韓国朝鮮語教育を位置づける必要があり、大学と高校の連携を進める必要があるということでした。それは、TJFの韓国朝鮮語教育事業をより広い視野のもとでとらえ直すことを求めるものでした。

### 国内における高大連携にもとづく研修

高校と大学の連携を視野に入れて、両者が運営に関わる韓国朝鮮語教師研修プログラムを企画し、韓国の関連機関や団体に支援の可能性を打診しました。韓国国際交流財団と駐日韓国文化院から支援を得られることになり、2004年8月に高校と大学等の教師を対象とする研修を京都と東京の2ヵ所で、実施しました（資料231、232ページ参照）。カリキュラムの作成など、韓国人を含む日本の大学教育関係者が主体的に関わった日本で初めての韓国朝鮮語の教師研修でした。

京都と東京で開催された研修には高校や大学等の教師だけでなく、一般の語学学校の講師も対象とし、2006年度までに延べ288人が参加しました。

### 研修プログラムの課題

研修の受講者の多様化が進むにつれて、京都、東京の各研修会の研修生のうち高校教師が占める割合は年々低下し、高校教師を対象としたソウル研修でも、その現象が同様に見られるようになりました。最終回の2005年度のソウル研修は、

高校教師の占める割合は約4割、ALTを含めてやっと6割程度というものでした。京都と東京の研修会では、当初から一般の語学学校や大学の教師も対象としたため、高校教師の割合が低くなることは予想していたものの、2006年度の研修会ではその割合の低下は著しく、京都は2割、東京は1割にも達しませんでした。

TJFが韓国朝鮮語教育の事業を高校教育に限定していることの意味を問い直す必要を感じると同時に、他教科と異なり、韓国朝鮮語の教師のための研修が制度化されていない状況で教師研修を推進する困難さを思い知らされました。一方で、TJFの韓国朝鮮語教育事業が大学等や一般の語学学校の関係者から注目されるようになったことも事実でした。

また、これらの研修がきっかけとなり、2007年4月に『韓国語教育論講座』（全4巻、くろしお出版）が出版されることになったことは大きな成果でした。日本と韓国ほかの韓国朝鮮語教育や言語研究の関係者だけでなく、韓国・朝鮮文学や歴史の研究者を含む約70人の執筆陣による本書は、戦後の韓国朝鮮語教育界において画期的なものです。TJFの調査にもとづく高校と大学等の韓国朝鮮語教育の主要データが第1巻に掲載され、JAKEHSに参加している高校教師の報告も第4巻に含まれています。

このように、2005年度から2006年度にかけてTJFの韓国朝鮮語教育事業は韓国朝鮮語教育関係者の間で広く認知されるようになり、高校と大学等の韓国朝鮮語教育に関する情報センターの機能を果たすまでになりました。

## 5 学習者向けの事業の実施

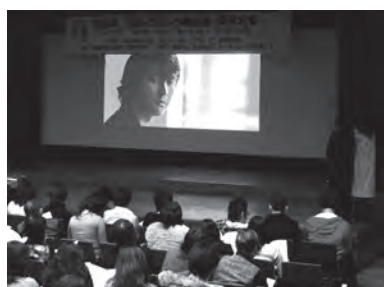
高校に韓国朝鮮語教育が広く導入されるには、教師研修や教材開発のほかに、学習者向けのプログラムを開発することも重要です。TJFは、駐日韓国文化院や韓国国際教育振興院（教育人的資源部の傘下にある公的機関）などが主催する事業に協力するかたちで、韓国朝鮮語を学ぶ高校生を対象とする事業を推進してきました。



大学、高校、語学学校等の教師が70人近く参加した京都研修【2006】



「話してみよう韓国語」では、参加者も聴衆も楽しめるコンテストをめざした



映像部門では、参加者の熱演が見られた

### 「話してみよう韓国語」コンテスト

TJFは、韓国朝鮮語の学習者のなかで最も学習人口が多い初級学習者を対象とするコンテストの開催を提案すると同時に、東京と大阪で同時期に開催することを駐日韓国文化院と大阪韓国文化院（当時関西韓国文化弘報院）に要請し、2003年3月に第1回「話してみよう韓国語」が東京と大阪で開催されました。

従来のスピーチコンテストのように学習成果を競いあうものではなく、本選である第2次選考会に出場するまでの学習過程を互いに披露しながら参加者にも聴衆にも楽しんでもらうことをめざしています。高校や大学、市民講座の講師などが企画段階から参加しました。

スキット部門（指定された台本の一つを選択、暗記して発表）、映像部門（韓国映画の一場面を見ながら参加者が創作したセリフを入れて発表）、Kポップ部門（高校生によく知られたKポップの歌詞を暗記、メロディをつけないで発表）の3部門を設け、高校生や大学生が参加しやすいようにしました。あえて高校生を部を設けたことも、このコンテストの特徴の一つでした。開催にあたって、募集段階からJAKEHSも深く関与しました。

また、2005年度からは、鳥取、青森、鹿児島各県でも開催されるなど広がりを見せるとともに、地域ごとに特色あるコンテストを運営してきました。TJFはすべての大会に対し、高校生を中心に副賞を提供しています。

### 「韓国語を学んで韓国に行こう」プログラム

韓国国際教育振興院とJAKEHSの共同事業として、2001年度から2003年度まで、韓国朝鮮語を学ぶ高校生と教師を対象に、高校生の語学研修プログラム「韓国語を学んで韓国に行こう」が実施されました。2001年度にはJAKEHS東ブロックと南ブロックの教師と高校生28人、2002年度には関西地方を中心に、関東、中国、九州地方から30人、2003年度には九州、関西、関東甲信越から32人が参加しました。

TJFはこのプログラムの参加者募集と韓国側機関との連絡、調整にあたりとともに、社会科や国語などの高校教師と一緒に、高校生が関心をもつ場面で韓国朝鮮語を使えるような企画を立てました。少人数のグループに分かれてソウル市内の公共交通機関を利用し、買い物をしたり、レストランで食事をし

たり、ホームステイをしたりするなど、高校生が楽しみながら韓国朝鮮語を使える内容にしました。

残念ながら、このプログラムは3年で中止となりました。継続して支援する機関・団体を見つけることができなかったことが中止の最大の要因です。また、韓国側の機関が相互交流プログラムを求めたにもかかわらず、ホームステイを含めて韓国の高校生を受け入れる学校や団体が日本側に少なかったことも挙げられます。2005年に再び韓国国際教育振興院の主催で、北海道と青森県、福島県の高校生を対象とした交流プログラムに協力しましたが、継続することはできませんでした。

## 6 隣国のことを考えるフォーラムの共催

近年、韓国朝鮮語の学習者が増え、日韓間の文化交流も以前に比べると活発になってきたにもかかわらず、さまざまな交流に携わる人びとと情報を共有する機会は多くありませんでした。韓国朝鮮語教育の現状や日韓間の文化交流について情報を共有するとともに、課題をさぐるために、2002年度から駐日韓国文化院と共催で「フォーラム」を開催しました。2002年度は「日本における韓国語教育の現在」、2003年度は「日韓の教育・草の根交流プログラムの現在」、2005年度は「なぜ韓国語を学ぶ若者がふえているのか」というテーマで意見交換を行いました。このフォーラムでは、韓国朝鮮語教育や文化交流の関係者だけでなく、それらに関心をもつ一般の人からも意見を発信してもらう形式をとりました。

2002年度から2005年度までのフォーラムでは、高校をはじめとして日本における韓国朝鮮語教育について、より広く一般の人びとの理解を得ることをめざしました。しかし、それは容易なことではありませんでした。より多くの人に関心をもってもらうためにはどうしたらいいのだろうか、そういったことを考えていたときに始まったのが、「中国語と韓国朝鮮語の学習のめやす」作成プロジェクトでした（第3部155ページ参照）。このプロジェクトでは、高校と大学の韓国朝鮮語と中国語の教育関係者が、二つの言語を学ぶ意義を考え、議論を交わしました。これが



語学研修プログラムに参加した高校生が思い出を綴ったアルバム



きっかけとなり、日中韓の観点から、韓国朝鮮語教育および中国語教育とその周辺の問題を討議するための場の一つとしてフォーラムを開催することにしました。韓国朝鮮語教育と中国語教育をあわせて取り上げることで、より多くの人に関心をもってもらうことができると考えたのです。

### 日中韓の合同フォーラム

2006年度には、駐日中国大使館教育処が主催者に加わり、初めて日中韓の合同でフォーラム「私たちはなぜ韓国語・中国語を学ぶのか」を開催しました。韓国朝鮮語や中国語を学ぶ高校生と大学生9人をパネリストに迎え、英語中心の外国語教育を受けてきた彼らに、韓国朝鮮語や中国語をなぜ履修し、それをどのようにとらえているかを語ってもらいました。二つのことばの教育を進めるにあたっては、学習者の視点に立って考えることも重要だと考えたからです。討論をしながら、2人の高校生が授業を受けている教室の風景や、教師や保護者の意見などもビデオで紹介し、フロア参加者とともに外国語を学ぶ意味を考えました。

韓国朝鮮語教育への関心を喚起することを目的として始めたフォーラムですが、同じく隣国のことばである中国語も含めたことは、意義深い試みでした。

彼らが中国語や韓国朝鮮語を学んだきっかけは、「韓国語を学んで韓国の同世代と話がしたいと思った」「中国の風景の壮さや中国語の音の美しさにひかれた」など、さまざまでしたが、二つのことばの学習を通じて、ことばと文化と一緒に学ぶ楽しさを感じ、日本語や日本文化について再認識することができるという点では同じ意見をもっていました。

### 他機関との連携

1997年度から、韓国の政府機関や団体から多大な財政的な支援を得ました。TJFが1997年以降実施したり、関わったりしてきた韓国朝鮮語教育の関連プログラムの多くは、駐日韓国大使館教育官室、駐日韓国文化院、韓国教育財団、韓国国際教育振興院、韓国国際交流財団など韓国側の資金によって支えられました。

また、(社)東京倶楽部から、1999年度と2002、2003年度の3回にわたり助成を受け、高等学校韓国語教師研修会や高校と大学等の韓国朝鮮語教育調査を実施することができました。



中国語と韓国朝鮮語を学ぶ高校生と大学生が、ことばと文化を学ぶ楽しさを語った [2006]

### 韓国朝鮮語の学習者の声

ハングルを学んだことで、以前よりもアジアや日本に目を向けるようになりました。それまではアメリカや西欧にばかり関心がありましたが、身近なアジアについてももっと知りたい、知らなければと感じるようになると同時に、自分の国日本について韓国などと比較して考えるようになりました。(1996)

韓国語を勉強しているときとその直後は、プラスになったとはあまり思えませんでした。でも、高校卒業後、韓国人の友人に出会い、高校時代に韓国語を勉強していたことで、彼らを身近な存在に感じ、違和感なく受け入れられたとき、勉強しておいてよかったと思いました。(1996)

韓国語を勉強し、韓国の高校生と交流したことで、韓国に対して興味と関心をもつようになりました。同世代の人びとと交流したことで、「韓国」という国に対して漠然と抱いていたイメージにとらわれなくなり、等身大の人びとを感じられるようになりました。ことばの学習だけでなく、韓国と日本の関係や歴史問題についても考えるようになり、次第に「知りたい」と思うようになりました。学ぶことに楽しみを感じました。韓国の人びとに今でも反日感情があることに対して、以前は諦めのような念をもっていました。韓国語を学んでからは、それを変えていきたいという意欲が出て、積極的に考えられるようになりました。(1999)

まったくわからなかった言語なのに、勉強していくうちに日本語と同じように「親しみ」がもてて、「韓国」という国に対しても親しみがもてるようになりました。他国のことを理解するには、その国の言語を勉強するのが一番いい方法だと思いました。(2001)

本当に近い国なのに、知らないことがあまりにもたくさんありました。在日コリアンの話も初めて聞いて、すごく大切なことを知りました。日本語と似ているようで、ちょっと親近感もちました。韓国のことをもっと知って、お互いの国も仲良くなれたらいいと思いました。(2001)

『ハングルの授業はいつもちょっぴりドキドキ——長野県松本蟻ヶ崎高校で韓国語を学んだ生徒たち——』(西澤俊幸著)より抜粋。著者は、長野県塩尻志学館高校教諭。( )内の数字は生徒が授業を選択した年度を示す。同報告書は、2005年度読売教育賞(外国語教育の部)を受賞した。

# 日本紹介の写真から 人と人をつなぐ写真へ

1990年代、海外の初等中等教育における日本語学習者が増加すると並行して、日本のアニメや音楽などのポップカルチャーが海外で注目されるようになりました。しかし、小中高校生が関心をもつ日本の同世代の姿が紹介されることは多くありませんでした。

国際文化フォーラム（以下、TJF）では、1992年前後に海外の日本語教育関連事業の対象を小中高校生に絞り込むとともに、日本語教育における文化理解に焦点をあてるようになりました。それを受けて1993年度に英文機関誌を創刊し、海外の小中高校の日本語教師向けに日本人の生活を中心とする情報を発信するようになりました。特に小中高校生の生活文化を伝えることに力を注ぎ、1995年度に小学校3年生の生活を紹介した写真教材「けんたろうくんの一日」を制作し、海外の教師から大きな反響を得ました。

視覚にうったえ、強い印象を与える写真は、文字では十分に伝えられない内容や情報を伝えることができる媒体です。見る人は一枚の写真からさまざまな情報を受け取り、見えない事象を想像したり、見た人同士が意見を交わしたりすることができるため、海外の日本語学習者にとって格好の文化理解、日本理解の教材となります。そして何よりも写真には、同世代の素顔を伝えることができるという大きな魅力があります。

こうしたことから、高校生の姿を高校生自身に写してもらえば、ありのままの姿を海外の同世代に紹介できると考え、財団設立10周年記念事業として1997年度に「高校生の日常生活写真コンテスト」（以後改称を重ね、最終的に2003年度に「高校生のフォトメッセージコンテスト」に改称）を開始しました。

## 国際理解教育の原点

コンテストを実施するうちに、応募作品をつくる過程で、撮影者が被写体である主人公を深く観察し、心を通わせながら2人の関係を深めたり、自らを振り返ったりするなど、当初は期待していなかった効果が見られるようになりました。このよ

うな自己の確立、自己表現、他者理解という過程こそ、国際理解の原点であるところから、コンテストのもつ国際理解教育としての意味を改めて考えるようになりました。

2006年度に10回をもって終了しましたが、高校生が作品づくりの過程で多くのことを学ぶことのできたこのコンテストは、当初の期待を超える広がりをもつことができました。

## 1997 >> 2006

### 高校生のフォトメッセージコンテスト関連事業の動き

- 1997年6月 第1回日本の高校生の日常生活写真コンテストを開催（1998年3月まで。2006年度まで毎年度開催）
- 1998年11月 第1回コンテスト写真集『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are』を発行（2007年度まで毎年度発行。第5回写真集まではおもな読者対象を海外の日本語学習者とし、読みがなや英訳をつけた）
- 1998年11月 「高校生のフォトメッセージコンテスト」ウェブサイトを開設し、入賞作品を掲載
- 2001年5月 英国の日本文化紹介行事「Japan 2001」において、入賞作品を展示する写真展を開催（2002年3月まで）。以降、英国の中高校や図書館など、延べ75カ所で展示
- 2002年11月 コンテストの作品づくりのワークショップを実施（2006年度まで延べ16カ所で実施）
- 2003年1月 ウェブサイトをリニューアルし、作品づくりのヒントや応募の仕方などを掲載
- 2003年7月 第6回コンテスト写真集『The Way We Are 2002 伝えたい私たちの素顔』を発行。雑誌スタイルにデザインを一新
- 2004年7月 「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」ウェブサイト（英語版）を開設（入賞作品を英語や日本語の音声などで紹介）
- 2006年3月 「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」ウェブサイト閲覧者が作品に対するコメントを書き込める機能を付加



# 1 高校生のフォトメッセージコンテストの開催

一人の高校生を主人公にした5枚の写真と文章で主人公の生き方や暮らし、人となり表現するとともに、主人公の生き方や暮らしに触れて、気がついたこと、感じたこと、考えたことなどを書いてもらうことを趣旨とする「高校生のフォトメッセージコンテスト」を1997年度から2006年度まで開催しました。このコンテストには毎回、日本全国から等身大の高校生の姿が寄せられ、第10回までに寄せられた作品は、合計2,648点（写真1万3,240枚）、撮影者または主人公としてこのコンテストに参加した高校生は延べ5,296人に上りました。

## 5枚の組写真とメッセージの意義

このコンテストは、写真の技術や芸術性の優劣を問うものではなく、5枚の組写真とメッセージを通じて、主人公がいかに生き生きと表現されているかを問うものでした。5枚の組写真としたのは、一人の高校生の姿をいろいろな角度から見てもらいたいということ、さまざまな姿を海外の中高校生に紹介したいという考えがあったからです。

当初は、海外に紹介したいという目的から、メッセージにも海外への発信を求めました。海外へのメッセージであることを強調したため、「○○さんの笑顔を見てください」「個性的な日

年度	名称	テーマ	応募作品数
1997	日本の高校生の日常生活写真コンテスト	日本の高校生の日常生活	222
1998	高校生の生活写真コンテスト	自分（友だち）らしさ いま夢中になっていること 家族と過ごす時間 私にとって特別な日 私がからすまち	165
1999	高校生の生活フォトメッセージコンテスト	日本の高校生の日常生活	277
2000	高校生の生活フォトメッセージコンテスト	友だちの素顔	317
2001	高校生の生活フォトメッセージコンテスト	友だちの素顔	497
2002	高校生の生活フォトメッセージコンテスト	私だから撮れる 友だちの素顔	318
2003	高校生のフォトメッセージコンテスト	気になるアイツ	186
2004	高校生のフォトメッセージコンテスト	[特定のテーマを設けなかった]	214
2005	高校生のフォトメッセージコンテスト	みつめよう 伝えよう わたしたちの日常（暮らし）を	286
2006	高校生のフォトメッセージコンテスト	みつめよう 伝えよう わたしたちの日常（暮らし）を	166

本の高校生がいることを知ってもらいたい」といったような内容のものが多く見られました。一方で、作品をつくる過程で高校生が多くのことを学んでいることがうかがえるメッセージも少なくなかったことから、メッセージは写真を補完するものではなく、メッセージそのものが魅力をもったものであることを認識するようになりました。

第3回からはコンテストの名称にメッセージという語を含めると同時に、一人でも多くの高校生に内面まで掘り下げたメッセージを書いてもらうために、文字数も400字程度に設定しました。さらに、審査対象とはしませんでした。被写体である主人公にも、400字程度のメッセージを自由に書いてもらうことにしました。当初、撮影者のことばだけでは、主人公がどんな人物なのかよくわからなかったため、主人公にもメッセージを書いてもらいました。このことによって、主人公の人物像をより把握できるようになっただけでなく、撮影者と主人公がお互いのメッセージを読みあうことで、それまで気づかなかった相手の内面を知ることができ、両者の関係を一層深めるという効果をもたらしました。

この頃から、海外の同世代に向けたメッセージだけでなく、作品づくりを通じて感じたことや考えたこと、気づいたことなどもあわせて書いてもらうようにしました。また、メッセージの内容をより深めるため、「日本の高校生の日常生活」というテーマを見直しました。日本とか海外とか区別せずに、まずは主人公を知らない人に紹介してほしいと考え、第4回から第6回までは「友だちの素顔」というテーマで作品を募集しました。これによって、日本あるいは海外という枠にとらわれることなく、主人公を理解し関係を深めていく様子が伝わってくる作品が増えました。半面、撮影者と主人公だけの関係に埋没しがちな作品も多くありました。

第7回以降は、より広い視点に立った作品を応募してもらおうと、「気になるアイツ」「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常を」というテーマに改めました。応募作品のなかには、社会的なつながりのなかで主人公や自分自身をとらえているものもありましたが、数は多くありませんでした。家庭や学校以外で他者と関わる場が少ない現代の日本の高校生がおかれた状況を考えると、一人の高校生の姿を通じて社会的な視点を表現するのは難しかったのではないかと思います。



作品募集の広報として制作された、各回のコンテストのチラシ



第1次審査では全作品を並べ、上位数十作品に絞った



上位作品のメッセージを読み返し、写真とメッセージを総合的に評価しながら、入賞作品を決めていった



熱い議論を交わしながら最終審査が行われた

高校生を対象とする写真のコンテストでは、組写真を課題としたものはほとんどなく、さらにメッセージまで書かせることは異例のことで、高校生にとってはかなりの負担のようでした。応募作品数が伸び悩んだとき、課題のハードルを低くすることも方策としてはありましたが、主人公を理解し紹介してもらうコンテストの趣旨から、課題を変えることはできませんでした。5枚の組写真にすることが、主人公をいろいろな角度から見ることにつながり、メッセージを書くことが、主人公をより深く知ることにつながると確信していたからです。

### 審査の過程

写真とメッセージをあわせて審査対象としたことから、審査員は写真の専門家だけでなく、国際理解教育の専門家、作家、高校生や高校教師を対象とする雑誌の編集者、日本と海外の子どもや若者の相互理解を進める事業に携わる外国人など幅広い分野の方々に依頼しました（資料234ページ参照）。

審査は終日かけて行われ、第1次審査で上位数十作品に絞られ、第2次審査を経て、最終審査で入賞作品が決定されました。写真とメッセージすべてに目を通してもらうために、審査会の1週間前までに全作品のコピーを審査員に送付したうえで、審査会当日も上位作品のメッセージを改めて読む時間を設けました。しかし、写真とメッセージの両方を評価の対象にするということは、想像以上に難しいことでした。人を惹きつけ強い印象を与える写真でもメッセージがとても浅薄なものがある一方で、メッセージでは主人公を多面的にとらえているのに写真では一面しか表現していないものもあり、それらをどのように評価したらよいか、審査員の間でたびたび白熱した議論が交わされました。

### コンテストの広がり

当初は高校の写真部員による応募が大半でしたが、第3回頃から、コンテストに教育的な意義を見だし、日本語、韓国朝鮮語、英会話、国際理解、総合、美術、国語表現など、さまざまな教科の授業で、コンテストの作品制作に取り組む教師が増え、授業で実際に作品づくりを行ったり、写真集を見て感想をまとめたりする試みが見られるようになりました。こうした事情を勘案して、授業でのコンテスト作品制作を奨励するために、個人賞のほかには学校賞を設け、さらに学校賞対象校

のうち、特に優れた作品を継続して応募した学校に学校賞特別賞を贈ることにしました（資料236ページ参照）。

2003年度から高校でも総合的な学習の時間が導入されたことに伴い、その枠内で行われる国際理解の分野の授業でコンテストに取り組む可能性が高まったことから、コンテスト参加の経験のある写真部顧問と国際理解担当の教師に集まってもらい、国際理解を促進する側面をもつコンテストの趣旨を理解してもらいました。また、国際理解教育や写真部に関わる教師の研修や会合の場も借りて、積極的に広報活動を行いました。一方で、高校生が個人でも気軽にコンテストに参加できるよう、2002年度にウェブサイトを一刷新して、作品づくりのヒントや作品がどのように役立てられているかなどの情報を提供するようにしました。

## コンテストに参加した教師の声



生徒には、主人公を追いかけて、新しい面を発見したり深く掘り下げたりしてほしい。生徒は作品を見せて「主人公はこんな表情をよくする」と言いますが、主人公を知らない人にはそんなことはわかりません。それをどうやってわかってもらうのか、考えつけてほしいのです。

（花畑雅之／大阪市立工芸高校教諭）



生徒たちは一見仲よく見えますが、実はしっかりと友だちとつながっていないのではないかと、思うことがあります。このコンテストでは、一人の主人公で5枚組の作品をつくります。ある特定の人を追いかけていくことで、しっかりと相手と向きあってほしいと思います。撮ったけれど作品にまで仕上げられない生徒もいますが、例年、写真部員全員に課題として取り組ませています。

（田村繁美／広島県立庄原格致高校教諭）



このコンテストでは、撮影者が主人公を追って作品を制作しますが、その過程で見えてくるのは自分自身の姿です。私の担当する日本語のクラスでは、他者と関わりながら自分自身への理解を深める練習として、コンテストに取り組んでいます。

（原和久／大阪インターナショナルスクール教諭）



定時制高校には、不登校を経験した生徒や、家庭事情が複雑な生徒が多くなります。自分の居場所を失い自信をなくしている生徒に、写真を通じてあるがままの自分を認め、自己回復してほしいというのが私の取り組みです。入賞は確実に生徒に自信を与えます。自分を否定されてきた生徒には至上の喜びです。自信は生徒自身の自己実現へとつながる可能性を秘めています。写真は生徒に大きな力を授けてくれるのです。

（野村訓／大阪府立大手前高校定時制課程教諭、当時）





千里学園・大阪インターナショナルスクールで  
開催したワークショップ [2002]

こういった試みが功を奏し、全体の応募作品数も増え、ウェブサイトで情報を得て一人で作品づくりに取り組む高校生も現れるとともに、コンテストに参加する学校も増えました。しかし、授業で取り組んだ作品には、課題をこなしただけのものや、通り一遍の似たようなメッセージも多く見受けられました。また、授業で取り組む教師からは、写真の知識がなく指導が難しいという声も聞かれるようになりました。そこで実施したのが、高校に出向いて行う生徒向けのワークショップです。写真部の顧問やコンテストの入賞者で高校卒業後写真を専門に学んでいる学生を講師として派遣し、どういった視点で写真を撮るの

か、写真がどのような力をもっているのかなどについて話をしてもらったりするなど、高校生たちの作品づくりが充実したものになるようにしました。ワークショップに参加した高校生からは、「多くの写真を見せてもらい、写真の表現の可能性を実感した」「自分の写真に対してコメントしてもらい、自信や刺激になった」などの感想が寄せられ、実際にワークショップに参加した生徒の作品が入賞するようになりました。

また、コンテストの意義を早くから認め、毎年入賞者を輩出していた高校の写真部顧問が、コンテストに寄せられた多くの作品を通じて写真がもつ力について著作・編集した刊行物が岩波ジュニア新書から出版されました。

これらの活動は、コンテストの趣旨に賛同した教師との協力から生まれました。

## メッセージに込めた高校生の思い

この撮影は僕にいろんなことを教えてくれた。それは歩み寄ること。撮影を始めたばかりのとき、あまりよい写真が撮れなかったのは、歩み寄りが足りなかったからじゃないかと思う。カメラへの歩み寄り、佐藤さん（主人公）への歩み寄り、自分への歩み寄り。それがどんなに重要かわかった気がする。  
(撮影者：北澤潤 / 2005年応募作品より)



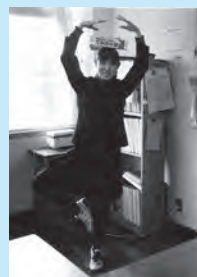
ふだん、夢について話すことはほとんどない。みんな、夢を持っているのだろう。けれども、まずは大学なのだ。夢というのは、入った大学によって決まってしまうのだから……。そんな雰囲気があるような気がする。

そんななか、夢について水野君がはっきりと教えてくれたとき、僕は驚いた。そして、彼はその夢の実現のために、しっかりと計画を立てていた。こいつは絶対、夢を実現する。僕はそう思った。まだ夢を決めきれず、大学に頼ろうとしている僕と比べれば、彼のほうが断然かっこいい。そんな彼を、僕は少し尊敬しているし、応援もしている。  
(撮影者：植田展大 / 2003年応募作品より)



私は自分があまり好きじゃない。自分にはよいところがまったくない。そう思う。自分のダメなところしか見えない。

そうやって落ち込んでいるときに、祐衣がこのコンテストの話に私にしてくれた。そして、私をモデルとしてコンテストに応募したいと言ってくれた。すごくうれしかった。「貴子のいいところをいっぱい出せるように頑張るからね!」。そう言われたときは、本当にうれしかった。私にもよいところがあるんだと思い、自分に自信がもてた。だから、祐衣にはすごく感謝している。祐衣、ありがとう。これからはずっと友だちでいようね。  
(主人公：松井貴子 / 2003年応募作品より) 写真：加藤祐衣



## 自他理解の手段としての作品づくり

「主人公のことを知らない人に伝えるためには、どんな姿を表現したらいいのだろう。ひとりでいるときは何をしているのだろう。家やアルバイト先ではどうだろう。将来のことはどう考えているのだろう」

5枚の写真を撮りメッセージを書くために、撮影者はそんな問いかけをしながら、主人公をより深く理解しようと、時には何ヶ月もかけて数百枚もの写真を撮り、共同で作品をつくり上げる過程で、主人公の素晴らしさを再確認したり、新しい一面を発見したりしていました。撮影者にとって、主人公の姿を深く見つめることが、自分自身について振り返りきっかけとなることも多く、周りの人びととの関係や社会との関わりについてまで考える高校生もいました。主人公の高校生も「私なんかが主人公でいいの?」と戸惑いながらも、自分に興味をもって写真を撮ってくれる撮影者の姿勢やできあがった作品から、自分を受け入れてくれる人間の存在に気づいたようでした。

写真で表現したものを誰かに受けとめてもらい、共感してもらったり感想を聞いたりすることも、撮影者にとって大きな喜びとなったようでした。さらに、コンテストで入賞したことが大きな自信につながった高校生も少なくありません。

## 作品は世界の高校生のもとへ

コンテストに寄せられた作品は、入賞作品を中心に毎年写真集『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』(138ページ参照)



<http://www.tjf.or.jp/thewayweare/index.html>



英国版フォトメッセージコンテストのチラシ

にまとめて、参加者や国内の高校関係者、海外で日本語教育を行っている中高校などに寄贈しました。

2004年度に、「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」ウェブサイト（英語版）を開設し、コンテストの入選作品から厳選した作品を掲載しました。以後、毎年作品を追加しています。写真の説明文とメッセージは英訳するとともに、やさしい日本語をつけたり、わかりにくいことばや事柄には解説を加えたり、また撮影者の肉声が聴けるようにしたりしています。

作品の写真の一部は「TJF Photo Data Bank」（61ページ参照）にも収めて、海外の小中高校の日本語教師や社会科教師が、日本の生活文化について紹介したり、教材として使用したりできるように無償で公開しています。海外の日本語の教科書にもコンテストの写真が掲載されるなど活用されています。

2001年5月から2002年3月にかけて、英国で大規模な日本文化紹介行事「Japan 2001」が開催され、ポピュラー音楽からアニメまで現代の日本人の日常生活に密着した文化が幅広く紹介されました。この「Japan 2001」の公式教育プログラムの一環として、当時のJapan Festival Education Trust（日本理解促進を支援する英国の公益法人。以下、JFET）は、英国の若者の姿を写真と文章で紹介する英国版のフォトメッセージコンテストを実施するとともに、TJFのフォトメッセージコンテ

### 想像力を刺激する写真



教科書に掲載されている日本の都市の風景や近代的な交通網、モダンな家に住む家族の写真ですと、生徒から強い共感を得たり、生徒の想像力を刺激したりすることはなかなかできません。そうしたことから、このコンテストの作品を見たときには、これだと思いました。狭い教育的観点から撮られたのではなく、若者のさまざまな関心を反映しており、そのうえ、一人の主人公を5枚の写真で表現しているため、個性のある実在の人物が写し出されていました。他の教材には見られない生命力や鋭さが、この写真にはありました。

（ハイディ・ポッター／英国JFET事務局長、当時）

ストの作品を展示する写真展をロンドンのヘンドンスクールを皮切りに英国各地で開催しました。延べ75カ所を巡回したこの写真展を鑑賞した人は10万人以上に上り、「着物や寺院の写真にはない、新しい日本の姿が見られた」「日本の若者との共通性に気づいた」といった感想が寄せられました。

### 双方向の交流をめざして

コンテストの作品を見た海外の高校生から感想が寄せられたり、海外の高校生の制作した作品が届いたりするたびに、TJFではそうした反響をコンテストの写真集に掲載して日本の高校生に紹介してきましたが、それをさらに進めて、日本と海外の高校生の対話と交流を双方向で実現することができないかと模索するようになりました。

2005年度、前述の「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」ウェブサイトに、ユーザーが作品の感想などを書き込めるスペースを設けました。

また、第3回から第7回までの最優秀賞受賞者に海外短期研修プログラムへの参加を副賞として授賞してきましたが、第8回の入賞者には、社団法人日本中国友好協会が実施し、TJFが協力している交流プログラム「日本高校生交流代表団」（103ページ参照）の一員として中国を訪問してもらいました。上海の甘泉外国語中学で日本語を学んでいる高校生の姿や、人びとの



英国各地、延べ75カ所を巡回した写真展には、10万人以上が訪れた

### 初めて見た日本の高校生の素顔

学校で写真展を見て、日本の生徒たちの多様な個性がとても印象的でした。たくさんのことばよりも、一枚の写真のほうが多くを語るというのは本当だと思います。

（英国／高校生）

写真集を通じて、私は日本の高校生を初めて知ることができました。いつか機会があったら自分の目で日本の姿を見たいと思っています。そして日本語に近づけば近づくほど、日本に行きたくくなります。緑いっぱいの自然風景、独特な風習などいろいろなところが私を惹きつけます。それが、日本を知ろうと一生懸命に日本語を勉強する励みになっています。

（中国／高校生）



日々の暮らしを撮った写真は、第8回コンテストの写真集『The Way We Are 2004 伝えたい私たちの素顔』に掲載しました。これらの作品は、ことばが十分に通じなくとも、写真という手段でことばや文化の違いを乗り越えて、現地の人びとと心を通わせることができるということを如実に語っていました。

### 成果と課題

コンテストで掲げた、海外の中高校生に日本の高校生のありのままの姿を伝えるという大きな目的は達成されたと考えます。作品には、一般論として語られる「日本の高校生像」ではなく、撮影者の視点から見た一人の個性ある高校生の姿が表現されています。その姿は撮影者自身が強く心を感じたものであるため、見る人に共感をもって受け入れられました。

作品を制作する過程で、多くの高校生がさまざまなことを得たことも、当初は予想しなかった成果でした。自己理解、自尊感情、他者への共感、他者との関係の深まり、将来への意欲、社会への関心など、撮影者と主人公の高校生がコンテ

ストに参加したことで多くのことを感じ、学びました。

高校生に新しい自己表現の機会を提供したという点も、このコンテスト独自の成果として挙げることができます。カメラ付き携帯電話やプリクラなどで写真を撮る機会が多い高校生にとって、カメラは身近な存在で気軽な自己表現の手段でもあります。作文や楽器など訓練や才能を必要とする表現手段と比べ、写真は誰でも簡単に撮ることができます。だからこそ、高校生の飾らない普段の姿が応募作品にのびやかに表現されたのです。

その一方で、広報や作品の募集にさまざまな工夫をしたにもかかわらず、応募作品数は一定数以上に増えませんでした。その一因は、求めるものが高すぎたことにあるのではないかと思います。いろいろな写真コンテストに入賞者を多く出している有力な高校写真部でさえも、作品制作にとりかかりながらも応募にたどりつくのは3分の1程度にしかならないと写真部の顧問から聞きました。しかし、このことは、コンテストに関心をもち、作品づくりに挑戦したり、過去の作品に触れたりしている高校生が応募数の何倍もいるということを示唆しています。

また、コンテストとして応募作品に順位をつけ入賞作品を選ぶことも、主催者としては難しさを感じる作業でした。コンテストの成果として高校生が多くのことを学んだことを挙げましたが、その過程そのものには本来優劣はつけられないものだからです。しかし、コンテストという形式で賞が授与されるからこそ、それを目標に高校生が作品制作に励んだのも事実です。コンテスト以外の方法でどのように高校生の意欲を引き出し、事業の成果をあげることが可能なのか、その方策を探ることが課題として残りました。

### コンテストの終了

コンテストの成果と課題を念頭におきながら、人と人がつながるための道具になりうる写真の特性を生かした事業を検討した結果、2007年度に、各地の高校写真部の顧問から協力を得て、写真を通じて世界の高校生の交流を図る特別交流事業「Focus on Japan 2007」を実施することになりました（第3部163ページ参照）。フォトメッセージコンテストは2006年度の第10回をもって終了しましたが、読売新聞社主催「第30回よみうり写真大賞」において、高校生部門として「フォト&エッセーの部」が新設され、同部門がコンテストを継承することになりました。



相田みつを美術館で開催された第9回コンテストの授賞式 [2005]



第10回コンテスト授賞式で、最優秀賞の受賞者が作品について語った [2006]

## 10年間コンテストの審査に関わって



人間は体全体で自分の心を表現しますが、生きる姿は顔に象徴的に表れます。そこには人間のつちかかってきた文化が反映してくるのです。人は生まれたときからそれぞれのドラマを背負って生きています。今、高校生活を送っているそのくらしぶりは、今しか撮れません。大切な自分の写真記録であり、友だちの写真記録、今に生きる日本の高校生の記録です。そんな高校生活の一端を写真にまとめ、仲間に、または海外の同世代の高校生たちに見てもらい、これはお互いを知るため、そして理解するための大切な行為だと考えます。世界の平和は、相手の国の文化を知り、お互いを理解し、認めあうことから始まるのです。それができてこそ、人間の素晴らしさが発揮できるのだと思います。

(田沼武能/写真家)



コンテストに参加した高校生は、撮影者と主人公という立場で向きあうなかで、新たないくつかの認識を得ています。一つは、写真に撮る作業を通じて、改めて、仲間・友人のなかに、今まで気づけなかった新しい発見をするとともに、さらにそれが自分自身の発見、生き方の問い直しにもつながっていったというものです。もう一つは、人と人とのつながりによって自分たちは生きている、その輪を身近なところから世界へと広げていくことが、世界平和のうえで大切であるということへの気づきです。

若者の日常のくらしや生き方には、国を超えて共通する部分が多くあり、こうした同時代の若者としての共通性の理解こそが、国際理解の基本であると確信しています。

(米田伸次/日本国際理解教育学会会長、当時)

TJFはこれを後援し、高校生の姿を写した入賞作品の一部をTJFのウェブサイトや出版物を通じて、引き続き海外の同世代に発信していくことになりました。

## 2 写真集『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』

「高校生のフォトメッセージコンテスト」への応募作品は毎回、最優秀賞をはじめ上位26作品を中心に写真集『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』にまとめました(資料195ページ参照)。

### 高校時代の写真が、今の「土台」になっている



写真通信社のフォトグラファーになってから、毎日さまざまなスポーツの写真を撮っています。この仕事には写真の技術や体力が必要なことはもちろんですが、現場で最も必要なのは、コミュニケーション能力や判断力です。取材相手や他のフォトグラファーとの会話や交渉など、自ら積極的に働きかけて情報を入手し、常に的確な判断を下していくことが求められます。仕事で撮る写真というのは、雑誌やWebに使われる報道用の写真、つまりスポーツをスポーツとして撮った写真です。でも、自分の写真として撮るときは、すべてドキュメンタリーとして人間を撮りたいと考えています。大学時代から今までずっと通っているボクシングジムでは、試合の写真だけでなく、日々の練習や選手のポートレート、そして通常、立入禁止になっている試合前後の控え室の中まで撮影します。試合前の興奮や不安、試合後の歓喜や屈辱、ジムの一員として信頼されていなければ決して撮らせてもらえない場面です。撮影する相手と個人的な関係をつくり、信頼を深めあいながら、人をじっくりと撮る。この撮影ス

タイルの元となっているのは、フォトメッセージコンテストの作品づくりです。

中学から高校にかけて人間嫌いになった時期がありました。でも、単位制・無学年制という特色をもった新宿山吹高校に入学して、「誰がいてもいい」というみんなの存在を受け入れてくれる校風と、さまざまな芸術を志す仲間めぐりあいました。そして、自分は写真に打ち込むようになり、いつの間にか人を撮るのが好きになりました。そんな高校時代の写真が今の自分の土台になっていて、この上に全部積み重なっている気がします。これからも人間のドラマを撮っていきたくです。

(中西祐介/第1回コンテスト最優秀賞受賞者)



©中西祐介

当初は、読者対象を海外で日本語を学ぶ中高校生としていたことから、応募作品のメッセージを平易な文章に書きなおしたうえで、漢字に読みがなをつけ、英訳もあわせて掲載しました。第2回から第5回コンテストの写真集では、写真のスペースを多くとるために、英訳は別刷りにして添付しました。

しかし、高校生が書いた文章の微妙なニュアンスや雰囲気こそ、現代の高校生の姿が表現されていると考え、第6回以降は、写真集の読者対象を国内の高校生とし、撮影者と主人公のメッセージをできるだけ原文のまま掲載することにしました。また、文章を縦組みにし雑誌風のデザインに変えました。海外の日本語学習者への発信は2004年7月に開設した英語版ウェブサイトを活用しています。

第7回コンテスト以降は、上位に入賞した高校生のなかから何人かを選び、作品だけでは伝わってこない姿を取材し紹介する「クローズアップ!」というコーナーを設けました。また、「Our Own Voices」というコーナーでは、友だちのこと、将来のことなどをテーマ別に、上位26作品だけでなく応募作品全体のなかから、写真とメッセージを選んで紹介しました。毎回のコンテストで入賞するのは、応募作品の1割程度にすぎず、入賞を逃した作品にも素晴らしい写真やメッセージが多くありました。また、作品づくりを通じて、撮影者と主人公の間に芽生えた友情や将来に対する決意を、ストレートに綴った文章は人にうたえる力がありました。そういった作品にも光をあてるのが、この写真集の役割でした。高校生が借り物のことばではなく、自分たちの心の底から湧きあがったことばで発信するメッセージは、読者に元気と勇気を与えました。

### 元気をくれる写真集

『The Way We Are』を見ていると、全国の高校生がどんな活躍をしているのかがわかるし、自分もみんなに負けにくい青春しなげやって思えてくる。元気がないときにこの本を見て、みんなの笑顔を励みにがんばるのです。私も友だちの写真を撮りまくりたいです。カメラからのぞいた世界から、新しい自分や新しい友だち、そして、新しい世界を見つけたいです。

(栃木県/高校生)



第6回コンテストの写真集。読み手となる高校生にとって親しみやすいデザインとなるよう意識した



# 情報発信と 交流の場をめざして

**機**関誌『国際文化フォーラム通信』を1987年12月に創刊し、それ以降、年4回情報を発信してきました。国内の外国語教育（英語・中国語・韓国朝鮮語）、日本語教育、国際理解教育、文化交流などに携わる関係者や機関、報道関係者などをおもな読者対象としていますが、一般の希望者にも配付しています。国際文化フォーラム（以下、TJF）の活動を広く知ってもらうとともに、活動の背景にある理念や問題意識を多くの方々と考えていくことを重視してきました。

1993年10月に、英文機関誌として『The Japan Forum Newsletter』を創刊しましたが、読者の8割が日本語教育関係者であることから、よりニーズに即した誌面にするため、2004年6月に休刊し、新たに『Takarabako』を創刊しました。

毎年度発行している『事業報告』では、毎号一つの事業に焦点をあて、事業の経緯や理念、成果、課題などを総括し、特別レポートとしてまとめてきました。また、英語版『TJF Annual Report』も毎年度発行してきました。

## ウェブサイトの役割の変遷

財団設立から10年、海外の教育機関等への図書寄贈や海外での展示事業、国際文化交流の情報誌『ワールドプラザ』の発行など、図書出版関連事業が財団の事業のなかで大きな位置を占めていました。寄贈図書は10年間で、延べ182ヵ国・地域3,157件、冊数にすると8万1,529冊に上りました。しかし、印刷媒体だけでは時代の変化に対応できなくなり、図書出版関連事業に代えて、インターネットを活用した事業に取り組むため、1997年3月にTJF ウェブサイトを開設しました。開設当初は、集積した情報を提供、共有するだけでしたが、その後、インターネットの機能は飛躍的に広がり、インターネットを活用した事業が発展し深まってきました。例えば、日本や中国に関連する写真を公開し提供する「TJF Photo Data Bank」、日本の高校生の素顔を紹介する「The Way We Are」、中高

校生の交流の場として開設した「であいフォトエッセイカフェ」などは、ウェブサイト上のみで展開されている事業です。

## ウェブサイトと出版物の長所を生かして

一方、機関誌や情報誌などの定期刊行物のほかに、写真集や写真教材、調査報告書などの出版物を継続して発行してきました。それらの多くはウェブサイトにも掲載しています。ウェブサイトが多くの人に活用されるようになったものの、印刷物の存在意義はまだ大きく、出版物とウェブサイトの両者の長所を生かしながら、今後も事業を展開したいと考えています。

## 1997 >> 2006 ウェブサイト関連事業の動き

- |       |  |
|-------|--|
| 1997年 | TJF ウェブサイトを開設（3月）<br>「中国高校生写真館」「けんたろうくんの一日」を開設   |
| 1998年 | 「高校生のフォトメッセージコンテスト」「TJFねっと（掲示板）」を開設<br>「日本人の生活文化シリーズ」「文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」を掲載<br>小中高校の日本語教育に関する情報、高校の韓国朝鮮語教育に関する情報、高校の中国語教育に関する情報を掲載 |
| 1999年 | 『国際文化フォーラム通信』をはじめ、出版物のPDFによる配信を開始  |
| 2001年 | 「であい」「TJF Photo Data Bank」（2004年度に「TJF Photo Data Bank 日本編」に改称）を開設   |
| 2002年 | 「ひだまり」「小溪」を開設  |
| 2003年 | 「隣語」「機関誌」を開設   |
| 2004年 | 「Takarabako」「TJF Photo Data Bank 中国編」「であいフォトエッセイカフェ」「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」を開設                   |
| 2005年 | 「日本の小学生生活」を開設  |
| 2006年 | 「Focus on Japan 2007」を開設   |

# 1 機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行



TJFは機関誌として、『国際文化フォーラム通信』（16ページ、年4回、5,000部）を1987年12月に創刊しました。最近の10年は、毎号誌面16ページの約半分を割いて、「外国語教育と文化理解」「教師研修」「教師間のネットワーキング」「近隣の地域の言語学習」「国際理解教育」「教材開発」「写真の教育的効果」「交流」といった、各事業の根底にあるキーワードをテーマに特集を組んできました。そのなかで、TJFの事業に関わった人たちの声、TJFと同じような問題意識をもって活動している他機関の取り組みを紹介することを通じて、TJFの考えを伝えてきました。一方、特集を組むことを通じて、事業を客観的な視点でとらえ直し、他機関の取り組みに触れることにより、視野を広げ、新しい人的ネットワークを構築するなど、TJFが得たものも少なくありません。

特集とは別に、中国語や韓国朝鮮語の教育現場の取り組みやフォトメッセージコンテストに参加した高校生の素顔を紹介したり、小中高校での国際理解のさまざまな授業の実践例を取り上げるなど、事業と関連したテーマをシリーズで掲載してきました。

## TJF内部での制作をめざして

機関誌の制作については、1996年度から、DTPのワークフローを導入し、入稿までの内部工程をデジタル化しました。これにより、制作にかかる時間とコストを大きく削減し、その分、内容面に力を注ぐことができました。

同時に、ウェブサイトによる発信に力を入れ、「機関誌」ウェブサイトでは、機関誌をPDF版で掲載したり、True EBook（ウェブ上で印刷物を閲覧できる電子ブック）で公開したりするなど、さまざまな形態による発信を試みました。

一方で印刷媒体は、アクセスしないと情報を受け取れないウェブと違い、発信したい相手に確実に情報を届けることができ、しかも手元に残しておける点で、その役割は依然として大きく、『国際文化フォーラム通信』が今後もTJFにとって重要な発信の手段であることは間違いありません。



<http://www.tjf.or.jp/newsletter/index.htm>

# 2 ウェブサイトの開設と運営

1997年3月にTJF ウェブサイトを開設して以来、最も力を注いできたのは、外国語教育に必要な写真などの素材や授業案などをデータベース化し、公開することでした。その代表が「TJF Photo Data Bank」(61ページ参照)と「であい」(41ページ参照)です。「TJF Photo Data Bank 日本編」では、「高校生のフォトメッセージコンテスト」に寄せられた写真や「であい」プロジェクトで撮影した写真をはじめ、TJFが収集した写真をテーマ別、キーワード別に整理し、著作権の問題をクリアしたうえで公開しました。その後、中国に関連する写真を整理し、「TJF Photo Data Bank 中国編」として開設しました。また、「であい」においても、膨大な写真や動画、授業案などの情報もデータベース化して公開しました。2002年度以後、事業ごとにウェブサイトを開設し、事業の進行にあわせて迅速な更新やリニューアルを行えるようにしました。

## 交流の場を提供

情報の提供と並行して、ウェブサイトを交流の場として活用することを考え、1998年度に掲示板「TJFねっと」を開設しました。TJFの事業に関係する人、興味をもった人たちとの情報の交換、情報の共有を目的として開設しましたが、不適切な書き込みが多くなり、閉鎖を余儀なくされました。

以後も、ウェブサイト上に交流の場をつくるために模索を重ね、その第一歩として「であいフォトエッセイカフェ」を2004年10月に開設しました。このウェブサイトでは、「であい」を使って日本語を学習している世界の高校生が写真と文章で自己紹介するフォトエッセイと、それを読んだ中高生から寄せられた感想や質問を掲載しています。

ブログやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の登場などで、ネット上でのコミュニケーションは新たな展開が可能になりました。ネット上での多言語による書き込みや表示も可能になり、画像などの扱ひも容易になったことから、セキュリティを重視した新しい交流ウェブサイト「つながる」の開設に着手することを決めました（第3部167ページ参照）。



[2000]



[2002]



[2004]



## TJFのウェブサイトで公開しているコンテンツの紹介



<http://www.tjf.or.jp>

- ……① 「であい：7人の高校生の素顔」
- ……② 「であいフォトエッセイカフェ」
- ……③ 「Focus on Japan 2007」
- ……④ 「The Way We Are」
- ……⑤ 「高校生のフォトメッセージコンテスト」
- ……⑥ 「日本の小学生生活」
- ……⑦ 「TJF Photo Data Bank 日本編」
- ……⑧ 「TJF Photo Data Bank 中国編」
- ……⑨ 「Takarabako」
- ……⑩ 「ひだまり」
- ……⑪ 「小溪」
- ……⑫ 「隣語」
- ……⑬ 「機関誌」

### 日本語・日本に関するもの

#### 日本の小中高高校生について知る

- 小学生の日常生活（家庭・学校）。写真、音声付。[日・英・中] ……⑥
- 高校生7人のプロフィールと日常生活。写真・動画・エッセイ付。[日・英・韓] ……①
- 高校生の素顔と日常生活を紹介する写真とメッセージ（「高校生のフォトメッセージコンテスト」応募作品）。[日] ……⑤
- 中高校生の考え方や生活に関する作文。[日・中] ……⑩
- 小中高高校生の人物紹介。生活や生き方、考え方などを紹介。[英/日・中] ……⑨⑩
- 小中高高校生の生活文化に関する写真。約3,400枚を無償提供（2007年3月現在）。検索可。[日・英・中] ……⑦

#### 日本事情について知る

- 日本の文化・社会・教育関連事項の解説。写真、データ付。[日・英・韓] ……①
- 日本人の日常生活文化や日本の現代社会文化事情の解説。写真、データ付。[英/日・中] ……⑨⑩
- 世界の高校生が撮った日本の地域の人びとのくらしに関する写真と文章（「Focus on Japan 2007」作品）。[日・英・中・韓] ……③
- 日本の小中高高校生の生活文化を中心に、教育、文化、社会、自然などに関する写真。約3,400枚を無償提供（2007年3月現在）。検索可。[日・英・中] ……⑦

#### 日本語の授業のヒントを得る

- 写真教材「であい：7人の高校生の素顔」の全コンテンツ（写真、動画ほか）とそれらを使った授業実践例。検索可。各種資料、データ、語彙リスト付。[日・英・韓] ……①
- 「文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」入賞の授業実践例。[日・英] ……⑨

- 写真教材「日本の小学生生活」を使った授業実践例。[日・英・中] ……⑥
- 中国の中高校向け授業案。[日・中] ……⑩
- 中国の中高校向けの日本語の学び方や教え方。[日] ……⑩

### 中国語・中国に関するもの

#### 中国の小中高高校生について知る

- 高校生3人の日常生活。写真、中国語の音声付。[日・中] ……⑪
- 小中高高校生の日常生活の写真。約2,000枚無償提供（2007年3月現在）。検索可。[日・英・中] ……⑧

#### 中国事情について知る

中国の生活習慣、伝統文化・行事、名所旧跡などに関する写真。約2,000枚を無償提供（2007年3月現在）。検索可。[日・英・中] ……⑧

#### 中国語の授業のヒントを得る

日本の高校生向け中国語の授業実践例。[日] ……⑪

#### 中国語教育について知る

日本の高校中国語教育の実施状況、実施校一覧。学習のめやすなどの情報。[日] ……⑪

### 韓国朝鮮語に関するもの

#### 韓国朝鮮語教育について知る

日本の高校における韓国朝鮮語教育の実施状況、実施校（高校・大学等）一覧。学習のめやすなどの情報。[日・韓] ……⑫

### 交流に関するもの

#### 世界の中高校生が同世代と交流する

- 写真教材「であい：7人の高校生の素顔」の主人公への海外の中高校生の感想、自分についてのフォトエッセイ。フォトエッセイへの感想や意見を4言語で書き込み可。[日・英・中・韓] ……②
- 「高校生のフォトメッセージコンテスト」入賞作品への感想や意見書き込み可。[英] ……④
- 世界の中高校生の交流ウェブサイト（SNS）。プロフィールの閲覧、書き込み、各種テーマごとの意見交換が4言語で可。画像掲載可。[日・英・中・韓] ……「つながー」(2007年11月開設)

### 財団の活動に関するもの（財団概要、事業・出版物一覧ほか）

#### 機関誌を閲覧する

財団機関誌のPDFファイルのダウンロードとバックナンバーの閲覧可。[日] ……⑬

★[ ] 内は、ウェブサイト内の言語（一部の場合も含む）を表す。

第3部

今、そして  
これからの  
展望する





# 学校の内外に、学びと 交流の場をつくるために

**【国】** 国際相互理解と国際文化交流を促進するために、国際文化フォーラム（以下、TJF）は設立以来、さまざまな事業に取り組んできました。第1部で述べたとおり、第1期（1987—1991年度）は、対日理解の促進を事業目標に掲げ、海外における日本語教育を支援し、日本文化を海外へ紹介するとともに、国際文化交流の情報誌『ワールドプラザ』を発行するなど、日本国内の国際文化交流の促進事業に取り組みました。

第2期（1992—1996年度）は、多言語・多文化共生社会の構築をめざし、「ことばと文化」をキーワードに、互いのことばと文化を学ぶことを通じて、国内外の若い世代の相互理解を促進することを事業目標に掲げました。そのために事業対象を初等中等教育に絞るとともに、相互理解を促進するためには互いの言語と文化を学ぶ必要があるという認識から、海外における日本語教育事業に加え、日本国内のアジア言語教育事業に取り組み始めました。海外だけでなく国内の言語教育にも関わるようになったことで、国内外の学校や教師の橋渡しをし、互いの言語や文化を学ぶ学習者をつなぐ事業ができるようになりました。また、第2期は事業を実施するためにさまざまな調査を実施したり、関係機関や関係者とのネットワークを形成したりすることに力を注ぎました。

第3期（1997—2006年度）は、第2期で築いた土台を足場に、言語教育関連事業（海外の日本語教育、国内の中国語教育、韓国朝鮮語教育関連事業）と国際理解教育関連事業を大きな柱に据え、各事業を着実にやりながら発展させてきました。また、インターネットの飛躍的な発展に即して、1996年度にTJFウェブサイトを開設しましたが、ウェブサイトを活用することで事業の幅を広げることができました。こういった、さまざまな事業に取り組む過程で、世界の小中高校生が「ことばと文化」を学ぶとともに交流し、個と個の対話を通じて自他の理解を深め、互いのつながりを実感することができる場を学校の内外につくるという、事業の新しい方向性が見えてきました。

## 事業の再編成

2007年6月に設立20周年を迎えるにあたり、過去20年の事業を振り返り、今後を展望するなかで、2006年度に事業の再編成を行いました。小中高校生の交流関連事業は、これまで言語教育関連事業および国際理解教育関連事業の一部に組み込まれていましたが、今後本格的に取り組むために一つの柱とすることにしました。そして、「国内外の小中高校における外国語教育を促進する事業」と「海外の日本語学習者と日本の同世代をつなぐ交流事業」をTJFの事業の二本柱としました。後者の事業の土台となるのは、小中高校における外国語教育（コミュニケーション能力の育成と資質形成を含む文化理解を目標とする外国語教育）であり、教室の学習と母語話者との対話をつなげることをめざします。互いの言語を教える学校・教師、そして互いの言語を学ぶ小中高校生の橋渡しをするとともに、学校の内外に学びと交流の場をつくっていきたいと考えています。

## 国内外の小中高校における外国語教育を促進する事業

TJFの事業の根幹をなしてきた東アジア、北米、大洋州を中心とする海外各国の小中高校における日本語教育関連事業と、国内の高校を対象とする中国語・韓国朝鮮語教育関連事業は、今後も引き続き展開していきます。具体的には、各言語教育の教育環境を整備し教育の質を高めるために、学習のめやす・教材の開発や教師研修などに取り組めます。また、海外の小中高校の日本語教師、日本国内の高校の中国語教師、韓国朝鮮語教師、小中高校の英語教師、国際理解教育担当の教師とのネットワークをさらに強化していきたいと思えます。これまでのTJFの事業を特徴づけてきた写真関連の事業については、今後も写真を媒体として活用しながらウェブサイトや出版物で、日本の若者の素顔や生活文化、現代日本事情を海外へ発信していきます。

日中韓の相互の関係を再認識し、さらに深めるために、互いの言語を「隣語」（隣人・隣国の言語）として位置づけ、中国語・韓国朝鮮語・日本語教育の連携事業を新たに設けまし

た。2005年度から取り組んでいる「高等学校の中国語と韓国朝鮮語の学習のめやす」作成プロジェクトは、連携事業の出発点となった事業です（155ページ参照）。これは文部科学省の委嘱事業として、日本の学習指導要領にない高等学校の外国語科目としての中国語と韓国朝鮮語に関する具体的な指針を作成する試みです。

海外における日本語教育および国内における中国語・韓国朝鮮語教育関連事業はいずれも、それぞれの言語教育を支えている教師と連携しながら行ってきました。小中高校における外国語教育は、教育制度のなかで実施されるものだけに、国内外を問わず、各国・地域の教育政策や教育制度における外国語教育の位置づけに大きく左右されます。TJFが今後これらの事業をさらに発展させていくためには、各国・地域の教育行政当局や学校との関わりをより深めていくことが必要であり、今後の大きな課題だと考えています。

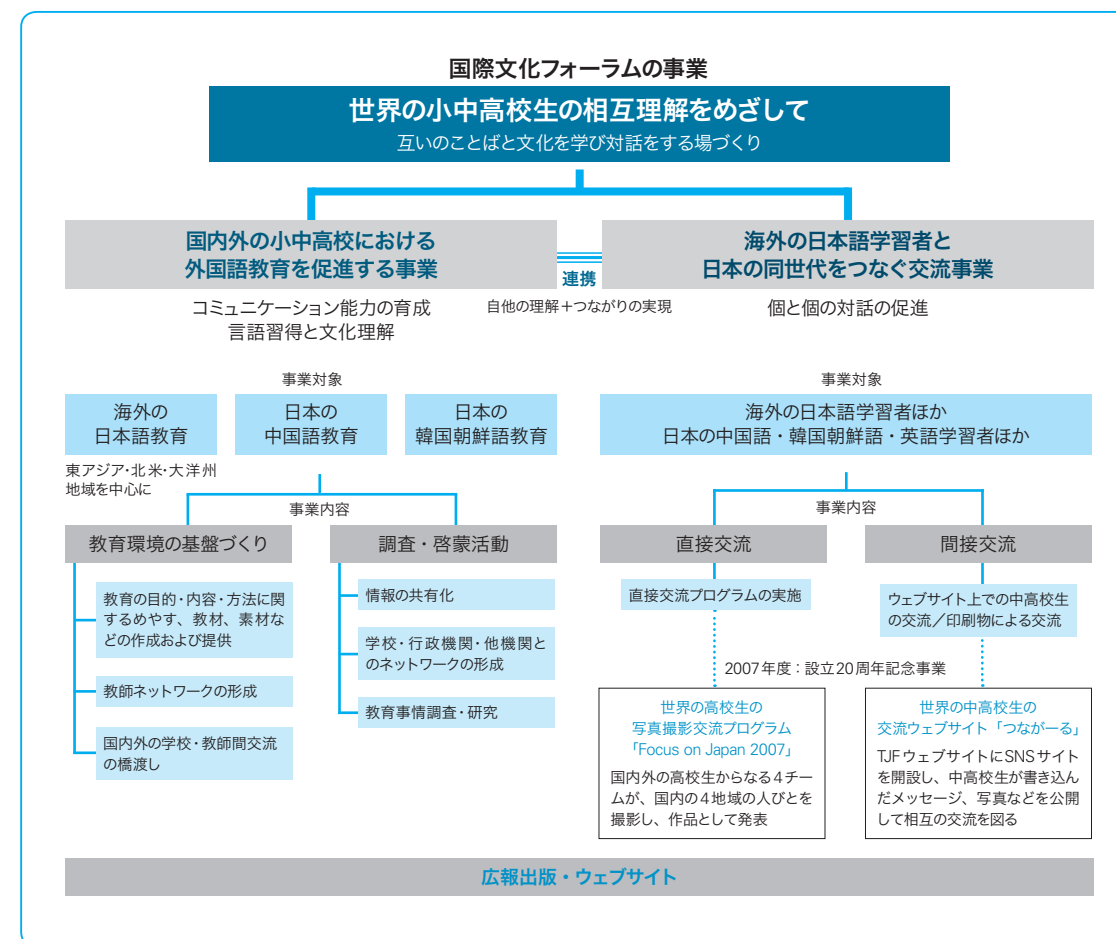
前述の「高等学校の中国語と韓国朝鮮語の学習のめやす」づくりとともに、2005年度より取り組んでいる中国大連市における小中高校の日本語教育支援事業は、課題である教育行政機関との連携事業の可能性を示すものです（152ページ参照）。特に、大連市教育局の教育政策に対する全面的な協力が実を結び、近年衰退していた大連市の小中高校の日本語教育が現在蘇ろうとしています。さらに、教育行政者の招聘だけでなく学校交流などと連携させることで、大連の日本語教育支援事業は大きな成果を上げています。

### 海外の日本語学習者と日本の同世代をつなぐ交流事業

一方で、学校における外国語教育を事業対象とするだけでなく、学校の外にも活動の場を広げ、学習者に直接働きかけるとともに、国内外の学習者間を直接つないでいくことが必要であると考えています。これまでも日米・日中間の学校交流や海外の高校生と日本の高校生の交流（「カフェおきなわ」）、ウェブサイトでの交流（「であいフォトエッセイカフェ」）など、世界の中高校生の交流事業に少しずつ取り組んできましたが、今後は、小中高校生間のウェブサイト上での交流と直接交流を連携させて、より積極的に取り組んでいきたいと考えています。これらの交流事業では、国内外の若い人びとに互いの「ことばと文化」を尊重し、学ぶことによって相互理解を深めてもらいたいというTJFの事業理念を基本におきながら、学習者間の個と

個の対話を促進することをめざします。こうした試みは、国内外の外国語教育や国際理解教育の促進事業を通じて築かれる、小中高校の教師をはじめとする学校関係者などとのネットワークがあって初めて可能となります。そのためにも、関係者の協力を得られるような質の高い事業を進めていかなければならないと考えています。

2006年度から、事業を再編させると同時に、新たな主要事業を三つ始動させました。中国語を学ぶ日本の高校生のための中国短期研修（160ページ参照）と、TJF設立20周年の記念事業として実施する高校生の写真撮影交流プログラム「Focus on Japan 2007」（163ページ参照）、世界の中高校生の交流ウェブサイト「つながる」（167ページ参照）です。いずれも学習者を対象とする事業で、それぞれの言語学習を支援するとともに、互いに相手の言語を学ぶ中高校生同士が出会える場をつくっていく試みです。





# 1 中国大連市の日本語教育支援プロジェクトの実施

初等中等教育における日本語教育が最も盛んな遼寧省のなかでも、大連市の小中高校の日本語教育は、その歴史的、経済的背景から、実施校の数、教育内容において群を抜いていました。しかし、中国では、日本語は英語と同じ第一外国語として位置づけられてきたために、近年の英語重視の流れをうけて、衰退の一途をたどってきました。大連市においても例外ではありませんでした。

こうした状況に対応するため、2005年10月、TJFは大連市教育局の副局長を含む遼寧省教育代表団を日本に招聘しました。滞日中、TJFの事業をはじめ、遼寧省と友好提携関係にある神奈川県教育行政や教育事情について理解を深めてもらうとともに、大連市における今後の日本語教育の展望や、日中間の学校交流の可能性について意見交換をしました。副局長は、TJFが中国の日本語教育と同時に日本の中国語教育を促進してきたこと、学校、教師、生徒の交流を通じて、日中両国の若い世代間の相互理解の促進をめざしていることに賛同し、大連市の日本語教育を見直すことを約束して帰国しました。

## 第二外国語としての日本語教育

大連は、歴史的に日本語教育の環境が整っているばかりでなく、現在も日系企業が3,000社以上も進出するなど、日本と密接な経済関係を有しています。大連の子どもたちが日本語を学べる環境をつくり、日本の同世代との交流を図ることは極めて重要であるとして、副局長は帰国早々、2005年11月末に、大連市の初等中等教育における日本語教育を奨励する政策を実現させるために、大連教育学院内に日本語教育学習研究センターを設立し、日本語教育担当の教研員（指導主事に相当）をおきました。

2006年4月には、市教育局から「小中高校における日本語教育の強化に関する指導意見」が発表され、大連市の各行政区に通達されました。同意見書の骨子は、中学校を起点として、大連市内のすべての中高校（約280校）に日本語の科

目を開設することを目標におき、日本語教師の増員をめざすというものでした。中高校において「第二外国語としての日本語」教育を中国の行政機関として初めて位置づけるとともに、従来の「第一外国語としての日本語」教育も奨励したのです。また小学校にも第一もしくは第二外国語として日本語を導入することを奨励しました。しかし、本意見書の目標を達成するためには、市政府への日本語教育のための予算の要求、教師の手配、研修、教材開発、教育研究、市民や各方面の指導者たちへの働きかけなど、数多くのハードルを乗り越えなければならぬことから、準備の整った学校から段階的に実施に移すという弾力的な施策がとられました。

TJFは、同教育局より協力要請を受け、全面的にこれを支援することにしました。中国の教育行政当局が、このように本格的に小中高校の日本語教育に取り組んだことはかつてなく、こうした動きに対して、日本側として機を逃さず、迅速かつ的確に協力し、政策を遂行する手助けをしたいと思います。

まず2006年5月に、前述の施策を市内各行政区に理解してもらうため、市の教育局長をはじめ大連市内の行政区の教育局長など13人を日本に招聘しました。こうした活動が実って、9月の新学期より10校以上が日本語科目を再開もしくは新設することになりました。しかし、日本語教師の調達や教材の整備が追いつかず、特に第二外国語教育用の教科書の制作と新任日本語教師の研修が緊急課題となりました。

## 中学校日本語教師研修会の共催

2006年夏、大連市教育局の要請により、第二外国語として日本語教育を導入することになった中学校の日本語教師を対象に、大連教育学院と共催で教師研修会を実施しました。

研修会では、まず第二外国語教育の意義と目的を研修生と共有するよう努めました。研修生の日本語力と教授歴には大きなばらつきがあったため、研修生同士が助けあうことを研修会の目標に掲げ、多様な研修生が混在するクラスを意図的に編成しました。研修を通じて、参加した31人の日本語教師の結束が強まり、教師ネットワークも結成されました。研修会後も初級レベルの教師をフォローする必要があったことから、大連教育学院と共催で日本語力向上のための研修会を同年12月まで週1回実施しました。実施にあたっては、大連在住の日本人日本語教師の協力を得ました。



大連市の小中高校における日本語教育の奨励策につながった遼寧省教育代表団の招聘



日本語教育奨励策を実施するために設立された日本語教育学習研究センター



大連市の中学校の日本語教師研修会。熱心に日本語教授法のワークショップに取り組む



### 中学校の第二外国語用の日本語教科書の共同編集

TJFは、大連教育学院と共同で中学校の第二外国語（週2時間の選択科目）教育用の教科書を編集・制作することになり、2006年12月、日中編集委員会を発足させました。全5冊の教科書を発行することになり、第1冊『好朋友 ともだち1』を2007年夏に出版しました。

教科書の編集理念として、「人間関係の温暖化」（日中の同世代間の交流と相互理解のためのコミュニケーション能力を身につけさせる）と、多文化共生（日本語学習を通じて、異なる文化を尊重する態度を育てる）を掲げました。中学生が関心をもって学べるように、書き下ろしのストーリーマンガを主軸としました。また、学習者参加型のコミュニケーション活動を豊富に取り入れることにしました。第二外国語教育用の日本語教科書は中国では初めての試みであり、他地域からも関心が寄せられています。なお、この教科書の編集・制作にあたっては、複数の企業や財団から助成を受けています。

### 中学校における日本語教育実施校の増加

2006年9月の新学期から新たに12校の中学校が日本語教育を始め、すでに開始していた学校とあわせると27校となり、約5,000人の中学生が日本語を学ぶことになりました。2007年10月現在、第二外国語を実施する学校だけで計26校（そのうち、15校が第一外国語としての日本語も併設した）、約5,500人の中学生が新教科書で日本語を学び始めました。

英語に切り替えられていく傾向にある「第一外国語としての日本語」に代わって、「第二外国語としての日本語」は、将来中国各地域で導入される可能性をもっています。大連市での試みが成功すれば、中国における初等中等教育の日本語教育史に新たな一ページを加えることになると期待しています。

### 日中の学校交流の進展

2004年度に遼寧省の小学校における日本語教育支援を始めたのが契機となり、遼寧省の小学校と神奈川県、東京都の小学校との学校交流の橋渡しをしました。2006年度は4組の中高校、2007年度にはさらに2組の中学校の橋渡しをし、現在9組の小中高校が交流しています（第2部80ページ参照）。高校では、大連市の日本語教育実施校と神奈川県の中国語教育実施校が言語教育と連携させた交流を行っています。同世代

の母語話者との交流は、言語学習の動機づけを高めるだけでなく、文化理解ひいては個と個の交流の面でも大きな効果が期待できます。一方、遼寧省側では日本語教育を実施する学校の多くが日本の学校との交流を望んでいるのに対して、日本側は中国語教育を実施している小中学校が極めて少ないことから、言語教育と関連させながら交流するのは難しいのが現状です。そこで、国際理解教育および国際交流の一環として、中国の学校との交流に関心をもつ小中学校を対象に橋渡しを行っています。通信手段や言語の障壁、教育制度の違いなどがあり、交流は容易ではありませんが、TJFとしては側面から支援し、交流を発展させるよう協力したいと考えています。

## 2 中国語と韓国朝鮮語の学習のめやすづくり

日本の高校における中国語教育と韓国朝鮮語教育の実施状況を見ると、どちらの言語も選択科目であることが多く、単位数も少ないために、他教科の教師が兼任で、もしくは非常勤講師が担当している場合がほとんどです。科目としての位置づけも脆弱で、受講者が集まらない、教師が異動したなどの理由で閉講に追い込まれることも珍しくありません。また、教材や教師研修の機会も不足しています。文部科学省の2005年の調査によると、中国語教育を実施している高校は全国で約10%強、韓国朝鮮語教育については約5%となっています。日本にとって重要な隣国のことばとして、あまりにも少ないといわざるをえません。

しかし、この20年を振り返ってみると、中国語教育、韓国朝鮮語教育の実施校は年々増えています。1990年度を境に中国語がフランス語、ドイツ語を凌いで英語に次ぐ地位を占め、2005年度には、韓国朝鮮語が英語、中国語に次ぐ地位を占めるようになりました。こうした需要の拡大に制度が追いついていないのが現状です。例えば、高校の学習指導要領では「外国語」の教育目標や学習指導内容が定められているものの、科目として取り上げられているのは英語のみで、その他の外国語科目は英語に準じるとして具体的な記述はありません。



### 中国語教育、韓国朝鮮語教育をめぐる状況

高校の中国語教育では、1999年6月に高等学校中国語教育研究会（当時全国高等学校中国語教育研究会）が『高校中国語教育のめやす』を発行し、TJFも作成に協力しました（第2部100ページ参照）。学習指導要領が示されていないなかで、同研究会がめやすを示したことは、中国語教育の基盤整備において評価されることでしたが、その内容は高校生が学習すべき文法項目と語彙を提示しているだけで、具体的な学習目標や学習内容を示していなかったために、現場で活用するには限界がありました。その後、高校生向けの教科書が数冊発行されましたが、明確な学習目標は設定されないままでした。その間、授業実践に関する議論がたびたび繰り返されたものの、設定単位数、設置学年、ネイティブ講師の有無など、それぞれ現場の条件が異なっていることから、議論もなかなかあわない状況にありました。また、高校における学習者が増えるに従い、大学進学後の学習とうまくつなげられないという課題も出始めていました。こうした状況のなかで、高校の中国語教育に携わる人たちが共有できる教育目標や客観的な到達度目標を設定する必要があるとの問題意識が生まれてきました。

高校の韓国朝鮮語教師の間でも、授業で何を教えるかについて繰り返し議論が行われていました。そうした経緯を経て、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（以下、JAKEHS）西ブロックが、高校生を対象とする初の教科書『高校生のための韓国朝鮮語I 好きやねんハングル』を、東ブロックが、高校生が学ぶべき基本語彙を中心に提示した『ハングル@ホームステイ』を発行しました。また、2005年度に行われたJAKEHSの研修では、「何を」「どのように」教えているか、また教えるべきかを整理することを試みました。

### 協働プロジェクトとしての「学習のめやす」

高校の中国語教師、韓国朝鮮語教師たちの間でそれぞれ基準づくりが必要だという共通認識が生まれていたときに、文部科学省の委嘱事業「学力向上拠点形成事業（わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム）」の申請の話がTJFに持ち込まれました。そして、2005年度から2006年度にわたって文部科学省委嘱事業として「高等学校における中国語と韓国朝鮮語の目標・内容・方法に関する研究」に取り組み、その成果として2007年3月に『高等学校の中国語と韓国

朝鮮語：学習のめやす（試行版）』（以下、「学習のめやす」）を発行しました。

このプロジェクトは、高校の中国語と韓国朝鮮語の教師および教師経験者9人を中心に進められました。日本語、中国語、韓国朝鮮語それぞれの母語話者であるメンバーは、互いに補完しつつ協働作業にあたりました。中国語の教師と韓国朝鮮語の教師がこのプロジェクトを通じて隣国のことばである二つの言語を学ぶ意義を考え、共通の理念を掲げたことは意義深いことでした。また、高校教師だけでなく大学教師6人もこのプロジェクトに関わりました。このことで、高校と大学が連携でき、日本における高校、大学レベルの中国語教育、韓国朝鮮語教育の質をさらに向上させる基礎をつくることができたと考えています。

めやすづくりに初めて取り組むメンバーにとって、外国語教育専門家の助言は大変役立ちました。日本の英語教育専門家や米国の外国語教育のスタンダードづくりに関わった日本語教育専門家からは、外国語教育の基本的アプローチ、哲学、理念、スタンダード作成の過程などについて助言を受け、米国ウィスコンシン州の日本語教育ガイドラインのアドバイザーを務めた日本語教育専門家からは、ガイドラインの考え方、構成、話題やレベルの設定などについて説明を受けました。また、ヨーロッパで約30年かけてつくられ、欧州評議会が2001年に発表した、外国語の能力を測るときに参照するための枠組みも大いに参考になりました。こうした先行例を学ぶことにより、15ヵ月という短期間で「学習のめやす」をまとめることができました。さらに、TJFが写真教材「であい：7人の高校生の素顔」プロジェクトをはじめ日本語教育に関するさまざまな事業を実施するなかで、相互理解をめざす日本語教育のあり方、文化理解のとらえ方などについて繰り返し考えてきたことを今回のプロジェクトに生かすことができました。

### 中国語、韓国朝鮮語を学ぶ意味

「学習のめやす」は高校の外国語教育への新たな提案です。高校生が外国語を学ぶ意味、英語以外の外国語を学ぶ意味を問い直し、そのなかで中国語と韓国朝鮮語を学ぶ意味をさまざまな角度からとらえ、隣国・隣人のことばである中国語と韓国朝鮮語に共通する教育理念として「他者の発見 自己の発見 つながりの実現」を掲げています。



中国語および韓国朝鮮語と日本語との間には類似性や共通性がある一方で違う点も多々あります。日本語を第一言語とするものは、隣国のことばを学ぶことによって、両言語の類似点や相違点に気づき、そのおもしろさを体感することができ、隣国の人びとや文化に対する理解を深めるとともに、日本語と日本文化を再認識し、深く理解することもできます。さらに、短期および長期の外国人滞在者には中国語話者と韓国朝鮮語話者が多く、また、2、3時間で中国や韓国に行くことができることから、学習者が学習したことばでコミュニケーションを図ることができる機会が増えています。言語が人との関わり、つながりを実現させてくれるものであるという、最も重要な教育的意味を、中国語や韓国朝鮮語の学習を通じて学習者が実感することができると思っています。

### 総合的コミュニケーション能力を身につける外国語教育

「学習のめやす」では、実践的なコミュニケーション能力をいかに身につけさせるかを主眼においています。このコミュニケーション能力とは、言語運用能力（コミュニケーションに対する関心・意欲・態度＋表現・理解の言語技能＋言語知識）と文化理解力（社会文化的能力や異文化間コミュニケーション能力とよばれている能力。言語と密接な文化と言語の背景にある文化についての理解を含む）の二つを含んでいます。コミュニケーション能力というと、言語運用能力のみをさすのが一般的です。しかし、「学習のめやす」では、コミュニケーションを図る際の文化理解の重要性に着目し、言語運用能力と文化理解力の両方を含んだものとして、コミュニケーション能力という用語を用いています。

こうしたコミュニケーション能力の育成という大きな目標を達成するために、コミュニケーション能力指標を設定しています。この指標は、言語領域と文化領域の二つの領域から構成されており、高校生の関心や発達年齢にあった内容（話題）別およびレベル別に学習到達目標を示しています。さらに、その目標を達成するための具体的な学習内容や方法（学習活動例、表現例、語彙例）も提示しています。学習活動例では、学習自体がコミュニケーション型であることをめざし、学習者参加型の活動例を紹介しています。中国語については、このコミュニケーション能力指標をもとに授業をつくる際に参照できる、年間指導計画案と単元指導案の様式も作成しました。この様式に基

づいて作成した年間指導計画例や単元指導例を蓄積することによって、授業づくりの方法を共有化できると考えています。

### 今後の課題

2年度にわたる研究の成果として、発行した「学習のめやす」は、広く議論を募るための「試行版」であり、研究成果の現時点での報告です。「学習のめやす」は教育の標準化をめざしているわけではありません。学習者、学習条件、学習目的に応じて教育現場は多様であり、授業は、学習者のことを最も理解している教師が、学習者とともに創造すべきものだと考えるからです。しかし、今後の教育研究の発展のためにも、また教材を開発したり、教師研修の内容を検討したりする際にも、教育目標や内容、方法について共通の土俵が必要です。「学習のめやす」は、そのための一つの提案です。ただし、これを共通の土俵としてもらうためには、この提案を全国の高校の中国語や韓国朝鮮語の教師と共有しなければなりません。今後は、この提案をできるだけ多くの中国語と韓国朝鮮語教育の現場で活用してもらいながら有効性について検証し、その意見を反映させて「学習のめやす」の中身を充実させたいと思っています。また、中国語と韓国朝鮮語について作成した「学習のめやす」の成果を、日本語や英語を含めた高校における他の外国語教育に応用する可能性について、これら外国語教育の関係者とともに検討していきたいと考えています。

また、「学習のめやす」を具体的な授業実践につなげるために、今後さらに、コミュニケーション能力指標を使った授業案・単元案・年間指導計画案を充実させ、作成した事例をデータベース化してウェブサイトに掲載し、関係者間で共有することをめざしたいと思います。

一方、「学習のめやす」の研究課題も残っており、今後着実に研究を継続させる必要があります。まず、高校の中国語教育および韓国朝鮮語教育に関する評価の基準を作成するために、日本の英語教育や海外各国の外国語教育における評価方法に関する先行事例を研究していく必要があります。さらに、「学習のめやす」における文化領域の扱いについても、研究をさらに深めていくことが求められています。

こうした中国語と韓国朝鮮語について研究してきた「学習のめやす」の成果を、日本語教育や、英語を含めた高校における他の外国語教育の関係者にも伝え、ともに議論し、日本



の学校における外国語教育のあり方について検討していけたらと思っています。

### 3 中国語を学ぶ高校生の中国短期研修の実施

TJFは、中国語を学ぶ高校生が中国を訪れ、同世代の中国の高校生と交流することは、言語や文化を理解するだけでなく、相互理解のために必要な姿勢を身につけるうえで大きな効果があると考えていました。中国語を学ぶ高校生を対象とする訪中プログラムはほとんどなかったことから、関係機関に働きかけた結果、社団法人日本中国友好協会が実施している「日本高校生交流代表団」という訪中プログラムの応募枠に、2003年度から中国語学習者20人の枠を設けてもらうことができました（第2部103ページ参照）。ただ、中国語を学習していない参加者も多いことから、ことばの学習と交流を結びつけた実践をこのプログラムに組み込むことはできませんでした。

そこで、中国語を学んでいる高校生を対象に、ことばを学ぶ楽しさを感じてもらうとともに、ことばの学習と交流を結びつける研修をTJFが主体となって実施したいと考え、駐日中国大使館教育処や日中間の青少年交流を実施している機関などに、機会あるごとに働きかけていました。そのような状況のなか、中国語を学ぶ世界の高校生の訪中プログラム（漢語橋：世界の高校生サマーキャンプ）を実施している中国国家漢語国際推广領導小組弁公室（以下、漢弁）が、日本の高校生

100人を2007年度に初めて中国に招聘する計画があること

を、2007年1月に中国大使館教育処の関係者から知らされました。2004年度から中国教育部、漢弁、文部科学省と「高等学校中国語担当教員研修」を実施していたという経緯から、この招聘プログラムの企画から実施までをTJFが担うことになりました。こうして、中国語を学ぶ高校生のための短期中国研修が実現したのです。

2007年8月に10日間の研修を北京と大連で実施することが決定しましたが、募集要項を中国語



教育を実施している高校に送付したのは6月下旬のことでした。募集期間を20日しか設けることができなかったものの、108校から280人近い応募がありました。これは、文部科学省に協力を要請し、都道府県の教育委員会を通じて各学校に案内を送ると同時に、情報誌『小溪』や「小溪」ウェブサイトを通じて、全国700校近くの中国語教育実施校の校長と中国語担当教師に直接呼びかけることができたからでした。

#### 学習と実践を結びつける試み

研修では、中国語を学ぶ楽しさを実感してもらうとともに、中国語を実際に使って何ができるか実践してもらいました。まず、研修の前半3日間を首都経済貿易大学での授業にあて、「自己紹介（自分、家族、学校）」「買い物」「食」をテーマにした学習を導入しました。授業では口頭表現を中心にロールプレイを毎回取り入れ、その後は学習と実践を結びつける場を数多く設定しました。北京では、グループで買い物をする機会を2回設け、授業で習った表現を駆使して欲しい物を安い値段で購入することに挑戦してもらいました。また、授業で学習した



中国語で行われた授業に、高校生は真剣な表情で臨んだ



買い物では、習った表現を使って値段の交渉に挑戦した

#### 研修に参加した高校生の声

以前は自分の意見を主張することが苦手でしたが、中国でとてもよい刺激をうけ、少しではありますが前向きになれた感じがします。また交流を通じて、以前より相手を気遣うことができました。

（3年生）

中国や中国語に対する意識の高い仲間がいい刺激をもらい、自分自身の意欲も高まりました。たった10日間しか一緒にいなかったなんてとても思えないほど仲よくなり、本当に価値のある出会いだったと思います。

（3年生）

秀水市場で、習った中国語を使って初めて値切ることに成功したときは、すごうれしかった。ごちない中国語でしたが、お店の人や中国の人たちに言いたいことが伝わって感動しました。

（3年生）

この研修を通じて、何でも自分から始めなければ、待っては何にもならないことに気づきました。自分から一歩進み出すことの大切さを学びました。

（2年生）

いろいろな場面で、現地の人を相手に「もっと話したい、いろいろ聞いてみたい!」と強く思いました。このことは、これから中国語を学ぶ気持ちを維持するための何よりの刺激剤です。

（3年生）

中国の学生は目的意識が高く、毎日の長い授業も必死に頑張っていて、見習わないといけないと思いました。それに、人間的にも純粋で仲間意識が強いこともわかりました。日本みたいに外見で判断するような子もいないと思います。そういった点でも日本は中国から学ぶべきだと思いました。

（3年生）

自己紹介に関する表現は、大連市で二つの高校を訪問し中国の高校生と交流した際に使ってもらいました。

このように、ことばの学習と実践を結びつけるため、コミュニケーションの相手として同世代の高校生を選び、交流の場を設定しました。参加した高校生たちの多くは、研修の成果として、中国語力の向上と新たな友だちとの出会いと交流をあげています。また、中国の高校生との交流を通じて、彼らの日本語のレベルが予想以上に高く勉強量も多いことを知って、自分たちの中国語学習への刺激になったようです。出発前には中国に悪い印象を抱いていたが、実際に中国の人たちと接したことでそれが払拭された、という感想も聞かれました。今回の試みを通じて、高校生は多くのことを得たようです。

#### 今後に向けての課題

現地での受け入れ機関である北京市国際教育交流中心（北京市教育委員会直属の事業部門で、中国の国内外の小中高校生の研修などを実施している）と大連市教育局の担当者と十分に協議し、TJFが要望する内容にすることができましたが、課題も多くありました。まず、プログラム実施の決定が遅れ、北京や大連の受け入れ機関、中国語の授業を担当する大学と事前の打ち合わせを始めたのが研修の1ヵ月前だったことです。そのため、参加者への事前研修を3ヵ所で開催したものの、中国訪問に際しての留意点を説明するにとどまらざるをえませんでした。どこを訪問して何を見るのか、授業はどんな内容でどのように進めるのかなどの詳細が決まっていれば、事前学習にもより多くの時間をかけることができ、参加者の目的意識も十分に高まり、より多くの研修成果が得られたと思います。

交流についても、一過性にしないための工夫をする必要があると考えています。例えば、参加者には交流相手と手紙やEメールなどで事前に交流を始められるようにしたり、研修期間中に一緒に過ごす時間を長く設けたり、活動を複数回設定したりするなどが考えられます。

今後、研修をより充実させるためにも、事前学習に力を注ぎたいと考えています。また、日本の高校生のための研修にあわせて、日本語を学ぶ中国の高校生のための研修を実施し、日中で互いの言語を学ぶ高校生が交流する場を設定するなど、日中の言語教育事業の連携を図っていきたいと考えています。



## 4 高校生の写真撮影 交流プログラムの実施

1997年度から2006年度まで「高校生のフォトメッセージコンテスト」を開催し、日本の高校生の素顔や日常生活の様子を、高校生自身による写真と文章で国内外の同世代に発信しました（第2部128ページ参照）。その過程で、写真は撮影者と被写体の相互理解を深め、人と人をつなぐ有効な媒体であることを認識したことから、この写真の特性を生かして、世界の高校生が交流する場をつくりたいと考えました。

そして、2007年8月、高校生の写真撮影交流プログラム「Focus on Japan 2007」を9日間の行程で実施しました。日本を含む世界の高校生16人が4チームに分かれ、大阪、東京、広島、宮城の4地域を訪れ、地域の人びとの姿や暮らしを写真と文章で表現する作品を共同で制作するというものです。作品を制作する過程で、ことばや文化の違いを超えた対話と交流を深めるとともに、日本の多様な地域と人びとの姿を高校生の視点で国内外の同世代に発信することをめざしました。

#### 交流プログラムの実施まで

プログラムを実施するにあたっては、「高校生のフォトメッセージコンテスト」で築いたネットワークを活用しました。コンテストの審査員だった一人には、アドバイザーとして企画全般にわたり関わってもらいました。また、高校の写真部顧問には、各地域での撮影に同行してもらうなどの協力を得ました。各写真部には、それぞれの地域を紹介する写真の撮影を依頼し、応募者はこの写真を見て、自分が訪れたい場所を選びました。

参加者の募集はウェブサイトなどで行い、応募者には三つの課題を課しました。一つは、4地域のうち自分が訪れたいところを決め、その地域のどこで、どんな人に会い、どんなことを伝えたいか、また制作した作品を自分の地域の人びとにどうやって伝えるのかなどを文章でまとめること、二つめは、自分と自分の住んでいる地域を写真と文章で





紹介すること、三つめは、TJFのウェブサイト「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in Japan」(第2部134ページ参照)あるいは「であいフォトエッセイカフェ」(第2部50ページ参照)に掲載してあるフォトエッセイ作品についての感想を書くことでした。

2007年2月の締め切りまでに、日本を含む世界13ヵ国148人の高校生から参加申し込みがありました。応募者から提出された三つの課題の文章や写真を、外部の評価も得て厳正に審査し、7ヵ国16人(日本8人、韓国・中国各2人、英国・オーストラリア・ニュージーランド・米国各1人)の参加者を決めました。

### 参加した高校生の感想

広島チームのみんなやたくさんの人と知りあい仲よくなれたことで、自分に少し自信をもてるようになったし、進路を前向きに考えていこうと思うようになりました。まだ将来の夢が見つかっていませんが、今回の経験を生かし、積極的にいろいろなことに挑戦し、頑張っていきたいと思います。

(コースケ、広島チーム)

国籍を超え、人の感性や個性の違いを肌で感じ、作品を通じてお互いを評価しあうことで自分の視野が広がりました。受験勉強では絶対学べない素敵な経験でした。この経験に誇りをもって、これからもいろいろなことに挑戦して、自分の視野を広げていきたいと思います。

(ひろみ、大阪チーム)

新しい人たちと会う楽しみを知り、将来の人生設計も変わりました。日本だけでなくいろいろな国のいろいろな人びとと友だちになり、その国について知ることが今の私の大きな夢です。そして日本に対してよくない意見をもっている人たちにできるだけ多く会って、私の考えを伝えたいと思います。

(キョンジュ、宮城チーム)

写真を絞り込むために、どの写真がいいか、その写真のどこがいいのかを話しあったとき、みん

なの考え方がよくわかっておもしろかった。意見を言いあえる関係になれたので、その後の作業も楽しみながらできるようになりました。

(みどりんぐ、東京チーム)

大阪のイルミネーションや広告、特に神社の緑の美しさには、心を打たれました。一つの都市のなかにそんな対照的なところがあることに驚きましたが、それが日本では普通のようなので、そして何よりも大阪の人たちが素晴らしくて、一緒にいて楽しかったです。日本人は禁欲的で感情を表さないという印象をもっていました。大阪の人たちを知って完全に間違っていたと思いました。

(ポリー、大阪チーム)

最も印象的で考えさせられたのは、山に囲まれた庄原という小さな町を訪ねたときのことでした。この町はとても魅力的で親切な人たちが多くて、本当の日本はこういうところなのだと感じました。広島市は信じられないほど穏やかです。あれほど破壊された歴史があるので、人びとはもっと憤ったり動揺したりしているのかと思いました。平和記念日の様子はまったく反対でした。原爆の被害者の方々は自分たちの経験をほかの人に伝えようとしていました。

(エミリー、広島チーム)

### 4チームに分かれて行った作品づくり

4チームが訪問した4地域には、各高校写真部の顧問とOBが同行し、現地で加わった写真部員とともに撮影場所を案内したり、デジタル一眼レフカメラの使い方を指導したり、作品制作に助言するなど、高校生の活動を支援しました。

高校生は、どこで何を撮影したいのか意見を出しあい、おおよその予定を立て、一人1台のデジタル一眼レフカメラをもって撮影に出かけ、毎日一人が100枚から400枚の写真を撮影しました。何千枚にも上る写真のなかからみんなで25枚程度を選んでそれぞれの写真の説明文を書き、自分たちの伝えたいことをメッセージにまとめていきました。「なぜこの写真を撮影したのか」「この写真で自分たちの考えが伝わるのか」、それぞれが自分の主張をぶつけあいながら、最終案をまとめました。

完成した作品は、プログラム終盤に東京で発表しました。限られた日数で仕上げたにもかかわらず、作品には4地域の土地柄や人びとの自然な表情、くらしの様子が表現されていました。参加者がさまざまな人との出会いや人びとの親切に感動し、自分たちの目でそれぞれの日本の姿を発見し、異なる文化と言語をもつメンバーと意見を交わしながら共同で作品づくりをする過程で、多くのことを得ていたことが明らかになりました。

### 高校生が得たこと

このプログラムを通じて高校生が得たものとして、まず、参加者が写真を撮ることを通じて多くの人と出会ったことが挙げられます。初めて訪れた場所で、初めて出会う人、しかもさまざまな年代の人に声をかけることは、高校生にとっては大きな挑戦でした。海外の高校生にとっては、日本語で話しかけなくてはならないため、なおさらのことでした。しかし、勇気を出して「写真を撮らせてください」と声をかけると、多くの方が快く応じ、ときには励ましのことばを掛けてくれたり、仕事のことを説明してくれたりするなど交流が生まれました。

次に、海外の高校生だけでなく日本の高校生も、単なる観光では体験できない、その土地にくらす人びととの交流を通じて、それまで知



広島チームは被爆体験を語るおばあさんの話を聞いた



大阪名物「たこせん」の実演取材する大阪チーム





東京でチームごとに作品を発表

らなかった日本の一面を知ったようです。自分たちがくらすところとは違う地域の姿をカメラのファインダー越しに見ることによって、日本について考えたり、海外の高校生が日本のことをもっと知ろうと積極的に活動している様子に刺激を受けて、日本を再発見したりしたようです。

また、ことばも文化も育ってきた環境も異なる4人が、同じ場所で撮影し、作品を仕上げる過程で、一人ひとりの考えやものの見方の違いが明らかになっていきました。そして、その違いがあるからこそ、ほかのメンバーの写真を見る楽しみがあると同時に、自分自身の視点をもつことが大切だということを学んでいきました。一方、一緒にプリクラを撮って盛り上がりたり、恋の話をしたりと、ことばや文化が異なっても、関心があることや共感することは変わらないということも参加した高校生は感じていたようです。

さらに、何千枚もの写真から25枚程度を選び、それぞれの写真に説明をつけて、自分たちが伝えたいことをメッセージにしてまとめるという過程では、メンバー一人ひとりが、自分の

## アドバイザーのコメント



できあがった作品を見てとても感動しました。日本に来て13年になりますが、これほど豊かな日本人の表情を見たことがないと思うくらいです。

参加した高校生たちが、これだけ豊かな日本人の表情を撮影することができたこと、そして何より一緒に作品をつくる過程で国際的な交流ができたことは、大変素晴らしい経験であると思います。

世界から集まった高校生が共同で作品づくりに取り組んだわけですが、お互いに文化が違うのですから意見が一致しなくても当然で、まず交流して相手を知ることが大切です。それぞれ相手のことを知ることが第一歩です。今回の経験をそれぞれ自分の国に持ち帰って、ぜひこの9日間の経験を周りの友人たちに伝えてほしい。そして、これからの国際社会の一員として、自分の心のなかに多様な世界をもって豊かな人生を過ごせるように、この経験を生かしてほしいと思います。

(可越/映像プロデューサー、東京視点代表)

考えをほかのメンバーに伝えることが不可欠でした。お互いに主張し、意見を調整し、力を出しあって作品を仕上げたことに充実感を覚え、自信をもった高校生も少なくありませんでした。

## 課題とこれからの展望

参加した高校生たちが制作した4地域を紹介する作品は、TJFのウェブサイトにて4カ国語（日本語・英語・中国語・韓国朝鮮語）で掲載しています。

「高校生のフォトメッセージコンテスト」では実現できず、今後の課題としていた問題も、この事業で一步進めることができました。一つは、世界の高校生が実際に出会い交流する機会を設けたことであり、もう一つは、高校生に作品を競わせるのではなく共同で作品づくりに取り組んでもらい、その過程でさまざまなことを得たり、感じたり、学んだりしてもらえたことです。

その一方でいくつかの課題も明らかになりました。例えば、参加者の選考にあたり、より参加意欲の高い高校生を選考するためにはどうすればよいか、参加者が自主的に自分たちの力で制作する作品に、顧問やスタッフがどの程度アドバイスをすればよいか、写真部で活動している生徒とそうでない生徒の撮影経験の違いにどう対応すればよいかなど、今後さらに検討する必要があります。

今後は、2007年度に新たに開設したウェブサイト「つながる」も活用しながら、引き続き世界の若者の対話と交流を進め、高校生の活動の成果を発信することができるよう努めていきたいと考えています。

## 5 中高校生の交流ウェブサイトの開設

第2部で述べたように、写真教材「であい：7人の高校生の素顔」プロジェクト（第2部41ページ参照）や「であいフォトエッセイカフェ」プロジェクト（第2部50ページ参照）では、個人と個人の出会いの場をつくることを試みてきました。これらの事業を通じて、若い人たちに言語や文化の知識を提供するだけでなく、



[http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/index\\_j.html](http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/index_j.html)





<http://www.tsunagaaru.com/>

さまざまな言語や文化背景をもつ人々たちのコミュニケーションの土台となる、人に対する興味や関心、その人を理解したいという思いをもってもらうことが大切だと強く認識するようになりました。そのために、お互いの考えていることや日々の生活についてやりとりするなかで視野を広げ、自分自身についての理解を深めるとともに、他者への共感を育んでいけるような場をつくりたいと考えました。

そして、2007年11月、世界の中高校生のための交流ウェブサイト「つながる」を開設しました。「日本と米国の高校生の交流」「日本と中国の中学生の交流」といった「双方向」の交流にとどまらず、複数の国や地域の中高校生同士が一つの場を共有して意見を交換できる「多方向」の交流の場とすることをめざしています。

### 「つながる」でできること

世界の中高校生が交流できるように、日本語、英語、中国語、韓国朝鮮語を中心に多言語での閲覧や書き込みができるようにしました。また、複数の参加者が活発でスムーズに意見交換できるようにSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）<sup>❖</sup>を導入しました。

メンバーとして登録した中高生は、自分のプロフィール、エッセイなどを発信できる「マイページ」をもちます。「マイページ」で、メンバーは日々考えていることや発見したことなどを文章や写真で表現できます。そのページを読んで興味をもったほかのメンバーが感想や意見などを書き込み、さらにそれに対して感想を書くなど、意見交換ができるようになっています。

さらに、自分が関心のあるテーマについて「コミュニティ」をつくり、そのテーマに関心のあるほかのメンバーと意見や情報の交換ができるようにしました。「コミュニティ」は、カテゴリ（学校・教育、趣味、ファッション、テクノロジー、生活、環境・自然、社会問題・世界のできごと、調べものコーナー、作品コーナー）で検索できるようになっています。

「つながる」では、対象を海外の日本語学習者、日本の外国語学習者（英語、中国語、韓国朝鮮語など）、国際理解に関心をもつ国内外の中高校生としました。参加登録の際には、学校に本人の在籍確認をし、保護者の同意を得るとともに、投稿された内容に個人情報や不適切な表現が含まれていないか、掲載する前にTJFが確認するなどして、メンバーの

プライバシーの保護や安全を図ることにしています。

❖ Social Networking Serviceの略。人と人とのつながりを促進、サポートするためのコミュニティ型ウェブサイト。社会的なネットワークをインターネット上で実現することをめざしたサービスで、登録制、招待制などの仕組みがある。ユーザーは、SNS上で、自分のプロフィールや趣味、日記などを公開し、SNS内で知りあいを増やし交流することができる。日本では、mixiやGREE、世界規模ではMySpaceが代表的。

### 個人からの発信と相互理解をめざして

中高生が個人の視点で言語、文化、社会についての情報を発信し、情報交換することで、ことばや文化の違いを超え、人と人の相互理解が促進されることをめざしています。そのことが、多様な文化や社会の現状を理解することにもつながると考えます。

多言語での書き込み、閲覧ができることから、メンバーは母語だけでなく、自分が学習していることばを使って実際にコミュニケーションを体験することができます。実際の交流のなかで学習していることばを使うことによって、外国語の学習意欲を高めることが期待できます。

### 今後の展開

直接交流プログラムのためのコーナーを設け、ウェブサイト上の交流を実際に出会う直接交流に結びつけていきたいと考えています。直接交流の参加者が事前に「つながる」に登録し、ウェブサイト上でやりとりすることで、直接交流の内容をより密度の濃いものにしたしたいと思います。また、直接交流の活動の成果を「つながる」で発表してもらい、多くの中高生たちと共有できるようにする予定です。

「つながる」の知名度を高め、参加者を集めるために、これまで築いた国内外のネットワークを生かして広報活動を行います。海外の英語圏については英文情報誌『Takarabako』（第2部59ページ参照）の読者、韓国については韓国日本語教育研究会のメンバー、中国については中文情報誌『ひだまり』（第2部82ページ参照）の読者および日本語教師研修会に参加した教師を対象に、国内については中国語・韓国朝鮮語教育関係者のネットワーク、「高校生のフォトメッセージコンテスト」（第2部128ページ参照）の参加校、国際教育活動ネットワーク／REX-



NET（第2部58ページ参照）などを足がかりにして、積極的に広報していく予定です。また、国内外ともに各種大会や研究会、TJF主催の研修会などの機会も利用したいと考えています。

参加者数を増やすと同時に、メンバーに継続的に参加してもらい、ウェブサイトでのやりとりの内容を深めるため、定期的にウェブサイト上でイベントを行うなどの工夫をしています。メンバーの学校の教師や、インターネットを利用している教育分野の関係者の協力を得て、イベントの内容を深めたいと考えています。また、直接交流事業との連携はもちろん、TJFのそのほかの事業でも情報交流や作品発表の場として使うなど、

さまざまな方法で「つながる」を利用できると思われます。それぞれの事業にあわせて「つながる」の可能性を探っていきたいと考えています。

さらに、必要に応じてシステムを更新していきます。将来は、音声や動画の掲載が現在よりも技術的に容易になると考えられます。相互理解ならびに外国語学習の観点から音声や動画の利用は大変魅力的ですが、著作権や安全性のチェックをどのように行っていくかなど課題も残されています。技術面の進歩を確認しつつ、本来の目的にそって何をどのように取り入れていくか決定していきたいと考えています。

## 「つながる」のおもな構成

<http://www.tsunagaaru.com/>

### ■「マイページ」

- ・**エッセイ**: 日記のように自由に文章を書き込んで自分の思っていることを発信できる。文章とともに画像を掲載することも可能。このエッセイに対して、他の「つながる」参加者が自由に意見や感想を書き込み、やりとりができる。
- ・**プロフィール**: 自己紹介の欄。「つながる」登録時に決めた自分の愛称や学年、出身地、他の「つながる」参加者への自己紹介の一言など、「つながる」の参加者と交流を深めるうえで必要な最低限の自身の情報を公開する。

### ■「みんなのエッセイ」

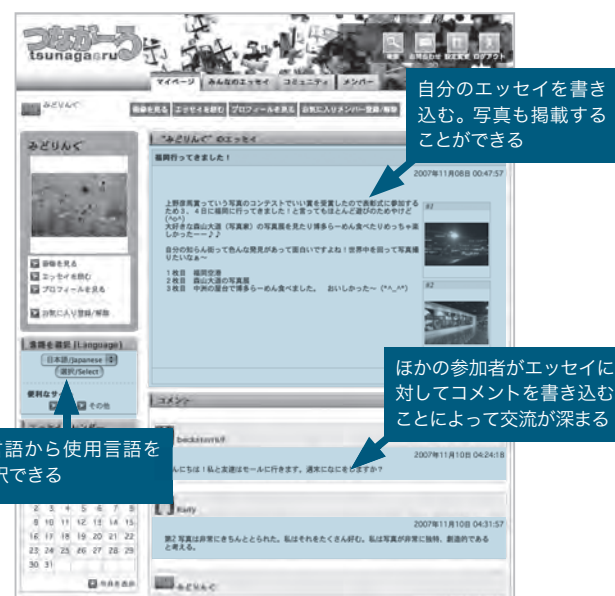
「つながる」参加者のエッセイを一覧で表示している。

### ■「コミュニティ」

意見交換したいテーマごとに、「コミュニティ」（グループ）をつくることができる。「コミュニティ」をつくる際は、以下のカテゴリのいずれかに分類して登録する。また、すでにほかのメンバーがつくっている「コミュニティ」のなかで関心のあるものに参加することもできる。

### ■「メンバー」

愛称、性別、年齢、国名、好きなことなどで、「つながる」参加者を検索することができる。また、新たに登録した参加者を一覧で表示している。



「マイページ」の一例

### カテゴリ例

- 学校・教育（学校生活、勉強、外国語学習、進路、クラブ活動、教育制度、その他）
- 趣味（映画・ビデオ、音楽、アート・芸能、本、マンガ・アニメ、ゲーム、旅行、動物・ペット、その他）
- ファッション（好きなファッション、その他）
- テクノロジー（IT/インターネット、その他）
- 生活（アルバイト、ボランティア、学校外での活動、食べ物・料理、健康、自分の住んでいるところ、その他）
- 環境・自然（環境問題、自然、その他）
- 社会問題・世界のできごと（社会問題、世界のできごと、あなたの国でおきていること、その他）
- 調べものコーナー（みんなに質問!、その他）
- 作品コーナー（文章、画像、その他）



資料

# TJFの事業を データで見る



# TJF 20年の歩み:1987-2006



●【期日・期間】事業名●開催場所の順に記載しました。●共催事業の共催機関は( )内に記載しました。  
1987年度から1996年度までの事業の詳細は、国際文化フォーラム設立10周年記念『ことばと文化 相互理解をめざして』をご参照ください。

## 1987年度-1996年度の主要事業

### 1987年度(昭和62年度)

【6月22日】財団法人国際文化フォーラム設立  
【12月】『国際文化フォーラム通信』創刊  
【1988年3月】国際シンポジウム「諸外国での日本語教育の現状と問題点」共催(国際交流基金)●東京

### 1988年度(昭和63年度)

【7月~1991年10月】中国放送大学の日本語講座シラバスの策定と教材制作協力  
【10月】日本現代文化芸術展「写真展・ポスター展」出展共催(中華全国青年連合会)●中国/北京  
【12月】『ワールドプラザ』創刊(1996年第48号をもって休刊)  
【1989年3月】『海外における日本語教育の現状と将来』(シンポジウム報告書)共同編集・発行(国際交流基金)

### 1989年度(平成1年度)

【4月】シンポジウム「地域国際交流化と文化創造—地域おこしへの新しい視点」主催(11月、シンポジウム報告書編集・発行)●東京  
【4月~7月】第3回北京市青少年日本語コンテスト共催(北京市青年連合会)●中国/北京  
【10月~11月】ユーロパリア89ジャパン「日本の蔵書票展」「アニメーション・ビデオ・シアター」出展●ベルギー/ブリュッセル  
【1990年3月】『日本語教育—その成長と悩み 海外日本語教育機関の動向1988年』発行

### 1990年度(平成2年度)

【5月】『日本とはなにか 近代日本文明の形成と発展』発行  
【5月~6月】第4回北京市青少年日本語コンテスト共催

【5月・10月】『日本語基礎』(第1・第2分冊)編集・出版協力  
【6月】『国際文化交流名言集』発行  
【8月~9月】「日中書籍装幀芸術展」共催(中国出版工作者協会、中国出版科学研究所)●中国/北京  
【12月】第2回全中国大学生日本語弁論大会共催(北京外国語学院)●中国/北京  
【1991年3月】日韓学術文化セミナー共催(蔚山大学)●韓国/蔚山

### 1991年度(平成3年度)

【4月~5月】第5回北京市青少年日本語コンテスト共催  
【4月~5月】ヒューストン・インターナショナル・フェスティバル「日本の漫画展」出展●米国/ヒューストン  
【5月】日本事情紹介写真展「日本の若い世代」出展●中国/北京  
【5月・10月】『日本語基礎』(科学技術編・観光編・外国貿易編)編集・出版協力

【9月~1992年1月】ジャパン・フェスティバル UK1991「Visions of Japan展」協力(国際交流基金、ヴィクトリア & アルバート美術館主催)●英国/ロンドン

【10月】第3回全中国大学生日本語弁論大会共催  
【1992年1月】日本・タイ学術文化シンポジウム共催(タマサート大学)●タイ/バンコク  
【1992年1月】『Teenage Tokyo』共同発行(ボストン子ども博物館)

【1992年3月~5月】第6回北京市青少年日本語コンテスト共催

### 1992年度(平成4年度)

【4月~1995年】ボストン子ども博物館「ティーン・トーキョー展」出展●米国/ボストン

【6月】第4回全中国大学生日本語弁論大会共催  
【7月】第1回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会共催(長春外国語学校、中国教育学会外語教学研究会、吉林省教育学院)●中国/長春  
【7月~1995年12月】「Japanese for Communication: A Teacher's Guide」制作助成●米国/ウィスコンシン州  
【10月~1993年6月】極東ロシア地域日本語教師助手派遣事業(JALFER)実施●ロシア/ウラジオストク、ユジノサハリンスク  
【1993年2月~3月】米国ウィスコンシン州教育関係者訪日プログラム(STAR)実施

### 1993年度(平成5年度)

【4月~5月】第7回北京市青少年日本語コンテスト共催  
【5月~6月】「文化のきずな—日本の童話とイラストレーションの祭典」共催(サイモン・フレザー大学異文化言語コミュニケーションセンター)●カナダ/バンクーバー  
【5月~10月】日本におけるアジア言語の実態調査委託(グローバルリンク総合研究所に委託)  
【7月】『Data Book on Japanese Local Grassroots Organizations in International Cultural Exchange』発行  
【9月~1995年】「日本語の習得と文化理解」研究委託(異文化間教育学会に委託)  
【10月】第2回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会・日本語教師研修会共催(武漢外国語学校)●中国/武漢  
【10月】『The Japan Forum Newsletter』創刊(2004年no.33をもって休刊)

### 1994年度(平成6年度)

【4月~5月】第8回北京市青少年日本語コンテスト共催  
【5月~1995年2月】日本の高校における中国語教育の実態調査実施  
【10月】第3回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会・日

## 1997年度(平成9年度)



【5月24-25日】日本語教育学会春季大会助成●東京  
【6月28-29日】第15回全国高等学校中国語教育研究会全国大会協力●東京、千葉  
【6月】「中国中高校日本語教師研修会テキスト」発行 \*1  
【6月~1998年3月】第1回日本の高校生の日常生活写真コンテスト主催 \*2  
【6月~1998年12月】日本の高等学校における中国語・韓国朝鮮語教育の調査実施 \*3  
【7月12日】第17回中国語教育研究会助成●東京  
【7月20日~8月1日】第2回中国中高校日本語教師研修会共催(大連市教育学院、中国教育学会外語教学研究会、遼寧省教育委員会、大連市教育委員会、吉林省教育委員会、黒龍江省教育委員会、内蒙古自治区教育厅)●中国/大連 \*4  
【10月4-5日】日本語教育学会秋季大会助成●東広島  
【11月22日】American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) 年次大会、セッション運営●米国/ナッシュビル \*5

青字の事業は1997年度以降の主要事業。ただし、調査・編集出版事業は、出版物が発行された年度のみ青字。後援・協力事業のうち、企画に関わったものは初年度のみ青字。





- 【11月】財団設立10周年記念『ことばと文化 相互理解をめざして』発行  
 【1998年1月24日】第18回中国語教育研究会助成●東京  
 【1998年3月】第23回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)  
 【1998年3月】異文化間教育学会紀要刊行助成  
 【1995年8月~1999年6月】『高校中国語教育のめやす』編集協力\*6  
 【1997年2月~1998年2月】第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト主催  
 【1996年4月~1999年6月】『全日制普通高級中学教科書(試験本)日語』編集協力\*7

## 1998年度(平成10年度)



- 【5月23-24日】日本語教育学会春季大会助成●東京  
 【6月13-14日】第16回全国高等学校中国語教育研究会全国大会協力●東京  
 【6月】「中国中高校日本語教師研修会テキスト」発行\*8  
 【6月】日本の高等学校における中国語・韓国朝鮮語教育の調査の中間報告書を発行  
 【7月18日】第19回中国語教育研究会助成●東京  
 【7月~1999年2月】第2回高校生の生活写真コンテスト主催\*9  
 【8月2-14日】第3回中国中高校日本語教師研修会共催(黒龍江省教育学院、中国教育学会外語教学研究会、黒龍江省教育委員会)●中国/ハルビン\*10  
 【8月27-29日】第1回高等学校韓国語教師研修会後援(駐日韓国文化院主催)●東京  
 【10月3-4日】日本語教育学会秋季大会助成●札幌  
 【11月20日】American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) 年次大会、セッション運営●米国/シカゴ\*11  
 【11月】『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are』発行\*12  
 【11月】『Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture II』発行\*13  
 【11月】高校生のフォトメッセージコンテストウェブサイト開設  
 【1998年~2000年3月】『きせつ1:春一番』編集協力\*14  
 【1999年1月31日】第20回中国語教育研究会助成●東京  
 【1999年1月~7月】中国大連市日本語教員招聘●東京  
 【1999年2月】第24回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)  
 【1999年2月~2000年3月】第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト主催  
 【1999年3月14-24日】第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト特賞受賞者招聘●東京ほか\*15  
 【1999年3月16日】セミナー「子どもたちにことばを教えるー文化理解をめざした外国語教育の意味と方法」共催(西町インターナショナルスクール)●東京  
 【1999年3月24日】高校生意見発表会「国際化時代がやってきた」後援(東京小石川ロータリークラブ主催)●東京  
 【1999年3月】『第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集』発行\*16  
 【1995年8月~1999年6月】『高校中国語教育のめやす』編集協力\*6  
 【1996年4月~1999年6月】『全日制普通高級中学教科書(試験本)日語』編集協力\*7  
 【1997月~1998年12月】日本の高等学校における中国語・韓国朝鮮語教育の調査実施\*3

## 1999年度(平成11年度)

- 【4月】『小溪』創刊\*17  
 【4月~6月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力●東京



- 【4月~2001年】高校生の生活写真パネル展協力●米国、オーストラリア、中国、英国\*18  
 【4月~2001年12月】「であい:7人の高校生の素顔」制作\*19  
 【5月22-23日】日本語教育学会春季大会助成●千葉  
 【5月29-30日】異文化間教育学会第20回大会助成●鳴門  
 【6月18-19日】第17回全国高等学校中国語教育研究会全国大会後援●金沢  
 【6月】日本語教育に関する情報交流・写真教材のワークショップ主催●オーストラリア/シドニー、ニュージーランド/ウェリントン  
 【6月】『日本の高等学校における中国語教育の広がり』発行\*20  
 【6月】『日本の高等学校における韓国朝鮮語教育』発行\*21  
 【6月】『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 1998』発行\*22  
 【6月】『高校中国語教育のめやす』出版助成\*6  
 【6月】『1999年中国中高校日本語教師研修会教材』発行\*23  
 【6月~2000年2月】第3回高校生の生活フォトメッセージコンテスト主催●東京\*24  
 【7月24日】第21回中国語教育研究会助成●東京  
 【7月25日~8月6日】第4回中国中高校日本語教師研修会共催(延吉会場:延辺教育学院、吉林省教育厅、中国教育学会外語教学研究会/ハルビン会場:黒龍江省教育学院、黒龍江省教育厅、中国教育学会外語教学研究会/瀋陽会場:遼寧教育学院、遼寧省教育厅、中国教育学会外語教学研究会)●中国/延吉、ハルビン、瀋陽\*25  
 【8月17-19日】第2回高等学校韓国語教師研修会共催(駐日韓国文化院)●東京\*26  
 【8月19日】高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク設立協力●東京  
 【10月2-3日】日本語教育学会秋季大会助成●岡山  
 【10月】『ひだまり』創刊\*27  
 【10月~11月】全国高等学校中国語教育研究会活動協力  
 【10月~12月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力●東京  
 【11月20日】American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) 年次大会、セッション運営●米国/ダラス\*28  
 【11月28日】第17回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催)●東京  
 【12月】中国内蒙古自治区における日本語教育事情の調査実施  
 【2000年2月5日】第22回中国語教育研究会助成●東京  
 【2000年3月】第25回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)  
 【1995年8月~1999年6月】『高校中国語教育のめやす』編集協力\*6  
 【1996年4月~1999年6月】『全日制普通高級中学教科書(試験本)日語』編集協力\*7  
 【1998年~2000年3月】『きせつ1:春一番』編集協力\*14  
 【1999年1月~7月】中国大連市日本語教員招聘●東京  
 【1999年2月~2000年3月】第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト主催

## 2000年度(平成12年度)



- 【4月・6月・7月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力●東京  
 【4月~2002年3月】中国初等中等教育における日本語教育事情の調査実施(国際交流基金委託事業)\*29  
 【5月20-21日】日本語教育学会春季大会助成●東京  
 【5月27-28日】異文化間教育学会第21回大会助成●東京  
 【6月】『2000年中国中高校日本語教師研修会教材』発行\*30  
 【6月】『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 1999』発行\*31  
 【7月22日】第23回中国語教育研究会助成●東京  
 【7月】「であい」プロジェクト・ワーキンググループ会合実施●米国/ウィスコンシン州、オレゴン州、ニューハンプシャー州\*32



【7月～2001年2月】**第4回高校生の生活フォトメッセージコンテスト主催**\*33  
 【8月4-16日、フフホト会場のみ8月18-28日】**第5回中国中高校日本語教師研修会共催**(長春会場:吉林省教育学院、吉林省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金/ハルビン会場:黒龍江省教育学院、黒龍江省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金/大連会場:大連市教育学院、遼寧省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金/フフホト会場:内蒙古自治区教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金)◎中国/長春、ハルビン、大連、フフホト\*34  
 【8月18-20日】**第3回高等学校韓国語教師研修会共催**(駐日韓国文化院)◎東京  
 【8月24-25日】第18回全国高等学校中国語教育研究会全国大会後援◎岐阜  
 【8月～2001年3月】全国高等学校中国語教育研究会活動協力  
 【9月・11月・12月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力◎東京  
 【10月7-8日】日本語教育学会秋季大会助成◎名古屋  
 【10月19-29日】第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト特賞受賞者日本招聘◎東京ほか\*35  
 【10月】『**第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集**』発行\*36  
 【10月】『**Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture III**』発行\*37  
 【11月17-18日】American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) 年次大会、セッション運営\*38、「日本の夕べ」共同実施(国際交流基金ロス・アンジェルス事務所日本語センター)\*39◎米国/ボストン  
 【11月18日】第2回高校生意見発表会後援(第4学区都立高校校長会、東京小石川ロータリークラブ主催)◎東京  
 【2001年1月20日】第24回中国語教育研究会助成◎東京  
 【2001年1月28日】第18回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催)◎東京  
 【2001年3月】第26回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)  
 【1999年4月～2001年】高校生の生活写真パネル展協力◎米国、オーストラリア、中国、英国\*18  
 【1999年4月～2001年12月】「**であい:7人の高校生の素顔**」制作\*19  
 【2001年3月～2002年7月】『**高校生からの中国語**』編集協力\*40

## 2001年度(平成13年度)

【4月～6月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力◎東京  
 【2001年4月～2004年3月】『**義務教育課程標準実験教科書日語**』編集協力\*51  
 【5月26-27日】日本語教育学会春季大会助成◎東京  
 【5月26-27日】異文化間教育学会第22回大会助成◎刈谷  
 【5月～2002年3月】Japan 2001写真展・コンテスト協力(Japan Festival Education Trust 主催)◎英国  
 【5月】**TJF Photo Data Bank ウェブサイト開設**  
 【6月30日～7月1日】全国高等学校中国語教育沖繩大会後援◎那覇  
 【6月】『**The Way We Are 2000 伝えたい私たちの素顔**』発行\*41  
 【7月21日】第25回中国語教育研究会助成◎東京  
 【7月26日～8月7日(通遼)、8月5-17日(長春)、8月8-20日(ハルビン)、8月2-14日(瀋陽)】**第6回中国中高校日本語教師研修会共催**(通遼会場:内蒙古教育学会外語教学研究会、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金/長春会場:吉林省教育学院、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金/ハルビン会場:黒龍江省教育学院、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金/瀋陽会場:遼寧教育学院、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金)◎中国/通遼、長春、ハルビン、瀋陽\*42  
 【7月】『**漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ**』(4冊)発行\*43  
 【7月～8月】**中国語、韓国語(第1期)特別講座開設協力**(神田外語大学主催)◎東京



## 2002年度(平成14年度)

\*44  
 【7月・9月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力◎東京  
 【7月～2002年2月】**第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト主催**\*45  
 【8月17日】韓日隣語教育ワークショップ協力(国際交流基金日本語国際センター主催)◎浦和  
 【8月】**朝鮮語科教員免許取得講座(第1期)開設協力**(天理大学主催)◎天理\*46  
 【8月】**中国語の教員免許法認定公開講座開設協力**(大阪外国語大学主催)◎大阪\*47  
 【8月～2002年3月】全国高等学校中国語教育研究会活動協力  
 【10月6-7日】日本語教育学会秋季大会助成◎大分  
 【10月～12月】全国中国語教育協議会教員セミナー協力◎東京  
 【11月16日】American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) 年次大会、セッション運営◎米国/ワシントンD.C.\*48  
 【11月23-24日】**第1回高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク全国交流会助成・後援**◎大阪  
 【11月～2004年10月】「**であい**」ワークショップ実施◎英国、オーストラリア、カナダ、韓国、ニュージーランド、米国  
 【12月2日】第19回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催)◎東京  
 【12月18-22日】**第1回韓国語を学んで韓国に行こうプログラム協力**(韓国国際教育振興院主催)◎韓国/ソウル\*49  
 【12月】「**であい**」キット完成\*19  
 【12月】**であいウェブサイト開設**  
 【12月～2004年5月】「**であい**」キットの寄贈◎英国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、ニュージーランド、米国ほか計30ヵ国\*50  
 【2002年2月2日】第26回中国語教育研究会助成◎東京  
 【2002年3月】第27回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)  
 【1999年4月～2001年】高校生の生活写真パネル展協力◎米国、オーストラリア、中国、英国\*18  
 【1999年4月～2001年12月】「**であい:7人の高校生の素顔**」制作\*19  
 【2000年4月～2002年3月】中国初等中等教育における日本語教育事情の調査実施(国際交流基金委託事業)\*29  
 【2001年3月～2002年7月】『**高校生からの中国語**』編集協力\*40



【4月】『**高校生のための韓国朝鮮語I 好きやねんハングル(試用版)**』出版助成\*52  
 【4月～2003年3月】高等学校中国語教育研究会活動協力  
 【4月～2003年7月】『**小学日語教材**』出版助成\*53  
 【5月24-25日】日本語教育学会春季大会助成◎東京  
 【6月1-2日】異文化間教育学会第23回大会助成◎埼玉  
 【6月29-30日】高等学校中国語教育全国大会後援(高等学校中国語教育研究会主催)◎東京  
 【6月】中国語教育学会第1回セミナー協力◎東京  
 【6月】『**The Way We Are 2001 伝えたい私たちの素顔**』発行\*54  
 【7月】『**高校生からの中国語**』出版助成\*40  
 【7月24-28日】第2回韓国語を学んで韓国に行こうプログラム協力(韓国国際教育振興院主催)◎韓国/ソウルほか\*49  
 【7月】『**漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ**』(全5冊)発行\*55  
 【7月～8月】中国語、韓国語(第1期)特別講座開設協力(神田外語大学主催)◎東京\*44  
 【7月～2003年2月】**第6回高校生の生活フォトメッセージコンテスト主催**\*56





- 【8月4-15日】第7回中国中高校日本語教師研修会共催(黒龍江省教育学院、国際交流基金)◎中国/ハルビン \*57
- 【8月5-17日】第1回高等学校韓国語教師研修会協力(韓国国際交流財団主催)◎韓国/ソウル \*58
- 【8月10-15日】高等学校中国語教師研修会後援(高等学校中国語教育研究会主催)◎中国/ハルビン
- 【8月16-17日】日中教師セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」主催◎中国/ハルビン \*59
- 【8月】朝鮮語科教員免許取得講座(第1期)開設協力(天理大学主催)◎天理 \*46
- 【8月】中国語の教員免許法認定公開講座開設協力(大阪外国語大学主催)◎大阪 \*47
- 【10月12-13日】日本語教育学会秋季大会助成◎高知
- 【11月23-24日】第2回高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク全国研修会助成・後援◎鹿児島
- 【11月～12月】高校生の生活フォトメッセージコンテスト作品制作ワークショップ実施◎東京、大阪
- 【12月2日】第20回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催)◎東京
- 【12月7日】フォーラム2002「日本における韓国語教育の現在」共催(駐日韓国文化院)◎東京
- 【12月21日】第3回高校生意見発表会後援(第4学区都立高校校長会、東京小石川ロータリークラブ主催)◎東京
- 【12月】ひだまりウェブサイト開設
- 【12月】小溪ウェブサイト開設
- 【2003年1月～2004年12月】日本の大学等における韓国朝鮮語教育の調査実施 \*60
- 【2003年2月】異文化間教育学会研修助成
- 【2003年3月1-2日】第1回異文化間教育研修会「異文化間での心理的援助」共催(異文化間教育協会)◎東京
- 【2003年3月8日】話してみよう韓国語 東京・大阪各大会後援(駐日韓国文化院、関西韓国文化弘報院主催)◎東京、大阪
- 【2003年3月】第28回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)
- 【2003年3月】中国語教育研究会記録作成助成
- 【2001年3月～2002年7月】『高校生からの中国語』編集協力 \*40
- 【2001年11月～2004年10月】「であい」ワークショップ主催◎英国、オーストラリア、カナダ、韓国、ニュージーランド、米国
- 【2001年12月～2004年5月】「であい」キットの寄贈◎英国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、ニュージーランド、米国ほか計30カ国 \*50
- 【2001年4月～2004年3月】『義務教育課程標準実験教科書日語』編集協力 \*51

## 2003年度(平成15年度)



- 【4月】『高校生のための韓国朝鮮語 I 好きやねんハングル(改訂試用版)』出版助成 \*52
- 【4月～2004年3月】高等学校中国語教育研究会活動協力
- 【4月～2004年8月】中国の小学校向け日本語副教材/パック制作協力 \*61
- 【5月24-25日】日本語教育学会春季大会助成◎東京
- 【5月31日～6月1日】異文化間教育学会第24回大会助成◎長野
- 【6月20-21日】高等学校中国語教育全国大会後援(高等学校中国語教育研究会主催)◎岡山
- 【6月】日本の大学等における韓国朝鮮語教育の調査の中間報告書を発行
- 【7月】『The Way We Are 2002 伝えたい私たちの素顔』発行 \*62
- 【7月～8月】中国語、韓国語特別講座(第1期)開設協力(神田外語大学主催)◎東



## 2004年度(平成16年度)



- 京 \*44
- 【7月～2004年2月】第7回高校生のフォトメッセージコンテスト主催 \*63
- 【8月4-8日】第3回韓国語を学んで韓国に行こうプログラム協力(韓国国際教育振興院主催)◎韓国/ソウルほか \*49
- 【8月4-16日】第2回高等学校韓国語教師研修会協力(韓国国際交流財団主催)◎韓国/ソウル \*58
- 【8月】中国語の教員免許法認定公開講座開設協力(大阪外国語大学主催)◎大阪 \*47
- 【9月～2004年3月】中国の東北三省・内蒙古自治区の日本語教育活動助成・協力◎中国/吉林省、黒龍江省、遼寧省、内蒙古自治区
- 【10月11-12日】日本語教育学会秋季大会助成◎大阪
- 【10月25-26日】第3回高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク全国研修会後援◎松本
- 【10月～12月】高校生のフォトメッセージコンテスト作品制作ワークショップ実施◎東京、大阪
- 【11月20-27日】高等学校中国語担当教員研修講師招聘◎東京ほか
- 【11月23日】第21回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催)◎東京
- 【12月6日】フォーラム2003「日韓の教育・草の根交流プログラムの現在」共催(駐日韓国文化院、国際交流基金アジアセンター)◎東京
- 【12月】隣語ウェブサイト開設
- 【2004年1月31日】第1回高等学校韓国語教育セミナー後援(駐日韓国文化院主催)◎鳥取
- 【2004年2月1日】高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会後援◎鳥取
- 【2004年2月14日(東京)、2月21日(大阪)】話してみよう韓国語 東京・大阪各大会後援(駐日韓国文化院、関西韓国文化弘報院主催)◎東京、大阪
- 【2004年2月】『高校生のための韓国朝鮮語 I 好きやねんハングル』出版協力 \*52
- 【2004年3月20日】第4回高校生意見発表会後援(第4地区都立高校校長会、東京小石川ロータリークラブ、東京後楽ロータリークラブ主催)◎東京
- 【2004年3月】第29回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)
- 【2004年3月28日～4月3日】第4次日本高校生交流代表団訪中プログラム協力(日本中国友好協会主催)◎中国/北京、上海 \*64
- 【2001年11月～2004年10月】「であい」ワークショップ主催◎英国、オーストラリア、カナダ、韓国、ニュージーランド、米国
- 【2001年12月～2004年5月】「であい」キットの寄贈◎英国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、ニュージーランド、米国ほか計30カ国 \*50
- 【2001年4月～2004年3月】『義務教育課程標準実験教科書日語』編集協力 \*51
- 【2002年4月～2003年7月】『小学日語教材』出版助成 \*53
- 【2003年1月～2004年12月】日本の大学等における韓国朝鮮語教育の調査実施 \*60

- 【4月】国際教育活動ネットワーク/REX-NET 設立協力
- 【4月～2005年3月】国際教育活動ネットワーク/REX-NET 活動協力
- 【4月～2005年3月】高等学校中国語教育研究会活動協力
- 【4月～2005年3月】『全日制普通高級中学教科書(試験本)日語』改訂版編集協力 \*7
- 【5月22-23日】日本語教育学会春季大会助成◎平塚
- 【5月29-30日】異文化間教育学会第25回大会助成◎京都
- 【5月】異文化間教育の授業に関するアンケート実施助成(異文化間教育学会主催)
- 【6月18-23日】日中の高校の中国語・日本語教師間の対話プログラム協力(高等学校中国語教育研究会主催)◎長崎、福岡
- 【6月19-20日】高等学校中国語教育全国大会後援(高等学校中国語教育研究会主催)◎長崎





- 【6月26-27日】国際教育活動ネットワーク／REX-NET 設立記念国際教育シンポジウム「学校現場から国際教育活動を見直すー日本および海外双方の視点から」助成(国際教育活動ネットワーク／REX-NET、東京外国語大学留学生日本語教育センター主催) ●東京
- 【6月】『日本の小学生生活』(日中併記版)発行 \*65
- 【7月25日～8月5日】第1回全中国小学校日本語教師研修会共催(遼寧省基礎教育教研培训中心) ●中国／瀋陽 \*66
- 【7月25日～8月16日】高等学校中国語担当教員研修協力(中国教育部、文部科学省主催) ●中国／長春、北京 \*67
- 【7月】『The Way We Are 2003 伝えたい私たちの素顔』発行 \*68
- 【7月】であいウェブサイト韓国朝鮮語版開設
- 【7月】The Way We Are : Photo Essays of High School Students in Japan ウェブサイト開設
- 【7月～2005年2月】第8回高校生のフォトメッセージコンテスト主催 \*69
- 【8月2-7日】第1回大学等韓国語教師研修会共催(韓国国際交流財団) ●京都
- 【8月9-21日】第3回高等学校韓国語教師研修会共催(韓国国際交流財団) ●韓国／ソウル \*58
- 【8月23-27日】第1回韓国語教師研修会共催(駐日韓国文化院) ●東京
- 【8月】中国の小学校向け日本語副教材バック寄贈協力 \*61
- 【8月】中国語の教員免許法認定講座開設協力(大阪外国語大学主催) ●大阪 \*47
- 【9月】『Takarabako』創刊 \*70
- 【9月】TJF Photo Data Bank 中国編ウェブサイト開設
- 【9月～12月】中国の東北三省・内蒙古自治区の日本語教育活動助成・協力 ●中国／吉林省、遼寧省、内蒙古自治区
- 【10月9-10日】日本語教育学会秋季大会助成 ●新潟
- 【10月16日】第2回高等学校韓国語教育セミナー後援(駐日韓国文化院主催) ●対馬
- 【10月17日】高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会後援 ●対馬
- 【10月】Takarabako ウェブサイト開設
- 【10月】であいフォトエッセイカフェウェブサイト開設
- 【10月～12月】高校生のフォトメッセージコンテスト作品制作ワークショップ実施 ●東京、大阪、奈良
- 【11月28日】第22回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催) ●東京
- 【12月27-30日】北京修学旅行セミナー共催(中国国家観光局東京、日本中国友好協会) ●中国／北京 \*71
- 【2005年1月】『ハンゲル@ホームステイ』出版助成 \*72
- 【2005年2月19日(東京)、2月26日(大阪)】話してみよう韓国語 東京・大阪各大会後援(駐日韓国文化院・関西韓国文化弘報院主催) ●東京、大阪
- 【2005年3月21日】第5回高校生意見発表会後援(第4地区都立高校校長会、東京小石川ロータリークラブ主催) ●東京
- 【2005年3月24日～4月4日】第5次日本高校生交流代表団訪中プログラム協力(日本中国友好協会主催) ●中国／北京、上海 \*73
- 【2005年3月】第30回国際理解教育賞論文助成(帝塚山学院大学国際理解研究所主催)
- 【2005年3月】『日本の小学生生活』(日英併記版)発行 \*74
- 【2001年11月～2004年10月】「であい」ワークショップ主催 ●英国、オーストラリア、カナダ、韓国、ニュージーランド、米国
- 【2001年12月～2004年5月】「であい」キットの寄贈 ●英国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、ニュージーランド、米国ほか計30カ国 \*50
- 【2003年1月～2004年12月】日本の大学等における韓国朝鮮語教育の調査実施 \*60
- 【2003年4月～2004年8月】中国の小学校向け日本語副教材バック制作協力 \*61

## 2005年度(平成17年度)



- 【4月】『日本の小学生生活』(日英併記版)寄贈 ●英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、米国
- 【4月】TJF Photo Data Bank 日本編ウェブサイトリニューアル \*75
- 【4月～2006年3月】国際教育活動ネットワーク／REX-NET 活動協力
- 【4月～2006年3月】高等学校中国語教育研究会活動協力
- 【5月21-22日】日本語教育学会春季大会助成 ●横浜
- 【5月28-29日】異文化間教育学会第26回大会助成 ●東京
- 【5月】日本の小学生生活ウェブサイト開設
- 【5月】『学びと交流の場づくり: 中国中高校日本語教師研修会プロジェクト1996-2002』発行 \*76
- 【5月】『日本の学校における韓国朝鮮語教育: 大学等と高等学校の現状と課題』発行 \*77
- 【6月17-22日】日中の高校の中国語・日本語教師間の対話プログラム後援(高等学校中国語教育研究会主催) ●札幌ほか
- 【6月18日】第2回国際教育シンポジウム「発信型教育の実践: 自分で考え表現し行動できる人づくり」助成(国際教育活動ネットワーク／REX-NET 主催) ●横浜
- 【6月18-19日】高等学校中国語教育全国大会後援(高等学校中国語教育研究会主催) ●札幌
- 【7月24日～8月15日】高等学校中国語担当教員研修共催(文部科学省、中国教育部、中国国家対外漢語教学指導小組弁公室) ●中国／長春、北京
- 【7月】『The Way We Are 2004 伝えたい私たちの素顔』発行 \*78
- 【7月】TJF Photo Data Bank 中国編ウェブサイトリニューアル \*75
- 【7月～2006年2月】第9回高校生のフォトメッセージコンテスト主催 \*79
- 【8月1-13日】第4回高等学校韓国語教師研修会共催(韓国国際交流財団) ●韓国／ソウル \*58
- 【8月9-14日】第2回大学等韓国語教師研修会共催(韓国国際交流財団、朝鮮語教育研究会) ●京都
- 【8月12-16日】高等学校中国語担当教員講座共催(大阪外国語大学地域連携室) ●大阪 \*80
- 【8月13-24日】第2回全中国小学校日本語教師研修会共催(遼寧省基礎教育教研培训中心) ●中国／瀋陽 \*81
- 【8月15-19日】第2回韓国語教師研修会共催(駐日韓国文化院) ●東京
- 【9月～11月】帰国子女・外国人子女写真コンクール「日本のびっくり! 日本のはてな?」後援(T-GAL 主催) ●横浜
- 【9月～12月】中国の東北三省・内蒙古自治区の日本語教育活動助成・協力 ●中国／吉林省、黒龍江省、遼寧省、内蒙古自治区
- 【10月8-9日】日本語教育学会秋季大会助成 ●金沢
- 【10月12日】フォーラム2005「なぜ韓国語を学ぶ若者がふえているのか」共催(駐日韓国文化院) ●東京
- 【10月15日(鳥取)、12月3日(青森)、2006年2月18日(大阪)、2月19日(東京)、2月26日(鹿児島)】話してみよう韓国語 鳥取・青森・大阪・東京・鹿児島各大会後援(鳥取: 駐日韓国文化院、鳥取県主催、青森: 駐日韓国文化院、青森県主催、大阪: 関西韓国文化弘報院、東京: 駐日韓国文化院主催、鹿児島: 鹿児島県大会実行委員会、開陽高校主催、駐日韓国文化院共催) ●鳥取、青森、大阪、東京、鹿児島
- 【10月17-23日】中国遼寧省教育代表団招聘 ●東京、神奈川、群馬 \*82
- 【10月22日】シンポジウム「高校・大学、中国語一貫教育の可能性を探る」後援(桜美林大学主催) ●東京
- 【10月～12月】高校生のフォトメッセージコンテスト作品制作ワークショップ主催 ●東京、大阪、奈良
- 【11月12日】第3回高等学校韓国語教育セミナー後援(駐日韓国文化院主催) ●横浜





- 【11月13日】高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会後援●横浜  
 【11月17-27日】**であいフォトエッセイカフェ交流プログラム「カフェおきなわ」主催**●  
 沖縄、東京、神奈川\*83  
 【11月27日】第23回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好協会主催)  
 ●東京  
 【12月11-16日】高校生のための韓国研修プログラム協力(韓国国際教育振興院主催)  
 ●韓国/ソウル、キョンジュ  
 【12月27-30日】**大連修学旅行セミナー共催**(日本中国友好協会)●中国/大連\*84  
 【2006年1月～2007年3月】**わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム「高等学校における中国語と韓国朝鮮語の目標・内容・方法に関する研究」実施**  
 (文部科学省委嘱事業)  
 【2006年2月】第6次日本高校生交流代表団訪中プログラム事前研修協力(日本中国  
 友好協会主催)●福岡\*85  
 【2006年3月18日】第6回高校生意見発表会後援(第4地区都立高校校長会、東京小  
 石川ロータリークラブ主催)●東京  
 【2006年3月】日本語教育学習研究センター(大連教育学院内)へ日本語教材ほか寄  
 贈●中国/大連

## 2006年度(平成18年度)



- 【4月～】つながるウェブサイト開設準備(2007年11月開設)  
 【4月～2007年3月】国際教育活動ネットワーク/REX-NET 活動協力  
 【4月～2007年3月】高等学校中国語教育研究会活動協力  
 【5月15-21日】**中国遼寧省教育代表団招聘**●東京、神奈川\*86  
 【6月16-18日】韓国高校中国語教師の招聘●大阪\*87  
 【6月17日】**第3回国際教育シンポジウム「グローバルな視点で今できること」助成**(国  
 際教育活動ネットワーク/REX-NET 主催)●大阪  
 【6月17-18日】高等学校中国語教育全国大会後援(高等学校中国語教育研究会主催)  
 ●大阪  
 【7月23日～8月14日】**高等学校中国語担当教員研修共催**(文部科学省、中国教育部、  
 中国国家対外漢語教学領導小組弁公室)●中国/長春、北京  
 【7月～8月】韓国語科教員免許取得講座(第2期)開設協力(天理大学主催)●天理  
 \*88  
 【7月】『The Way We Are 2005 伝えたい私たちの素顔』発行\*89  
 【7月～2007年2月】**第10回高校生のフォトメッセージコンテスト主催**\*90  
 【8月8-13日】**第3回大学等韓国語教師研修会共催**(韓国国際交流財団、朝鮮語教育研  
 究会)●京都  
 【8月10-12日】**高校中国語教員研修共催**(北九州市立大学)●北九州\*91  
 【8月12-16日】**高校中国語教員研修共催**(桜美林大学孔子学院)●東京\*92  
 【8月12-19日】**第3回全中国小学校日本語教師研修会共催**(遼寧省基礎教育教研培  
 訓中心、大連教育学院)●中国/大連\*93  
 【8月14-18日】**第3回韓国語教師研修共催**(駐日韓国文化院)●東京  
 【8月17-21日】**高等学校中国語担当教員講座共催**(大阪外国語大学地域連携室)●大  
 阪\*94  
 【8月20-24日】**大連市中学校日本語教師研修会共催**(大連教育学院)●中国/大連  
 \*95  
 【8月】日本語教育国際研究大会、招待パネルで「であい」について発表●米国/ニュー  
 ヨーク  
 【8月】韓国語特別講座(第2期)開設協力(神田外語大学主催)●東京\*96  
 【9月～12月】中国の東北三省・内蒙古自治区の日本語教育活動助成・協力●中国/  
 黒龍江省、遼寧省、内蒙古自治区



- 【9月～】高校生写真撮影交流プログラム「Focus on Japan 2007」準備(2007年8  
 月実施)\*97  
 【10月6-12日】**日中の高校の中国語・日本語教師間の対話プログラム共催**(神奈  
 川県高等学校中国語教育研究会、神奈川県日本中国友好協会)●神奈川\*98  
 【11月18日】第4回高等学校韓国語教育セミナー後援(駐日韓国文化院主催)●  
 広島  
 【11月19日】高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会後援●広島  
 【11月25日(青森)、12月16日(鳥取)、2007年2月18日(東京・大阪)、2月25日  
 (鹿児島))話してみよう韓国語 青森・鳥取・東京・大阪・鹿児島各大会後援(鳥  
 取:駐日韓国文化院、鳥取県主催、青森:駐日韓国文化院、青森県主催、大阪:  
 関西韓国文化弘報院、東京:駐日韓国文化院主催、鹿児島:鹿児島県大会実行  
 委員会、開陽高校主催、駐日韓国文化院共催)●青森、鳥取、東京、大阪、鹿  
 児島  
 【11月～12月】高校生のフォトメッセージコンテスト作品制作ワークショップ主催  
 ●東京、奈良  
 【12月9日】**フォーラム2006「私たちはなぜ韓国語・中国語を学ぶのか」共催**(駐  
 日韓国文化院、駐日中国大使館教育処)●東京\*99  
 【12月～】『第二外国語(日語)読本試行版 好朋友 ともだち1』共同編集・出版  
 助成(大連教育学院)\*100  
 【2007年1月4-6日】日本の高校中国語教育関係者の韓国派遣●韓国/ソウル  
 \*101  
 【2007年1月14日】第24回全日本中国語スピーチコンテスト後援(日本中国友好  
 協会主催)●東京  
 【2007年1月～】中国語を学ぶ高校生の中国短期研修準備(2007年8月実施)\*102  
 【2007年3月21日】第7回高校生意見発表会後援(発表会運営委員会主催)●東京  
 【2007年3月】『高校生のための韓国朝鮮語II 好きやねんハングル(試行版)』  
 編集助成\*103  
 【2007年3月】『高等学校の中国語と韓国朝鮮語:学習のめやす(試行版)』発行  
 \*104  
 【2006年1月～2007年3月】**わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プロ  
 グラム「高等学校における中国語と韓国朝鮮語の目標・内容・方法に関する研  
 究」実施**(文部科学省委嘱事業)

## 注記

- \*1 第2回中国中高校日本語教師研修会使用テキスト、全3冊、A4判、『類義表現の使いわけ』126ページ、『交際用語／動詞の整理』92ページ、『練習問題解答』12ページ
- \*2 後援：文部省、外務省、全日本写真連盟、(社)日本ユネスコ協会連盟、朝日新聞社  
協賛：(株)講談社、凸版印刷(株)
- \*3 中国語は1994年度に続き2回め、韓国朝鮮語は初めての調査、1999年6月に報告書発行
- \*4 助成：(財)三菱銀行国際財団  
後援：中国語教育委員会基礎教育司、課程教材研究所、遼寧教育学院、吉林省教育学院、延辺教育学院、黒龍江省教育学院、ハルビン市教育学院、大連外国語学院、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団  
協力：国際交流基金  
協賛：(株)アスク講談社、荒竹出版(株)、(株)アルク、(財)NHK インターナショナル、キングレコード(株)、(株)講談社、学校法人産能短期大学、(株)ジャパンタイムズ、(株)スリーエーネットワーク、全日本空輸(株)、(株)専門教育出版、(株)創拓社、(株)大修館書店、大連日本商工クラブ、日本通運(株)、(株)バベル、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社
- \*5 セッション「How Can Culture Be Taught in the Language Classroom?」
- \*6 日本の高校中国語教育ガイドライン、全国高等学校中国語教育研究会編・発行、A4判、20ページ、3,000部、1999年6月
- \*7 中国の高校用日本語教科書、全3冊、B5判、2色、第1冊：278ページ、1997年6月、第2冊：226ページ、1998年6月、第3冊：264ページ、1999年6月、人民教育出版社発行
- \*8 第3回中国中高校日本語教師研修会使用テキスト、全4冊、A4判、『発音／交際用語』(改訂版)112ページ、『類義表現の使いわけ』(改訂版)164ページ、『読解／動詞の整理』90ページ、『解答集』19ページ  
後援：外務省、文部省、都道府県教育長協議会、全日本写真連盟、(社)日本ユネスコ協会連盟、朝日新聞社  
協賛：(株)講談社、講談社インターナショナル(株)、凸版印刷(株)、富士写真フイルム(株)、松下電器産業(株)
- \*9 助成：(財)三菱銀行国際財団  
後援：中国語教育委員会基礎教育司、課程教材研究所、ハルビン市教育委員会、遼寧省教育委員会、吉林省教育委員会、内蒙古自治区教育厅、遼寧教育学院、吉林省教育学院、大連市教育学院、延辺教育学院、黒龍江大学、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団  
協力：国際交流基金  
協賛：荒竹出版(株)、(株)アルク、キングレコード(株)、(株)講談社、(株)小学館、全日本空輸(株)、(株)専門教育出版、(財)日本語教育振興協会、日本通運(株)、(株)バベル、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社
- \*10 セッション「How Can Culture Be Taught in a Foreign Language Classroom?」
- \*11 第1回日本の高校生の日常生活写真コンテスト作品集、A4判、カラー、64ページ、日英併記、3,000部(1999年度に3,000部増刷)
- \*12 A4判、128ページ、ルーズリーフ形式、英語版、1,000部(1999年度に1,500部増刷)
- \*13 米国高校用日本語教科書、島野雅俊(ニューハンプシャー州セント・ポールズ高校日本語教師)・津田和男(ニューヨーク国連高校日本語教師)著、レター判、カラー、576ページ、3,000部、2000年3月、Kisetsu Editorial Group 発行  
協賛：全日本空輸(株)
- \*14 A4判、128ページ、ルーズリーフ形式、日本語版、1,500部(1999年度に1,000部増刷)
- \*15 日本の高校の中国語教師向け情報誌、A4判、8ページ、1,000部(創刊時500部)
- \*16 セット内容：写真パネル、B2判、カラー、26枚、キャプション、カタログ付
- \*17 助成：米日財団、国際交流基金(講談社よりの寄付金を原資とした国際交流基金特定助成)、Japan 2001 実行委員会  
後援：米国 American Council on the Teaching of Foreign Languages, American Forum, Asia Society, Council of Chief State School Officers, National Council of Japanese Language Teachers, National Foreign Language Center, Program for Teaching East Asia; 英国 The Japan Festival Education Trust; オーストラリア Department of Education and Training, Victoria, Department of Education of Western Australia, Melbourne Centre for Japanese Language Education, Professional Support and Curriculum Directorate, New South Wales Department of Education and Training, Queensland LOTE Centre; ニュージーランド Association of Colleges of Education in New Zealand  
協賛：凸版印刷(株)
- \*20 A4判、72ページ、日中併記、4,000部
- \*21 A4判、68ページ、日韓併記、4,000部
- \*22 第2回高校生の生活写真コンテスト作品集、A4判、48ページ、日本語版(英語抄訳冊子付)、5,000部
- \*23 第4回中国中高校日本語教師研修会使用テキスト、A4判、256ページ
- \*24 後援：外務省、文部科学省、都道府県教育長協議会、全日本写真連盟、(社)日本ユネスコ協会連盟、(財)エイ・エフ・エス日本協会、朝日新聞社  
協賛：(株)講談社、講談社インターナショナル(株)、全日本空輸(株)、凸版印刷(株)、パイオニア(株)、富士写真フイルム(株)、富士フイルムアクシア(株)  
助成：(財)三菱銀行国際財団、国際交流基金  
後援：中国語教育委員会基礎教育司、課程教材研究所、吉林省教育学院、延辺朝鮮族自治州教育委員会、内蒙古自治区教育厅、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団  
協賛：(株)アルク、(株)講談社、(株)小学館、全日本空輸(株)、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社
- \*26 助成：(社)東京倶楽部
- \*27 中国の中高校の日本語教師向け情報誌、A4判、カラー、8ページ、1,800部(創刊時1,000部)
- \*28 セッション「The Indirect Personal Encounter: Bridging Language Instruction and Intercultural Education」
- \*29 調査報告書『中国日本語事情』を2002年3月に国際交流基金が発行
- \*30 第5回中国中高校日本語教師研修会使用テキスト、A4判、272ページ
- \*31 第3回高校生の生活フォトメッセージコンテスト作品集、A4判、一部カラー、48ページ、日本語版(英語抄訳冊子付)、5,000部
- \*32 協力：Center for Applied Japanese Language Studies
- \*33 後援：外務省、文部科学省、都道府県教育長協議会、全日本写真連盟、(社)日本ユネスコ協会連盟、(財)エイ・エフ・エス日本協会、朝日新聞社  
協賛：(株)講談社、講談社インターナショナル(株)、全日本空輸(株)、凸版印刷(株)、パイオニア(株)、富士写真フイルム(株)、富士フイルムアクシア(株)
- \*34 助成：(財)三菱銀行国際財団  
後援：中国語教育委員会基礎教育司、人民教育出版社、課程教材研究所、延辺朝鮮族自治州教育委員会、延辺教育学院、大連市教育委員会、遼寧教育学院、在中國日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団  
協賛：(株)アルク、(株)くろしお出版、(株)講談社、全日本空輸(株)、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社  
協賛：全日本空輸(株)
- \*35 A4判、128ページ、ルーズリーフ形式、日本語版、5,000部
- \*36 \*36の出版物の英語版、A4判、128ページ、ルーズリーフ形式、5,000部
- \*37 セッション「A New Photo-based Approach to Culture and Foreign Language Education」
- \*38 後援：American Council on the Teaching of Foreign Languages、在ボストン日本国総領事館  
協賛：(株)アルク、(株)紀伊國屋書店、講談社インターナショナル(株)、(社)国際日本語普及協会、(株)ジャパンタイムズ、(株)スリーエーネットワーク、全日本空輸(株)、日本出版貿易(株)、(株)凡人社
- \*39 小浜教材研究チーム編、B5判、96ページ、初版2,000部、2002年7月、白帝社発行
- \*40 第4回高校生の生活フォトメッセージコンテスト作品集、A4判、一部カラー、48ページ、日本語版(英語抄訳冊子付)、5,000部
- \*41 助成：(財)三菱銀行国際財団、国際交流基金(講談社よりの寄付金を原資とした国際交流基金特定助成)  
後援：人民教育出版社、課程教材研究所、内蒙古自治区教育厅、遼寧省教育厅、吉林省教育厅、黒龍江省教育厅、在中國日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団  
協賛：(株)アルク、(株)くろしお出版、(株)講談社、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社
- \*42 全4冊、B5判、①『発音』：106ページ、②『コミュニケーション表現』：202ページ、③『類義表現の使い分け』：356ページ、④『助詞の使い分け文例集』：156ページ、各400部発行
- \*43 教員免許取得を目的に開設された講座、講座期間：2001年～2003年
- \*44 後援：外務省、文部科学省、都道府県教育長協議会、全日本写真連盟、(社)日本ユネスコ協会連盟、(財)エイ・エフ・エス日本協会、朝日新聞社  
協賛：(株)講談社、講談社インターナショナル(株)、全日本空輸(株)、凸版印刷(株)、富士写真フイルム(株)、富士フイルムアクシア(株)
- \*45 講座期間：2001年～2002年
- \*46 講座期間：2001年～2004年
- \*47 セッション「A Brand-new Photo-based Resource "Deal"」
- \*48 協力：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク
- \*49 協賛：(株)近鉄エクスプレス、(株)商船三井、商船三井ロジスティクス(株)、全日本空輸(株)、ニュー



- ジールランド航空、ノースウェスト航空  
 協力：韓国日本語教育研究会、国際交流基金ソウル  
 日本文化センター、国際交流基金ロンドン事務所、  
 Association of Colleges of Education in New Zealand、  
 英国 The Japan Festival Education Trust, オーストラリア  
 Department of Education and Training, Victoria,  
 Department of Education of Western Australia,  
 Melbourne Centre for Japanese Language Education,  
 Professional Support and Curriculum Directorate, New  
 South Wales Department of Education and Training,  
 Queensland LOTE Centre
- \*51 中国の中学校用日本語教科書、全6冊、B5判、2色、  
 7年級上：112ページ、2002年8月、7年級下：110ペー  
 ジ、2002年10月、8年級上：110ページ、2003年8月、  
 8年級下：112ページ、2003年12月、9年級上：108ペー  
 ジ、2005年8月、9年級下：162ページ、2005年10月、  
 人民教育出版社発行
- \*52 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク西ブロック「学  
 習のめやす」研究チーム制作、B5判、試用版：103ペー  
 ジ、1,500部、2002年4月、改訂試用版：103ページ、  
 1,500部、2003年4月、市販本初版：104ページ、1,500  
 部、2004年2月発行、二刷：2,000部、2005年、三刷：  
 1,500部、2006年、四刷：1,500部、2007年、白帝社  
 発行
- \*53 中国の小学校用日本語教科書、遼寧省基礎教育教研  
 培訓中心編、全4冊、B5判、カラー、第1冊、第2冊：  
 2002年7月、第3冊、第4冊：2003年7月発行
- \*54 第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト作品  
 集、A4判、一部カラー、52ページ、日本語版（英語  
 抄訳冊子付）、5,000部
- \*55 全5冊、①『発音』②『コミュニケーション表現』③  
 『類義表現の使い分け』④『助詞の使い分け文例集』  
 ⑤『発音指導の手引き』、B5判、計916ページ、①②  
 ⑤音声テープ付、①②日本語、③④⑤日中併記、各  
 3,000部  
 助成：国際交流基金（講談社よりの寄付金を原資と  
 した国際交流基金特定助成）、（社）東京倶楽部  
 協賛：キングレコード（株）
- \*56 後援：外務省、文部科学省、全国都道府県教育長協  
 議会、全日本写真連盟、（社）日本ユネスコ協会連盟、  
 （財）エイ・エフ・エス日本協会、朝日新聞社  
 協賛：（株）講談社、全日本空輸（株）、凸版印刷（株）、  
 富士写真フイルム（株）、富士フイルムイメージング（株）
- \*57 助成：（財）三菱銀行国際財団、国際交流基金（講談社  
 よりの寄付金を原資とした国際交流基金特定助成）  
 後援：中国教育学会外語教学研究会、課程教材研究  
 所、内蒙古教育学会外語教学研究会、吉林省教育  
 学院、遼寧教育學院、内モンゴル自治区教育庁、吉林省教  
 育庁、黒龍江省教育庁、遼寧省教育庁、在中国日本  
 国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団  
 協賛：キングレコード（株）、（株）講談社、全日本空  
 輸（株）、学校法人文化学園文化外国語専門学校、（株）  
 凡人社
- \*58 実施：ソウル大学言語教育院
- \*59 助成：国際交流基金（講談社よりの寄付金を原資とし  
 た国際交流基金特定助成）
- \*60 助成：（社）東京倶楽部、2005年5月報告書発行
- \*61 セット内容：五十音表・絵カード・地図・遊具等37点、  
 使い方ビデオ1本、冊子『使い方の手引き』A4判、32  
 ページ、日中併記  
 2004年度に外務省所管の「草の根無償資金協力プロ  
 グラム」により小学校65校に寄贈
- \*62 第6回高校生の生活フォトメッセージコンテスト作品集、  
 A4変型判、一部カラー、64ページ、日本語版、4,000  
 部
- \*63 後援：外務省、文部科学省、全国都道府県教育長協  
 議会、全日本写真連盟、（社）日本ユネスコ協会連盟、  
 （財）エイ・エフ・エス日本協会、朝日新聞社  
 協賛：（株）講談社、全日本空輸（株）、凸版印刷（株）、  
 富士写真フイルム（株）、富士フイルムアクシア（株）
- \*64 派遣：外務省 受入：中国教育部
- \*65 協力：東京ゼロックス（株）  
 セット内容：写真シート、A3判、カラー、35枚、冊  
 子『日本の小学生生活』A4判、一部カラー、108ペー  
 ジ、日中併記、音声テープ1本、200セット制作
- \*66 助成：（財）三菱銀行国際財団、国際交流基金  
 後援：吉林省教育学院、黒龍江省教育学院、中国教  
 育学会外語教学專業委員会、課程教材研究所、在中  
 国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力  
 機構
- \*67 実施：中国国家対外漢語教学領導小組弁公室
- \*68 第7回高校生のフォトメッセージコンテスト作品集、A4  
 変形判、一部カラー、64ページ、日本語版、4,000部  
 後援：外務省、文部科学省、全国都道府県教育長協  
 議会、全日本写真連盟、（社）日本ユネスコ協会連盟、  
 朝日新聞社  
 協賛：（株）講談社、全日本空輸（株）、凸版印刷（株）、  
 富士写真フイルム（株）、富士フイルムイメージング（株）
- \*70 英語圏の小中高校の日本語・日本理解教育関係者向  
 け情報誌、A4判、カラー、8ページ、6,000部  
 協力：全日本空輸（株）
- \*71 高校生のための韓国語会話手帳、A5ポケット判、121  
 ページ、初版3,500部、2005年1月、白帝社発行、1,200  
 部購入
- \*73 派遣：外務省 受入：中国教育部
- \*74 助成：国際交流基金  
 協力：東京ゼロックス（株）  
 セット内容：写真シート、A3判、カラー、35枚、冊子『日  
 本の小学生生活』A4判、一部カラー、86ページ、日  
 英併記、CD-ROM1枚、200セット制作
- \*75 助成：国立国語研究所。日英中3言語での検索システ  
 ムを開発
- \*76 A4判、136ページ、1,000部
- \*77 A4判、192ページ、日韓併記、3,000部  
 助成：駐日韓国大使館教育官室、韓国教育財団、（社）  
 東京倶楽部
- \*78 第8回高校生のフォトメッセージコンテスト作品集、A4  
 変型判、一部カラー、64ページ、日本語版、4,000部  
 後援：外務省、文部科学省、全国都道府県教育長協  
 議会、全日本写真連盟、（社）日本ユネスコ協会連盟、  
 朝日新聞社  
 協賛：（株）講談社、全日本空輸（株）、凸版印刷（株）、  
 富士写真フイルム（株）、富士フイルムイメージング（株）
- \*80 後援：文部科学省、駐日中国大使館教育処、在大阪中  
 国総領事館教育室
- \*81 助成：（財）三菱銀行国際財団、（社）尚友倶楽部  
 後援：吉林省教育学院、黒龍江省教育学院、中国教  
 育学会外語教学專業委員会、課程教材研究所、在中  
 国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力  
 機構
- \*82 助成：（財）三菱銀行国際財団
- \*83 助成：国際交流基金、駐日韓国大使館韓国文化院  
 後援：外務省、全国都道府県教育委員会連合会、在  
 日米国大使館、豪日交流基金、在日ニュージーラン  
 ド大使館、ブリティッシュ・カウンシル、米日財団  
 協力：沖縄県伊是名村、沖縄県伊是名村教育委員会、  
 神奈川県立外語短大付属高校、東京農業大学第一高  
 校、東洋英和女学院、横浜市立横浜商業高校  
 協賛：ヴァージンアトランティック航空、カンタス航  
 空、ニュージーランド航空、中国国際航空、富士フイ  
 ルムイメージング（株）
- \*84 後援：中国国家観光局東京  
 協力：全日本空輸（株）
- \*85 派遣：外務省、受入：中国教育部
- \*86 助成：（財）三菱銀行国際財団
- \*87 助成：（財）かめのり財団
- \*88 講座期間：2006年～2007年
- \*89 第9回高校生のフォトメッセージコンテスト作品集、A4  
 変型判、一部カラー、64ページ、日本語版、4,000部  
 後援：外務省、文部科学省、全国都道府県教育委員  
 会連合会、全日本写真連盟、（社）日本ユネスコ協会  
 連盟、朝日新聞社  
 協賛：（株）講談社、全日本空輸（株）、凸版印刷（株）、  
 富士フイルム（株）、富士フイルムイメージング（株）
- \*91 後援：駐日中国大使館教育処、在福岡中国総領事館
- \*92 後援：駐日中国大使館教育処  
 協力：中国国家対外漢語教学領導小組弁公室
- \*93 助成：（財）三菱銀行国際財団、（社）尚友倶楽部  
 後援：大連市教育局、吉林省教育学院、黒龍江省教  
 育学院、中国教育学会外語教学專業委員会、課程教  
 材研究所、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領  
 事館在大連出張駐在官事務所、国際協力機構中国事  
 務所、日本国際交流基金会北京事務所
- \*94 後援：在大阪中国総領事館教育室  
 協力：中国国家対外漢語教学領導小組弁公室
- \*95 助成：（財）かめのり財団  
 第2回研修会を2007年8月に共催（大連教育学院）  
 助成：（財）かめのり財団、（社）尚友倶楽部  
 後援：大連市教育局、在瀋陽日本国総領事館在大連  
 出張駐在官事務所、国際協力機構中国事務所  
 協力：日本国際交流基金会北京事務所
- \*96 教員免許取得を目的に開設された講座、講座期間：  
 2006年～2008年
- \*97 助成：日本万国博覧会記念機構、国際交流基金  
 後援：外務省、文部科学省、全国都道府県教育委員  
 会連合会、全日本写真連盟、（社）日本ユネスコ協会  
 連盟、朝日新聞社、（社）全国高等学校文化連盟  
 協賛：（株）講談社、（株）情報センター出版局、凸版  
 印刷（株）、ニコンカメラ販売（株）
- \*98 助成：（財）三菱銀行国際財団、（財）かめのり財団
- \*99 後援：朝日新聞社
- \*100 中国大連市の中学校第二外国語教育用日本語教科書、  
 大連教育学院編、B5判、126ページ、CD-ROM1枚、  
 5,000部、2007年8月、外語教学与研究出版社発行  
 助成：アクセンチュア（株）、（財）かめのり財団、（社）  
 尚友倶楽部、セコム（株）、（財）三菱銀行国際財団
- \*101 助成：（財）かめのり財団
- \*102 主催：中国国家漢語国際推広領導小組弁公室  
 実施：TJF  
 後援：在中国日本国大使館、中国教育部、在日本中  
 国大使館  
 協力：文部科学省  
 現地受け入れ機関：北京市国際教育交流中心、大連  
 市教育局
- \*103 B5判、76ページ、350部、白帝社発行
- \*104 文部科学省委嘱事業の成果として発行、A4判、178  
 ページ、3,000部

## TJF 出版物：1997-2006



① 創刊年月あるいは発行年、発行形態 ② 判型、ページ数、色数 ③ 言語 ④ 発行部数 ⑤ 対象読者 ⑥ 内容 ⑦ URL  
1987年度から1996年度までの事業の詳細は、国際文化フォーラム設立10周年記念『ことばと文化 相互理解をめざして』をご参照ください。



### 機関誌『国際文化フォーラム通信』

- ① 1987年12月創刊、季刊
- ② A4判、16ページ、2色
- ③ 日本語
- ④ 5,000部
- ⑤ 国内の外国語教育(中国語・韓国朝鮮語・英語)、日本語教育、国際理解教育、文化交流などに携わる関係者・機関、報道関係者、一般の希望者。
- ⑥ 財団の機関誌。毎号事業に関連したテーマで特集を組み、事業の根底にある理念もあわせて紹介。また、シリーズ「見る聞く考えるやってみる授業」、財団の活動を報告する「TJF ニュース」などを掲載。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/newsletter/index.htm>



### 機関誌『The Japan Forum Newsletter』

- ① 1993年10月創刊、2004年6月休刊、季刊
- ② A4判、16ページ、2色(隔号で年2回は8ページ4色)
- ③ 英語
- ④ 6,000部
- ⑤ 英語圏の中小高校で日本語教育、日本理解教育、国際理解教育に携わる教師など。
- ⑥ 財団の英文機関誌。隔号で事業に関連したテーマの特集を組み、事業の根底にある理念もあわせて紹介。また、シリーズ「A Day in the Life」「The Way We Are」「Japanese Culture Now」「Meeting People」などで、日本語教師や学習者のための情報や教材となる素材を提供。
- ⑦ [http://www.tjf.or.jp/newsletter/backissueslist\\_en.htm](http://www.tjf.or.jp/newsletter/backissueslist_en.htm)



### 情報誌『小溪』

- ① 1999年4月創刊、季刊
- ② A4判、8ページ、1色
- ③ 日本語(一部中国語)
- ④ 1,000部
- ⑤ 中国語教育に取り組む日本の高校の中国語担当教師、大学の中国語教育関係者、日中友好クラス交流に取り組む中国の日本語教師など。
- ⑥ 「中国語で語る私たちの生活」(生徒が自分について語れるようになる授業のヒント)、「授業の工夫」(文化理解をめざす授業の実践例)、「中国の高校生」(日本語を学ぶ中国の高校生をエッセイと写真で紹介)のシリーズほかで誌面を構成。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/xiaoxi.htm>



### 情報誌『ひだまり』

- ① 1999年10月創刊、季刊
- ② A4判、8ページ、4色
- ③ 中国語(一部日本語)
- ④ 1,800部
- ⑤ 中国の中高校の日本語教師、教育学院の日本語指導主事など。
- ⑥ 「人物探訪」(日本に住んでいる10代の若者を紹介)、「今日日本」(最近の日本の社会文化事情を紹介)、「教法指点」(「人物探訪」や「今日日本」を素材として使った授業のヒントを提示)のシリーズほかで誌面を構成。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/hidamari/index.htm>



### 情報誌『Takarabako』

- ① 2004年9月創刊、季刊
- ② A4判、8ページ、4色
- ③ 英語
- ④ 6,000部
- ⑤ 英語圏の中小高校で日本語教育、日本理解教育、国際理解教育に携わる教師など。
- ⑥ 「Japanese Culture Now」(最近の日本の社会文化事情を紹介)、「Meeting People」(日本に住んでいる10代の若者を紹介)、「Access This Page!」(TJFのウェブコンテンツを紹介)のシリーズほかで誌面を構成。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/takarabako/index.htm>



## 『Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture: Selected Lesson Plans from the 1997 TJF Contest II』



- ① 1998年11月
- ② A4判、128ページ、1色
- ③ 英語
- ④ 1,000部(1999年度に1,500部増刷)
- ⑤ 小中高校の日本語・日本理解教育に携わる教師など。
- ⑥ 第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストの入賞作品ほか、授業案20点を掲載。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/eng/content/ideacontest/index.html>

## 『第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集』



- ① 1999年3月
- ② A4判、128ページ、1色
- ③ 日本語
- ④ 1,500部(1999年度に1,000部増刷)
- ⑤ 小中高校の日本語・日本理解教育に携わる教師など。
- ⑥ 第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストの入賞作品ほか、授業案20点を掲載。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/jp/content/ideacontest/index.html>

第1回コンテストの作品集『異文化理解のための日本語の授業実例集』(英語版、日本語抄訳付)は1996年に発行

## 『Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture: Selected Lesson Plans from the 1999 TJF Contest III』



- ① 2000年10月
- ② A4判、128ページ、1色
- ③ 英語
- ④ 5,000部
- ⑤ 小中高校の日本語・日本理解教育に携わる教師など。
- ⑥ 第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストの入賞作品ほか、授業案20点を掲載。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/eng/content/ideacontest/index.html>

## 『第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集』



- ① 2000年10月
- ② A4判、128ページ、1色
- ③ 日本語
- ④ 5,000部
- ⑤ 小中高校の日本語・日本理解教育に携わる教師など。
- ⑥ 第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストの入賞作品ほか、授業案20点を掲載。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/jp/content/ideacontest/index.html>

## 写真教材「であい：7人の高校生の素顔」



- ① 2001年12月
- ② 写真シート：A3判、192枚、4色、冊子：A4判、308ページ、1色、CD-ROM：2枚
- ③ 日英併記
- ④ 3,000部
- ⑤ 日本語・日本理解教育に携わる中高校の教育関係者、日本語や国際理解教育に関心のある海外の中高校生など。
- ⑥ 実在する日本の高校生7人の人物像と日常生活の様子を、写真と文章で紹介。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/deai/index.html>

・英文タイトル「Deai: The Lives of Seven Japanese High School Students」

## 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」

- ① 2002年7月
- ④ 3,000部
- ⑤ 中国語(漢語)を母語とする日本語学習者とその指導者ほか。



### 1『発音』

- ② B5判、106ページ、1色、音声テープ2本付
- ③ 日本語
- ④ 母語干渉の観点から注意すべき発音などを解説。一部の項目について、漢語話者と朝鮮語話者別に解説。



### 2『コミュニケーション表現』

- ② B5判、202ページ、1色、音声テープ1本付
- ③ 日本語(一部中国語)
- ④ 日常のコミュニケーションに必要な表現を「あいさつ」「誘い」「勧め」「申し出」「依頼」「許可」などの機能別に整理。



### 3『類義表現の使い分け』

- ② B5判、356ページ、1色
- ③ 日中併記
- ④ 漢語話者が間違いやすい語彙・表現65項目について、用法を基本から応用までステップ別に解説。



### 4『助詞の使い分け文例集』

- ② B5判、156ページ、1色
- ③ 日中併記
- ④ 文例を通じて基本動詞と助詞の関係を提示。



### 5『発音指導の手引き』

- ② B5判、96ページ、1色、音声テープ1本付
- ③ 日中併記
- ④ 漢語話者が日本語の音声を学習するときに陥りやすい問題点とその解決法を解説。朝鮮語話者の問題点をコラムで紹介。

## 写真教材「日本の小学生生活」(日中併記版)

- ① 2004年6月
- ② 写真シート：A3判、35枚、4色、冊子：A4判、108ページ、1色(一部4色)、音声テープ：1本
- ③ 日中併記
- ④ 200セット
- ⑤ 中国の小学校の日本語教師。
- ⑥ 日本の小学生の生活を写真・文章・音声などで紹介。
- ⑦ [http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index\\_c.htm](http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index_c.htm)

・中文タイトル「日本的小学生生活」

## 写真教材「日本の小学生生活」(日英併記版)

- ① 2005年3月
- ② 写真シート：A3判、35枚、4色、冊子：A4判、86ページ、1色(一部4色)、CD-ROM：1枚
- ③ 日英併記
- ④ 200セット
- ⑤ 英語圏の小学校の日本語教師。
- ⑥ 日本の小学生の生活を写真・文章・音声などで紹介。
- ⑦ [http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index\\_e.htm](http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index_e.htm)

・英文タイトル「The Lives of Japanese Elementary School Students」

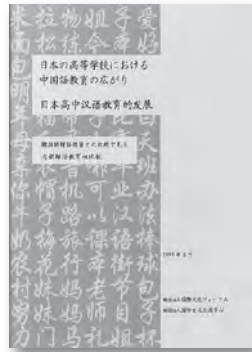


## 『学びと交流の場づくり：中国中高校日本語教師研修会プロジェクト1996-2002』



- ① 2005年5月
- ② A4判、136ページ、1色
- ③ 日本語
- ④ 1,000部
- ⑤ 中国の日本語教育ならびに日本語教師養成・研修に携わる教育関係者。
- ⑥ 中国中高校日本語教師研修会(1996年度-2002年度)の参加者へのアンケートをもとに、同研修会の成果と課題を総括。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/hidamari/pdf/manabikoryu01-04.pdf>

## 『日本の高等学校における中国語教育の広がり：韓国朝鮮語教育との比較で見る』



- ① 1999年6月
- ② A4判、72ページ、1色
- ③ 日中併記
- ④ 4,000部
- ⑤ 中国語教育に取り組む日本の高校、教育行政機関、中国の外国語としての中国語教育および日本語教育の関係者。
- ⑥ 1997-1998年度に実施した高校の中国語と韓国朝鮮語教育調査結果をデータと実践例で紹介しながら、二つの言語をめぐる現状と問題点を提示。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/ij100report.htm>

## 『高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす(試行版)』



- ① 2007年3月
- ② A4判、178ページ、1色
- ③ 日本語
- ④ 3,000部
- ⑤ 都道府県教育委員会の外国語教育担当者、高校と大学の中国語・韓国朝鮮語教育関係者。
- ⑥ 外国語教育への一つの提案として、高校の中国語教育および韓国朝鮮語教育の学習目標・内容・方法を具体的な指標や実践例で提示。
- ⑦ <http://www.tjf.or.jp/publication/wakaru/meyasu2007v00.html>

## 『日本の高等学校における韓国朝鮮語教育：中国語教育との比較で見る』



- ① 1999年6月
- ② A4判、68ページ、1色
- ③ 日韓併記
- ④ 4,000部
- ⑤ 韓国朝鮮語教育に取り組む高校の教師ほか関係者、日本と韓国の外国語教育および教育行政機関の関係者ほか。
- ⑥ 日本で初の高校の韓国朝鮮語教育に関する実態調査の報告。
- ⑦ [http://www.tjf.or.jp/korean/chousa/ch1999\\_j.htm](http://www.tjf.or.jp/korean/chousa/ch1999_j.htm)

## 『日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題』



- ① 2005年5月
- ② A4判、192ページ、1色
- ③ 日韓併記
- ④ 3,000部
- ⑤ 韓国朝鮮語教育に取り組む大学等と高校の教師ほか関係者、日本と韓国の外国語教育および教育行政機関の関係者ほか。
- ⑥ 日本で初の大学等と高校の韓国朝鮮語教育に関する実態調査の報告。
- ⑦ [http://www.tjf.or.jp/korean/chousa/ch2005\\_j.htm](http://www.tjf.or.jp/korean/chousa/ch2005_j.htm)

## 『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』

- ⑤ 日本語を学習している海外の高校生、国内の高校生など。
- ⑥ 高校生のフォトメッセージコンテスト(1997年度-2006年度)に入賞した作品ほかの写真とメッセージを掲載。
- ⑦ [http://www.tjf.or.jp/photocon/pastwork/b\\_2006.htm](http://www.tjf.or.jp/photocon/pastwork/b_2006.htm)  
<http://www.tjf.or.jp/thewayweare/>



### 『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are』

- ① 1998年11月
- ② A4判、64ページ、4色
- ③ 日英併記
- ④ 3,000部(1999年度に3,000部増刷)



### 『The Way We Are 2002 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2003年7月
- ② A4変型判、64ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語
- ④ 4,000部



### 『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 1998』

- ① 1999年6月
- ② A4判、48ページ、1色
- ③ 日本語(英語抄訳を別冊にした)
- ④ 5,000部



### 『The Way We Are 2003 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2004年7月
- ② A4変型判、64ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語
- ④ 4,000部



### 『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 1999』

- ① 2000年6月
- ② A4判、48ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語(英語抄訳を別冊にした)
- ④ 5,000部



### 『The Way We Are 2004 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2005年7月
- ② A4変型判、64ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語
- ④ 4,000部



### 『The Way We Are 2000 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2001年6月
- ② A4判、48ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語(英語抄訳を別冊にした)
- ④ 5,000部



### 『The Way We Are 2005 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2006年7月
- ② A4変型判、64ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語
- ④ 4,000部



### 『The Way We Are 2001 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2002年6月
- ② A4判、52ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語(英語抄訳を別冊にした)
- ④ 5,000部



### 『The Way We Are 2006 伝えたい私たちの素顔』

- ① 2007年7月
- ② A4変型判、64ページ、1色(一部4色)
- ③ 日本語
- ④ 3,000部



## 『国際文化フォーラム通信』

## 【特集】一覧

第35号 1997年7月



## 設立10周年を迎えて—設立10周年記念特別座談会：言葉と文化を考える外国語教育と文化理解の視点から

設立10周年にTJFの理念と事業内容を再確認するため、プログラムの骨格をなす言語教育と文化理解促進について、社会言語学ほかの専門家による座談会を開催。ことばと文化を結びつける事業を展開する基本的な問題を確認した

第36号 1997年9月



## 世界の人びとと手をたずさえて—設立10周年記念特別寄稿：国際文化フォーラムに期待するもの

設立10周年を記念し、前号に続いて過去10年におけるTJFの歩みを振り返り、将来を展望した。TJFのために知恵と力を提供してくださった国内外の人びとからTJFに期待するものと題して寄せられたメッセージを掲載した

第37号 1997年12月



## 国際交流と外国語・文化理解教育をリンクする

外国語教育や文化理解教育の果たす役割は大きく、その日常的な実践と海外の学校との交流プログラムを一体化させる効果ははかりしれない。海外の学校と交流している日本の高校を取り上げ、国際交流の可能性と課題を探った

第38号 1998年3月



## 外国語の授業をおもしろくする—「文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」を開催して

TJFが1995年度に開催した第1回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストの初等・中等部門で特賞を受賞した教師の授業を紹介。コンテストに寄せられたさまざまな実践例を含め、どのような授業方法が可能かを示した

第39号 1998年6月



## 飾らない自分を伝えたい—「日本の高校生の日常生活写真コンテスト」を開催して

コンテストでは高校生の視点からとらえた日常生活の記録をフォトメッセージとして海外に届けることを目的としている。上位入賞者がコンテストの課題をいかに受けとめ、写真と文章でどう表現しようとしたか、わかりやすく紹介した

第40号 1998年9月



## 隣国のことばと文化を学ぶ—中国語・韓国朝鮮語教育に取り組む高等学校

1994年度に中国語教育を実施する高校の第1回調査を実施したTJFは、1997年度に中国語の第2回調査を実施し、高校における第1回の韓国朝鮮語の調査も実施した。調査結果からうかがえる高校の中国語教育と韓国朝鮮語教育の状況を紹介した

第41号 1998年12月



## 文化の謎解きを楽しもう—日本の高等学校における文化理解をめざした外国語の授業例

日本の高校で外国語教育に携わる教師4人の文化理解に関する授業例を取り上げ、外国語を学ぶことで生徒が他文化に興味を抱くことが重要であり、文化を取り入れることで外国語に対する関心も高まることを検証した

第42号 1999年3月



## 教室を“出会い”の場に—米国の日本語教師が取り組む教材づくり

観察力、分析力、想像力、表現力などの基礎能力を育む授業をめざす日本語教師の取り組みを取り上げ、文化理解の過程の一つとして、生徒が異なった国々のさまざまな人物と出会う疑似体験をさせる教材づくりを紹介した

第43号 1999年7月



## 伝えあう場をつくりたい—高校生の生活写真コンテストの開催を通じて

第1回・第2回の高校生の生活フォトメッセージコンテストに参加した教師や高校生の声を通じて、海外の若い世代の日本理解と、日本の同世代間の相互理解をもたらすというコンテストのもつ教育的な可能性を探った

第44号 1999年10月



## 子どもたちにことばを教える—文化理解をめざした外国語教育の意味と方法

第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト(1997年度)の特賞受賞者を招聘した際に、外国語教育と文化理解・国際理解教育に携わる教師をパネリストに迎え、ことばを教える意味について考えるセミナーを開催。その内容を紹介した

第45号 2000年1月



## 隣国のことばが結ぶ人と人のつながり—高等学校韓国朝鮮語教育ネットワークの結成

隣国とすることばに対する思いを共有する日本の高校教師が中心となって1999年8月に結成された全国ネット。その設立前後のいきさつを紹介し、高校の韓国朝鮮語教育を支える教師たちの思いを伝えた

第46号 2000年4月



## 交流を日々の授業に生かす—日中友好クラス交流の取り組みから

中国語の授業のほか、国語や道徳の授業など、交流プログラムと授業の連携が広がりにつつある。それを実践する日本の中高校の教師の事例を紹介し、日中間の「友好クラス交流」プログラムの可能性を探った

第47号 2000年7月



## どうして日本語を学ぶの?—米国ウィスコンシン州の小学校の取り組み

初等教育課程に外国語教育を導入している米国において日本語教育を実施している小学校の取り組みを特集。米国の子どもが日本語を学ぶ理由を探り、初等教育課程に外国語教育を導入する社会的な背景と意味を検討した

第48号 2000年10月



## 隣国のことばに魅せられた教師と生徒たち—高等学校における韓国朝鮮語の授業実践

日本の高校教育における韓国朝鮮語教育のあらましを振り返るとともに、高校の韓国朝鮮語教師の取り組みを紹介しながら、日本の高校における韓国朝鮮語の授業を紹介した

第49号 2001年1月



## 映画を使った外国語の授業

映画をさまざまな視点から取り上げ、魅力的な授業を行っている日本の外国語教師たちの実践例を紹介し、デジタル化時代の外国語教育で素材として使うことができる映画の可能性を探った

第50号 2001年4月



## いま写真に注目するわけ—外国語教育における文化理解の素材としての写真の魅力

インターネットを使って写真を提供する可能性を検討し、海外の小中高校の日本語クラスで望まれている写真教材、写真がもつ教材としての魅力と初等中等教育の外国語教育における効用について考えた

第51号 2001年7月



## 友だちを撮影して発見したこと—授業で取り組んだ「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」

国際理解、美術、英語などの授業で作品づくりを行うなど、各教科の教師がコンテストを授業のなかに位置づけようとしている。これらの授業を紹介し、作品づくりを通じて生徒が学び考えたこと、コンテストの課題と展望を探った

第52号 2001年10月



## 文化の学び方を再考する

日本語教育や言語教育において、文化理解を取り入れる方法や、文化の背景にあるものの考え方、価値観などを考察させる方法と体験について、文化人類学、社会科教育、日本語教育の専門家がそれぞれの事例を紹介した

第53号 2002年1月



## 写真教材「であい」ついに完成!—『であい：7人の高校生の素顔』発行

主人公である日本の高校生7人の生いたち、大切なこと、将来の夢、家族や友だち、住んでいる場所、現在の生活などについて写真や文章、ビデオで紹介する教材「であい」を紹介した

第54号 2002年4月

**高校時代に韓国朝鮮語を学ぶ—高校教師たちのネットワークがめざすもの**

韓国朝鮮語教育に携わる高校教師を中心とする全国ネットとしてJAKEHSが設立されて3年、会員数が増え、事業内容が多角化した。ネットワークの活動を一つの運動としてとらえ、その活動の基盤を検証した

第59号 2003年7月

**写真で伝える、写真でつながる—7年目のフォトメッセージコンテスト**

高校生のフォトメッセージコンテストでは、友だちを深く観察し、自分を問直す作品が増え、授業で作品づくりに取り組む教師も増えた。参加者が考え学んだこと、教師や審査員が高校生に期待するものを検証した

第55号 2002年7月

**世界に届いた日本の高校生の素顔—海外の若者からの反響とメッセージ**

英国の公益法人JFETは、TJFのフォトメッセージコンテストの作品の展覧会を開催すると同時に、英国の高校生フォトメッセージコンテストを実施した。英国の高校生の作品を紹介するとともに日本の高校生の姿がどう受けとめられたかをまとめた

第60号 2003年10月

**高等学校の授業に広く韓国朝鮮語を—外国語および他の科目の授業例**

総合的な学習の時間の授業で隣国の文化に触れる試み、地方自治体の交流プログラム、韓国の学校との姉妹校交流や修学旅行の試みなど、多様化している隣国やそのことばの学習と関連プログラムの例を紹介した

第56号 2002年10月

**日中の高校生に隣国のことばを教える教師たち—ハルビンに集まった100人の教師が学んだこと**

日中の高校生が隣国のことばとして日本語や中国語を学ぶ意義や、ことばの学習と交流を結びつける意味を考えるセミナーを開催した。セミナーの報告から教師たちが経験を通じて考えたこと、交流プログラムを通じて感じたことを検証した

第61号 2004年1月

**「であい」と教室との出会い**

モニターとして写真教材「であい：7人の高校生の素顔」を使った日本語の授業に取り組んだ教師の教育目標を明らかにし、その目標にそって「であい」をどのように使ったかを報告。生徒が感じたこと、考えたことも紹介した

第57号 2003年1月

**『であい』を使ってみました—写真教材『であい：7人の高校生の素顔』を使用した取り組み**

国内外で「であい」教材を使用した授業を受けた生徒が、教材の主人公である日本の高校生7人と写真・文章・ビデオを通じて出会ったときの反応を紹介し、教材としての「であい」の可能性を検証した

第62号 2004年4月

**授業に役立つ画像素材集を求めて—電子教材の集積・共有化に向けて**

教育用の写真素材をデータベース化してウェブサイト公開しているNPOを紹介、その活動目的や教育用画像素材、教育現場における画像の活用事例を紹介し、画像素材のデータベース化について考察した

第58号 2003年4月

**学好中国語！—高校生が中国語を学ぶ意味**

TJFが日本の高校における中国語教育関連事業に取り組んできた10年で中国語教育の実施校は大きく増えた。教師や生徒、高校中国語教育を支える人たちが、高校時代に中国語を学ぶ意味をどう考えているかを見直した

第63号 2004年7月

**交流を続けるために—日米学校交流の事例にみる仲介者の役割**

学んでいる外国語を使って、子どもたちが海外の同世代とコミュニケーションを図り、心を通わせる交流を継続させるために必要なものは何か。日米の小中高校の交流プログラムを紹介し、交流の仲介者として留意すべきことを整理した

第64号 2004年10月

**インターネットが可能にする人々の出会いとつながり**

インターネットを使って世界の若者や子ども同士をつなぐことをめざす団体の活動を取り上げ、それぞれの目的や実際の活動事例を紹介し、より有意義な活動を行うための留意点、課題や発展の可能性を探った

第69号 2006年1月

**子どもの視点に学ぶ—子どもたちが伝える子どもの姿**

子どもたちが自分のくらしや訪問した海外の子どもを伝える活動を推進している団体を紹介し、子どもたちが見て感じたものをどう表現しているか、その感性や視点を大切に可能性をどう引き出すかなど、表現の可能性を探った

第65号 2005年1月

**韓国朝鮮語教育をどう位置づけるか—調査結果をもとに考える高等学校と大学等の現状と課題**

1997—1998年度の高校の調査に続き、TJFは2002—2003年度に大学等の韓国朝鮮語教育の実態調査を実施した。大学等の調査結果を紹介し、高校と大学等の韓国朝鮮語教育が直面する現状と課題を明らかにした

第70号 2006年4月

**「であい」から学んだもの—であいフォトエッセイカフェ日本招聘プログラム**

2005年11月、「であいフォトエッセイカフェ」に海外から応募した7人を日本に招聘し、日本の高校生7人と沖縄県伊是名島で共同作業を行うプログラムを実施した。ことばや育った環境を異にする彼らが、違いを乗り越えて感じ考えたものを紹介した

第66号 2005年4月

**教師自身が体験することの意味—教員の海外派遣プログラムに参加して得たもの**

海外で教えたり生活したりしたことの経験のある教師が、自分の経験を通じて感じたこと、内面の変化、帰国後の実践におよぼした影響などを紹介し、教師自身が体験することの意味を考えた

第71号 2006年7月

**わたしと中国語—教師研修参加者の思い**

高校の中国語教育にとって懸案だった教師研修の機会をつくるため、各方面に働きかけて実現した中国語の教師研修に参加した教師たち。彼らの中国語との出会いから現在までを紹介するとともに、教師研修の意義について検証した

第67号 2005年7月

**学びと交流の場づくりをめざして—文化交流事業としての日本語教師研修の試み**

1996—2002年、中国の東北三省と内蒙古自治区の高校の日本語教師を対象に開催した7年におよぶ中国中高校日本語教師研修会を振り返り、事業目的の達成度や意義、参加した教師にとっての意味などについて検証した

第72号 2006年10月

**インターネットで世界の子どもたちをつなぐ—双方向の交流をめざしたオンラインプログラム**

低年齢層向けに絵や話を投稿するウェブサイトを提供するキッズスペース、バイリンガルで日英交流を支えるジャパン・イギリス・ライブ！、世界中から約11万5千の教室の生徒が参加するePALSなどを紹介。インターネットの可能性について考えた

第68号 2005年10月

**海外修学旅行の効果を考える—中国・韓国修学旅行の実践例から**

中国と韓国への修学旅行を長年にわたり実施している高校における外国語の授業と修学旅行の関連づけ、旅行前後の学習における実践内容などを取り上げ、中国語と韓国朝鮮語の授業と修学旅行の関係を考えた

第73号 2007年1月

**世界の小中高校生の相互理解をめざして—この10年間の事業を振り返る**

設立20周年を迎えるにあたり、この10年のTJFの事業を「海外の日本語教育」「日本の中国語教育」「日本の韓国朝鮮語教育」「国際理解教育」「広報出版」の分野別に整理して振り返った



## 『国際文化フォーラム通信』

### 【シリーズ】一覧

❖ 執筆者または取材対象

#### アジアのことばを学ぶ

【第22号（1994年3月）～第46号（2000年4月）】

- 第22号　大東文化大学第一高等学校（東京）
- 第23号　千葉県立成田国際高等学校
- 第24号　佐賀県立佐賀商業高等学校
- 第26号　関東国際高等学校（東京）
- 第27号　静岡県立静岡中央高等学校
- 第28号　東邦高等学校（愛知）
- 第29号　慶応義塾志木高等学校（埼玉）
- 第30号　敦賀気比高等学校（福井）
- 第31号　埼玉県立伊奈学園総合高等学校
- 第32号　石川県立金沢辰巳丘高等学校
- 第33号　福井県立足羽高等学校
- 第34号　神奈川県立外語短大付属高等学校
- 第35号　東京都立日比谷高等学校、東京都立西高等学校
- 第36号　自由の森学園高等学校（埼玉）
- 第37号　鳥取県立青谷高等学校
- 第38号　兵庫県教育委員会主催中国語・ハングル講座
- 第39号　千葉県立幕張総合高校の取り組み
- 第40号　佐賀県教育委員会の取り組み
- 第41号　高等学校韓国語教師研修会から
- 第42号　鹿児島県立鹿児島高等学校の取り組み
- 第43号　『小溪』と『ムルキョル』の創刊
- 第44号　兵庫県立神戸甲北高等学校の取り組み
- 第45号　神奈川県立六ツ川高等学校の取り組み
- 第46号　シリーズから『小溪』『ムルキョル』へ

※シリーズタイトルとして第22号から第34号まで「日本の高校における中国語教育の現場から」、第35号から第38号まで「アジア言語教育の現場から」第39号から第46号まで「アジアのことばを学ぶ」を使った。

#### 世界の日本語教育事情

【第26号（1995年3月）～第38号（1998年3月）】

- 第26号　ロシア連邦ノボシビルスク市❖イリーナ・ブリク（日本語教師協会事務局長）
- 第27号　ベトナム共和国ハノイ市❖小松みゆき（日本語教師）
- 第28号　ドイツ❖持田節子（ドイツ語圏中等教育日本語教師会会長、ヴァイヤーホーフ・ギムナジウム日本語科教諭）
- 第29号　韓国❖朴且煥（ソウル日本語教育研究会総務、ソウル高明商業高等学校日本語科教師）
- 第30号　ニュージーランド❖大塚美穂（国際交流基金青年日本語教師長期派遣 Teaching Assistant Program派遣日本語教師）
- 第31号　インドネシア❖ニック・トゥリワジュニスバルワティ（東京外国語大学教師研修生、インドネシア国立スラバヤ第10高校教師）
- 第32号　中国❖張国強（中国課程教材研究所副教授）
- 第33号　フランス❖根元佐和子（商業高等専門大学外国語学科日本語講師）

- 第34号　米国❖TJF 米国代表連絡員
- 第35号　カナダ❖鶴見道代（スティーブストン高校外国学部主任）
- 第36号　オーストラリア❖コリン・W・ジョーンズ（シドニー在住）
- 第37号　タイ❖ノッパワン・ブンソム（国際交流基金バンコック日本語センター専任講師）、プラバー・セントーンソック（国際交流基金バンコック日本語センター専任講師）
- 第38号　英国❖リディア・モーリ（日本語教師）

#### 日本人の生活と文化

【第32号（1996年9月）～第38号（1998年3月）】

- 第32号　「風呂敷」と「包む」文化（日本語）
- 第33号　「風呂敷」と「包む」文化（中国語）
- 第34号　「靴を脱ぐ」（英語）
- 第35号　世界に広がったカラオケ（中国語・日本語）❖張国強（課程教材研究所副教授）
- 第37号　お茶（英語）
- 第38号　中国人から見た日本の年号（中国語・日本語）❖張国強（課程教材研究所副教授）

#### 二つのことばで語る私の文化論

【第39号（1998年6月）～第46号（2000年4月）】

- 第39号　友だちの子どもも「お子さん」？❖金仁和（筑波大学芸・言語学系専任講師）
- 第40号　玄関での出来事❖邱奎福（アジア学生文化協会アジアセミナー中国語主任講師）
- 第41号　これがぼくと日本人との付き合い方❖クリエンクライ・ラワンクル（通訳・コンサルティング業務ほか）
- 第42号　日本人にほほえみをとりもどそう❖ナンダン・ラフマット（名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程）
- 第43号　日本語にみる日本人の「借用」の知恵❖バイカル（東洋大学大学院博士後期課程仏教学専攻）
- 第44号　時間の後ろ❖ラジャ・ラトナ・スタピット（成安造形大学メディア・アート研究生）
- 第45号　企業経営における日本と香港の違い❖ジョニー・S・C・リー（日本国内の企業で国際業務担当）
- 第46号　働く女性の子どもは損をする？❖クリスティーナ・J・小田（フリーライター）

#### ことばは楽しい

【第39号（1998年6月）～第54号（2002年4月）】

- 第39号　タイ語：自由な生き方、それがタイ式人生❖山田均（名城大学国際学部助教授）
- 第40号　モンゴル語：馬を見てこよう❖温品廉三（東京外国語大学外国語学部助手）
- 第41号　ヒンディー語：へえ？　ほう！　とてもいいね❖松岡環（シネマ・アジア代表）
- 第42号　フィリピン語：ゴチャ混ぜ❖赤嶺淳（国立民族学博物館地域研究企画交流センター）
- 第43号　アラビア語：おめでとう！　あなたにあげますよ！❖師岡カリマ・エルサムニー
- 第44号　インドネシア語：おいしいね！❖武部洋子
- 第45号　ベトナム語：いくらですか？❖加藤栄（ベトナム文学翻訳家）
- 第46号　トルコ語：家族は宝もの❖内藤正典（一橋大学大学院教授）
- 第47号　スワヒリ語：「どう？」「元氣です！」❖中村香子（京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）
- 第48号　チベット語：友だち一助けてくれる人ー❖星泉（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手）
- 第49号　ロシア語：こんにちは❖黒田龍之助（東京工業大学助教授）
- 第50号　ラトヴィア語：どうぞ❖カタリーネ・リエクスティニヤ（早稲田大学大学院日本語教育研究科）
- 第51号　広東語：ごはん食べた？　食べたよ。ありがとう。❖佐保暢子（香港在住ジャーナリスト）

- 第52号　マレーシア語：おはよう❖森道代
- 第54号　ハンガリー語：こんにちは、やあ、オスッ、さよなら、バイバイ❖大杉千恵子

#### 見る聞く考えるやってみる授業

【第39号（1998年6月）～第72号（2006年10月）】

- 第39号　一枚の写真から十人十色のスケッチ❖梅村松秀（東京都立台台高校教諭／地理）
- 第40号　あたりまえがあたりまえでない❖齋藤護（東京都杉並区立高井戸小学校教諭）
- 第41号　知識から心情面の理解へ❖大野隆敏（千葉県立松戸国際高校教諭／国語・中国語）
- 第42号　五感で語感を楽しむ❖増田忠幸（東京都立日比谷高校講師／韓国語）
- 第43号　こころとからだを動かそう❖柏村みね子（東京都江戸川区立小松川第3中学校教諭／英語）
- 第44号　あこがれを育む❖棚橋和正（東京都港区立港陽小学校教諭／図工専科）
- 第45号　ぬいところからつくる❖濱中啓子（東京都立晴海総合高校教諭／英語）
- 第46号　想像力を刺激し、創造力を養う❖チャーリー・オーサリバン（オーストラリア、元マアリー・ヘルプ・オブ・クリスチャン小学校教諭／日本語）
- 第47号　「共感」から「行動」への国際理解教育❖柴田元（大阪府立豊島高校教諭／社会科）
- 第48号　日本語の授業に文化を取り入れて❖マアリー・グレース・ブラウニング（英国サフォーク州カウンティ・アッパースクール教諭／日本語）
- 第49号　しけられた評価の鏡と、学びとしてのカリキュラムの生成❖宇土泰寛（東京都港区立三光小学校教諭）
- 第50号　体験してこわさを実感❖菊博文（東京都板橋区立エコポリスセンターエコポリス事業係）、入江篤子（同センター環境学習指導員）
- 第51号　人間科－自分さがしの旅❖野中春樹（広島工業大学附属中学校・広島高校教諭）
- 第52号　英語教育を通じて生きる力を育てる❖吉村峰子（GITC 代表）
- 第54号　作ることで知る・メディア・リテラシー❖清水宣隆（中部大学春日丘中学・高校教諭／愛知）
- 第55号　北淀高校から見える日本社会と国際理解教育の役割❖伊井直比呂（大阪府立北淀高校教諭）
- 第56号　授業で学んだことを実践する教育活動－平成13年度国際理解セミナーを中心に❖橋本文彦（岡山県立玉野高校教諭）
- 第57号　地域に根ざした総合学科－神奈川県立大師高校の試み❖山田秀二（神奈川県立大師高校教諭）
- 第58号　中学生がみずからひらく「国際理解」への扉－選択学習「国際理解」基礎講座の試み❖成田喜一郎（東京学芸大学教育学部附属大泉中学校副校長）
- 第59号　教員とNGOが共同作成した国際理解教育教材「フィリピンボックス」❖出口雅子（ピナツポ復興むさしのネット）
- 第60号　教室を飛び出そう！　あーすぶらざ展示室での地球市民学習❖高須裕子（神奈川県国際交流協会）
- 第61号　『地球の仲間たち』で広がる世界！－中学校の総合学習の現場から❖安部直子（東京都西東京市立保谷中学校教諭）
- 第62号　NGOとの協働授業－フィリピンの子どもたちとの出会い❖佐藤智彦（東京都江戸川区立西葛西中学校教諭／社会科）
- 第63号　“普通の学校”の国際理解授業－参加型授業で1年間をとおしてみたら❖中山滋樹（東京都立久留米西高校教諭）
- 第64号　仮想日本旅行❖宅間ラーセン顯子（カナダ・プリティッシュ・コロンビア州、セントマイケルス・ユニバーシティ・スクール初等部教師／日本語）
- 第65号　現在のアメリカを理解する授業実践❖初海茂（東京都八王子市立松木中学校教諭／英語）
- 第66号　授業「私の出会った日本－キムチは日本人に何を伝えるか」❖善元幸夫（東京都新宿区立大久保小学校日本語学級教諭）
- 第67号　現代芸術家が教室にやってきた❖堤康彦（NPO芸術家と子どもたち代表）

- 第68号　キャンパスライフ・プロジェクト「中学生が大学生になった」－未来の自分に会いにいく❖青木一（千葉市立小中台中学校教諭）
- 第69号　次世代日韓首脳会談－高校生によるバーチャル国際会議❖谷井隆夫（大阪府立岸和田高校教諭）
- 第70号　たんけん・はっけん・ほっとけん－子どもとつくる里山の賑わい❖井阪尚司（NPO蒲生野考現倶楽部総合プロデューサー）
- 第71号　水沢自慢ビデオ番組づくり－子どもたちが発信する水沢❖佐藤正寿（岩手県奥州市立水沢小学校教諭）
- 第72号　在日外国人の人権を考え、共に暮らす社会を探ろう－米国日系人と在日コリアンの生活史から学ぶ❖バン・ジョンウン（兵庫県立淡川高校教諭）

※本シリーズは第74号以降も掲載しています。

#### 素顔の高校生

【第44号（1999年10月）～第65号（2005年1月）】

- 第44号　自由に自分の世界を表現したい❖近藤優美子（神奈川県立鶴見高校）
- 第45号　カメラはメモがわり。自分を確認する手段です❖佐伯直俊（東京都立新宿山吹高校）
- 第46号　写真のおかげで、いろいろな人と触れ合うことができるようになった❖辻幸代（大阪府立大手前高校定時制課程）
- 第47号　感動したことを写真に撮って伝えたい❖羽後結（横浜市立桜丘高校）
- 第48号　お互いの存在を大切にしている様子が伝わってきて感動した❖尾崎圭一（市川高校／兵庫）
- 第49号　感動的な瞬間やすばらしい風景を写真に撮ってみたい❖熊谷史絵（秋田県立横手高校）
- 第50号　いろんな所に行って、いろんな人に接してたくさんのことを吸収したい❖井上慶太（神奈川県立鶴見高校）
- 第51号　友だちの輝きをうけて、自分も輝けるのです❖山見茜（岐阜県立大垣工業高校）
- 第52号　夢さえあれば何でもできる。年齢は関係ないよ❖阿部俊士（北海道立滝川高校定時制課程）
- 第53号　のびのびと自由に撮っていきたい❖中才知弥（大阪府立大手前高校定時制課程）
- 第54号　笑えることってすごく幸せなことなんだよ❖佐藤里美（秋田県立横手高校）
- 第55号　前向きに生きている姿を撮ってみたかった❖石川直子（沖縄県立真和志高校）
- 第56号　素直に感じ伝えたい。心の奥まで伝わる写真を❖五味稚子（目白学園高校／東京）
- 第57号　悩んでいるときに、立ち止まる人と進む人がいてる❖後尾久美子（大阪府立大手前高校定時制課程）
- 第58号　しっかりした技術を身につけて自分の力を伸ばしていきたい❖田中舞（自由の森学園高校／埼玉）
- 第59号　頼れる先輩。私の憧れです❖江崎由佳（岐阜県立大垣工業高校）
- 第60号　今、一生懸命になれたらそれでいい❖小田瑠衣子（広島県立庄原格致高校）
- 第61号　「逃げない私」であり続けたい❖後尾久美子（大阪府立大手前高校定時制課程）
- 第62号　背中を押されるように、楽しく撮れた❖相原美穂（広島県立庄原格致高校）
- 第63号　ぜんぜん違う二人だからこそずっといい関係でいられる❖宮里三奈（沖縄県立真和志高校）
- 第64号　ことばではないもので、「がんばれ」と伝えたかった❖ジミー・ビュリー（大阪インターナショナルスクール）
- 第65号　写真は私に自信を与えてくれ、私を大きくしてくれた❖松永未樹（大阪府立大手前高校定時制課程）

（号数のないものは休載）

# TJF 事業データ：1997-2006

文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト(202)／写真教材「であい」(203)／「カフェおきなわ」(204)／中国中高校日本語教師研修会(204)／「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」(215)／中国の中学・高校用日本語教科書(216)／全中国小学校日本語教師研修会(216)／高校中国語担当教員研修(218)／高校中国語教師研修[大阪・北九州・東京](221)／中国修学旅行セミナー(223)／高校韓国語教師研修会(223)／高校韓国語教師研修会[ソウル](225)／高校韓国朝鮮語教育ネットワーク全国研修会(228)／高校韓国語教育セミナー・研修会(229)／韓国語教師研修会[東京](231)／大学等韓国語教師研修会[京都](232)／高校生のフォトメッセージコンテスト(234)／大連市中学校日本語教師研修会(236)／大連市中学校第二外国語用日本語教科書(237)／高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす(238)／中国語を学ぶ高校生の中国短期研修(238)／「Focus on Japan 2007」(238)／図書寄贈・助成事業(239) ( )内は掲載ページ



「事業データ：1997-2006」に含まれる事業の主催・助成・後援・協賛・協力機関・団体は本書「20年の歩み」(174-189ページ)をご参照ください。なお、1987年度から1996年度までの事業の詳細は、国際文化フォーラム設立10周年記念『ことばと文化 相互理解をめざして』をご参照ください。

## 文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト(第2部38ページ)

### 第1回〔1995年度〕

募集 4月～9月  
応募数 42作品

	豪州	米国	カナダ	英国	NZ	計
初等	4	3	1	0	0	8
中等	15	12	3	2	2	34
計	19	15	4	2	2	42

NZ：ニュージーランド

### 選考委員会

委員長 上野田鶴子(東京女子大学教授)  
委員 ペニー・ケニア(西町インターナショナルスクール教諭)、佐々木倫子(国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長)、西原鈴子(国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部長)、村野良子(国際基督教大学講師)

### 入賞作品

【初等教育部門】  
特賞 「ミステリー・ボックス」キャサリン・マッコイ(オーストラリア)  
入賞 「このぼりと色彩」チエコ・ジョーンズ(オーストラリア)、「セツ」アナタ・ライアン(オーストラリア)、「浦島太郎」ラーセン・米津頼子(カナダ)

### 【中等教育部門】

特賞 「米の歴史」サンドラ・ロベス・リクター(米国)  
入賞 「買い物とお金の使い方」サラ・ディアス(米国)、「ボディランゲージ」加納洋子(米国)、「日本の家族」レスリー・マリンス(オーストラリア)、「住空間の利用」ロバート・ヘイザー(米国)／異文化理解賞、「日本の女性」サイラス・ロルビン(米国)／異文化理解賞

【作品集】 『異文化理解のための日本語の授業実例集』(1996年12月発行)

### 第2回〔1997年度〕

募集 2月～9月  
応募数 46作品

	豪州	米国	カナダ	英国	NZ	中国	ブラジル	計
初等	7	4	1	0	0	0	1	13
中等	16	7	1	2	3	4	0	33
計	23	11	2	2	3	4	1	46

NZ：ニュージーランド

### 選考委員会

【最終選考委員】  
委員長 上野田鶴子(東京女子大学教授)  
委員 ペニー・ケニア(西町インターナショナルスクール教諭)、佐々木倫子(国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長)、西原鈴子(国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部長)、村野良子(国際基督教大学講師)

### 【第1次選考委員】

委員長 村野良子(国際基督教大学講師)  
委員 荒川洋平(国際交流基金日本語国際センター専任講師)、伊東祐郎(東京外国語大学留学生日本語教育センター助教授)、神戸由美(加藤学園暁秀初等学校教諭)、アナタ・ゲスリング(アメリカンスクール・イン・ジャパン教諭)、田中小静(セント・ジョセフ・インターナショナルスクール教諭)

### 入賞作品

【初等教育部門】  
特賞 「ミックスピザ」寒河江聡子(米国)  
入賞 「コミュニケーション／文通」吉田芳子(オーストラリア)、「かたつむり」キャサリン・スピーチレイ(オーストラリア)／テーマ学習賞、「きもの」ノブコ・ウィークス(米国)／伝統文化賞

### 【中等教育部門】

特賞 「ベットをかっけていますか」ジャーニー・カーロン(オーストラリア)  
入賞 「お正月」ヘレン・ジルフリー(英国)、「日本人とお風呂」劉淑艶(中国)、「カナダ製品の宣伝」鶴見道代(カナダ)、「写真花嫁」ヴィンク・風間宏子(米国)、「最初の授業」メアリー・グレース・ブラウニング(英国)／オールラウンド賞

【作品集】 『第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集』(1999年3月発行)  
『Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture: Selected Lesson Plans from the 1997 TJF Contest II』(1998年11月発行)

### 第3回〔1999年度〕

募集 2月～9月  
応募数 33作品

	豪州	米国	カナダ	英国	NZ	中国	韓国	タイ	ドイツ	計
初等	7	3	2	1	1	0	0	0	0	14
中等	4	3	4	0	0	5	1	1	1	19
計	11	6	6	1	1	5	1	1	1	33

NZ：ニュージーランド

### 選考委員会

【最終選考委員】  
委員長 上野田鶴子(東京女子大学教授)  
委員 ペニー・ケニア(前横浜市教育委員会外国語指導主事)、佐々木倫子(国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部長)、西原

## 写真教材「であい：7人の高校生の素顔」プロジェクト(第2部41ページ)

期間 1999年4月～

### であいキットの制作

発行 2001年12月  
構成 写真シート：A3判カラー192枚、冊子：A4判308頁、CD-ROM2枚

協力 【写真・ビデオ撮影ほか】大石尚人、岡本卓也、加藤昭裕、加藤貴紀、佐用純一、竹崎奈保子、谷口達郎、堤由佳、中西祐介、中村尚暁、日高大輔、北郷仁、前地昭寛、妻鹿貴志、森崎貴、吉田佐和子、吉田忠正、吉野光、市川高等学校、大阪産業大学附属高等学校、沖縄県立南風原高等学校、神奈川県立鶴見高等学校、千里国際学園高等部、東京都立新宿山吹高等学校、北海道標茶高等学校、伊是名尚円太鼓、(株)講談社、講談社野間記念館、鶴岡八幡宮、日本マクドナルド(株)、(有)ユビキタス、【教材制作アドバイザー】佐藤都衛(東京学芸大学教授)、當作靖彦(カリフォルニア大学サン・ディエゴ校教授)、吉田研作(上智大学教授)

鈴木(東京女子大学教授)、村野良子(国際基督教大学講師)、吉岐久子(那須大学助教授)

### 【第1次選考委員】

委員長 村野良子(国際基督教大学講師)  
委員 荒川洋平(東京外国語大学留学生日本語教育センター助教授)、神戸由美(加藤学園暁秀初等学校教諭)、アナタ・ゲスリング(アメリカンスクール・イン・ジャパン教諭)、藤光由子(ニュージーランド教育省日本語アドバイザー)、松田みゆき(東京外国語大学留学生日本語教育センター講師)

### 入賞作品

【初等教育部門】  
特賞 「日本旅行」メアリー・グレース・ブラウニング(英国)  
入賞 「三月三日はわたしたちのひな祭り」ラーセン・米津頼子(カナダ)、「写真で見る日本の小学生の一日」リン・セスラー・シュメリング(米国)

### 【中等教育部門】

特賞 「一緒に文化を比較してみよう」サイラス・ロルビン(米国)  
入賞 「ゴールド・コーストを宣伝しよう」ミーガン・アレクサンダー(オーストラリア)、「写真プロフィールを作ろう」リー・芦原美江(米国)、「かばんの中」宮川・ジロー・三保(ドイツ)、「もしもし」レノヴィッチ・小本祥子(カナダ)

【作品集】 『第3回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集』(2000年10月発行)  
『Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture: Selected Lesson Plans from the 1999 TJF Contest III』(2000年10月発行)

### ウェブサイトの制作

開設 2001年12月  
構成 であいキットに含まれるデータ、日本語教育用の授業計画と授業案、アイデアコーナー、Voicesコーナー、参考資料集、ミニ事典、語彙リスト  
協力 【TJF授業案作成】荒川洋平(東京外国語大学助教授)、矢部まゆみ(東京YMCA英語・ホテルサービス専門学校非常勤講師)

### ワークショップ

開催期日	開催地／協力
■2001年	
11/3	米国ウィスコンシン州アップルトン(同州外国語教師会年次大会に参加)
11/7	米国オレゴン州ポートランド／Center for Applied Second Language Studies
11/15-18	米国ワシントン D.C. (American Council on the Teaching of Foreign Languages 年次大会に参加)
12/20	ニュージーランド オークランド／Association of Colleges of Education in New Zealand



■2002年	
2/28	英国ロンドン／国際交流基金ロンドン日本語センター、The Japan Festival Education Trust
3/16	米国ノースカロライナ州チャールストン（米国南東部教師会大会に参加）
4/1	米国ロードアイランド州プロビデンス／ロードアイランド州教育庁
4/4	米国ワシントンD.C.（NCTA/National Consortium of Teaching about Asia 社会科アドバイザー会合に参加）
4/7	米国テキサス州ダラス／テキサス州日本語教師会
4/8	米国コロラド州デンバー
4/13	米国フロリダ州マイアミ／フロリダ州日本語教師会、在マイアミ日本国総領事館
4/19	米国カリフォルニア州ロングビーチ（同州外国語教師会総会に参加）
4/24	米国カリフォルニア州サンフランシスコ／在サンフランシスコ日本国総領事館
4/27	米国ワシントン州シアトル／ワシントン州日本語教師会、ルーズベルト高校
5/2	米国イリノイ州シカゴ／イリノイ州日本語教師会、在シカゴ日本国総領事館
5/4	米国ミシガン州イプシランティ／ミシガン州日本語教師会、イースタン・ミシガン大学
5/25	米国マサチューセッツ州ボストン（米国北東部日本語教師会総会に参加）
6/1	米国ワシントン D.C.（ミッドアトランティック日本語教育法ワークショップに参加）
6/30	カナダ オンタリオ州トロント（カナダ日本語教育振興会年次大会に参加）
7/4	カナダ アルバータ州エドモントン／アルバータ州教育省

7/6	カナダ ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー／ブリティッシュ・コロンビア州高校日本語教師 Benkyokai
7/12	米国カリフォルニア州サンディエゴ（日本語教育支援システム研究会第3回国際会議に参加）
10/11-12	米国ワシントン州タコマ／ワシントン州日本語教師会
10/18	米国フロリダ州（同州外国語教師会に参加）
11/4	オーストラリア西オーストラリア州パース／西オーストラリア州教育省
11/6	米国オレゴン州ポートランド／オレゴン州日本語教師会
11/9	米国インディアナ州インディアナポリス（同州外国語教師会に参加）
11/16	米国ニューヨーク州ニューヨーク／米国北東部日本語教師会
11/16	ニュージーランド オークランド／ニュージーランド日本語教師会
11/21	ニュージーランド ウェリントン／ウェリントン地区日本語教師会
12/7	米国ハワイ州アイエア／ハワイ州日本語教師会、同州教育省
■2003年	
3/1	米国オレゴン州ポートランド／オレゴン州日本語教師会
3/8	米国ノースカロライナ州ダーハム（米国南東部教師会大会に参加）
3/18	米国ウィスコンシン州アップルトン（同州社会科教師会大会に参加）
■2004年	
8/17	韓国全羅北道益山市（韓国日本語教育研究会主催授業研究発表大会に参加）
8/19	韓国釜山広域市／釜山中等日本語教育研究会
10/23	韓国ソウル特別市／ソウル日本語教育研究会

## であいフォトエッセイカフェ交流プログラム「カフェおきなわ」（第2部52ページ）

<b>期間</b>	2005年11月17～27日
<b>場所</b>	沖縄県伊是名島、東京都、神奈川県
<b>参加者</b>	14名（米国2名、英国・オーストラリア・韓国・中国・ニュージーランド各1名、東京都2名、神奈川県5名）

日 程	
11/17	海外参加者来日
11/18	沖縄県伊是名島へ移動。オリエンテーション
11/19	全員で伊是名島を見学した後、グループ・ミーティング。島の祭りに参加
11/20	グループごとに追加取材、ウェブサイトの制作、翌日の発表の準備
11/21	伊是名中学校にて発表、交流
11/22	那覇市へ移動。首里城、平和祈念公園見学
11/23	東京へ移動
11/24-25	高校訪問、ホームステイ
11/26	発表会
11/27	海外参加者帰国

## 中国中高校日本語教師研修会（第2部68ページ）

第1回〔1996年度〕	
<b>期間</b>	8月5～16日
<b>場所</b>	長春外国語学校（吉林省長春市）
<b>研修生</b>	47名

<b>講師数</b>	13名
<b>講師名</b>	会田夕子（西安外国語学院外籍教師）、加納陸人（文教大学助教授）*、時田緑子（西安外国語学院外籍教師）、姫野昌子（東京外国語大学教授・文部省派遣日本語教育専門家／東北師範大学

中国赴日本国留学生予備学校）、本田弘之（杏林大学専任講師）、松田みゆき（日本青年海外協力隊日本語教師隊員／武漢外国語学校）、山口敏幸（国際交流基金海外派遣日本語教育専門家／北京日本学研究中心）、宿久高（吉林大学教授）\*\*、趙華敏（北京大学副教授）、張国強

（中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長）、翟東娜（北京師範大学副教授）、唐磊（課程教材研究所外語室副主任）、林洪（北京師範大学講師）

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第1回カリキュラム				
時 日	1 8:30-10:00	2 10:15-11:45	3 14:00-15:30	4 15:45-17:15
8/5	開講式	意見交換会 [2] 山口、加納	教授法：大学入試 [1] 加納	文字・語彙 [2] 本田、山口
8/6	発音 [8]	聴解・口頭表現（含日本事情）[2] 松田、時田	文法 [外]、読解 [普] 宿、加納	文字・語彙 [外]、教授法：教科書 [普] 本田、張
8/7	文法 [外]、読解 [普] 宿、加納	作文指導 [1] 加納	聴解・口頭表現（含日本事情）[1] * 本田	
8/8	発音 [8]	聴解・口頭表現（含日本事情）[2] 松田、会田	文法 [外]、教授法：教科書 [普] 宿、張	個人面談
8/9	文字・語彙 [2] 本田、松田	聴解・口頭表現（含日本事情）[2] 時田、会田	読解 [外]、文法 [普] 山口、宿	教材・教具紹介 [1] 山口
8/10	教科書説明・意見交換		交流会	
8/11	浄月ピクニック			
8/12	教授法：教学大綱 [1] 唐	教授法：教科書 [外]、文字・語彙 [普] 趙、山口	教授法：教科書 [外]、読解 [普] 趙、加納	個人面談
8/13	発音 [8]	聴解・口頭表現（含日本事情）[2] 時田、松田	個人面談	個人面談
8/14	文字・語彙 [2] 本田、松田	読解 [外]、文法 [普] 山口、宿	聴解・口頭表現（含日本事情）[2] 会田、時田	特別講座：文法（質疑応答形式）[1] 姫野
8/15	発音 [8]	聴解・口頭表現（含日本事情）[2] 会田、松田	読解 [外]、文法 [普] 山口、宿	意見交換会 [2] 山口、加納
8/16	異文化理解講座 [1] 宿	異文化理解講座 [1] 姫野	作文指導 [1] 本田	閉講式

[ ] はクラス数を表す。[2] は外国語学校、普通中学のクラス別。ただし、同一コマで異なる講義の場合は [外] [普] と記した。\* は公開講座。

## 第2回〔1997年度〕

<b>期間</b>	7月20日～8月1日
<b>場所</b>	大連市教育学院（遼寧省大連市）
<b>研修生</b>	48名
<b>講師</b>	16名
<b>講師名</b>	会田夕子（西安外国語学院外籍教師）、柏崎雅世（東京外国語大学助教授・文部省派遣日本語教育専門家／東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校）、加納陸人（文教大学助教授）*、高橋元喜（日本青年海外協力隊日本語教師隊員／延辺教育学院）、高柳真理（日本青年海外協力隊日本語教師隊員／延辺大学）、立花秀正（国際日本語普及協会講師・国際交流基金海外派

遣日本語教育専門家／北京日本学研究中心）、時田緑子（西安外国語学院外籍教師）、永保澄雄（龍谷大学教授）、林えり（日本青年海外協力隊日本語教師隊員／通遼市クルン第一中学）、本田弘之（杏林大学専任講師）\*\*、山下博之（日本青年海外協力隊日本語教師隊員／瀋陽大学）、山田裕香（日本青年海外協力隊日本語教師隊員／瀋陽市外国語学校）、余語曉子（上海外国語学院外籍教師）、蔡全勝（大連外国語学院日本語学院副院長）、朱春躍（北京外国語大学日語系主任）、張国強（中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長）

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第2回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
7/20	クラス分けテスト				オリエンテーション	
7/21	発音 [10] 講師10名	交際用語 [3] 会田、時田、余語	文法・語彙 [3] 高橋、高柳、立花		教科書と教授法 [2] 加納、高橋	
7/22	発音 [10] 講師10名	聴解・口頭表現 [3] 会田、時田、余語	読解 [2] *1 加納、本田		大学入試 [1] 蔡	
7/23	交際用語 [3] 会田、時田、余語		文法・語彙 [3] 本田、高橋、高柳		教授法：教室活動 [1] 立花	

第2回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
7/24	発音 [10] 講師10名	聴解・口頭表現 [3] 会田、時田、余語	読解 [2] *1 加納、本田		日本語の音声と音声指導 [1] 朱	
7/25	日本語の音声と音声指導 [1] 朱		文法・語彙 [3] 本田、高柳、立花		日本語教育と文化理解 [1] * 張国強	
7/26	大連一日観光					
7/27	休日					
7/28	日本語の丁寧な表現 [1] 柏崎		発音 [10] 講師10名	聴解・口頭表現 [3] 会田、時田、余語	日本語音声の特色と指導方法 [1] 永保	
7/29	音声表現：実習 [1] 永保	交際用語 [3] 本田、時田、高柳	文法・語彙 [3] 加納、本田、立花		聴解・口頭表現 [3] 会田、時田、余語	
7/30	発音 [10] 講師10名	聴解・口頭表現 [3] 会田、時田、余語	文法・語彙 [3] 本田、立花、高柳		直接教授法における視覚的技法 [1] 永保	
7/31	視覚表現：実習 [1] 永保	交際用語 [3] 本田、時田、高柳	読解 [2] *1 加納、本田		聴解・口頭表現 [3] 会田、時田、余語	
8/1	模擬授業 張栄		意見交換会 [3] 加納、本田、立花		直接教授法における視覚的技法 [1] 永保	

[ ]はクラス数、\*は公開講座、\*1は中学・高校別クラス数を表す。課外では、ビデオ上映、個人面談、在連日本人との集い、日中教師交流会などを実施した。講師10名は、会田、高橋、高柳、立花、時田、林、本田、山下、山田、余語。

### 第3回 [1998年度]

**期 間** 8月2～14日  
**場 所** 黒龍江省教育学院(黒龍江省ハルビン市)  
**研修生** 50名  
**講師** 19名  
**講師名** 会田夕子(西安外国語学院外籍教師)、青木惣一(アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター助教授)、泉文明(龍谷大学専任講師)、江淵一公(放送大学教授・異文化間教育学会会長)、加納陸人(文教大学助教授)\*、阪田雪子(杏林大学客員教授)、辻佳代(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／黒龍江省中日友誼医院)、時田

緑子(西安外国語学院外籍教師)、藤井眞三(日中学院日本語科主任講師)、本田弘之(杏林大学専任講師)、水谷修(名古屋外国語大学教授・日本語教育学会会長)、山口敏幸(元国際交流基金海外派遣日本語教育専門家)、余語暁子(上海大学外国語学院外籍教師)、横山朝子(日中学院専任講師)、宿久高(吉林大学外国語学院院長)、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)、陳岩(大連外国語学院日本語学院院长)、劉淑艶(長春市第八中学日本語教師)、呂寅秋(黒龍江大学東方語言文学系主任) \*は主任講師

第3回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/2	クラス分けテスト				オリエンテーション	
8/3	発音 [8] 講師8名	交際用語 [3] 時田、余語、会田	文法・語彙 [3] 泉、山口、本田		教科書と教授法 [2] *1 加納、本田	
8/4	発音 [8] 講師8名	文法・語彙 [3] 泉、山口、本田	聴解・口頭 [3] 時田、横山、会田		読解 [3] 加納、山口、本田	
8/5	発音 [8] 講師8名	聴解・口頭 [3] 時田、横山、会田	読解 [3] 加納、山口、本田		誤用例について [1] 呂	
8/6	模擬授業 中学：馬文麗、高校：王建英		模擬授業について討論		交際用語 [3] 時田、余語、会田	
8/7	発音 [8] 講師8名	文化を取り入れた日本語の授業 [1] * 講義：張			文法・語彙 [3] 泉、山口、本田	
8/8	ハルビン観光					
8/9	自由行動					
8/10	発音 [8] 講師8名	聴解・口頭表現 [3] 時田、横山、会田	文法・語彙 [3] 泉、山口、本田		対照言語 [2] *2 加納、泉	
8/11	日本語の文法を支える考え方 [1] 宿久高		読解 [3] 藤井、山口、青木		日中言語・文化比較：翻訳を事例として [1] 陳	
8/12	話し言葉の授業のポイント [1] 水谷		助詞の使い方と教え方 [1] 阪田		文化を理解するとは？ [1] 江淵	
8/13	交際用語 [3] 時田、余語、本田		文法・語彙 [3] 泉、青木、藤井		聴解・口頭表現 [3] 時田、横山、会田	

8/14	文法・語彙 [3] 泉、山口、本田	文化理解ワークショップ TJF(中野、長江、室中)	意見交換会(文法・語彙) [2] *2 本田、泉
------	----------------------	------------------------------	-----------------------------

[ ]はクラス数、\*1は中学と高校別クラス、\*2は漢語話者と朝鮮語話者別クラスを表す。\*は公開講座。課外では、ビデオ上映、個人面談、講師との交流会を実施した。

講師8名は、泉、会田、辻、時田、本田、山口、余語、横山。

### 第4回 [1999年度]

#### 吉林省会場

**期 間** 7月25日～8月6日  
**場 所** 延辺教育学院(吉林省延吉市)  
**研修生** 30名  
**講師** 12名(内3名は複数会場を巡回)  
**講師名** 泉文明(龍谷大学専任講師)\*、今井なをみ(北京師範大学外籍教師)、岩澤みどり(人民大学外籍教師)、大船ちさと(西安外国語学院外籍

教師)、加納陸人(文教大学助教授)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、高橋元喜(日本青年海外協力隊日本語教師シニア隊員／延辺第一中学)\*\*、平野ゆかり(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／桂林工学院)、権宇(延辺大学人文学院日語系主任)、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)、朴澤龍(延辺教育学院日語教員)、林成虎(延辺大学人文社会科学学院副院長) \*は主任講師、\*\*は副主任講師

第4回吉林省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
7/25	クラス分けテスト(聴解・インタビュー)				開講式	オリエンテーション
7/26	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	類義表現 [2] 泉、高橋	コミュニケーション [2] 岩澤、大船	聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	日朝言語の対比 [1] * 泉	類義表現 [2] 泉、高橋
7/27	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	コミュニケーション表現 [2] 岩澤、大船		聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	日朝言語の対比 [1] * 林	
7/28	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	類義表現 [2] 泉、高橋	コミュニケーション [2] 岩澤、大船	聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	朝鮮族が間違えやすい日本語表現 [1] * 権	
7/29	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	類義表現 [2] 泉、高橋		聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	コミュニケーション表現 [2] 岩澤、大船	
7/30	模擬授業 中学：延吉第三中学	模擬授業について討論	模擬授業 高校：延辺第一中学	模擬授業について討論	教授法：高校教科書 [1] * 加納	
7/31	観光(民族村)					
8/1	自由行動					
8/2	教授法：会話指導 [1] * 加納		文化を取り入れた日本語の授業 [1] * 張		教授法：素材集について [1] * 篠崎	
8/3	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	教授法：高校教科書読解 [1] * 篠崎		コミュニケーション表現 [2] 岩澤、大船	
8/4	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	類義表現 [2] 泉、高橋	コミュニケーション [2] 岩澤、大船	聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	大学入試の受験指導 [1] * 朴	
8/5	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	類義表現 [2] 泉、高橋		聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	コミュニケーション表現 [2] 岩澤、大船	
8/6	発音 [4] 今井、岩澤、大船、平野	類義表現 [2] 泉、高橋		聴解・口頭表現 [2] 今井、平野	意見交換会 [1] 全講師	

[ ]はクラス数、\*は公開講座を表す。課外では、ビデオ上映、個人面談、茶話会、日中友好クラス交流会などを実施した。コミュニケーション：コミュニケーション表現の略

#### 黒龍江省会場

**期 間** 7月25日～8月6日  
**場 所** 中国共産党ハルビン市委党校(黒龍江省ハルビン市)  
**研修生** 31名  
**講師** 12名(内3名は複数会場を巡回)  
**講師名** 飯野令子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／湘潭大学)、大澤徹(西城外国語学校外籍教師)、加納陸人(文教大学助教授)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、堤美帆(日本青年海外協力隊日本語教

師隊員／通遼市クルン第一中学)、中新井綾子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／通遼市カンチカ第二高級中学)、原土洋(拓殖大学教授・国際交流基金海外派遣日本語教育専門家／北京日本学研究中心)\*\*、山口敏幸(元国際交流基金海外派遣日本語教育専門家)\*、郭殿福(ハルビン理工大学人文社会科学学院副院長)、申成日(ハルビン市教育学院日語教員)、張曉華(ハルビン理工大学副教授)、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長) \*は主任講師、\*\*は副主任講師



第4回黒龍江省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
7/25	クラス分けテスト(聴解・インタビュー)				オリエンテーション(教材配布)	
7/26	発音[4] 飯野、大澤、中新井、堤	コミュニケーション[2] 中新井、飯野	教授法：教科書について[1]* 加納 篠崎		教授法：素材集について[1]* 篠崎	
7/27	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	類義表現[2] 飯野、山口	教授法：話しことば[1]* 加納 篠崎		教授法：高校教科書読解[1]* 篠崎	
7/28	発音[4クラス] 飯野、大澤、中新井、堤	コミュニケーション[2] 中新井、飯野	教授法：高校教科書コラム[1]* 張国強		日本事情[1]* 原土	
7/29	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	類義表現[2] 飯野、山口	コミュニケーション表現[2] 中新井、大澤		特別講義：日本語の誤用[1]* 張曉華	
7/30	模擬授業 中学：朝鮮族第一中学	模擬授業 高校：朝鮮族第一中学	模擬授業について討論		日本事情[1]* 原土	
7/31	一日観光					
8/1	自由行動					
8/2	発音[4] 飯野、大澤、中新井、堤	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	類義表現[2] 飯野、山口	読解作文指導法[1]* 原土		
8/3	発音[4] 飯野、大澤、中新井、堤	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	コミュニケーション表現[2] 中新井、大澤	特別講義：日中語対訳[1]* 郭		
8/4	発音[4] 飯野、大澤、中新井、堤	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	類義表現[2] 飯野、山口	読解作文指導法[1]* 原土		
8/5	発音[4] 飯野、大澤、中新井、堤	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	コミュニケーション表現[2] 中新井、大澤	特別講義：中高の授業の違い[1]* 申		
8/6	発音[4] 飯野、大澤、中新井、堤	聴解・口頭表現[2] 堤、大澤	類義表現[2] 飯野、山口	意見交換会[1]* 全講師		

[ ]はクラス数、\*は公開講座を表す。課外では、ビデオ上映、個人面談、日中友好クラス交流会などを実施した。コミュニケーション：コミュニケーション表現の略

## 遼寧省会場

期 間	7月25日～8月6日
場 所	遼寧教育学院(遼寧省瀋陽市)
研修生	30名
講 師	12名(内3名は複数会場を巡回)
講師名	小川恭史(瀋陽大学外籍教師)、加納陸人(文科大学助教授)、坂本裕子(西安外国語学院外籍教師)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、柴原智代(国際交流基金日本語国際センター専任講師・国際交流

基金海外派遣日本語教育専門家／北京日本学研究中心)\*\*、津花知子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／瀋陽市外国語学校)、蜂須賀好美(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／凌源市第一中学)、本田弘之(杏林大学助教授)\*、金寿奉(遼寧師範大学教授)、曾麗雲(遼寧教育学院日語教研員)、張国強(中国教育学会外語教学研究會日語專業委員會會長)、陳岩(大連外国語学院日本語学院院长)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第4回遼寧省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
7/25	クラス分けテスト(聴解・インタビュー)				オリエンテーション	
7/26	読解[2]*1 坂本、蜂須賀	特別講義：文章表現[1]* 本田		発音[4] 講師5名	コミュニケーション[2] 本田、柴原	
7/27	聴解・口頭表現[2] 坂本、津花	コミュニケーション[2] 本田、柴原	特別講義：言語とその文化的背景[1]* 金寿奉		発音[4] 講師5名	文法[2] 本田、柴原
7/28	文法[2] 本田、柴原	聴解・口頭表現[2] 坂本、津花	コミュニケーション[2] 本田、柴原	座談会[4] 全講師	聴解・口頭表現[中]、作文[高] 小川、本田	
7/29	文法[2] 本田、柴原	読解[2]*1 坂本、蜂須賀		発音[4] 講師5名	コミュニケーション[2] 本田、柴原	
7/30	模擬授業* 中学：瀋陽市外国語学校	模擬授業* 高校：瀋陽第二十中学	模擬授業について討論		特別講義：翻訳と文化[1]* 陳	
7/31	1日観光					
8/1	自由行動					
8/2	文法[2] 本田、柴原	大学入試[1] 曾		発音[4] 講師5名	聴解・口頭表現[2] 坂本、津花	
8/3	コミュニケーション表現[2] 本田、柴原		読解[2]*1 坂本、蜂須賀	聴解・口頭[中]、作文[高] 小川、本田		

8/4	特別講義：教授法[1]* 篠崎	特別講義：高校教科書[1]* 加納	発音[4] 講師5名	聴解・口頭表現[2] 坂本、津花
	文法[2] 本田、柴原	特別講義：教授法[1]* 加納	発音[4] 講師5名	聴解・口頭表現[2] 坂本、津花
8/6	特別講義：文化を取り入れた日本語の授業[1]* 張	特別講義：教授法[1]* 篠崎	意見交換会[2] 全講師	

[ ]はクラス数、[中]は中学、[高]は高校を対象とするクラスであることを表す。コミュニケーション：コミュニケーション表現の略

\*1は中学・高校別クラスを表す。\*は公開講座。課外では、ビデオ上映、個人面談、日中交流会などを実施した。

講師5人は、小川、坂本、柴原、津花、蜂須賀。

## 第5回(2000年度)

### 4会場合同講師向けオリエンテーション

期 間	8月2～3日
場 所	大連市教育学院(遼寧省大連市)
講師名	泉文明(龍谷大学助教授)、加納陸人(文科大学助教授)、永保澄雄(京都日本語学校校長)、本田弘之(杏林大学助教授)、山口敏幸(ヒューマンアカデミー日本語教師養成講座講師)

場 所	中日友好語言培訓中心(内モンゴル自治区フフホト市)
研修生	19名
講 師	5名(内2名は複数会場を巡回)
講師名	泉文明(龍谷大学助教授)、岩田一成(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／内蒙古智力引進外語培訓中心)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、本田弘之(杏林大学助教授)、山口敏幸(ヒューマンアカデミー日本語教師養成講座講師)

## 内蒙古自治区会場

期 間	8月18～28日
-----	----------

第5回内蒙古自治区会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/18	クラス分けテスト(聴解・インタビュー)、朗読録音				講師会議	オリエンテーション
8/19	発音[1] 泉		聴解・口頭表現[2] 岩田、本田		教授法：会話指導[1] 本田	
8/20	発音[3] 泉、本田、山口	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田	類義表現[1] 山口		コミュニケーション表現[1] 本田	
8/21	発音[3] 泉、本田、山口	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田	類義表現[1] 山口		コミュニケーション表現[1] 本田	
8/22	発音[3] 泉、本田、山口	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田	類義表現[1] 山口		コミュニケーション表現[1] 本田	
8/23	自由行動					
8/24	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田		類義表現[1] 山口		コミュニケーション表現[1] 泉	
8/25	発音[3] 泉、本田、山口	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田	類義表現[1] 山口		コミュニケーション表現[1] 泉	
8/26	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田		類義表現[1] 山口		コミュニケーション表現[1] 泉	
8/27	発音[3] 泉、本田、山口	聴解・口頭表現[2] 岩田、本田	教材の使い方：『写真パネルバンク』[1] 篠崎		教授法：教具・教室活動[1] 山口	
8/28	朗読総評・発音個別指導[3] 泉、本田、山口			教材の使い方：教科書を作ろう[1] 篠崎		意見交換会[3] 全講師

[ ]はクラス数を表す。課外では、個人面談、茶話会、朗読発表などを実施した。

## 吉林省会場

期 間	8月4～16日
場 所	吉林省教育学院(吉林省长春市)
研修生	32名
講 師	9名(内2名は複数会場を巡回)
講師名	伊東祐郎(東京外国語大学助教授・文部省派遣日本語教育専門家／東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校)、岩澤みどり(元人民大外語教師)、大船ちさと(西安外国語学院外籍

教師)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、田賀真美子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／白求恩医科大学)、本田弘之(杏林大学助教授)\*、谷部弘子(東京学芸大学助教授)\*\*、和栗雅子(国際交流基金海外派遣日本語教育専門家／東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校)、張国強(中国教育学会外国語教学研究會日語專業委員會會長)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第5回吉林省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/4	クラス分けテスト(聴解・インタビュー)、朗読録音				オリエンテーション	
8/5	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		教授法：文化を取り入れた授業[1] 張		教授法：会話指導[中]、作文指導[高] 谷部、本田	
8/6	聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		コミュニケーション表現[2] 大船、岩澤		類義表現[2] 谷部、和栗	
8/7	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		コミュニケーション表現[2] 大船、岩澤	
8/8	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		コミュニケーション表現[2] 大船、岩澤	
8/9	模擬授業 中学		模擬授業 高校		模擬授業について討論 教授法：教具[中]、作文指導[高] 谷部、本田	
8/10	市内観光					
8/11	自由行動					
8/12	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		コミュニケーション表現[2] 大船、岩澤	
8/13	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		類義表現[2] 谷部、本田	
8/14	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		コミュニケーション表現[2] 大船、岩澤	
8/15	発音[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		聴解・口頭表現[2] 田賀、本田		類義表現[2] 谷部、本田	
8/16	朗読総評・発音個別指導[4] 谷部、岩澤、大船、田賀		教授法：ゲーム[中]、作文総評[高] 岩澤、本田		意見交換会[1] 全講師	

[ ]はクラス数、[中]は中学、[高]は高校を対象とするクラスであることを表す。課外では、ビデオ上映、個人面談、茶話会、日中交流会などを実施した。

## 黒龍江省会場

**期 間** 8月4～16日  
**場 所** 黒龍江省教育学院(黒龍江省ハルビン市)  
**研修生** 31名  
**講師** 7名(内2名は複数会場を巡回)  
**講師名** 新井潤(西安外国語学院外籍教師)、泉文明(龍谷大学助教授)\*\*、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、鳴海佳

恵(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／寧夏大学)、松田みゆき(東京外国語大学講師・文部省派遣日本語教育専門家／東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校)、山口敏幸(ヒューマンアカデミー日本語教師養成講座講師)\*、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第5回黒龍江省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/4	クラス分けテスト(聴解テスト・インタビュー)、朗読録音				オリエンテーション	
8/5	発音[4] 山口、泉、松田、鳴海		教授法：会話指導[中]、作文指導[高] 松田、山口		コミュニケーション表現[2] 松田、新井	
8/6	聴解・口頭表現[2] 新井、鳴海		類義表現[2] 山口、泉		コミュニケーション表現[2] 松田、新井	
8/7	発音[4] 山口、泉、松田、鳴海		聴解・口頭表現[2] 新井、鳴海		教授法：文化を取り入れた授業[1] 張	
8/8	発音[4] 山口、泉、松田、鳴海		聴解・口頭表現[2] 新井、鳴海		類義表現[2] 山口、泉	
8/9	模擬授業 中学：ハルビン市 ——二中学		模擬授業 高校：ハルビン市 朝鮮族第一中学		模擬授業について討論 教授法：『教科書を作ろう』[1] 篠崎	
8/10	市内観光					
8/11	自由行動					
8/12	聴解・口頭表現[2] 新井、鳴海		教授法：教具[1] 松田		対照言語学[2]*1 山口	
8/13	発音[4] 新井、泉、松田、鳴海		類義表現[2] 山口、泉		コミュニケーション表現[2] 松田、鳴海	
8/14	発音[4] 新井、泉、松田、鳴海		聴解・口頭表現[2] 新井、鳴海		類義表現[2] 山口、泉	

8/15	発音[4] 新井、泉、松田、鳴海	聴解・口頭表現[2] 新井、鳴海	類義表現[2] 山口、泉	コミュニケーション表現[2] 松田、鳴海
8/16	朗読総評・発音個別指導[4] 新井、泉、松田、鳴海		教授法：教室ゲーム[中]、作文総評[高] 松田、山口	意見交換会[1] 全講師

[ ]はクラス数、[中]は中学、[高]は高校を対象とするクラスであることを表す。\*1は漢語話者と朝鮮語話者の対象別クラス。課外では、ビデオ上映、個人面談、茶話会、日中交流会、日中友好クラス交流、朗読発表などを実施した。

## 遼寧省会場

**期 間** 8月4～16日  
**場 所** 大連市教育学院(遼寧省大連市)  
**研修生** 33名  
**講師** 8名(内2名は複数会場を巡回)  
**講師名** 狩野佳子(西安外国語学院外籍講師)、加納陸人(文教大学助教授)\*、柳原悦子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／遼寧外国語大学)、坂本倫子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員

／太原外国語学校)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、田口みゆき(洛陽外国語学院外籍教師)、横山紀子(国際交流基金日本語国際センター専任講師・国際交流基金海外派遣日本語教育専門家／北京日本学研究中心)\*\*、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第5回遼寧省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/4	クラス分けテスト(聴解テスト・インタビュー)、朗読録音				オリエンテーション	
8/5	発音[1] 永保、加納		教授法：会話指導[中]、作文指導[高] 坂本、加納		聴解・口頭表現[2] 狩野、坂本	
8/6	発音[4] 狩野、柳原、坂本、田口		聴解・口頭表現[2] 狩野、坂本		類義表現[2] 加納、横山	
8/7	発音[4] 狩野、柳原、坂本、田口		聴解・口頭表現[2] 狩野、坂本		類義表現[2] 加納、横山	
8/8	発音[4] 狩野、柳原、坂本、田口		聴解・口頭表現[2] 狩野、坂本		類義表現[2] 加納、横山	
8/9	模擬授業 中学		模擬授業 高校		模擬授業について討論 教授法：教具[中]、日語教科書[高] 坂本、加納	
8/10	市内観光					
8/11	自由行動					
8/12	発音[4] 田口、横山、柳原、坂本		聴解・口頭表現[2] 柳原、坂本		教材の使い方：『写真パネルバンク』[1] 篠崎	
8/13	発音[4] 田口、横山、柳原、坂本		聴解・口頭表現[2] 柳原、坂本		教材の使い方：『教科書を作ろう』[1] 篠崎	
8/14	発音[4] 田口、横山、柳原、坂本		聴解・口頭表現[2] 柳原、坂本		類義表現[2] 加納、横山	
8/15	聴解・口頭表現[2] 柳原、坂本		類義表現[2] 加納、横山		コミュニケーション表現[2] 狩野、田口	
8/16	朗読総評・発音個別指導[4] 田口、横山、柳原、坂本		教授法：ゲーム[中]、作文総評[高] 横山、加納		意見交換会[1] 全講師	

[ ]はクラス数、[中]は中学、[高]は高校を対象とするクラスであることを表す。課外では、ビデオ上映、個人面談、茶話会、日中交流会、友好クラス交流、朗読発表などを実施した。

## 第6回〔2001年度〕

### 内蒙古自治区会場

**期 間** 7月26日～8月7日  
**会 場** 通遼市カンチカ第二高級中学(内蒙古自治区通遼市)  
**研修生** 27名  
**講師** 7名(内3名は複数会場を巡回)

**講師名** 新井潤(西安外国語学院外籍教師)、岩澤みどり(人民大学外籍教師)、黒岩幸子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／通遼市カンチカ第二高級中学)、田口みゆき(洛陽外国語学院外籍教師)、永保澄雄(京都日本語学校校長)\*\*、山田泉(大阪大学教授)\*、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師



第6回内蒙古自治区会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
7/26	講師オリエンテーション 山田		クラス分けテスト(聴解・インタビュー)			朗読録音
7/27	講師オリエンテーション：発音指導について 永保		採点・クラス分け		オリエンテーション	懇談会
7/28	発音 [1] 永保		類義表現 [2] 1: 岩澤 2: 山田		聴解・口頭表現 [2] 黒岩、新井	
7/29	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		教授法：教案について [2] *1 岩澤、山田		作文指導 [2] *1 黒岩、田口	
7/30	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		類義表現 [2] 岩澤、山田		コミュニケーション表現 [2] 黒岩、岩澤	
7/31	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		教授法：視覚教材と文化理解 [1] 山田		コミュニケーション表現 [2] 黒岩、岩澤	
8/1	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		類義表現 [2] 岩澤、山田		コミュニケーション表現 [2] 黒岩、岩澤	
8/2	自由行動					
8/3	模擬授業 中学		模擬授業 高校		模擬授業について討論 教授法：教科書と文化理解 [1] 張	
8/4	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		聴解・口頭表現 [2] 田口、新井		コミュニケーション表現 [2] 黒岩、岩澤 教授法：絵を描いて教える日本語 [1] 永保	
8/5	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		聴解・口頭表現 [2] 田口、新井		コミュニケーション表現 [2] 黒岩、岩澤 類義表現 [2] 岩澤、山田	
8/6	発音 [4] 山田、永保、新井、田口		聴解・口頭表現 [2] 田口、新井		国際交流基金教材紹介 [1] 岩澤 作文指導 [2] *1 黒岩、田口	
8/7	朗読総評・発音個別指導 [4] 山田、永保、新井、田口		聴解・口頭表現 [2] 田口、新井		意見交換会 [2] 全講師	

[ ] はクラス数、\*1 は中学・高校別クラスを表す。課外では、ビデオ上映、発音クリニック(個別指導)、茶話会などを実施した。

## 吉林省会場

**期 間** 8月5～17日  
**場 所** 吉林省教育学院(吉林省长春市)  
**研修生** 31名  
**講師** 10名(内3名は複数会場を巡回)  
**講師名** 泉文明(龍谷大学助教授)\*、加納陸人(文教大学助教授)、小林由生(長春第一外国語学校外籍教師)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、辰馬玲(関西学会講師・国際交流基金海外派遣日本語教育

専門家/東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校)、中新井綾子(国際交流基金海外派遣青年日本語教師/吉林省教育学院)、成田愛裕子(上海市旅遊服務職業技術学校外籍教師)、濱野なな枝(日本青年海外協力隊日本語教師隊員/長春外国語学校)、和栗雅子(国際交流基金海外派遣日本語教育専門家/東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校)\*\*、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)  
 \*は主任講師、\*\*は副主任講師

第6回吉林省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/5	講師オリエンテーション 泉		クラス分けテスト(聴解・インタビュー)			朗読発表 / 録音
8/6	講師オリエンテーション：発音指導について 加納、泉		採点・クラス分け		オリエンテーション	懇談会 全講師
8/7	発音 [1] 泉		教授法：教科書と文化理解 [1] 張		教授法：教案について [2] *1 中新井、和栗	
8/8	発音 [4] *2 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 濱野、小林		コミュニケーション表現 [2] 濱野、中新井 類義表現 [2] 辰馬、和栗	
8/9	発音 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 濱野、小林		教授法：視覚教材と文化理解 [1] 中新井 作文指導 [2] *1 濱野、泉	
8/10	発音 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 濱野、小林		コミュニケーション表現 [2] 濱野、中新井 類義表現 [2] 辰馬、和栗	
8/11	発音 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 濱野、小林		コミュニケーション表現 [2] 濱野、中新井 類義表現 [2] 辰馬、和栗	
8/12	自由行動					

8/13	模擬授業 中学		模擬授業 高校		模擬授業について討論		聴解・口頭表現 [2] 濱野、小林
8/14	発音 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 成田、小林		コミュニケーション表現 [2] 濱野、中新井		教授法：教材・教具 [1] 和栗
8/15	発音 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 成田、小林		コミュニケーション表現 [2] 濱野、中新井		類義表現 [2] 辰馬、和栗
8/16	発音 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 成田、小林		国際交流基金教材紹介 [1] 篠崎		作文指導 [2] *1 濱野、泉
8/17	朗読総評・発音個別指導 [4] 泉、中新井、成田、小林		聴解・口頭表現 [2] 成田、小林		意見交換会 [2] 全講師		

[ ] はクラス数、\*1 は中学・高校別クラス、\*2 は個別指導を表す。課外では、ビデオ上映、発音クリニック(個別指導)、茶話会などを実施した。

## 黒龍江省会場

**期 間** 8月8～20日  
**場 所** 黒龍江省教育学院(黒龍江省ハルビン市)  
**研修生** 32名  
**講師** 9名(内3名は複数会場を巡回)  
**講師名** 新井潤(西安外国語学院外籍教師)、大船ちさと(国際学友会非常勤講師)、加納陸人(文教大学助教授)\*、佐竹千草(日本青年海外協力隊日本

語教師隊員/ハルビン工程大学)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、田邊知成(国際交流基金海外派遣青年日本語教師/黒龍江省教育学院)、松田みゆき(島根大学非常勤講師)\*\*、横山朝子(日中学院専任講師)、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第6回黒龍江省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/8	講師オリエンテーション 加納		クラス分けテスト(聴解・インタビュー)			朗読録音
8/9	講師オリエンテーション：発音指導について 加納		採点・クラス分け		オリエンテーション	懇談会
8/10	発音 [1] 加納		聴解・口頭表現 [2] 新井、佐竹		教授法：教科書と文化理解 [1] 張	
8/11	発音 [4] 加納、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 新井、佐竹		教授法：教案について [2] *1 松田、加納 コミュニケーション表現 [2] 佐竹、松田	
8/12	発音 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 新井、佐竹		作文指導 [2] *1 松田、加納 類義表現 [2] 田邊、加納	
8/13	発音 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 新井、佐竹		教授法：視覚教材と文化理解 [1] 加納 コミュニケーション表現 [2] 佐竹、松田	
8/14	発音 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 新井、佐竹		文法：類義表現 [2] 田邊、加納 コミュニケーション表現 [2] 佐竹、松田	
8/15	自由行動					
8/16	模擬授業 中学		模擬授業 高校		模擬授業について討論 教授法：教材教具・教室活動 [1] 松田	
8/17	発音 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 横山、佐竹		コミュニケーション表現 [2] 大船、松田 類義表現 [2] 田邊、加納	
8/18	発音 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 横山、佐竹		コミュニケーション表現 [2] 大船、松田 類義表現 [2] 田邊、加納	
8/19	発音 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 横山、佐竹		作文指導 [2] *1 松田、加納 国際交流基金教材紹介 [1] 篠崎	
8/20	朗読総評・発音個別指導 [4] 横山、田邊、大船、新井		聴解・口頭表現 [2] 横山、佐竹		意見交換会 [2] 全講師	

[ ] はクラス数、\*1 は中学・高校別クラスを表す。課外では、ビデオ上映、発音クリニック(個別指導)、茶話会などを実施した。

## 遼寧省会場

**期 間** 8月2～14日  
**場 所** 遼寧教育学院(遼寧省瀋陽市)  
**研修生** 30名  
**講師** 10名(内3名は複数会場を巡回)  
**講師名** 飯野令子(日本青年海外協力隊日本語教師シニア隊員/大連市金州区教師進修学校)、加納陸人(文教大学助教授)、篠崎摂子(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)、永保

澄雄(京都日本語学校校長)\*\*、本田弘之(杏林大学助教授)\*、谷部弘子(東京学芸大学助教授)\*\*、矢部まゆみ(東京YMCA英語ホテルサービス専門学校非常勤講師)、山口智子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員/中国医科大学)、渡部真由美(日本青年海外協力隊日本語教師隊員/瀋陽市外国語学校)、張国強(中国教育学会外語教学研究会日語專業委員会会長)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第6回遼寧省会場カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 13:30-14:15	6 14:25-15:10
8/2	講師オリエンテーション 加納、谷部		クラス分けテスト(聴解・インタビュー)			朗読録音
8/3	講師オリエンテーション：発音指導について 加納		採点・クラス分け	オリエンテーション	懇談会	
8/4	発音 [1] 本田、谷部、飯野、山口		聴解・口頭表現 [2] 山口、渡部		作文指導 [2]*1 矢部、本田	
8/5	発音 [4] 本田、谷部、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 山口、渡部	教授法：教案について [2]*1 谷部、本田		教授法：教科書と文化理解 [1] 張国強	
8/6	発音 [4] 本田、谷部、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 山口、渡部	類義表現 [2] 飯野、谷部	コミュニケーション表現 [2] 矢部、渡部		
8/7	発音 [4] 本田、谷部、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 山口、渡部	類義表現 [2] 飯野、谷部	教授法：視覚教材と文化理解 [1] 矢部(渡部)		
8/8	発音 [4] 本田、谷部、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 山口、渡部	類義表現 [2] 飯野、谷部	コミュニケーション表現 [2] 矢部、渡部		
8/9	自由行動					
8/10	模擬授業 中学	模擬授業 高校	模擬授業について討論		コミュニケーション表現 [2] 矢部、渡部	
8/11	発音 [4] 本田、永保、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 矢部、渡部	教授法：絵を描いて教える日本語 [1] 永保		コミュニケーション表現 [2] 矢部、渡部	
8/12	発音 [4] 本田、永保、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 矢部、渡部	類義表現 [2] 飯野、本田	コミュニケーション表現 [2] 矢部、渡部		
8/13	発音 [4] 本田、永保、飯野、山口	聴解・口頭表現 [2] 矢部、渡部	作文指導 [2]*1 矢部、本田	国際交流基金教材紹介 [1] 篠崎		
8/14	朗読総評・発音個別指導 [4] 本田、永保、飯野、山口		聴解・口頭表現 [2] 矢部、渡部	意見交換会 [2] 全講師		

[ ] はクラス数、\*1 は中学・高校別クラスを表す。課外では、ビデオ上映、発音クリニック(個別指導)、茶話会などを実施した。

## 第7回〔2002年度〕

期 間	8月4～15日
場 所	中国共産党ハルビン市委党校(黒龍江省ハルビン市)
研修生 講 師 講 師 名	79名 19名 東香世(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／北寧市高級中学)、天野貴介(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／江西省旅遊学校)、有馬淳一(国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー)**、飯野令子(日本青年海外協力隊日本語教師シニア隊員／大連市金州区教師進修学校)、泉文明(龍谷大学助教授)**、稲田登志子(国際交流基金海外派遣青年日本語教師／遼寧省教育学院)、大船ちさと(国際学友

会非常勤講師)、加藤悦子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／長春市第八中学)、加納陸人(文教大学助教授)\*、杉山充(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／大連市第一中学)、鈴木今日子(東京城北日本語学院専任講師)、田邊知成(国際交流基金海外派遣青年日本語教師／黒龍江省教育学院)、辻聖子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／長春市朝鮮族中学)、中新井綾子(国際交流基金海外派遣青年日本語教師／吉林省教育学院)、本田弘之(杏林大学助教授)\*\*、松本朝子(旧姓横山、日中学院専任講師)、谷部弘子(東京学芸大学助教授)\*\*、唐磊(課程教材研究所外語室主任)、黎雲華(上海市甘泉中学日本語教師)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第7回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 14:00-14:45	6 14:55-15:40
8/4	クラス分けテスト(聴解・インタビュー)、朗読録音					オリエンテーション
8/5	発音 [2]*2 泉、加納		教材活用法：『写真パネルバンク』[1] 有馬		教授法：教科書の使い方 [4]*1 松本、大船、谷部、加納	
8/6	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	作文指導 [4]*1 谷部、飯野、泉、本田		教授法：教案指導(基本) [4]*1 松本、大船、谷部、加納	
8/7	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	コミュニケーション表現 [4] 稲田、杉山、中新井、辻、田邊、加藤、本田、東		教授法：教案指導(発展・課題) [4]*1 松本、大船、谷部、加納	
8/8	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	作文指導 [4]*1 谷部、飯野、泉、本田		教授法：文法導入と練習法 [3]*1 鈴木、本田、加納	
8/9	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	コミュニケーション表現 [4] 稲田、杉山、中新井、辻、田邊、加藤、本田、東		教授法：文法導入と練習法 [4]*1 鈴木、本田、谷部、加納	

自由行動			
8/10	自由行動		
8/11	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	コミュニケーション表現 [4] 稲田、杉山、中新井、辻、田邊、加藤、本田、東
8/12	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	コミュニケーション表現 [4] 稲田、杉山、中新井、辻、田邊、加藤、本田、東
8/13	発音 [10] 講師 10名	聴解・口頭表現 [4] 東、辻、杉山、加藤	コミュニケーション表現 [4] 稲田、杉山、中新井、辻、田邊、加藤、本田、東
8/14	朗読発表・録音 [10] 講師 10名		文化理解 [中] [1]、作文指導 [高] [2] 泉、本田、TJF(長江)
8/15	朗読総評・発音個別指導 [10] 講師 10名		作文指導 [中] [2]、文化理解 [高] [1] 谷部、飯野、TJF(中野、長江)

[ ] はクラス数、[中] は中学、[高] は高校を対象とするクラス、\*1 は中学・高校別クラス、\*2 は朝鮮語話者クラスと漢語話者・その他のクラスであることを表す。課外では、発音クリニック(個別指導)、日中教師交流、茶話会などを実施した。講師 10名は、天野、有馬、飯野、泉、稲田、大船、鈴木、田邊、中新井、松本、8/2-3 に講師オリエンテーション、8/16-17 には日中教師セミナーを実施した。

≫ 第1回から第7回までのカリキュラムは、全体主任講師の加納陸人文教大学助教授を中心に各会場の主任講師の協力により作成された。

## 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」編集・制作(第2部70ページ)

代 表 総監修	加納陸人(文教大学助教授) 水谷修(名古屋外国語大学教授)
------------	----------------------------------

監 修 執 筆	姫野昌子(放送大学教授) 飯島ひとみ(杏林大学非常勤講師)、石井誠(横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会メンバー)、伊藤宏美(群馬大学留学生センター非常勤講師)、高野浩子(学習院大学非常勤講師)、田中妙子(慶應義塾大学国際センター専任講師)、本田明子(立命館アジア太平洋大学非常勤講師)、本田弘之(杏林大学助教授)、山口敏幸(国際交流基金日本語教育専門家)*
------------	---

### ①『発音』

仕 様 発行年 執 筆	B5判、106ページ 1998年初版、毎年増補改訂、2002年最終版発行 [漢語話者対象] 石井誠(横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会メンバー)、山口敏幸(国際交流基金日本語教育専門家)* [朝鮮語話者対象] 泉文明(龍谷大学助教授)*、新川以智子(名古屋大学非常勤講師) 塩原慎次朗(元NHKアナウンサー)
校 閲	

### ②『コミュニケーション表現』

仕 様 発行年	B5判、202ページ 1997年初版、1999年『交際用語』を改題、毎年増補改訂、2002年最終版発行
監 修 執 筆	阪田雪子(杏林大学客員教授) 飯島ひとみ(杏林大学非常勤講師)、石井誠(横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会メンバー)、伊藤宏美(群馬大学留学生センター非常勤講師)、田中妙子(慶應義塾大学国際センター専任講師)、本田明子(立命館アジア太平洋大学非常勤講師)、本田弘之(杏林大学助教授)*、松田みゆき(島根大学非常勤講師)

### ③『類義表現の使い分け』

仕 様 発行年	B5判、356ページ 1997年初版、1998、1999、2001年増補改訂、2002年最終版発行
------------	--

### ④『助詞の使い分け文例集』

仕 様 発行年	B5判、156ページ 1997年初版、2001年増補改訂・『動詞の整理』を改題、2002年最終版発行
監 修 執 筆	阪田雪子(杏林大学客員教授) 飯島ひとみ(杏林大学非常勤講師)、石井誠(横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会メンバー)、伊藤宏美(群馬大学留学生センター非常勤講師)、田中妙子(慶應義塾大学国際センター専任講師)、本田明子(立命館アジア太平洋大学非常勤講師)、本田弘之(杏林大学助教授)*

### ⑤『発音指導の手引き』

仕 様 発行年 執 筆 翻訳・校閲	B5判、96ページ 2002年初版発行 永保澄雄(龍谷大学非常勤講師) 朱春暉(元北京外国語大学教授)
----------------------------	--

\*は完成版制作時のリーダーを表す



## 中国の中学・高校用日本語教科書『日語』編集協力 (第2部76ページ)

### 中学用教科書

『義務教育課程標準実験教科書日語』

**仕様** B5判、2色、**[7年級上]** 112頁、**[7年級下]** 110頁、**[8年級上]** 110頁、**[8年級下]** 112頁、**[9年級上]** 108頁、**[9年級下]** 162頁

**協力期間** 2001年4月～2004年3月  
**発行** **[7年級上]** 2002年8月、**[7年級下]** 2002年10月、**[8年級上]** 2003年8月、**[8年級下]** 2003年12月、**[9年級上]** 2005年8月、**[9年級下]** 2005年10月

**出版社** 人民教育出版社

### 中国側編集委員会

**委員** 唐磊(課程教材研究所教授)、張国強(課程教材研究所副教授)、張敏(課程教材研究所講師)、劉粉麗(課程教材研究所講師)、李家祥(課程教材研究所講師)、趙華敏(北京大学副教授)、彭廣陸(北京大学教授)、朱京偉(北京外国語大学副教授)、続三義(北京外国語大学教授)、何琳(首都師範大学副教授)

**監修** 顧海根(北京大学教授)、嚴安生(元北京外国語大学日本学研究センター主任教授)

**事務局** 課程教材研究所

### 日本側編集委員会

**委員** 加納陸人(文教大学教授)、大船ちさと(課程教材研究所外国人専門家)、鈴木今日子(東京城北日本語学院専任講師)、松本朝子(日中学院専任講師)

**監修** 水谷修(元国立国語研究所所長)

**事務局** TJF

### 高校用教科書

『全日制普通高級中学教科書(試験本)日語』

**仕様** B5判、2色、**[第1冊]** 278頁、**[第2冊]** 226頁、**[第3冊]** 264頁

**協力期間** 1996年4月～1999年6月  
**発行** **[第1冊]** 1997年6月、**[第2冊]** 1998年6月、**[第3冊]** 1999年6月

**出版社** 人民教育出版社

### 中国側編集委員会

**委員長** 魏国東(課程教材研究所所長)  
**委員** 唐磊(課程教材研究所教授)、張国強(課程教材研究所副教授)、張敏(課程教材研究所講師)、趙華敏(北京大学副教授)、翟東娜(北京師範大学副教授)、林洪(北京師範大学講師)

**事務局** 課程教材研究所

### 日本側編集委員会

**委員長** 水谷修(元国立国語研究所所長)  
**委員** 加納陸人(文教大学助教授)、藤井真三(日中学院専任講師)、青木惣一(アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター助教授)、横山朝子(日中学院専任講師)

**監修** 佐治圭三(京都外国語大学教授)、玉村文郎(同志社大学教授)、山田泉(大阪大学教授)

**事務局** TJF

## 全中国小学校日本語教師研修会 (第2部77ページ)

### 第1回 (2004年度)

**期間** 7月25日～8月5日  
**場所** 遼寧省基礎教育教研培训中心(遼寧省瀋陽市)  
**研修生** 50名  
**講師** 6名  
**講師名** 飯野令子(元日本青年海外協力隊日本語教師シニア隊員)、稲田登志子(国際交流基金海外派

遣日本語教育ジュニア専門家／遼寧省基礎教育教研培训中心)、齋藤ひろみ(東京学芸大学助教授)\*、杉山充(アン・ランゲージ・スクール非常勤講師)、鳴海佳恵(国際交流基金海外派遣日本語教育ジュニア専門家／遼寧省基礎教育教研培训中心)、山田花尾里(東北師範大学外国語学院講師) \*は主任講師

第1回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 14:00-14:45	6 14:55-15:40
7/25	クラス分け(インタビュー)、座談会				オリエンテーション	
7/26	小学校日本語教育の意義と目的について [1]				カリキュラムについて [1]	
	齋藤				飯野	
7/27	写真教材「日本の小学生生活」ワークショップ [1]					
	全講師					
7/28	テーマ学習の教授法・教室活動1：友達になろう [2]					
	齋藤、稲田、鳴海／飯野、杉山、山田					

7/29	テーマ学習の教授法・教室活動1：授業づくり [2]	テーマ学習の教授法・教室活動1：発表 [2]	日本語教室 [4]
	齋藤、飯野	齋藤、飯野	稲田、杉山、鳴海、山田
7/30	テーマ学習の教授法・教室活動2：学校へ行こう！ [2]		
	齋藤、稲田、鳴海／飯野、杉山、山田		
7/31	テーマ学習の教授法・教室活動2：授業づくり [2]	テーマ学習の教授法・教室活動2：発表 [2]	日本語教室 [4]
	齋藤、飯野	齋藤、飯野	稲田、杉山、鳴海、山田
8/1	自由行動		
8/2	テーマ学習の教授法・教室活動3：一緒に遊ぼう！ [2]		
	飯野、杉山、山田／齋藤、稲田、鳴海		
8/3	テーマ学習の教授法・教室活動3：授業づくり [2]	テーマ学習の教授法・教室活動3：発表 [2]	日本語教室 [4]
	飯野、齋藤	飯野、齋藤	稲田、杉山、鳴海、山田
8/4	テーマ学習の教授法・教室活動4：うちへ行こう！ [2]		
	飯野、杉山、山田／齋藤、稲田、鳴海		
8/5	テーマ学習の教授法・教室活動4：授業づくり [2]	テーマ学習の教授法・教室活動4：発表 [2]	意見交換会 [1]
	飯野、齋藤	飯野、齋藤	全講師

[ ]はクラス数を表す。 テーマ学習の教授法・教室活動では、講師が活動例を見せたあと、研修生がグループに分かれて、教案をつくり発表した。

### 第2回 (2005年度)

**期間** 8月13～24日  
**場所** 遼寧省基礎教育教研培训中心(遼寧省瀋陽市)  
**研修生** 51名  
**講師** 11名  
**講師名** 池上摩希子(早稲田大学助教授)\*\*、鎌田美保(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／湖北師範学院)、齋藤ひろみ(東京学芸大学助教授)\*\*、杉山充(早稲田大学大学院)、田島芳美(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／大連市第

三十中学)、中村直子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／瀋陽市朝鮮族第一中学)、鳴海佳恵(国際交流基金海外派遣日本語教育ジュニア専門家／遼寧省基礎教育教研培训中心)、林直子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／ハルビン工程大学)、山田泉(法政大学教授)\*、山田容子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／貴州大学)、大和純子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／赤峰市競揮中学)

\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第2回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 14:00-14:45	6 14:55-15:40
8/13	小学校日本語教育の意義と目的 [1]				小学校日本語教育の意義と目的	
	山田泉				齋藤	
8/14	テーマ学習の教授法・教室活動1：友達になろう [2]			素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	〈導入〉池上、齋藤	〈展開〉杉山、林／鳴海、田島		山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/15	技能別教室活動 [2]		テーマ学習の教授法・教室活動1：授業づくり [2]	素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	杉山、林／鳴海、田島		池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/16	テーマ学習の教授法・教室活動1：授業づくり [2]		テーマ学習の教授法・教室活動1：発表 [2]	素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	杉山、林／鳴海、田島		池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/17	自由行動					
8/18	テーマ学習の教授法・教室活動2：学校へ行こう [2]			素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	〈導入〉池上、齋藤	〈展開〉杉山、鎌田／鳴海、山田容子		山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/19	技能別教室活動 [2]		テーマ学習の教授法・教室活動2：授業づくり [2]	素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	杉山、鎌田／鳴海、山田容子		池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/20	テーマ学習の教授法・教室活動2：授業づくり [2]		テーマ学習の教授法・教室活動2：発表 [2]	素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	杉山、鎌田／鳴海、山田容子		池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/21	教授法・教室活動3：一緒に遊ぼう [2]					
	〈導入〉池上、齋藤	〈展開〉杉山、大和／鳴海		〈まとめ〉池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田
8/22	技能別教室活動 [2]		テーマ学習の教授法・教室活動3：授業づくり [2]	素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	杉山、大和／鳴海		池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/23	テーマ学習の教授法・教室活動3：授業づくり [2]		テーマ学習の教授法・教室活動3：発表 [2]	素質日本語/日本語教室	素質日本語/日本語教室	
	〈導入〉杉山、大和／鳴海		池上、齋藤	山田泉／山田容子、鎌田	山田泉／山田容子、鎌田	
8/24	交流：学習発表会		交流：日本食体験		交流：日中交流会	

[ ]はクラス数を表す。素質日本語は1クラス、日本語教室は2クラスで同時に実施した。テーマ学習の教授法・教室活動では、コミュニケーションを重視した教室活動を中心に講師が活動例を見せたあと、活動例の目的、効果、組み立て方について研修生とともに振り返り、さらに研修生はグループに分かれ、教案をつくり発表した。技能別教室活動では、テーマ学習を効果的に進めるための技能(読む、書く、聞く、発音の教え方)を習得した。素質日本語：日本の小学生に対する理解を深めるための日本語でのさまざまな活動(似顔絵づくり、日中の小学生へのアンケートの分析など)。日本語教室：最終日の日中交流会に向けての準備活動(ポスター・招待状の作成、司会進行・歓迎・交流のこぼれなど)に関する日本語表現を習得。

## 第3回〔2006年度〕

**期間** 8月12～19日  
**場所** 大連教育学院(遼寧省大連市)  
**研修生** 50名  
**講師** 8名  
**講師名** 池上摩希子(早稲田大学助教授)\*\*、加藤有紀(日本青年海外協力隊日本語教師隊員/三峽大学)、北本牧子(日本青年海外協力隊日本語教

師隊員/桂林旅遊職業中等專業学校)、小谷香織(日本青年海外協力隊日本語教師隊員/湖北黄冈師範学院)、齋藤ひろみ(東京学芸大学助教授)\*\*、瀨川万有美(日本青年海外協力隊日本語教師隊員/青海民族学院)、鳴海佳恵(国際交流基金海外派遣日本語教育ジュニア専門家/遼寧省基礎教育教研培训中心)、山田泉(法政大学教授)\* \*\*は主任講師、\*\*は副主任講師

第3回カリキュラム						
時 日	1 8:30-9:15	2 9:25-10:10	3 10:20-11:05	4 11:15-12:00	5 14:00-14:45	6 14:55-15:40
8/12	開講式	クラス分けテスト	クラス分け作業	オリエンテーション	実践事例報告	
8/13	素質教育としての日本語教育 [1] 山田		交流のための日本語・日本の小学生理解 [1] 池上、齋藤	日本語教室： 発音A、聴解B、活動*1	日本語教室： 会話A、作文B、チュータ*2	瀨川、加藤、鳴海 小谷、北本、鳴海
8/14	テーマ学習の教授法・教室活動：テーマ決定・計画1 [3] 齋藤、山田、池上			日本語教室： 聴解A、作文B、活動	日本語教室： 会話A、発音B、チュータ	加藤、北本、鳴海 小谷、瀨川、鳴海
8/15	テーマ学習の教授法・教室活動：テーマ決定・計画2 [3] 齋藤、山田、池上			日本語教室： 発音A、会話B、活動	日本語教室： 聴解A、作文B、チュータ	瀨川、小谷、鳴海 加藤、北本、鳴海
8/16	中間発表 [1] 発表準備		日本語教室登録 発表	日本語教室： 会話B、作文A、活動	日本語教室： 会話B、聴解A、チュータ	小谷、北本、鳴海 瀨川、加藤、鳴海
8/17	テーマ学習の教授法・教室活動：活動案・教案づくり1 [3] 齋藤、山田、池上			日本語教室： 発音B、会話A、活動	日本語教室： 聴解B、作文A、チュータ	瀨川、小谷、鳴海 加藤、北本、鳴海
8/18	テーマ学習の教授法・教室活動：活動案・教案づくり2 [3] 齋藤、山田、池上			日本語教室： 聴解B、作文A、活動	日本語教室： 会話B、発音A、チュータ	加藤/北本/鳴海 小谷、瀨川、鳴海
8/19	成果発表 [1]				日中交流	

[ ]はクラス数を表す。

テーマ学習の教授法・教室活動では、テーマ学習を体験したあと、グループでテーマを設定し、教案をつくり発表した。

\*1の活動は楽しい活動、\*2のチュータはチュータールーム。日本語教室では、発音、会話、聴解、作文、楽しい活動、チュータールームを設け、研修生が選択できるようにした。さらに発音、会話、聴解、作文は2レベル(A、B)を設けた。楽しい活動では、五感を使ったり身体を動かしたりして日本語を学ぶ方法を体験した(折り紙、時計づくり、絵描き歌など)。チュータールームでは、日本人講師と日本語で会話を楽しんだ。

## 高等学校中国語担当教員研修 (第2部97ページ)

## 平成16年度〔2004年度〕

**期間** 7月25日～8月16日  
**場所** 吉林大学(吉林省長春市)、北京市  
**研修生** 20名  
**講師** 17名(アシスタントを含む)  
**講師名** 黄玉花(吉林大学副教授)、邵壮(吉林大学講師)、秦日竜(吉林大学講師)、宋暉(吉林大学

講師)、張吉平(吉林芸術学院副教授)、任玉華(吉林大学副教授)、李軼(吉林大学講師)、劉春明(吉林大学講師)、劉富華\*(吉林大学教授)  
 \*は主任講師  
 アシスタント 8名：王琛、王倩、汪海洋、王巍、胡明偉、施偉偉、渋谷周二、佟福奇(吉林大学研究生)

平成16年度カリキュラム					
時 日	1 8:30-10:00	2 10:15-11:45	3 14:00-14:45	4 14:55-15:40	5 16:00-17:00
7/25	講師オリエンテーション				
7/26	開講式・クラス分けテスト・オリエンテーション				休息
7/27	中国語の基礎知識1 任玉華	中国語の基礎知識2:発音指導 劉富華	発音矯正/グループ討論 講師2名*1 / 講師2名*2	グループ討論/発音矯正 講師2名*2 / 講師2名*3	
7/28	授業見学①	授業見学②	発音矯正/グループ討論 講師2名*4 / 講師2名*5	グループ討論/発音矯正 講師2名*5 / 講師2名*4	

7/29	文法指導1 任玉華	コミュニケーション表現1 黄玉花	発音矯正/グループ討論 講師2名*3 / 講師2名*6	グループ討論/発音矯正 講師2名*6 / 講師2名*7	
7/30	文法指導2 任玉華		発音矯正/グループ討論 講師2名*4 / 講師2名*8	グループ討論/発音矯正 講師2名*8 / 講師2名*4	
7/31	自由行動		長春市内の日本語教師との交流		
8/1	自由行動				
8/2	文法指導3 任玉華	作文指導1 邵壮	発音矯正/グループ討論 講師2名*9 / 講師2名*10	グループ討論/発音矯正 講師2名*10 / 講師2名*1	
8/3	教室活動1 劉富華、任玉華		発音矯正/グループ討論 講師2名*7 / 講師2名*11	グループ討論/発音矯正 講師2名*11 / 講師2名*4	
8/4	視聴覚教材を使った授業 宋暉		発音矯正/グループ討論 講師2名*4 / 講師2名*12	グループ討論/発音矯正 講師2名*12 / 講師2名*4	
8/5	授業見学③		発音矯正/グループ討論 講師2名*4 / 講師2名*13	グループ討論/発音矯正 講師2名*13 / 講師2名*4	
8/6	コミュニケーション表現1 黄玉花	発音指導 劉富華	教室活動2		
8/7	自由行動				
8/8	教室活動3 任玉華		文化活動(京劇) 張吉平		
8/9	教案作成 劉富華、任玉華		伝統的中国と新しい中国 黄玉花	中国語新語概況 秦日竜	
8/10	作文指導2 劉春明		コミュニケーション表現3 黄玉花	対外漢語教育の新教材紹介 邵壮	
8/11	交流で役立つ中国語 黄玉花		朗読発表・反省会 講師全員		
8/12	中国国家対外漢語教学領導小組弁公室訪問				
8/13	蘆溝橋抗日戦争記念館、周口店見学				
8/14	教材研究(書店めぐり)		夜：京劇鑑賞		
8/15	自由行動				
8/16	帰国				

発音矯正および討論は2クラスに分かれて実施。

\*1の講師：任玉華、李軼、\*2の講師：胡明偉、王倩、\*3の講師：劉富華、秦日竜、\*4の講師：李軼、秦日竜、\*5の講師：王琛、佟福奇、\*6の講師：王巍、渋谷周二、\*7の講師：任玉華、秦日竜、\*8の講師：施偉偉、汪海洋、\*9の講師：劉富華、李軼、\*10の講師：王巍、王倩、\*11の講師：施偉偉、渋谷周二、\*12の講師：王琛、胡明偉、\*13の講師：汪海洋、佟福奇

8/11閉講式後、北京に移動

## 平成17年度〔2005年度〕

**期間** 7月24日～8月15日  
**場所** 吉林大学(吉林省長春市)、北京市  
**研修生** 20名  
**講師** 15名(アシスタントを含む)  
**講師名** 黄玉花(吉林大学副教授)、祝東平(吉林大学副教授)、邵壮(吉林大学講師)、秦日竜(吉林大

学講師)、宋暉(吉林大学講師)、孫克文(吉林大学副教授)、張吉平(吉林芸術学院副教授)、張晋濤(吉林大学講師)、李軼(吉林大学講師)、劉富華(吉林大学教授)\*、呂文傑(吉林大学講師)  
 \*は主任講師  
 アシスタント 4名：王琛、汪海洋、胡明偉、福井啓子(吉林大学研究生)

平成17年度カリキュラム				
時 日	1 8:30-10:00	2 10:15-11:45	3 14:00-15:30	4 15:45-16:20
7/24	講師オリエンテーション			
7/25	オリエンテーション		クラス分けテスト	
7/26	発音指導1 李軼	コミュニケーション表現1 黄玉花	発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉	
7/27	発音指導2 李軼	文法指導1 祝東平	グループ討論1 王琛、汪海洋/胡明偉、福井啓子	
7/28	発音指導3 李軼	文法指導2 祝東平	発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉	
7/29	コミュニケーション表現2 黄玉花	作文指導1 邵壮	長春市内の学校訪問、日本語教師との交流	
7/30	文化活動1(長春市内見学)			自由行動
7/31	自由行動			



平成17年度カリキュラム				
時	1 8:30-10:00	2 10:15-11:45	3 14:00-15:30	4 15:45-16:20
8/1	発音指導4 李軼	文法指導3 祝東平	グループ討論2 王瑤、汪海洋／胡明偉、福井啓子	
8/2	コミュニケーション表現3 黄玉花	作文指導2 邵壮	発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉	
8/3	教室活動1		グループ討論3 王瑤、汪海洋／胡明偉、福井啓子	
8/4	視聴覚教材を使った授業 宋暉		発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉	
8/5	授業見学	研究討議	教室活動2	
8/6	文化活動2(京劇) 張吉平		自由行動	
8/7	自由行動			
8/8	教室活動3	伝統的中国と新しい中国 孫克文	中国語新語概況 秦曰竜	
8/9	教案作成 劉富華、孫克文、呂文傑、黄玉花	交流で役立つ中国語1 黄玉花	対外漢語教育の新教材紹介 邵壮	
8/10	朗読発表・反省会 講師全員			
8/11	中国国家対外漢語教学領導小組弁公室訪問			
8/12	北京市内見学			
8/13	教材研究(書店めぐり)、京劇鑑賞			
8/14	自由行動			
8/15	帰国			

8/10北京に移動

## 平成18年度〔2006年度〕

**期 間** 7月23日～8月14日  
**場 所** 吉林大学(中国吉林省長春市)、北京市  
**研修生** 20名  
**講 師** 13名(アシスタントを含む)  
**講師名** 汪海洋(吉林大学助教)、王瑤(吉林大学助教)、黄玉花(吉林大学副教授)、邵壮(吉林大学講

師)、秦曰竜(吉林大学講師)、宋暉(吉林大学講師)、張吉平(吉林芸術学院副教授)、張晋濤(吉林大学講師)、田萍(長春市歴史編纂委員会研究員)、李軼(吉林大学講師)、劉富華(吉林大学教授)\*  
\*は主任講師  
 アシスタント 2名: 福井啓子、李怡寧(吉林大学研究生)

平成18年度カリキュラム			
時	1 8:30-10:00	2 10:15-11:45	3 14:00-15:30
7/23			講師オリエンテーション
7/24		オリエンテーション	クラス分けテスト
7/25	発音指導1 李軼	コミュニケーション表現1 張晋濤	発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉、王瑤
7/26	発音指導2 李軼	文法指導1 黄玉花	グループ討論1 王瑤、汪海洋／福井啓子、李怡寧
7/27	発音指導3 李軼	文法指導2 黄玉花	発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉
7/28	コミュニケーション表現2 張晋濤	作文指導1 邵壮	文化活動1(長春の歴史) 田萍
7/29	文化活動2(長春市内見学)		自由行動
7/30	自由行動		
7/31	発音指導4 李軼	文法指導3 黄玉花	グループ討論2 王瑤、汪海洋／福井啓子、李怡寧
8/1	コミュニケーション表現3 張晋濤	作文指導2 邵壮	発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉、王瑤
8/2	グループ討論3 王瑤、汪海洋／福井啓子、李怡寧		教室活動1 長春市内の高校訪問
8/3	朗読指導 李軼		発音個別指導 李軼、張晋濤、宋暉、王瑤

8/4	授業見学	作文指導3 邵壮	グループ討論4 王瑤、汪海洋／福井啓子、李怡寧
8/5	交流時に役立つ中国語 劉富華		自由行動
8/6	自由行動		
8/7	教室活動2		中国語新語概況 秦曰竜、劉富華
8/8	視聴覚教材を使った授業 宋暉		
8/9	文化活動3(京劇) 張吉平		朗読発表 講師全員
8/10	中国国家対外漢語教学領導小組弁公室訪問		自由行動
8/11	北京語言出版社訪問		
8/12	北京市内見学		
8/13	自由行動		
8/14	帰国		

グループ討論は2クラスに分かれて行った。8/9閉講式後、北京に移動。

## 高等学校中国語担当教員講座：大阪外国語大学公開講座(第2部98ページ)

## 2005年度

**期 間** 8月12～16日  
**場 所** 大阪外国語大学  
**研修生** 32名  
**講 師** 7名

**講師名** 郭修静(大阪外国語大学講師)、鈴木慎吾(大阪外国語大学講師)、古川典代(大阪外国語大学講師)、古川裕(大阪外国語大学教授)、山崎深雪(大阪外国語大学講師)、李軼(吉林大学講師)、劉富華(吉林大学教授)

2005年度カリキュラム				
時	1 9:10-10:40	2 10:50-12:20	3 13:10-14:40	4 14:50-16:20
8/12	対照音声学：日本語の母音 山崎深雪	対照音声学：日本語の子音 山崎深雪	対照音声学：中国語の韻母 鈴木慎吾	対照音声学：中国語の声母 鈴木慎吾
8/13	発音クリニックA 李軼	日本語話者のましがえやすい文法項目 劉富華	中国語の音韻体系：音節表のしくみを知る1 鈴木慎吾	中国語の音韻体系：音節表のしくみを知る2 鈴木慎吾
8/14	文法クリニックA 劉富華	朗読の訓練A 李軼	ゲーム・言語活動を使った授業1 郭修静	ゲーム・言語活動を使った授業2 郭修静
8/15	発音クリニックB 李軼	日本語話者のましがえやすい文法項目 劉富華	学習者の興味を引き出すソフトアプローチ 古川典代	中国語学の最前線：現代中国語の語彙 古川裕
8/16	文法クリニックB 劉富華	朗読の訓練B 李軼	同時通訳訓練メソッドの中国語教育への応用 古川典代	中国語学の最前線：現代中国語の文法 古川裕

受講料：全日程10,400円(1日：6,400円)

## 2006年度

**期 間** 8月17～21日  
**場 所** 大阪外国語大学  
**研修生** 31名  
**講 師** 10名  
**講師名** 太田斎(神戸市外国語大学教授)、郭修静(大阪

外国語大学講師)、黄玉花(吉林大学副教授)、鈴木慎吾(大阪外国語大学講師)、藤井達也(埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭)、山崎直樹(大阪外国語大学助教)、山田真一(富山大学教授)、李軼(吉林大学講師)、劉富華(吉林大学教授)、盧華岩(大阪外国語大学外国人招聘教員)

2006年度カリキュラム				
時 日	1 9:10-10:40	2 10:50-12:20	3 13:10-14:40	4 14:50-16:20
8/17	教授法:いかに学習者に質問するか、形式と方法1 盧華岩	教授法:いかに学習者に質問するか、形式と方法2 盧華岩	中国語教師の素養:「平仄」って何? 鈴木慎吾	中国語教師の素養:「押韻」って何? 鈴木慎吾
8/18	日本語話者の習得しにくい音とその指導法 李軼	日本語話者のましがえやすい文法項目 黄玉花	中国語教授法:音声教育の工夫 郭修静	中国語教授法:発音訓練教材の作成 郭修静
8/19	日本語話者のましがえやすい文法項目 黄玉花	日本語話者の習得しにくい音とその指導法 李軼	中国語教師の素養:辞書の良し悪しの検討1 山崎直樹	中国語教師の素養:辞書の良し悪しの検討2 山崎直樹
8/20	朗読の訓練と指導法 李軼	交流表現 劉富華	『高校中国語教育のめやす』説明1 藤井達也	『高校中国語教育のめやす』説明2 山田真一
8/21	日本語話者のましがえやすい文法項目 黄玉花	中国語の新語概況 劉富華	中国語教師の素養:漢語諸方言概説1 太田斎	中国語教師の素養:漢語諸方言概説2 太田斎

受講料:全日程10,400円(1日:6,400円)

## 高校中国語教員研修:北九州市立大学 2006年度 (第2部98ページ)

**期間** 8月10～12日  
**場所** 北九州市立大学  
**研修生** 19名  
**講師** 5名  
**講師名** 王占華(北九州市立大学教授)、佐藤昭(北九州市立大学教授)、堀地明(北九州市立大学教授)、水本敬子(稲月志耕館高等学校講師)、葉言材(北九州市立大学助教授)

8/10	14:00	開講式
	14:10-15:40	中国語文法レベルアップⅠ 王占華
	15:50-17:20	中国語文法レベルアップⅡ 王占華
8/11	9:00-10:30	中国語音声学の基礎Ⅰ 佐藤昭
	10:40-12:10	中国語音声学の基礎Ⅱ 佐藤昭
	13:10-14:40	発音強化と発音教授法Ⅰ 葉言材
	14:50-16:20	発音強化と発音教授法Ⅱ 葉言材
		懇親会
8/12	9:00-10:30	中国事情 堀地明
	10:40-12:10	研究授業 水本敬子

受講料:全日程 6,000円 (2コマ:2,000円)

## 高校中国語教員研修:桜美林大学孔子学院 2006年度 (第2部98ページ)

**期間** 8月12～16日  
**場所** 桜美林大学淵野辺キャンパス  
**研修生** 28名  
**講師** 9名  
**講師名** 黄玉花(吉林大学副教授)、多田恵(桜美林大学非常勤講師)、藤井達也(埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭)、光田明正(桜美林大学孔子学院院长)、楊光俊(桜美林大学孔子学院副院长)、李軼(吉林大学講師)、李貞愛(桜美林大学孔子学院専任講師)、Li, Lisa Y.H.(桜美林大学専任講師)、劉富華(吉林大学教授)

2006年度カリキュラム				
時 日	1 9:00-10:30	2 10:40-12:10	3 13:00-14:30	4 14:40-16:10
8/12	中国語の音声:発音のメカニズムから 多田恵	外国語の教え方:英語教育の現場から Li, Lisa Y.H.	日中社会文化の比較1 光田明正	日中社会文化の比較2 光田明正

8/13	日本語話者の習得しにくい音とその指導法 李軼	日本語話者のましがえやすい文法項目 黄玉花	中国語の教え方:認知と実践1 李貞愛	中国語の教え方:認知と実践2 李貞愛
	日本語話者のましがえやすい文法項目 黄玉花	日本語話者の習得しにくい音とその指導法 李軼	高校中国語教育の学習目標と学習内容1 藤井達也	高校中国語教育の学習目標と学習内容2 藤井達也
8/15	朗読の訓練と指導法 李軼	交流表現 劉富華	これだけは知っておきたい文法1 楊光俊	これだけは知っておきたい文法2 楊光俊
	日本語話者のましがえやすい文法項目 黄玉花	中国語の新語概況 劉富華	カリキュラムと授業運営 楊光俊	カリキュラムと授業運営 楊光俊

受講料:全日程10,400円(1日:6,400円)

## 中国修学旅行セミナー (第2部103ページ)

### 北京修学旅行セミナー (2004年度)

**期間** 12月27～30日  
**場所** 中国北京市  
**参加者** 210名(教師162名、保護者8名、生徒31名、マスコミ2名、事務局7名)

### 日程

12/27	空路北京へ、天壇公園見学
12/28	修学旅行セミナー、故宮・天安門見学、中国国家旅游局主催レセプション
12/29	万里の長城見学、学校訪問・学校関係者との交流
12/30	買い物体験、帰国

参加費:30,000円

### 大連修学旅行セミナー (2005年度)

**期間** 12月27～30日  
**場所** 中国大連市  
**参加者** 41名(教員40名、事務局1名)

### 日程

12/27	空路大連へ、大連市内見学、修学旅行セミナー
12/28	三菱電機工場見学、旅順(水師營、二〇三高地、東鶏冠山)見学
12/29	大連教育学院見学、大連市第十六中学訪問、買い物体験
12/30	帰国

参加費:53,000円(成田発着)、58,000円(関西発着)

## 高等学校韓国語教師研修会 (第2部112ページ)

### 第1回 (1998年度)

**期間** 8月27～29日  
**場所** YMCAアジア青少年センター(東京)  
**受講者** 約40名  
**講師** 梅田博之(麗澤大学大学院教授)、生越直樹(東京大学助教授)、オ・ヨンウォン(二松学舎大学教授)、キム・ドンジュン(神田外語大学名誉教授)

8/27	14:00-14:10	開会、事業趣旨の説明
	14:10-15:50	講師紹介、参加者の自己紹介と報告
	16:00-17:00	基調講演:日本における韓国語教育 梅田博之
8/28	17:00-17:30	質疑応答
	18:30-20:00	懇親会
	9:00-9:15	高校における韓国語教育の現状 TJF(小栗)
	9:15-10:20	参加者の報告・情報交換
	10:40-11:10	韓国語の教授法 キム・ドンジュン
	11:10-12:10	質疑応答・情報交換
	13:30-14:00	インターネット・デモンストレーション
	14:00-14:30	韓国語教育と教材 オ・ヨンウォン
	14:30-15:30	質疑応答・情報交換
	15:50-16:20	高校における韓国語教育の方向 生越直樹
8/29	16:20-17:20	質疑応答・情報交換
	9:00-9:30	韓国語能力検定試験 梅田博之、キム・ドンジュン
	9:30-10:30	質疑応答・情報交換
	10:50-13:50	討議:教師ネットワーク形成と研修会の今後



## 第2回〔1999年度〕

**期間** 8月17～19日  
**場所** YMCAアジア青少年センター(東京)  
**受講者** 約60名  
**講師・発表者** イム・ヒグジャ(大阪府立阪南高校教諭)、梅田博之(麗澤大学大学院教授)、キム・ドンジュン(神田外語大学名誉教授)、鈴木孝夫(慶應義塾大学名誉教授)、チョ・ウォニル(大分・楊志館高校元講師)、西澤俊幸(長野県立蟻ヶ崎高校教諭)、パン・ジョンウン(兵庫県立湊川高校定時制教諭)

8/17	14:00-14:10	開会、主催者あいさつ
	14:10-16:00	基調講演 鈴木孝夫
	16:30-17:30	世話会からの経過報告と提案 西澤俊幸
8/18	18:00-20:00	懇親会
	9:00-12:00	授業実践報告1：異文化理解のための手だて 西澤俊幸
		授業実践報告2：湊川高校での朝鮮語授業 パン・ジョンウン
		報告をふまえた討議
	13:00-16:00	授業実践報告3：大阪府立阪南高校「韓国朝鮮語」 イム・ヒグジャ
		授業実践報告4：楊志館高校の韓国語授業 チョ・ウォニル
報告をふまえた討議		
16:30-18:30	授業実践上の工夫と疑問 梅田博之、キム・ドンジュンほか	
19:00-20:30	地域別懇親会：地域ごとのネットワーク作り	
8/19	9:00-12:00	討議：教員間ネットワークの組織化と研修会の今後
	12:00-13:00	地域ブロック別協議会
	13:00-14:00	まとめ

## 第3回〔2000年度〕

**期間** 8月18～20日  
**場所** 大学セミナーハウス(東京)  
**受講者** 日本の高校教師など65名、韓国の高校教師など45名  
**発表者** イ・グッチ(広島・崇徳高校講師)、太田剛(長野県立明科高校教諭)、キム・ジュグアン(韓国・韓獨経営情報女子高校教諭)、黒澤真爾(東京・関東国際高校講師)、チョン・ミヨン(韓国・東都工業高校教諭)、西澤俊幸(長野県立蟻ヶ崎高校教諭)、パク・チャファン(韓国・高明情報産業高校教諭)、長谷川由起子(九州産業大学講師)、馬場純二(熊本県立菊池農業高校教諭)、パン・ジョンウン(兵庫県立湊川高校定時制教諭)、山下敏裕(鹿児島県立鹿児島東高校教諭)、山下誠(神奈川県立岸根高校教諭)、ユン・ミギョン(佐賀県立唐津商業高校講師)、ユン・ユスク(韓国・誠庵女子情報産業高校教諭)、リ・ジョンヨン(大阪府立桃谷高校通信制・定時制ほか講師)

8/18	14:00-15:00	【高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク全国ブロック交流会】 全国ネットワークの現状と課題 山下誠
		東日本ブロックの活動と展望 西澤俊幸
		西日本ブロックの活動と展望 パン・ジョンウン
	15:45-17:00	南日本ブロックの活動と展望 馬場純二
		【日本の高校における韓国朝鮮語教育】 高校の韓国朝鮮語教育：日本の現状 山下誠
		模擬授業1：ハングル書道 太田剛
	17:15-18:30	模擬授業2：地域性を生かして ユン・ミギョン
		模擬授業3：通信制課程の授業 リ・ジョンヨン
		【韓国の高校における日本語教育】 高校の日本語教育：韓国の現状 パク・チャファン
		模擬授業4：マルチメディア教材を利用した日本語授業 ユン・ユスク
模擬授業5：「～月」「～日」の練習 キム・ジュグアン		
模擬授業6：存在文(あります、います)の導入 チョン・ミヨン		
19:00-21:00	懇親会	
8/19	9:00-10:45	基本語彙プロジェクト(東日本ブロック) 黒澤真爾
	11:00-12:45	学習のめやすプロジェクト(西日本ブロック) 長谷川由起子
	14:15-16:00	交流プログラム実践報告(南日本ブロック) 山下敏裕

8/19	16:30-18:30	授業形態別の分科会〔3〕 分科会1：他教科の授業 分科会2：2単位1年間の授業 分科会3：3単位2年間以上の授業
		20:00-22:00 ブロック別交流会
8/20	9:00-10:45	分科会の報告 報告1：他教科の授業 太田剛 報告2：2単位1年間の授業 ユン・ミギョン 報告3：3単位2年間以上の授業 リ・ジョンヨン
		11:00-12:45 ネットワークの今後(報告と討議)

研修会后20、21日に教員免許取得に関して、韓国朝鮮語教育と中国語教育関係者の合同会議を開催した。

※「期限を付さない常勤講師」「指導専任教諭」を含む外国籍の教師を教諭と表記した。

## 高等学校韓国語教師研修会：ソウル研修(第2部119ページ)

## 第1回〔2002年度〕

**期間** 8月5～17日  
**場所** ソウル大学言語教育院ほか  
**受講者** 20名  
**講師** アン・ギョンファ(ソウル大学言語教育院研究員)、キム・ジョンスク(ソウル大学言語教育センター教授)、キム・ジョンファ(ソウル大学言語教育院研究員)、キム・チャンソブ(ソウル大学教授)、キム・デヘン(ソウル大学教授)、キム・ファウォン(ソウル大学言語教育院研究員)、キム・

ミネ(ソウル大学言語教育院研究員)、クオン・オリャン(ソウル大学教授)、シン・ヘウォン(ソウル大学言語教育院講師)、チェ・ウンギョ(ソウル大学言語教育院研究員)、チェ・ジョンスン(ソガン大学韓国学センター教授)、チャン・ウナ(ソウル大学言語教育院講師)、パク・ガブス(ソウル大学名誉教授)、パク・ジョン(ソウル大学言語教育院研究員)、パク・ドンホ(ソウル大学言語教育院研究員)、ミン・ヒョンシク(ソウル大学教授)、ユン・フィウォン(ソウル大学教授)、ユン・ヨタク(ソウル大学教授)

2002年度カリキュラム				
時 日	1,2 9:00-10:30	3,4 10:45-12:15	5,6 13:30-15:00	7,8 15:15-16:45
8/5	入所式、オリエンテーション		韓国と海外の韓国語教育 ユン・ヨタク	韓国語の特質と歴史 キム・チャンソブ
8/6	韓国語と韓国文化 キム・デヘン		韓国語教授法：発音 パク・ジョン	
8/7	言語教育方法論 クオン・オリャン		韓国語教授法：文法 パク・ドンホ	
8/8	韓国語と日本語の対照論 パク・ガブス		韓国語教授法：語彙 キム・ファウォン	
8/9	韓国語教育課程論 ユン・フィウォン		韓国語教授法：聞く・話す キム・ジョンファ	
8/10	IAKLE* 国際学術大会に参加			
8/11	自由行動			
8/12	授業参観		韓国語教授法：読む キム・ミネ	
8/13	韓国語教授法：書く アン・ギョンファ			
8/14	韓国語教材論 キム・ジョンスク	韓国語評価法 チェ・ウンギョ	韓国文化と現場学習 シン・ヘウォン	
8/15	フィールドワーク			
8/16	韓国文化と実習 シン・ヘウォン	標準語と正書法 ミン・ヒョンシク	教材制作と活用法 チャン・ウナ	
8/17	韓国語遠隔教育論 チェ・ジョンスン	修了式、ランチョン		

\*IAKLE：The International Association for Korean Language Education

## 第2回〔2003年度〕

**期間** 8月4～16日  
**場所** ソウル大学言語教育院ほか  
**受講者** 21名  
**講師** アン・ギョンファ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・ウネ(ソウル大学言語教育院専任講師)、キム・ジョンファ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・チャンソブ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・ジョンソク(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・フィウォン(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・デヘン(ソウル大学

教授)、キム・ファウォン(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・ミネ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、クオン・オリヤン(ソウル大学教授)、シン・ヘウォン(ソウル大学言語教育院級主任講師)、チェ・ウンギョ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、チャン・ウナ(ソウル大学言語教育院級主任講師)、パク・ガブス(ソウル大学名誉教授)、パク・ジョン(ソウル大学言語教育院専任研究員)、パク・ドンホ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、ミン・ヒョンシク(ソウル大学教授)、ユン・フィウォン(ソウル大学教授)、ユン・ヨタク(ソウル大学教授)

## 2003年度カリキュラム

時 日	1,2 9:00-10:30	3,4 10:45-12:15	5,6 13:30-15:00	7 15:10-15:55	8 16:05-16:50
8/4	入所式	韓国語の特質と歴史 キム・チャンソブ	韓国語と日本語の対照論 パク・ガブス	オリエンテーション	
8/5	言語教育方法論 クオン・オリヤン		韓国語教授法：発音 パク・ジョン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／パク・ドンホ
8/6	教材制作と活用法 チャン・ウナ				
8/7	標準語と正書法 ミン・ヒョンシク		韓国語教授法：語彙と文法 キム・ファウォン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／パク・ドンホ
8/8	韓国語教育課程論 ユン・フィウォン		韓国語教授法：機能 キム・ジョンファ		
8/9	IAKLE 国際学術大会に参加				
8/10	自由行動				
8/11	授業参観	韓国語授業運用法 キム・ジョンファ、シン・ヘウォン			
8/12	韓国語と韓国文化 キム・デヘン		韓国語教育課程の実際 アン・ギョンファ		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／パク・ドンホ
8/13	韓国語評価法 チェ・ウンギョ				
8/14	実習 [選択] 書道、メドゥッ キム・ジョンソク、キム・ウネ		Team Teachingの実際 キム・ミネ		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／パク・ドンホ
8/15	フィールドワーク(ブクチョン)				
8/16	韓国語と文化教育 ユン・ヨタク	修了式、ランチョン			

[ ]はクラス数を表す。

## 第3回〔2004年度〕

**期間** 8月9～21日  
**場所** ソウル大学言語教育院ほか  
**受講者** 22名  
**講師** アン・ギョンファ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・ウネ(ソウル大学言語教育院級主任講師)、キム・ジョンソク(ソウル大学言語文化センター教授)、キム・ジョンソク(書家)、キム・ジョンチョル(ソウル大学教授)、キム・ジョンファ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、キム・チャンソブ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、

キム・デヘン(ソウル大学教授)、キム・ファウォン(ソウル大学言語教育院専任研究員)、クオン・オリヤン(ソウル大学教授)、シン・ヘウォン(ソウル大学言語教育院級主任講師)、チェ・ウォルギョ(伝統工芸家)、チェ・ウンギョ(ソウル大学言語教育院専任研究員)、チャン・ウナ(ソウル大学言語教育院級主任講師)、チャン・ソウォン(ソウル大学教授)、パク・ガブス(ソウル大学名誉教授)、パク・ジョン(ソウル大学言語教育院専任研究員)、ミン・ヒョンシク(ソウル大学教授)、ミン・ピョンウォン(ソウル産業大学IT専門大学院教授)

## 2004年度カリキュラム

時 日	1,2 9:00-10:30	3,4 10:45-12:15	5,6 13:30-15:00	7 15:10-15:55	8 16:05-16:50
8/9	入所式	韓国語の特質と歴史 チャン・ソウォン	標準語と正書法 ミン・ヒョンシク	オリエンテーション	
8/10	授業参観		韓国語教授法：発音 パク・ジョン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ
8/11	教材制作と活用法 チャン・ウナ				
8/12	韓国語教育課程論 キム・ジョンソク		韓国語教授法：語彙と文法 キム・ファウォン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ
8/13	言語教育方法論 クオン・オリヤン		韓国語教授法：機能 キム・ジョンファ		韓国の政治 ミン・ピョンウォン
8/14	IAKLE 国際学術大会に参加				
8/15	自由行動				
8/16	韓国語と韓国文化 キム・デヘン		韓国語授業運用法 シン・ヘウォン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ
8/17	韓国語と日本語の対照論 パク・ガブス		韓国語教育課程の実際 アン・ギョンファ		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ
8/18	韓国語評価法 チェ・ウンギョ				
8/19	韓国文化実習 [選択] 書道、工芸 キム・ジョンソク、チェ・ウォルギョ		セミナー		
8/20	フィールドワーク				
8/21	韓国文化の特性 キム・ジョンチョル	修了式、ランチョン			

[ ]はクラス数を表す。

## 第4回〔2005年度〕

**期間** 8月1～13日  
**場所** ソウル大学言語教育院ほか  
**受講者** 17名  
**講師** アン・ギョンファ(ソウル大学言語教育院専任講師)、イ・ピョンミン(ソウル大学教授)、ウ・ハニョン(ソウル大学教授)、キム・ウネ(ソウル大学言語教育院専任講師)、キム・ジョンソク(書家)、キム・ジョンチョル(ソウル大学教授)、キム・ジョンファ(ソウル大学言語教育院専任講師)、キム・

ジョンファ(ソウル大学言語教育院専任講師)、キム・デヘン(ソウル大学教授)、キム・ファウォン(ソウル大学言語教育院専任講師)、キム・ミネ(ソウル大学言語教育院専任講師)、シン・ヘウォン(ソウル大学言語教育院級主任講師)、チェ・ウンギョ(ソウル大学言語教育院専任講師)、チャン・ウナ(ソウル大学言語教育院専任講師)、チャン・ソウォン(ソウル大学教授)、パク・ガブス(ソウル大学名誉教授)、パク・ジョン(ソウル大学言語教育院専任講師)、ミン・ヒョンシク(ソウル大学教授)、ユン・フィウォン(ソウル大学教授)

## 2005年度カリキュラム

時 日	1,2 9:00-10:30	3,4 10:45-12:15	5,6 13:30-15:00	7 15:10-15:55	8 16:05-16:50
8/1	入所式、オリエンテーション	韓国語の特質と歴史 チャン・ソウォン	韓国語と日本語の対照論 パク・ガブス	選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ	キャンバスツアー
8/2	言語教育方法論 イ・ピョンミン	標準語と正書法 ミン・ヒョンシク		韓国語教授法：発音 パク・ジョン	
8/3	韓国語教授法：機能 キム・ジョンファ				
8/4	授業指導案作成の実際 キム・ミネ		韓国語教授法：語彙と文法 キム・ファウォン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ
8/5	授業参観	文学と韓国語教育 ウ・ハニョン	教材制作と活用法 チャン・ウナ		
8/6	IAKLE 国際学術大会に参加				
8/7	自由行動				
8/8	韓国語と韓国文化 キム・デヘン		韓国語授業運用法 シン・ヘウォン		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ
8/9	韓国語教育課程論 ユン・フィウォン		韓国語教育課程の実際 アン・ギョンファ		選択クラス [2] 発音／文法 キム・ウネ／キム・ジョンファ



2005年度カリキュラム					
時 日	1,2 9:00-10:30	3,4 10:45-12:15	5,6 13:30-15:00	7 15:10-15:55	8 16:05-16:50
8/10	韓国語評価法 チェ・ウンギョ				
8/11	韓国文化実習〔選択〕書道、工芸 キム・ジョンソクほか		セミナー	選択クラス〔2〕発音／文法 キム・ウネ／キム・チョンジャ	
8/12	フィールドワーク				
8/13	韓国文化の特性 キム・ジョンチョル	修了式、ランチョン			

[ ]はクラス数を表す。

## 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク全国研修会 (第2部116ページ)

### 第1回〔2001年度〕

期 間	11月23～24日
場 所	アピオ大阪、大阪府立青少年会館
受講者	65名
発表者	イム・ヒグジャ(大阪府立阪南高校教諭)、武井一(東京都立日比谷高校ほか講師)、チュ・ヒョンソク(二松学舎大学付属高校ほか講師)、パン・ジョンウン(兵庫県立湊川高校定時制教諭)、山下敏裕(鹿児島県立鹿児島東高校教諭)、ヤン・チョナジャ(兵庫県立尼崎工業高校教諭)、リ・ジョンヨン(大阪府立桃谷高校通信制・定時制ほか講師)

### 第2回〔2002年度〕

期 間	11月23～24日
場 所	ホテルタイセイアネックス、鹿児島市勤労者福祉センター
参加者	約50名
発表者	リ・ユジ(大阪府立西成高校教諭)、イム・ヒグジャ(大阪府立阪南高校教諭)、太田剛(長野県立大町北高校)、キム・ヒョンジョン(長崎県立対馬高校ALT*)、山下誠(神奈川県立岸根高校教諭)、ユン・ミギョン(佐賀県立唐津商業高校ほか講師)
	*ALT: Assistant Language Teacher

### 第3回〔2003年度〕

期 間	10月25～26日
場 所	みやま荘(松本市)
参加者	約50名
発表者	今給黎俊伸(鹿児島県立開陽高校教諭)、イム・チャンジャ(大阪府立桃谷高校定時制教諭)、太田剛(長野県立大町北高校教諭)、武井一(東京

11/23	13:00-13:10	開会、主催者あいさつ
	13:10-15:30	東日本・西日本・南日本ブロックの活動報告
	15:45-16:05	天理大学と神田外語大学の教員免許取得講座：参加者の報告
	16:20-18:30	「学習のめやすに依拠した教科書の草案」について討議 各ブロック活動報告を受けて総括討議、意見交換
11/24	19:30-21:30	夕食・交流会
	9:00-10:50	授業実践報告と質疑応答、討議(各ブロック)
	11:10-12:30	ネットワークの今後に関する討議、意見交換
13:30-	フィールドワーク：猪飼野コリアタウン	

※第1回の名称は全国交流会。

11/23	13:00-13:10	開会、主催者あいさつ
	13:10-13:30	ネットワークの現状と課題 山下誠
	13:30-15:05	南日本ブロック：佐賀県における新たな試み ユン・ミギョン
	15:15-16:50	東日本ブロック：松本と仙台への活動の広がり 太田剛
西日本ブロック：目が輝いた授業 リ・ユジ		
11/24	9:00-12:00	「好きやねんハングル」試用本の経過報告 イム・ヒグジャ
	13:00-	ALTの現状と課題 キム・ヒョンジョン
	13:00-	討議：ネットワーク活動の今後と課題 フィールドワーク：朝鮮陶工ゆかりの美山(苗代川)

公開授業(11/22)：鹿児島県立鹿児島東高校と開陽高校で実施

都立日比谷高校ほか講師)、長渡陽一(立教新座高校ほか講師)、山下誠(神奈川県立岸根高校教諭)

## 高等学校韓国語教育セミナー・研修会 (第2部116ページ)

### 第1回〔2003年度〕

期 間	2004年1月31日～2月1日
場 所	三朝町総合文化ホール(鳥取県東伯郡)
参加者	約70名
発表者	片山善博(鳥取県知事)、キム・ジニ(鳥取県立米子高校ALT)、シム・ジェヒョン(鳥取県立倉吉産業高校ALT*)、濱本愛(鳥取県立青谷高校教諭)、山下誠(神奈川県立岸根高校教諭)、依藤典篤(鳥取県教育委員会高等学校課指導主事)

\*ALT: Assistant Language Teacher

### 第2回〔2004年度〕

期 間	10月16～17日
場 所	対馬市商工会議所
参加者	約50名
発表者	池上和芳(長崎県立長崎明誠高校講師)、今給黎俊伸(鹿児島県立開陽高校教諭)、遠藤正承(神奈川県立横浜翠嵐高校定時制教諭)、太田剛(長野県立大町北高校教諭)、武井一(東京都立日比谷高校ほか講師)、チュア・ミファジャ(大阪府立佐野工業高校教諭)、パン・ジョンウン(兵庫県立湊川高校定時制教諭)、濱本愛(鳥取県

10/25	13:00-13:20	開会、主催者あいさつ
	13:20-13:30	基調提案：時代とネットワークの方向性 山下誠
	13:30-14:15	各ブロックからの報告、質疑応答
	14:15-15:30	実践報告 今給黎俊伸、イム・チャンジャ、太田剛、武井一、長渡陽一
10/26	15:45-17:00	討議
	18:00-20:00	夕食・交流会
	9:00-10:10	討議(前日の続き)
10/26	10:25-11:50	ネットワークの今後と課題について討議
	13:00-15:30	フィールドワーク 針塚古墳：高句麗渡来民の積み石塚 里山辺地下工場跡：戦時中の強制労働のあと
	13:00-15:30	公開授業(10/25)：長野朝鮮初中級学校で実施

公開授業(10/25)：長野朝鮮初中級学校で実施

※「期限を付さない常勤講師」「指導専任教諭」を含む外国籍の教師を教諭と表記した。

1/31	13:00-13:10	開会、主催者あいさつ
	13:10-14:00	鳥取県における韓国語教育と韓国との交流：私が韓国語を学んだ理由 片山善博
	14:00-14:20	鳥取県立高校の韓国語教育及び韓国との交流 依藤典篤
	14:40-14:50	日本の高校における韓国語教育の現状 山下誠
2/1	14:50-15:10	米子高校の授業展開／動詞の丁寧形 キム・ジニ
	15:10-15:30	鳥取県の高校における現状と課題 シム・ジェヒョン
	15:30-15:50	韓国語担当教員としての一年を振り返って 濱本愛
2/1	16:20-17:30	討議：高校における韓国語教育の現状と課題
	9:00-10:20	ネットワークの地域ごとの動き
	10:40-12:00	授業実践報告 大阪府の教材開発：高校の外国語教育多様化推進事業ほか
13:00-	フィールドワーク：日韓友好交流公園「風の丘」と資料館(赤碓町)	

1/31：高等学校韓国語教育セミナー、2/1：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会

立青谷高校教諭)、増島香代(神奈川県立横浜清陵総合高校教諭)、米倉源藏(長崎県立対馬高校校長)、渡川正人(長崎県教育委員会指導主事)

10/16	13:35-13:55	開会、主催者あいさつ
	13:55-14:15	離島留学制度 渡川正人
	14:15-14:55	対馬高校の取り組み 米倉源藏
	14:55-15:55	授業研究1：生徒を引きつける授業実践 増島香代
	16:15-17:15	授業研究2：生徒を引きつける授業実践 池上和芳
10/17	17:20-18:50	総括討論：生徒を引きつける授業実践
	9:00-10:45	韓国朝鮮語を取りまく現状 逸藤正承、太田剛、濱本愛、パン・ジョンウン
	11:00-12:30	JAKEHSの現状と今後の課題：報告と意見交換 今給黎俊伸、逸藤正承、武井一、チュア・ミアアジャ
	13:30-	フィールドワーク：雨森芳洲の誠信之交際の碑、 長崎県立対馬歴史民族資料館ほか

10/16：高等学校韓国語教育セミナー、10/17：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会、10/15に長崎県立対馬高校で公開授業が実施された。

11/12	13:00-13:10	開会、主催者あいさつ
	13:10-13:20	横浜翠嵐高校定時制における特色ある授業への取り組み 蔦澤元晴
	13:20-13:40	セミナーのテーマ 武井一
	13:40-16:20	学習項目の検討と学習項目の指針、文字と発音・文法項目を中心に 山下誠ほか
	16:40-18:30	第1分科会：タスクモチベーションの研究 キム・キョンミン、長渡陽一、増島香代 第2分科会：映像、音声資料をどう授業に生かすか ホ・コンギョン、山下敏裕、ヤン・チョナジャ、リ・ジョンヨン
11/13	9:00-10:10	タスクモチベーションと映像・音楽に関する分科会
	10:20-12:00	学習項目の指針策定に向けて
	13:00-	フィールドワーク：新宿大久保コリアンタウン、 高麗博物館

11/12：高等学校韓国語教育セミナー、11/13：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会、11/11に神奈川朝鮮中高級学校と神奈川県立横浜翠嵐高校定時制で公開授業が実施された。

11/18	13:00-13:10	開会、主催者あいさつ
	13:10-14:10	韓国朝鮮語教育はどのように始まったか キム・シジョン
	14:10-15:00	模擬授業：在日・文化理解のための韓国朝鮮語教育 パン・ジョンウン
	15:20-16:20	報告：言語コミュニケーション能力指標にもとづく授業 山下誠ほか
	16:20-17:50	グループ討論：言語コミュニケーション能力指標にもとづく授業
11/19	9:30-10:30	コミュニケーション指標に基づく授業づくり イム・ヒグジャ、チュ・ヒョンスク、長渡陽一、 増島香代、山下誠
	10:40-12:10	DVD試作教材を使った模擬授業-好きやねん ハングル 今井智美ほか
	12:20-13:00	各ブロック報告・地域報告、世話人会よりの提案

### 第3回〔2005年度〕

<b>期間</b>	11月12～13日
<b>場所</b>	神奈川県立横浜翠嵐高校
<b>参加者</b>	約60名
<b>発表者</b>	キム・キョンミン(啓明学園高校ほか講師)、武井一(東京都立日比谷高校ほか講師)、谷澤恵介(文教大学講師)、蔦澤元晴(神奈川県立横浜翠嵐高校校長)、長渡陽一(立教新座高校ほか講師)、ヒョン・ウンジュ(神奈川県立大師高校講師)、ホ・コンギョン(横浜市立横浜商業高校講師)、増島香代(神奈川県立横浜清陵総合高校教諭)、山下敏裕(鹿児島県立鹿児島水産高校教諭)、山下誠(神奈川県立鶴見総合高校教諭)、ヤン・チョナジャ(兵庫県立尼崎工業高校教諭)、リ・ジョンヨン(大阪府立今宮工業・工科高校教諭)

### 第4回〔2006年度〕

<b>期間</b>	11月18～19日
<b>場所</b>	広島市まちづくり市民交流プラザ
<b>参加者</b>	約50名
<b>発表者</b>	今井智美(大阪市立生野工業高校教諭)、イム・ヒグジャ(大阪府立阪南高校教諭)、キム・シジョン(元兵庫県立湊川高校講師、詩人)、チュ・ヒョンスク(二松学舎大学付属高校ほか講師)、長渡陽一(立教新座高校ほか講師)、パン・ジョンウン(兵庫県立湊川高校教諭)、増島香代(神奈川県立横浜清陵総合高校教諭)、山下誠(神奈川県立鶴見総合高校教諭)、ヤン・チョナジャ(兵庫県立尼崎工業高校教諭)

11/19	14:00-15:00	韓国人原爆犠牲者慰霊碑移転の経緯について 豊永恵三郎
	15:00-17:00	フィールドワーク：韓国人原爆犠牲者慰霊碑、 広島平和記念資料館

11/18：高等学校韓国語教育セミナー、11/19：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク研修会、11/17に、広島国際学院高校2年生「ハングル」授業が広島朝鮮初中高級学校で公開授業として実施された。

※「期限を付さない常勤講師」「指導専任教諭」を含む外国籍の教師を教諭と表記した。

## 韓国語教師研修会：東京研修(第2部120ページ)

### 第1回〔2004年度〕

<b>期間</b>	8月23～27日
<b>場所</b>	国際文化フォーラム会議室(東京)
<b>受講者</b>	韓国語教師(大学・高校・語学学校講師等) 37名
<b>講師</b>	伊藤英人(東京外国語大学大学院助教授)、生越直樹(東京大学大学院教授)、カン・ヒョンファ

(韓国・キョンヒ大学教授)、キム・ジナ(東京外国語大学ほか講師)、チョ・ウイソン(東京外国語大学専任講師)、チョン・フィウォン(韓国国立語学研究院学芸研究員)、ナム・ユンジン(東京外国語大学大学院助教授)、野間秀樹(東京外国語大学大学院教授)

2004年度カリキュラム				
時	1 9:30-11:00	2 11:15-12:45	3 14:00-15:30	4 15:45-17:15
8/23	序論：日本における韓国語教育の現在 野間秀樹	教材論：いかに選ぶか、いかに作るか 野間秀樹	発音の実習：単音からブロッディまで カン・ヒョンファ	書くことを教えるために カン・ヒョンファ
8/24	文字と発音を教えるために チョ・ウイソン	文法Ⅰ：助詞(格語尾)を教えるために ナム・ユンジン	文法Ⅱ：用言の活用と形を教えるために 野間秀樹	教育実習ワークショップ、教授法 野間秀樹、ナム・ユンジン
8/25	語彙Ⅰ：動詞を教えるために カン・ヒョンファ	語彙Ⅱ：形容詞と副詞を教えるために カン・ヒョンファ	韓国語教育のための言語礼節 チョン・フィウォン	読むことを教えるために：正確さを求めて 伊藤英人
8/26	北朝鮮の言語 チョン・フィウォン	正書法を教えるために チョン・フィウォン	漢字音と漢字語を教えるために 伊藤英人	韓国語教育のための語史と類型論 伊藤英人
8/27	話すことを教えるために(1)： 談話論からの接近 キム・ジナ	話すことを教えるために(2)： 言語行動からの接近 生越直樹	教育実習Ⅰ 野間秀樹、キム・ジナ	教育実習Ⅱ 野間秀樹、キム・ジナ

受講料：12,000円(1日参加3,000円)

### 第2回〔2005年度〕

<b>期間</b>	8月15～19日
<b>場所</b>	国際文化フォーラム会議室(東京)
<b>受講者</b>	韓国語教師(大学・高校・語学学校講師等) 37名
<b>講師</b>	アン・ギョンファ(韓国・ソウル大学言語教育院専任講師)、五十嵐孔一(東京外国語大学専任講師)

師)、伊藤英人(東京外国語大学大学院助教授)、キム・ジナ(東京外国語大学講師)、チョ・ウイソン(東京外国語大学専任講師)、チョ・フィチュル(東京外国語大学講師)、チョン・フィチャン(韓国国立語学政策課学芸研究員)、ナム・ユンジン(東京外国語大学大学院助教授)、野間秀樹(東京外国語大学大学院教授)

2005年度カリキュラム				
時	1 9:30-11:00	2 11:15-12:45	3 14:00-15:30	4 15:45-17:15
8/15	はじめに、受講生紹介 野間秀樹	韓国語教授法 アン・ギョンファ	話し方・聞き方教授法 アン・ギョンファ	教材論 野間秀樹
8/16	文法教授法 アン・ギョンファ	日本語話者の誤用分析 アン・ギョンファ	韓国漢字音教育法 伊藤英人	接続形の教え方 五十嵐孔一
8/17	文字と発音 チョ・ウイソン	韓国語相談室より チョン・フィチャン	用言の活用を教えるために 野間秀樹	日韓対照語彙論 チョ・フィチュル
8/18	南北の言語差、正書法 チョン・フィチャン	韓日両語の外來語表記法 チョン・フィチャン	NHKハングル講座：談話研究の視点から キム・ジナ	評価の方法、テスト論 チョ・ウイソン
8/19	韓国語とその周りの言語、類型論 伊藤英人	韓国語教育におけるコロケーション情報の活用：作文指導を中心に ナム・ユンジン	教育実習Ⅰ チョ・ウイソン	教育実習Ⅱ チョ・ウイソン

受講料：12,000円(1日参加3,000円)



## 第3回〔2006年度〕

**期間** 8月14～18日  
**場所** 国際文化フォーラム会議室、新宿第一生命ビル9階研修室(東京)  
**受講者** 韓国語教師(大学・高校・語学学校講師等)62名  
**講師** 五十嵐孔一(東京外国語大学専任講師)、伊藤

英人(東京外国語大学大学院助教授)、生越直樹(東京大学大学院教授)、キム・ジェウク(韓国外国語大学教授)、キム・ジナ(明治学院大学専任講師)、キム・セジュン(韓国国立国語院国語生活部長)、チョ・ウィソン(東京外国語大学専任講師)、ナム・ユンジン(東京外国語大学大学院助教授)、野間秀樹(東京外国語大学大学院教授)

2006年度カリキュラム				
時 日	1 9:30-11:00	2 11:15-12:45	3 14:00-15:30	4 15:45-17:15
8/14	韓国語教師研修序論 野間秀樹 【8/14-1】	韓国語音韻論 キム・ジェウク 【8/15-1】	韓国語形態論 キム・ジェウク 【8/15-4】	韓国語語彙論 キム・ジェウク 【8/15-2】
8/15	南北の言語差 キム・セジュン 【8/14-2】	正書法・分かち書き キム・セジュン 【8/14-3】	外来語表記法 キム・セジュン 【8/14-4】	用言の活用を教えるために・ 日韓対照用言活用論 野間秀樹 【8/15-3】
8/16	作文教育法：コロケーションからの アプローチ ナム・ユンジン 【8/16-2】	韓国語統辞論 キム・ジェウク 【8/16-1】	日韓対照言語学の諸問題 生越直樹 【8/16-4】	韓国語発音教育法 チョ・ウィソン 【8/16-3】
8/17	接続形教育：韓日対照の観点から 五十嵐孔一 【8/17-2】	韓国語の助詞と日本語の助詞 チョ・ウィソン 【8/17-1】	韓国漢字音教育法 伊藤英人 【8/17-4】	談話論からのアプローチ キム・ジナ 【8/17-3】
8/18	『訓民正音』講義 チョ・ウィソン 【8/18-2】	類型論からのアプローチ 伊藤英人 【8/18-1】	教育実習 [2] 五十嵐孔一、キム・ジナ 【8/18-3,4】	

母語別にクラスを分けて、講義を行った。上表は日本語母語話者の日程、【 】内は韓国語母語話者の日程(月/日-時限)を表す。  
 受講料：12,000円(1日参加3,000円)  
 8/15に課外発表「言語コミュニケーション能力指標と授業づくり」が行われた。

## 大学等韓国語教師研修会：京都研修(第2部120ページ)

## 第1回〔2004年度〕

**期間** 8月2～7日  
**場所** 京都リサーチパーク  
**受講者** 韓国語教師(大学・高校・語学学校講師等)46名  
**講師** イム・ホンビン(韓国・ソウル大学教授)、内山政春(法政大学講師)、オ・デファン(名古屋商科大

学講師)、キム・スジョン(九州大学大学院言語文化研究院外国人教師)、コ・ヨンジン(同志社大学助教授)、ソン・チョルイ(韓国・ソウル大学教授)、長谷川由起子(九州産業大学専任講師)、山田寛人(近畿大学ほか講師)、油谷幸利(同志社大学教授)

2004年度カリキュラム				
時 日	1 9:15-10:45	2 11:00-12:30	3 13:30-15:00	4 15:15-16:45
8/2	日本における韓国朝鮮語教育の 現状と課題 油谷幸利	朝鮮語教育史 山田寛人	音韻論概説・正書法 ソン・チョルイ	形態論 ソン・チョルイ
8/3	統辞論 イム・ホンビン	意味論 イム・ホンビン	語基説 内山政春	北朝鮮の言語と言語政策 コ・ヨンジン
8/4	会話指導 オ・デファン	書き方・作文 オ・デファン	聞き取り オ・デファン	日韓対照言語学1(漢字音) 油谷幸利
8/5	日韓対照言語学2(助詞・語尾・語彙) 油谷幸利	日韓対照言語学3(誤用分析) 油谷幸利	CAI入門 油谷幸利	教授法 キム・スジョン
8/6	評価論 キム・スジョン	シラバス作成法 キム・スジョン	発音教育 長谷川由起子	視覚教材使用法・授業運営法 長谷川由起子
8/7	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業

受講料：15,000円(1日参加3,000円)

## 第2回〔2005年度〕

**期間** 8月9～14日  
**場所** キャンパスプラザ京都  
**受講者** 韓国語教師(大学・高校・語学学校講師等)41名  
**講師** 浅井良純(同志社大学ほか講師)、イ・スギョン(福岡大学人文学部講師)、イム・ヒグジャ(大阪府立阪南高校教諭)、内山政春(法政大学講師)、オ・デファン(名古屋商科大学講師)、キム・ソン

ミ(同志社大学講師)、コ・ヨンジン(同志社大学助教授)、中井俊樹(名古屋大学高等教育研究センター助教授)、長谷川由起子(九州産業大学専任講師)、波田野節子(県立新潟女子短期大学教授)、前田真彦(白頭学院建国中学校教諭)、松井聖一郎(コングレ・インスティテュートほか講師)、山下誠(神奈川県立鶴見総合高校教諭)、油谷幸利(同志社大学教授)

2005年度カリキュラム					
時 日	1 9:30-10:30	2 10:40-11:40	3 11:50-12:50	4 14:20-15:20	5 15:30-16:30
8/9	韓国朝鮮語の現状と課題、 自己紹介(受講者) 油谷幸利	自己紹介(受講者) 油谷幸利	シラバス作成法 中井俊樹	韓国語音声学および 韓国語音韻論 油谷幸利	韓国語音声学および 韓国語音韻論 油谷幸利
8/10	発音教育1 長谷川由起子	発音教育2 長谷川由起子	外国語教授法 オ・デファン	語基説1 内山政春	語基説2 内山政春
8/11	対照言語学1 キム・ソンミ	対照言語学2 キム・ソンミ	対照言語学3 キム・ソンミ	誤用分析1 イ・スギョン	誤用分析2 イ・スギョン
8/12	表現領域1 オ・デファン	表現領域2 オ・デファン	正書法 長谷川由起子	15世紀朝鮮語形態論1 コ・ヨンジン	15世紀朝鮮語形態論2 コ・ヨンジン
8/13	理解領域1 オ・デファン	理解領域2 オ・デファン	授業経営1 前田真彦	授業経営2 前田真彦	北朝鮮事情 浅井良純
8/14	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	まとめ(講師、受講者)

[D] デモンストレーション：教材開発や授業の工夫などに関する発表  
 受講料：15,000円(1日参加3,000円)

## 第3回〔2006年度〕

**期間** 8月8～13日  
**場所** キャンパスプラザ京都  
**受講者** 韓国語教師(大学・高校・語学学校講師等)67名  
**講師** 浅井良純(同志社大学ほか講師)、イ・フィギョン(松山大学講師)、植田晃次(大阪大学助教授)、内山政春(法政大学助教授)、オ・デファン(島根

県立大学助教授)、キム・ソンミ(同志社大学講師)、チュ・ヒョンスク(二松学舎大学ほか講師)、長渡陽一(東京外国語大学ほか講師)、波田野節子(県立新潟女子短期大学教授)、前田真彦(白頭学院建国中学校教諭)、松井聖一郎(コングレ・インスティテュートほか講師)、山田佳子(県立新潟女子短期大学講師)、油谷幸利(同志社大学教授)

2006年度カリキュラム						
時 日	1 9:30-10:30	2 10:40-11:40	3 11:50-12:50	4 14:00-15:00	5 15:10-16:10	6 16:20-17:20
8/8	始めに、自己紹介(受講者) 油谷幸利	自己紹介(受講者) 油谷幸利	言語情報処理またはCAI 油谷幸利	音声学 内山政春	音韻論 内山政春	正書法 内山政春
8/9	発音指導法1 長渡陽一	発音指導法2 長渡陽一	外国語教授法1 オ・デファン	外国語教授法2 オ・デファン	語基説1 内山政春	語基説2 内山政春
8/10	[D]中級以上の学習者のための「会話」の授業 チュ・ヒョンスク	[D]中級学習者用教材に 新聞とウェブページ 山田佳子	[D]ハングル情報処理 入門 浅井良純	[D]建国の60年と これからの民族教育 前田真彦		
8/11	対照言語学1 キム・ソンミ	対照言語学2 キム・ソンミ	文化論1 イ・フィギョン	文化論2 イ・フィギョン		
8/11	誤用分析1 キム・ソンミ	誤用分析2 キム・ソンミ	評価論1 イ・フィギョン	評価論2 イ・フィギョン		

2006年度カリキュラム						
時 日	1 9:30-10:30	2 10:40-11:40	3 11:50-12:50	4 14:00-15:00	5 15:10-16:10	6 16:20-17:20
8/12	授業運営 1 前田真彦	授業運営 2 前田真彦	文法論、類型論 長渡陽一	朝鮮文化語 植田晃次	北朝鮮事情 1 浅井良純	北朝鮮事情 2 浅井良純
	[D]韓国語 CAIソフトの作成法 油谷幸利	[D]韓国語 CAIソフトの作成法 油谷幸利	[D]韓国語 CAIソフトの作成法 油谷幸利	[D]韓国語 CAIソフトの作成法 油谷幸利	[D]DVD作成による韓国語学習 波田野節子	[D]授業における映像資料の活用方法 松井聖一郎
	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業	受講者による模擬授業

[D] デモンストレーション：教材開発や授業の工夫などに関する発表

受講料：15,000円（1日参加3,000円）

8/12に課外発表「言語コミュニケーション能力指標と授業づくり」が行われた。

## 高校生のフォトメッセージコンテスト (第2部128ページ)

### 第1回〔1997年度〕

**名称** 日本の高校生の日常生活写真コンテスト  
**テーマ** 日本の高校生の日常生活  
**期間** 1997年6月～1998年3月  
**応募数** 222

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、リービ英雄(作家・日本文学研究者)、俵万智(歌人)、高嶋伸和(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「日野俊'sドキュメント」中西祐介(東京都立新宿山吹高校)

**優秀賞** 「弟の生活」西美有紀(広島県立三和高校)、「笑顔の理由(わけ)」岩瀬三八(大阪府立大手前高校定時制課程)、「友達感覚」吉田篤史(岐阜県立土岐商業高校)、「相撲部員 木下真吾」毛利圭助(市川高校)、「僕らのアイドル、踊る柔道家」山崎英幸(千葉県立京葉工業高校)

### 第2回〔1998年度〕

**名称** 高校生の生活写真コンテスト  
**テーマ** 自分(友だち)らしさ/いま夢中になっていること/家族と過ごす時間/私にとって特別な日/私がからすまち  
**期間** 1998年7月～1999年2月  
**応募数** 165

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、リービ英雄(作家・日本文学研究者)、金子さとみ(月刊『ジュ・パンス』編集長)、高嶋伸和(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「大地の子」荒井聡子(北海道標茶高校)  
**優秀賞** 「大人へと旅立つ時」岡本卓也(摂陵高校)、「ゆうこさんの会話」川満あんり(沖縄県立豊見城

高校)  
**審査員特別賞** 「毎日を大切に生活」佐用純一(市川高校)、「48歳の青春～在日韓国人高校生の素顔～」仙頭英樹(大阪府立大手前高校定時制課程)、「家族」加藤貴紀(市川高校)

### 第3回〔1999年度〕

**名称** 高校生の生活フォトメッセージコンテスト  
**テーマ** 日本の高校生の日常生活  
**期間** 1999年6月～2000年2月  
**応募数** 277

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、リービ英雄(作家・日本文学研究者)、金子さとみ(月刊『ジュ・パンス』編集長)、高嶋伸和(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「みつつんの夢」羽後結(横浜市立桜丘高校)  
**優秀賞** 「転校生 ーぬくもりの瞬間ー」辻幸代(大阪府立大手前高校定時制課程)、「晶子 ー17才の自分ー」熊谷史絵(秋田県立横手高校)

**審査員特別賞** 「いつも明るく振舞っている」尾崎圭一(市川高校)、「ツツミー-ing」近藤優美子(神奈川県立鶴見高校)、「暖かい家庭環境のなかで」中川賢史(市川高校)、「彼の真夜中」岡大輔(大阪府立大手前高校定時制課程)

### 第4回〔2000年度〕

**名称** 高校生の生活フォトメッセージコンテスト  
**テーマ** 友だちの素顔  
**期間** 2000年7月～2001年2月  
**応募数** 317

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、リービ英雄(作家・日本文学研究者)、金子

さとみ(月刊『ジュ・パンス』編集長)、高嶋伸和(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「いつも、彼らしく」井上慶太(神奈川県立鶴見高校)

**優秀賞** 「美香 17歳 輝く瞬間」山見茜(岐阜県立大垣工業高校)、「エリナ 16歳」中才知弥(大阪府立大手前高校定時制課程)

**審査員特別賞** 「ハッスル母ちゃん マリコの青春」阿部俊士(北海道滝川高校定時制課程)、「心の光 ☆ きらきら」菊池恵美(神奈川県立鶴見高校)、「柔道を通じて生活の充実をはかる」前地昭寛(市川高校)

### 第5回〔2001年度〕

**名称** 高校生の生活フォトメッセージコンテスト  
**テーマ** 友だちの素顔  
**期間** 2001年7月～2002年2月  
**応募数** 497

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、リービ英雄(作家・日本文学研究者)、金子さとみ(月刊『ジュ・パンス』編集長)、田所宏之(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「笑顔満点、元気になるしのなっちゃん」佐藤里美(秋田県立横手高校)

**優秀賞** 「一生懸命がんばるファイターりさ」石川直子(沖縄県立真和志高校)、「imagine」五味稚子(目白学園高校)

**審査員特別賞** 「SMILING EVERYDAY～等身大の18歳～」後尾久美子(大阪府立大手前高校定時制課程)、「いつも明るく明朗に振舞っている大中さん」園田忠司(市川高校)、「忍ちゃんの生活」今佳奈子(山形県立霞城学園高校通信制課程)

### 第6回〔2002年度〕

**名称** 高校生の生活フォトメッセージコンテスト  
**テーマ** 私だから撮れる 友だちの素顔  
**期間** 2002年7月～2003年2月  
**応募数** 318

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、リービ英雄(作家・日本文学研究者)、金子さとみ(月刊『ジュ・パンス』編集長)、田所宏之(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「英えんどうの花という名前」田中舞(自由の森学園高校)

**優秀賞** 「憧れの先輩」江崎由佳(岐阜県立大垣工業高校)、「さとぼん奮闘記」小田瑠衣子(広島県立庄原格致高校)

**審査員特別賞** 「恋人の妹」後尾久美子(大阪府立大手前高校定時制課程)、「ただ今ヨネッチ街道を珍道中」佐藤里美(秋田県立横手高校)、「日本代表高校生井川君の実態」松尾恵美(広島県立三次高校)

### 第7回〔2003年度〕

**名称** 高校生のフォトメッセージコンテスト  
**テーマ** 気になるアイツ  
**期間** 2003年7月～2004年2月  
**応募数** 186

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所所長)、可越(「東京視点」代表、映像プロデューサー)、レオニー・ボクステル(豪日交流基金事務局長)、田所宏之(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 「憧れのアッキー 16歳の記録」相原美穂(広島県立庄原格致高校)

**優秀賞** 「私の分身!! 双子の姉ちいーかぁー」宮里三奈(沖縄県立真和志高校)、「共に、そして友に」ジミー・ビューリー(大阪インターナショナルスクール)

**審査員特別賞** 「みさんごと私」松永未樹(大阪府立大手前高校定時制課程)、「麻衣的楽しみ方」宮下萌(大阪府立立工芸高校)、「↑マッスーグ↑」渡辺麻実(桜美林高校)

### 第8回〔2004年度〕

**名称** 高校生のフォトメッセージコンテスト  
**テーマ** (特定のテーマを設けなかった)  
**期間** 2004年7月～2005年2月  
**応募数** 214

#### 審査員会

**審査員長** 田沼武能(写真家)  
**審査員** 米田伸次(日本国際理解教育学会会長)、可越(「東京視点」代表、映像プロデューサー)、レオニー・ボクステル(豪日交流基金事務局長)、田所宏之(TJF常務理事)

#### 入賞作品

**最優秀賞** 『「スゴイ!」と思った瞬間」松永未樹(大阪府立大手前高校定時制課程)

**優秀賞** 「うちなー美人☆がんじゅータイム」下地小百合(沖縄県立真和志高校)、「やまこは私のびったりさん」岩田典子(広島県立庄原格致高校)

**審査員特別賞** 「これからもそのまま。」中野佐妃子(大阪府立立工芸高校)、「いつも陽気に振舞う北野君」木下英樹(市川高校)、「自立してる同級生」白井優太(宮城県塩釜高校)



## 第9回〔2005年度〕

<b>名 称</b>	高校生のフォトメッセージコンテスト
<b>テーマ</b>	みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)
<b>期 間</b>	2005年7月～2006年2月
<b>応募数</b>	286

<b>審査員会</b>	
<b>審査員長</b>	田沼武能(写真家)
<b>審査員</b>	米田伸次(日本国際理解教育学会会長)、可越(「東京視点」代表、映像プロデューサー)、ルーシー・キング(豪日交流基金事務局長)、田所宏之(TJF常務理事)

<b>入賞作品</b>	
<b>最優秀賞</b>	「フリースクールの兄貴分」不登校児フリースクール創る村』佐々木一貴(宮城県塩釜高校)
<b>優秀賞</b>	「決して忘れない　生君との絆」西口謙(大阪インターナショナルスクール)、「初恋から変わる君」園部竜矢(岐阜県立岐阜工業高校)
<b>審査員特別賞</b>	「100%ナミリン～マレーシアを通して～」藤本瞳(広島工業大学附属広島高校)、「新世界くウイグル」金子怜史(和光高校)、「たいせつなこと。」久保田淳子(大阪市立工芸高校)

第9回「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)」の表彰式。左から、田所宏之、可越、ルーシー・キング、米田伸次、田沼武能、受賞者、TJF常務理事。

※第1回から第10回までの応募作品数は2,648件（写真13,240枚）、参加者（撮影者または主人公）は延べ5,296人、参加学校数は延べ668校に上りました。

※第2回から第10回まで、授業の一環としてコンテストに参加した学校に対して「学校賞」を贈りました。また、第6回からは、学校賞対象校のうち特に優れた作品を継続して応募した学校には「学校賞特別賞」を贈りました。

<b>学校賞</b>	アメリカンスクールインジャパン(第4、5回)、茨城県立美浦養護学校(第3回)、大阪インターナショナルスクール(第4～6、8～10回)、大阪府立芦間高校(第4～6、8、9回)、大阪府立阪南高校(第4～6、8回)、大阪府立松原高校(第4、5回)、岡山県立玉野高校(第4、5回)、関西文化芸術学院(第2、3回)、岐阜県立岐阜女子商業高校(第4、5回)、埼玉県立深谷商業高校(第9回)、清泉インターナショナルスクール(第6回)、正則高校(第2～5、7～10回)、筑紫台高校(第9、10回)、東京都立工芸高校(第3～5、7～10回)、東京都立八王子北高校(第6回)、兵庫県立鈴蘭台西高校(第9回)、福岡インターナショナルスクール(第3～5、7回)、身延山高校(第8回)
<b>学校賞特別賞</b>	大阪インターナショナルスクール(第7回)、大阪府立芦間高校(第7回)、大阪府立阪南高校(第7回)、正則高校(第6回)、東京都立工芸高校(第6回)、福岡インターナショナルスクール(第6回)

## 第10回〔2006年度〕

第10回「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)」の表彰式。左から、田所宏之、可越、ルーシー・キング、米田伸次、田沼武能、受賞者、TJF常務理事。

第10回「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)」の表彰式。左から、田所宏之、可越、ルーシー・キング、米田伸次、田沼武能、受賞者、TJF常務理事。

第10回「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)」の表彰式。左から、田所宏之、可越、ルーシー・キング、米田伸次、田沼武能、受賞者、TJF常務理事。

<b>2006年度</b>	
<b>期 間</b>	8月20～24日
<b>場 所</b>	大連教育学院(遼寧省大連市)
<b>研修生</b>	31名
<b>講師</b>	9名
<b>講師名</b>	池上摩希子(早稲田大学助教授)、加納陸人(文教大学教授)*、齋藤ひろみ(東京学芸大学助教授)、立花秀正(国際交流基金派遣日本語教育

2006年度カリキュラム						
時	1	2	3	4	5	6
日	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	14:00-14:45	14:55-15:40
8/20	開講式	小中高校の日本語教育政策〔1〕 <div>王允慶*</div>	日中交流の視点から〔1〕 <div>TJF(中野)</div>	第二外国語としての日本語教育〔1〕 <div>加納</div>	特別授業：楽しい教室活動〔1〕 <div>池上、齋藤</div>	

## 第9回〔2005年度〕

<b>名 称</b>	高校生のフォトメッセージコンテスト
<b>テーマ</b>	みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)
<b>期 間</b>	2006年7月～2007年2月
<b>応募数</b>	166

<b>審査員会</b>	
<b>審査員長</b>	田沼武能(写真家)
<b>審査員</b>	米田伸次(日本国際理解教育学会会長)、可越(「東京視点」代表、映像プロデューサー)、田所宏之(TJF常務理事)

<b>入賞作品</b>	
<b>最優秀賞</b>	「世界を引き寄せる君」平松絹子(広島工業大学附属広島高校)
<b>優秀賞</b>	「やさしき人」中元早太(大阪府立大手前高校定時制課程)、「ガチャの青春」山根衣理(千葉県立津田沼高校)
<b>審査員特別賞</b>	「なんくるないさあ～精神の持ち主! しょうこ先輩!」北上奈生子(沖縄県立真和志高校)、「ほどほどに田舎もの」本田涼(宮城県塩釜高校)、「いつも　いつでも　お兄ちゃん」長谷川明(大阪市立工芸高校)

第9回「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(暮らし)」の表彰式。左から、田所宏之、可越、ルーシー・キング、米田伸次、田沼武能、受賞者、TJF常務理事。

※第1回から第10回までの応募作品数は2,648件（写真13,240枚）、参加者（撮影者または主人公）は延べ5,296人、参加学校数は延べ668校に上りました。

※第2回から第10回まで、授業の一環としてコンテストに参加した学校に対して「学校賞」を贈りました。また、第6回からは、学校賞対象校のうち特に優れた作品を継続して応募した学校には「学校賞特別賞」を贈りました。

<b>学校賞</b>	アメリカンスクールインジャパン(第4、5回)、茨城県立美浦養護学校(第3回)、大阪インターナショナルスクール(第4～6、8～10回)、大阪府立芦間高校(第4～6、8、9回)、大阪府立阪南高校(第4～6、8回)、大阪府立松原高校(第4、5回)、岡山県立玉野高校(第4、5回)、関西文化芸術学院(第2、3回)、岐阜県立岐阜女子商業高校(第4、5回)、埼玉県立深谷商業高校(第9回)、清泉インターナショナルスクール(第6回)、正則高校(第2～5、7～10回)、筑紫台高校(第9、10回)、東京都立工芸高校(第3～5、7～10回)、東京都立八王子北高校(第6回)、兵庫県立鈴蘭台西高校(第9回)、福岡インターナショナルスクール(第3～5、7回)、身延山高校(第8回)
<b>学校賞特別賞</b>	大阪インターナショナルスクール(第7回)、大阪府立芦間高校(第7回)、大阪府立阪南高校(第7回)、正則高校(第6回)、東京都立工芸高校(第6回)、福岡インターナショナルスクール(第6回)

## 大連市中学校日本語教師研修会

第3部153ページ

第3部154ページ

第3部154ページ

<b>2006年度</b>	
<b>期 間</b>	2006年12月～
<b>場 所</b>	（全5冊出版予定）
<b>研修生</b>	
<b>講師</b>	
<b>講師名</b>	専門家／中日友好大連人材培训中心)**、中村直子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／瀋陽市第一朝鮮族中学)、鳴海佳恵(国際交流基金派遣ジュニア専門家／遼寧省基礎教育教研培训中心)、藤光由子(元国際交流基金派遣日本語教育専門家)**、森田淳子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／大連市第一中学)、山本晋也(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／吉林市朝鮮族中学) <p> *は主任講師、**は副主任講師</p>

## 大連市の中学校第二外国語用日本語教科書の共同編集・出版助成

8/21	テーマ学習・教授法：友だちになろう1〔1〕 <div>加納</div>	日本語教室：発音〔4〕 <div>講師4名</div>	日本語教室：会話〔4〕 <div>講師4名</div>
8/22	テーマ学習・教授法：友だちになろう2〔2〕 <div>藤光、立花</div>	日本語教室：発音〔4〕 <div>講師4名</div>	日本語教室：会話〔4〕 <div>講師4名</div>
8/23	テーマ学習・教授法：友だちになろう3〔2〕 <div>藤光、立花</div>	日本語教室：発音〔4〕 <div>講師4名</div>	日本語教室：会話〔4〕 <div>講師4名</div>
8/24	テーマ学習・教授法：友だちになろう4〔1〕 <div>加納</div>		振り返り〔1〕 <div>加納</div>

〔 〕はクラス数を表す。講師4名は、中村、鳴海、森田、山本。\*大連市教育局副局長から、大連市内の小中高校の日本語教育の奨励計画について説明が行われた。8/19に聴解、インタビューによるクラス分けを行った。課外では、「楽しい時間」（歌、踊り、ゲーム、絵ほか）を設け、4クラスで実施した。

## 2007年度

<b>期 間</b>	8月17～23日
<b>場 所</b>	大連教育学院(遼寧省大連市)
<b>研修生</b>	39名
<b>講師</b>	12名
<b>講師名</b>	加納陸人(文教大学教授)*、立花秀正(国際交流基金派遣日本語教育専門家／日中友好大連人材培训中心)**、中新井綾子(日本語教育専門家)**、神山譲(文部科学省・神奈川県教育委員会派遣日本語教師／大連市弘文学校)、齊

第3部154ページ

第3部154ページ

第3部154ページ

2007年度カリキュラム							
時	1	2	3	4	5	6	7
日	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:05	15:15-16:00
8/17		開講式	日本語教育がめざすもの〔1〕 <div>加納、楊</div>		授業実践発表〔1〕 <div>発表者6名</div>		
8/18	新教科書**と第二外国語	新教科書の概要：教科書の内容構成・漫画解説		新教科書の使い方教科書の各構成要素の使い方の説明			
	張濤*、楊	加納、TJF(中野)		中新井、楊、李、金、宋、張玲、森田			
8/19	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解1	加納	新教科書を使った授業例紹介		教案づくり
					中新井、李、張玲		楊、李、金、張玲
8/20	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解2	TJF(中野)	教案づくり	教案づくり	教案づくり
					楊、李、金、張玲	楊、李、金、張玲	楊、李、金、張玲
8/21	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解3	TJF(中野)	教案づくり	教案発表	
					立花、齊藤	楊、李、金、張玲	
8/22	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解4	森田	教案づくり		
					中新井、楊、李、金、張玲		
8/23	教案発表・質疑応答		振り返り		閉講式、送別宴(日本文化体験)		
	加納、楊		加納、楊				

〔 〕はクラス数を表す。教案づくりは8グループに分かれて行った。\*大連教育学院副院長、\*\*大連市中学校第二外国語用日本語教科書『好朋友1』（2007年8月16日発行）を研修会の教材として使用した。コミュニケーション能力の授業として、発音と学習活動の授業を行った。文化理解1：日本語教育と文化理解。文化理解2：TJFのウェブサイトについての説明。文化理解3：国際交流基金のウェブサイトについての説明。文化理解4：『好朋友1』『日本語広場』で取り上げられている日本文化(じゃんけん、折り紙など)の体験。

## 大連市の中学校第二外国語用日本語教科書の共同編集・出版助成

第3部154ページ

第3部154ページ

<b>期 間</b>	2006年12月～
<b>場 所</b>	（全5冊出版予定）
<b>研修生</b>	
<b>講師</b>	
<b>講師名</b>	『好朋友 ともだち1』（試行版）
<b>仕様</b>	B5判、カラー、126頁、CD-ROM1枚付
<b>発行</b>	2007年8月
<b>出版社</b>	外語教学与研究出版社

## 大連市の中学校第二外国語用日本語教科書の共同編集・出版助成

8/21	テーマ学習・教授法：友だちになろう1〔1〕 <div>加納</div>	日本語教室：発音〔4〕 <div>講師4名</div>	日本語教室：会話〔4〕 <div>講師4名</div>
8/22	テーマ学習・教授法：友だちになろう2〔2〕 <div>藤光、立花</div>	日本語教室：発音〔4〕 <div>講師4名</div>	日本語教室：会話〔4〕 <div>講師4名</div>
8/23	テーマ学習・教授法：友だちになろう3〔2〕 <div>藤光、立花</div>	日本語教室：発音〔4〕 <div>講師4名</div>	日本語教室：会話〔4〕 <div>講師4名</div>
8/24	テーマ学習・教授法：友だちになろう4〔1〕 <div>加納</div>		振り返り〔1〕 <div>加納</div>

〔 〕はクラス数を表す。講師4名は、中村、鳴海、森田、山本。\*大連市教育局副局長から、大連市内の小中高校の日本語教育の奨励計画について説明が行われた。8/19に聴解、インタビューによるクラス分けを行った。課外では、「楽しい時間」（歌、踊り、ゲーム、絵ほか）を設け、4クラスで実施した。

## 2007年度

<b>期 間</b>	8月17～23日
<b>場 所</b>	大連教育学院(遼寧省大連市)
<b>研修生</b>	39名
<b>講師</b>	12名
<b>講師名</b>	加納陸人(文教大学教授)*、立花秀正(国際交流基金派遣日本語教育専門家／日中友好大連人材培训中心)**、中新井綾子(日本語教育専門家)**、神山譲(文部科学省・神奈川県教育委員会派遣日本語教師／大連市弘文学校)、齊

第3部154ページ

第3部154ページ

第3部154ページ

2007年度カリキュラム							
時	1	2	3	4	5	6	7
日	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:05	15:15-16:00
8/17		開講式	日本語教育がめざすもの〔1〕 <div>加納、楊</div>		授業実践発表〔1〕 <div>発表者6名</div>		
8/18	新教科書**と第二外国語	新教科書の概要：教科書の内容構成・漫画解説		新教科書の使い方教科書の各構成要素の使い方の説明			
	張濤*、楊	加納、TJF(中野)		中新井、楊、李、金、宋、張玲、森田			
8/19	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解1	加納	新教科書を使った授業例紹介		教案づくり
					中新井、李、張玲		楊、李、金、張玲
8/20	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解2	TJF(中野)	教案づくり	教案づくり	教案づくり
					楊、李、金、張玲	楊、李、金、張玲	楊、李、金、張玲
8/21	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解3	TJF(中野)	教案づくり	教案発表	
					立花、齊藤	楊、李、金、張玲	
8/22	発音〔4〕 <div>神山、森田、立花、宮村</div>	学習活動〔3〕 <div>神山、齊藤／立花／中新井</div>	文化理解4	森田	教案づくり		
					中新井、楊、李、金、張玲		
8/23	教案発表・質疑応答		振り返り		閉講式、送別宴(日本文化体験)		
	加納、楊		加納、楊				

〔 〕はクラス数を表す。教案づくりは8グループに分かれて行った。\*大連教育学院副院長、\*\*大連市中学校第二外国語用日本語教科書『好朋友1』（2007年8月16日発行）を研修会の教材として使用した。コミュニケーション能力の授業として、発音と学習活動の授業を行った。文化理解1：日本語教育と文化理解。文化理解2：TJFのウェブサイトについての説明。文化理解3：国際交流基金のウェブサイトについての説明。文化理解4：『好朋友1』『日本語広場』で取り上げられている日本文化(じゃんけん、折り紙など)の体験。

## 大連市の中学校第二外国語用日本語教科書の共同編集・出版助成

第3部154ページ

第3部154ページ

<b>期 間</b>	2006年12月～
<b>場 所</b>	（全5冊出版予定）
<b>研修生</b>	
<b>講師</b>	
<b>講師名</b>	日本側編集委員会
<b>委員長</b>	加納陸人(文教大学教授)
<b>委 員</b>	中新井綾子(日本語教育専門家)、藤光由子(日本語教育専門家)
<b>事務局</b>	TJF
<b>中国側編集委員会</b>	
<b>委員長</b>	張濤(大連教育学院副院長)

<b>委員</b>	宋曉峰(大連市第十六中学日本語教師)、李芷苓(大連市第三十四中学校日本語教師)、金尚笋(金州区教師進修学校日語教員)、張玲(大連市第三十中学日本語教師)、楊慧(大連教育	学院日語教員) <p>[編集協力] 森田淳子(日本青年海外協力隊日本語教師隊員／大連市第一中学)</p> <b>事務局</b> 大連教育学院
-----------	--	--

## 「高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす」作成プロジェクト （第3部155ページ）

<b>事業名</b>	わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム「高等学校における中国語と韓国朝鮮語の目標・内容・方法に関する研究」（文部科学省委嘱事業）	井達也(埼玉県立伊奈学園総合高校教諭)、古川裕(大阪外国語大学教授)、森茂岳雄(中央大学教授)、山田眞一(富山大学教授)、水口景子(TJF職員)
<b>期間</b>	2006年1月～2007年3月	
<b>推進委員</b>		
<b>委員長</b>	中野佳代子(TJF理事・事務局長)	
<b>委員</b>	鈴木啓修(埼玉県教育局指導部高校教育指導課指導主事)	
<b>【中国語部会委員】</b>	植村麻紀子(埼玉県立和光国際高校ほか講師)、胡興智(上智大学講師、日中院専任講師)、千場由美子(大阪府立柴島高校教諭)、藤	
<b>【韓国朝鮮語部会委員】</b>		イム・ヒグジャ(大阪府立阪南高校教諭)、チュ・ヒョンスク(二松学舎大学、同附属高校ほか講師)、長渡陽一(立教新座高校ほか講師)、増島香代(神奈川県立横浜清陵総合高校教諭)、山下誠(神奈川県立鶴見総合高校教諭)、野間秀樹(東京外国語大学大学院教授)、長谷川由起子(九州産業大学専任講師)、油谷幸利(同志社大学教授)、小栗章(TJF職員)
<b>出版物</b>		『高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす(試行版)』（2007年3月発行）

## 中国語を学ぶ高校生の中国短期研修 （第3部160ページ）

<b>期間</b>	2007年8月21～30日	<b>日程</b>	
<b>場所</b>	北京市、大連市	8/21	成田空港から北京へ
<b>参加者</b>	全国33都道府県の86校から91名の中国語を学ぶ高校生、団長(TJF常務理事)1名、引率教員4名、看護師1名、TJFスタッフ2名	8/22	開講式のあと首都経済貿易大学で中国語授業開始
		8/23	午前：授業　午後：太極拳と中国結びを体験
		8/24	午前：授業　午後：成果発表会の後、首都計画館見学 <p>夜：北京在住の日本人(留学生、社会人)と交流</p>
		8/25	午前：万里の長城見学 <p>午後：授業で習った中国語を使い秀水市場でショッピング</p>
		8/26	午前：天壇公園と天安門広場・故宮見学 <p>午後：王府井を散策、ショッピング</p>
		8/27	北京から大連へ移動。　夜：京劇鑑賞
		8/28	午前：極地海洋動物館を見学した後、大連第十六中学へ。 <p>午後：労働公園を散策した後、第16中学の生徒の案内でデパートでショッピング</p>
		8/29	午前：旅順へ。水師営・二〇三高地見学 <p>午後：旅順第二高校を訪問、交流会　夜：歓送会</p>
		8/30	大連空港から成田へ
			参加費：20,000円

## 高校生の写真撮影交流プログラム「Focus on Japan 2007」 （第3部163ページ）

<b>期間</b>	2007年8月3日～11日	<b>日程</b>	
<b>参加者</b>	日本の高校生8名と海外の高校生8名(中国・韓国各2名、英国・オーストラリア・ニュージーランド・米国各1名)	8/3	東京に集合
<b>協力</b>	大阪市立工芸高校撮影研究部、広島県立庄原格致高校写真部、宮城県塩釜高校写真部、和光高校写真部、	8/4	オリエンテーション、歓迎会
<b>撮影場所</b>	大阪府、東京都、広島県、宮城県	8/5～9	撮影場所での撮影、作品制作
		8/10	作品発表会、歓送会
		8/11	解散

## 図書寄贈・助成事業

第1部で述べたとおり、1996年度まで図書寄贈事業を主要事業の一つとして行っていました。1997年度に財団設立10周年記念事業として、国内外の教育・研究機関に対して、日本の文学、美術、社会等日本に関連する英文図書の寄贈申請を公募しましたが、主要事業としての図書寄贈事業はこれが最後となりました。それ以後は、言語教育事業のなかに吸収するとともに、教育機関などに対して辞書、教材、写真集等

の寄贈を小規模に行ってきました。また、TJFは事業型財団ですが、TJFの事業を遂行するために必要とされる事業およびTJFの事業の趣旨にあう事業に対して、非公募で個別に助成を行ってきました。1997年度から2006年度までに行行った図書寄贈・助成事業のなかで、第1部～第3部で記述できなかった事業は以下のとおりです。

## 図書寄贈事業一覧

対象事業	期間	場所
国際交流基金日本語国際センター研修事業	1997年6月、7月、8月、12月、1998年1月	埼玉
全米日米協会	1997年6月、7月、8月	米国
日本外交協会主催夏期ジュニア大使友情使節団	1997年7月～2004年3月	英国、オランダ、カナダ、中国、米国、マレーシア
経済広報センター・第18回社会科教育関係者招聘事業	1997年7月	東京
ウズベキスタン第295校	1997年7月	ウズベキスタン
高校生国際交流プログラム実行委員会主催第4回米国高校生国際交流プログラム	1997年7月	東京
財団設立10周年記念図書寄贈事業	1997年9月～1998年3月	アイルランド、英国、オーストラリア、オーストリア、コロンビア、スイス、トルコ、モザンビーク、米国、韓国、フランス、カナダ、タイ、ドイツ、ロシア、日本各地
第15回全日本中国語弁論大会全国大会	1997年11月	日本各地
東北朝鮮民族教育出版社	1997年12月	中国
タイ日本交流作文コンテスト	1998年1月	タイ
外国人による日本語スピーチコンテスト	1998年1月	東京
ワシントン州日米協会主催ワシントン州高校生対象スピーチコンテスト	1998年4月	米国
高等学校中国語教育研究会主催中国語朗読暗誦大会	1998年4月	日本各地
フォックスシティズ子ども博物館	1998年7月	米国
いっくら主催いっくら日本語スピーチコンテスト	1998年度～2006年度	栃木
日中友好協会主催全日本中国語スピーチコンテスト	1998年度～2006年度	東京
北京大学主催日本語弁論大会	1998年11月	中国
全米日本語教師会・全米日本語教師協議会	1999年11月	米国
泰日経済技術振興協会付属語学学校	1999年3月	タイ
東京小石川ロータリークラブ等主催高校生意見発表会	2001年度～2006年度	東京

## 助成事業一覧

対象事業	期間
日本語教育学会の春季・秋季大会(毎年5月・10月に開催)	1997年度～2005年度
異文化間教育学会の紀要刊行	1997年度
異文化間教育学会の大会(毎年5月または6月に開催)	1998年度～2005年度
ヴィジョンの会の図書購入	1998年4月
帝塚山学院大学国際理解研究所の国際理解教育論文国際文化フォーラム賞授与・副賞授与	1998年度～2004年度
中国語教育研究会の記録作成	2003年3月
日本韓国語研究会会報出版	1999年8月



# 財団の あらまし

# 財団概要

名称	<b>財団法人国際文化フォーラム</b> <b>The Japan Forum</b>
設立	1987年6月22日
会長	野間 佐和子
理事長	渡邊 幸治
出捐企業	王子製紙株式会社 株式会社講談社 大日本印刷株式会社 凸版印刷株式会社 日本製紙株式会社 株式会社三菱東京UFJ銀行
主務官庁	外務省
賛助会員	法人会員 58社 [会費1口年額5万円] 個人会員 19名 [会費1口年額1万円]

2007年12月末現在



# 役員・顧問・評議員

(任期2007年4月1日—2009年3月31日)

会長	野間 佐和子	…… (株) 講談社代表取締役社長
理事長	渡邊 幸治	…… (財) 日本国際交流センターシニア・フェロー、元駐ロシア特命全権大使
常務理事	田所 宏之	…… (財) 国際文化フォーラム常勤理事
理事	ドナルド・キーン	…… 評論家
	北島 義俊	…… 大日本印刷(株)代表取締役社長
	黒沼 コリ子	…… ヴァイオリニスト
	小林 陽太郎	…… 富士ゼロックス(株)相談役最高顧問
	篠田 和久	…… 王子製紙(株)代表取締役社長
	鈴木 孝夫	…… 慶應義塾大学名誉教授
	中野 佳代子	…… (財) 国際文化フォーラム常勤理事・事務局長
	中村 雅知	…… (株) 日本製紙グループ本社代表取締役社長
	福原 義春	…… (株) 資生堂名誉会長
	藤田 弘道	…… 凸版印刷(株)代表取締役会長
	三木 繁光	…… (株) 三菱東京UFJ銀行取締役会長
	三角 哲生	…… (学) 二階堂学園理事長、元文部事務次官
	山本 正	…… (財) 日本国際交流センター理事長
	横山 至孝	…… (株) 講談社常務取締役
監事	小田倉 正典	…… 公認会計士
	関根 邦彦	…… (株) 講談社監査役
顧問	高嶋 伸和	…… 前(財) 国際文化フォーラム常務理事
評議員	饗庭 孝典	…… 東アジア近代史学会副会長
	足立 直樹	…… 凸版印刷(株)代表取締役社長
	上野 田鶴子	…… 放送大学客員教授
	梅田 博之	…… 廣池学園顧問、麗澤大学名誉教授
	北島 義斉	…… 大日本印刷(株)専務取締役

草場 宗春	…… 大阪大谷大学学長
輿水 優	…… 東京外国語大学名誉教授
小宮 秀之	…… (株)トーハン執行役員海外事業部長
佐藤 國雄	…… (財)ユネスコ・アジア文化センター理事長
佐藤 郡衛	…… 東京学芸大学教授
鈴木 和夫	…… (財)ユネスコ・アジア文化センター顧問
関口 裕	…… 王子製紙(株)取締役専務執行役員
鶴田 尚正	…… 日本出版販売(株)代表取締役会長
富田 充	…… 講談社インターナショナル(株)代表取締役社長
長瀬 眞	…… 全日本空輸(株)専務取締役執行役員
奈良 久彌	…… (株)三菱総合研究所取締役特別顧問
C.W. ニコル	…… 作家
野間 省伸	…… (株)講談社代表取締役副社長
浜田 博信	…… (株)講談社取締役相談役
鮑 啓東	…… 前人材派遣健康保険組合理事
松岡 紀雄	…… 神奈川大学教授
水谷 修	…… 名古屋外国語大学学長
茂木 友三郎	…… キッコーマン(株)代表取締役会長
吉田 研作	…… 上智大学教授
若松 常正	…… 日本製紙(株)専務取締役洋紙営業本部長

(敬称略 五十音順 2007年12月末現在)

## 財団事務局

事務局長	中野 佳代子
事務局主任	水口 景子
職員	飯野 典子、小栗 章、長江 春子、原島 陽子、藤掛 敏也、室中 直美、森 亮介
専門員	大船 ちさと、千葉 美由紀、辻本 京子、楊 鳳秋
米国代表連絡員	伊藤 幸男



## 収支の変遷 (1997-2006年度)

科目	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度
<b>I 収入の部</b>					
1. 寄付金収入	102,700,000	117,200,000	116,200,000	124,200,000	97,673,255 <sup>*1</sup>
2. 基本財産収入	2,500,000	0	0	0	0
3. 基本財産運用収入	27,848,288	24,734,014	18,868,524	11,633,182	15,968,920
4. 補助金等収入	3,569,580	3,700,000	8,882,320	27,442,408	69,523,748 <sup>*1</sup>
5. 会費収入	31,510,000	30,839,685	30,249,685	13,999,370	24,409,790
6. 雑収入	1,805,166	1,980,017	813,857	673,327	352,386
7. 固定資産売却収入	150,000	300,000	0	0	0
8. 特定預金取崩収入	0	0	0	0	0
当期収入合計	170,083,034	178,753,716	175,014,386	177,948,287	207,928,099
前期繰越収支差額	11,295,172	13,504,880	26,223,816	38,792,272	28,831,696
収入合計	181,378,206	192,258,596	201,238,202	216,740,559	236,759,795
<b>II 支出の部</b>					
1. 事業費	117,483,490	125,239,576	118,693,436	146,615,384	170,545,418
2. 管理費	47,339,636	40,585,204	39,788,279	41,290,730	44,806,805
3. 固定資産取得支出	550,200	210,000	964,215	0	565,530
4. 特定預金支出	2,500,000	0	3,000,000	2,749	2,001,108
当期支出合計	167,873,326	166,034,780	162,445,930	187,908,863	217,918,861
当期収支差額	2,209,708	12,718,936	12,568,456	△ 9,960,576	△ 9,990,762
次期繰越収支差額	13,504,880	26,223,816	38,792,272	28,831,696	18,840,934

\*1 講談社の寄付金（114,000,000円）のうち16,326,745円は、国際交流基金の特定助成金として入金（補助金等収入に計上）

\*2 講談社の寄付金（110,000,000円）のうち16,047,353円は、国際交流基金の特定助成金として入金（補助金等収入に計上）

\*3 2006年度より新会計基準を導入

(単位：円)

2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	科目	2006年度*3
				<b>I 事業活動収支の部</b>	
				<b>1. 事業活動収入</b>	
93,952,647*2	105,000,000	105,000,000	104,135,000	①寄付金	119,240,000
0	0	0	0	②基本財産運用収入	37,165,040
15,249,226	16,872,564	18,129,194	32,124,999	③補助金等収入	14,161,113
44,105,951*2	8,546,800	10,371,836	20,139,008	④会費収入	20,499,685
23,859,790	22,789,390	21,369,790	21,420,000	⑤雑収入	100,115
955,956	1,692,250	99,503	1,241,329	<b>事業活動収入計</b>	191,165,953
0	0	0	0	<b>2. 事業活動支出</b>	
0	0	2,393,000	9,931,460	①事業費支出計	147,073,950
178,123,570	154,901,004	157,363,323	188,991,796	②管理費支出計	33,551,289
18,840,934	8,375,271	14,184,821	14,391,584	<b>事業活動支出計</b>	180,625,239
196,964,504	163,276,275	171,548,144	203,383,380	<b>事業活動収支差額</b>	10,540,714
				<b>II 投資活動収支の部</b>	
				<b>1. 投資活動収入</b>	
141,480,021	98,539,905	113,274,886	127,935,534	投資活動収入計	0
40,767,982	42,087,265	37,581,992	43,816,162	<b>2. 投資活動支出</b>	
340,389	2,462,500	296,556	272,779	①固定資産取得支出	251,922
6,000,841	6,001,784	6,003,126	18,002,268	②特定資産取得支出	9,500,000
188,589,233	149,091,454	157,156,560	190,026,743	<b>投資活動支出計</b>	9,751,922
△ 10,465,663	5,809,550	206,763	△ 1,034,947	<b>投資活動収支差額</b>	△ 9,751,922
8,375,271	14,184,821	14,391,584	13,356,637	<b>当期収支差額</b>	788,792
				<b>前期繰越収支差額</b>	13,356,637
				<b>次期繰越収支差額</b>	14,145,429



# 2007年度の事業

## 国内外の小中高校における外国語教育を促進する事業 …… (3,454)

### A 海外の小中高校日本語教育関連プログラム …… (2,453)

- 1 大連市の中学校日本語教師研修会の共催
- 2 大連市の中学校第二外国語用日本語教科書の共同編集・出版助成
- 3 遼寧省教育代表団の招聘
- 4 中国東北部の日本語教育研究活動に協力・助成
- 5 TJF Photo Data Bank 日本編ウェブサイトの制作運営
- 6 英語圏の日本語教師向け情報誌『Takarabako』の発行
- 7 中国の日本語教師向け情報誌『ひだまり』の発行

### B 日本の高校中国語教育関連プログラム …… (380)

- 1 高校中国語教師研修会の共催
- 2 高校中国語教育研究活動に協力・助成
- 3 中国語を学ぶ高校生の中国短期研修の実施
- 4 TJF Photo Data Bank 中国編ウェブサイトの制作運営
- 5 高校中国語教師向け情報誌『小溪』の発行

### C 日本の高校韓国朝鮮語教育関連プログラム …… (340)

- 1 韓国語教師研修会の共催
- 2 高校韓国朝鮮語教育研究活動に協力・助成

### D 日本語・中国語・韓国朝鮮語教育連携プログラム …… (281)

- 1 高等学校における中国語と韓国朝鮮語の学習のめやすプロジェクト
- 2 シンポジウム「フォーラム2007」の共催

## 海外の日本語学習者と日本の同世代間をつなぐ交流事業 …… (2,659)

- 1 高校生のフォトメッセージコンテスト写真集『The Way We Are 2006』の発行
- 2 「The Way We Are」ウェブサイトの制作運営
- 3 中高校生の交流ウェブサイトの開設\*
- 4 高校生の写真撮影交流の実施\*
- 5 日中の学校間交流に協力
- 6 日米の学校間交流に協力
- 7 国際教育研究活動に協力・助成

## 広報出版・ウェブサイト関連事業 …… (1,508)

- 1 機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行
- 2 『TJF 事業報告2006—2007』（日本語版・英語版）の発行
- 3 『ことばと文化Ⅱ』（20年史）の編集出版\*
- 4 一般図書教材の寄贈
- 5 TJFウェブサイトの制作運営

\*20周年記念事業

( )内の数字は事業予算額（四捨五入、単位：万円）

## あとかき

本書は、(財)国際文化フォーラム(TJF)設立20周年を記念し刊行したものです。TJFの20年の歩みを、特に直近の10年間に焦点をあててまとめました。前半の10年の事業については、1997年に刊行した10年史『ことばと文化 相互理解をめざして』に詳しくまとめてあります。

本書の第1部では、TJFの組織体制や事業理念の変遷をたどりながら、20年の事業を概観しました。本書の中核をなす第2部では、直近10年の歩みを事業別に詳しくまとめました。ここでは、事業を実施するにあたって試行錯誤したことや課題となったことも、自己評価を含めてありのままに記述しました。第3部では、TJFの事業の新たな方向性を示すいくつかの事業を取り上げて、今後の活動を展望しました。資料編では、各事業に関連するデータを通じて事業の詳細な内容を記録すると同時に、今後同じような活動に取り組む方々の参考となるようデータを詳しく記載しました。また、お世話になった国内外の機関、団体、個人のお名前を可能な限り掲載させていただきました。

第2部および第3部については、各事業の担当者がそれぞれ執筆を担当しましたが、改めて過去の歩みを振り返り、現在とこれからの事業との関連性を視野に入れながら総括できたことは有意義なことでした。また、本書の編集にあたっては、大川修氏より貴重なご助言を得て、多くのことを学ばせていただきました。

文化交流や教育関連事業は、成果を上げるまでに時間がかかり、正確に評価することは難しいものです。そのために、これらの事業に取り組みながら、これでいいのかと自問自答することも度々ありましたが、先生方の熱意や子どもたちの笑顔にいつも後押しされてきました。TJFの事業を支援して下さった多くの機関や団体、TJFの事業に関わったり、助言して下さったり、共に歩んで下さった方々とのネットワークは、今やかけがえのない私たちの財産となっています。

本書をまとめながら、これまでいかに多くの方々から温かい手が差し伸べられてきたかを改めて実感しました。そして、TJFの事業に直接関わらなくても、数多くの方々が見守り、応援して下さったことを思い返し、胸に熱いものがこみ上げてきました。TJFの20年の歴史は、これらの方々なくして語ることは到底できません。共に刻むことができた20年史を、ここに感謝を込めて捧げたいと思います。

2008年3月

中野 佳代子



# ことばと文化 II

小中高校生の  
相互理解をめざして  
国際文化フォーラム 20年の歩み

---

2008年3月発行 (非売品)

発行人 田所 宏之  
編集人 中野 佳代子  
発行所 **財団法人国際文化フォーラム**

163-0726  
東京都新宿区西新宿2丁目7番1号  
新宿第一生命ビル26階  
電話 (03) 5322-5211  
Fax (03) 5322-5215  
E-mail [forum@tjf.or.jp](mailto:forum@tjf.or.jp)  
<http://www.tjf.or.jp/>

©2008 by The Japan Forum, Printed in Japan

表紙・本文デザイン

校閲・校正

印刷・製本

…… 山本 義明 (gfd)

…… 有限会社天山舎

…… 凸版印刷株式会社